〈ノウンスペース・シリーズ〉

# リングワールド

ラリイ・ニーヴン／小隅 黎訳

ヒューゴー／ネビュラ賞受賞

大田区立羽田図書館
111-1034124-0

RINGWORLD

CamScannerでスキャン

目次

1 ルイス・ウー 7
2 ……と、その雑多な一党 27
3 ティーラ・ブラウン 50
4 獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ) 74
5 薔薇飾り(ローゼット) 92
6 クリスマス・リボン 114
7 跳躍円盤(ステッピング・ディスク) 133
8 リングワールド 152
9 遮光板(シャドウ・スクエア) 177
10 環の床面(リング・フロア)で 203
11 天空の懸け橋(アーチ) 226
12 神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド) 244
13 星間種子誘引機(スターシード・ルアー) 269

CamScannerでスキャン

14 ひまわり花（サンフラワー） 290
15 夢の城 312
16 地図の部屋 330
17 嵐の〈目〉 355
18 ティーラ・ブラウンの危機 377
19 罠の中 399
20 肉 421
21 壁の向こうからきた女 437
22 探す人（シーカー） 460
23 神様ごっこ 484
24 神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド） 508
訳者あとがき 529

CamScannerでスキャン

# リングワールド

CamScannerでスキャン

# 1　ルイス・ウー

ベイルート中心街の夜、ずらりと並んだ公衆転移ボックスのひとつで、ルイス・ウーは、一瞬の光のきらめきとともに実体化した。

長さ一フィートの弁髪が、人工雪のように白く光っている。除毛した頭と顔の皮膚の色はクローム・イエロー。眼球の虹彩は金。ゆったりした上衣（ローブ）は紫紺色で、立体染色の金龍の図柄が浮きだしている。出現した瞬間、彼は真珠のように完璧な歯並びを見せて相好をくずしていた。笑って、手をふっているのだった。が、その笑顔はもう消えかけており、真顔になる寸前、くずれかけたゴムの仮面のような表情に、ルイス・ウーの本当の年齢がかいま見えた。

しばし彼は、ベイルート市街の雑踏ぶりを眺めていた。どことも知れぬ各地から、転移ボックスの中に現れてくる人びと。夜がふけて、走路がとまっているので、徒歩で流れていく群集。そのとき、あちこちの時計が、二十三時を打ちはじめた。ルイス・ウーは、ちょっと肩をいからしてボックスを出ると、人ごみにまぎれこんだ。

レシトでは、彼の誕生パーティがたけなわだろうが、そこでは暦はもう誕生日の朝にな

っている。しかし、このベイルートでは、一時間だけ早い。感じのよさそうな屋外レストランにはいると、ルイスはラキ酒を周囲にふるまい、アラビア語と共通語(インターワールド)の歌の輪をひろげた。真夜中になる直前、彼はブダペストへ向けて、そこを去った。

みんなはもう、彼が自分のパーティをぬけだしたことに気づいているだろうか？　女といっしょに席をはずして、二、三時間のうちにもどってくると思っているかもしれない。しかし、ルイス・ウーは、ただひとり、翌日の到来に追いたてられながら、深夜の鼻先をかすめ飛んでいるのだった。二百歳の誕生日を祝うのに、二十四時間では、まだちょっと不足というわけである。

彼がいなくても、友人たちのほうに問題はあるまい。みんな自分の面倒くらい見られる連中だ。その点にかけてはルイスの選択基準は、かっちりしたものであった。

ブダペストではまた、踊りと酒だった。地元の人びとには、裕福な旅行者のように、旅行者には、地元の金持ちのように見えたことだろう。ダンスをし、ワインを飲み、そして、深夜直前に姿を消す。

ミュンヘンの街を、彼は歩いていた。

空気は暖かく、澄んでいる。頭のほてりも、いくらかさめたようだ。明るく照明された走路が、時速十マイルで動く上を、彼はさらに自分の足で歩む。ふとそのとき、世界のどの都市にもこんな走路があって、どれも時速十マイルで動いているのだということが、心に浮かんだ。

堪えられぬ思いであった。はじめて気づいたわけでもない。ただ急にそれががまんできなくなっただけだ。このミュンヘンが、カイロやレシトと……ついでにいえば、サンフランシスコやトペカやロンドンやアムステルダムなどとも、いかによく似ているかを、いつも彼は見てきた。走

路ぞいの店で売っているものまで、世界じゅうどこへいっても同じだ。いきかう人びとまでが、今夜は、似たような服で、似たような姿にみえる。アメリカ人でもドイツ人でもエジプト人でもなく、ただのフラットランダーなのである。

転移ボックスの三世紀半が、地球の無限のヴァラエティをこんなにしてしまったのだ。それは瞬送旅行の網目（ネット）で世界を蔽いつくしている。モスクワとシドニーの距離も、いまや一瞬の時間と十分の一スター貨幣一枚にしか値しない。必然的にここ数世紀にわたって、各都市はみごとにブレンドされ、地名はもはや過去の遺物となってしまった。

サンフランシスコとサンディエゴは、長々とのびた海岸都市の北端と南端である。しかし、そのどっちがどっちの端かを知っているものが、どれだけいるだろうか？　いまではもう、カホなほどわずかだろう。

二百歳の男の誕生日としては、ひどく気の滅入るようなことを考えたものだ。

しかし、都市の混合は事実である。ルイスは、その経過をずっと見まもってきた。時と所と慣習と、そういったあらゆる不整合が、世界的規模で、くすんだ灰色のペーストのような〝都市〟の大きな合理性に統一されてきたのだ。こんにち、ドイツ語、英語、フランス語、スペイン語を話しているものがあるだろうか？　みんな話すのは共通語（インターワールド）だけ。ボディ・ペインティングのスタイルも、まるで巨大な波のように、世界じゅういっせいにデザインをかえていく。

もう一度休養（サバティカル）に出ようか？　未知の宇宙にただひとり、小さな船で、皮膚や目や髪の色も自然のまま、無精髭にも手をつけずに……。

「馬鹿め（ナッツ）」とひとりつぶやく。「まだもどったばかりじゃないか」それも、二十年前のことであ

CamScannerでスキャン

る。

しかし、ここにもう真夜中が迫っていた。ルイス・ウーは、転移ボックスを見つけると、クレジット・カードをスロットにさしこみ、セヴィリアをダイアルした。

出たのは、陽のさしこむ一室の中。

「カホナ！」びっくりして目をしばたたいた。転移ボックスが、いかれちまったにちがいない。セヴィリアで陽が照っているはずはない。もう一度ダイアルしなおそうとして、ふとふりかえると、思わず目をむいた。

どことも知れぬホテルの一室である。つくりが平凡なだけに、そこにいたものの異様さが、よけいショッキングだった。

部屋の中央で、こっち向きに立っているのは、人間でもヒューマノイドでもない何かであった。三本脚で立ち、屈曲自在な細い二本の頸の先についたふたつのひらたい頭が、それぞれの位置からルイス・ウーを見つめている。その異様な体軀のほとんどを蔽っているのは、白っぽい手袋の革のような皮膚だが、粗い褐色のたてがみが、ふたつの頸のあいだから背骨にそって下へのび、うしろ脚の複雑なつけ根のあたりまでを蔽っている。二本の前脚を大きく開き、小ぶりな蹄爪状の蹄が、だいたい正三角形をなして床をふまえている。

異星の獣だろうとルイスは思った。あのひらたい頭部には、脳髄を入れる余地などありそうにない。しかし、よく見ると、ふたつの頸のつけ根のあいだが、こぶのようにもりあがり、たてがみも、その部分を保護するように厚く濃くなっている……百八十年も昔の記憶の底から、やおら

浮かびあがってくるものがあった。

パペッティア人――ピアスンが〝人形師（パペッティア）〟と名づけたやつだ。その脳と頭蓋は、あのこぶの下にある。獣などではない。少なくとも人間に匹敵する知恵の持ち主なのだ。両方の頭にそれぞれひとつずつ、骨の中に深く埋まった目が、ふたつの方向から、ルイス・ウーをじっと見すえていた。

ドアを押した。ロックされている。

ルイスは閉じこめられたのではなく、締めだされているのだった。もう一度ダイアルして、消えてしまうこともできる。が、そんな気は、いささかもなかった。ピアスンのパペッティア人は、しょっちゅうお目にかかれるという相手ではない。ルイス・ウーが生まれるよりも前に、その一族は、既知空域（ノウンスペース）から姿を消していたはずだ。

「何か、ぼくに用かね？」とルイス。

「はいそうです」異星人が答えた……。

……青春の夢をスパークさせる声。その声にふさわしい美女のおもかげが、ルイスの脳裡をかすめる。クレオパトラ、トロイのヘレン、マリリン・モンロー、それにローレライ・ハンツを、いっしょにしたような……。

「カホナ！」まったく、悪態をついて当然の場合だった。世の中に、神（カミ）も、仏（ホトケ）もナいものか！
性別もはっきりせぬふたつ頭の異星人が、こんな声の持ち主だとは！

「こわがらないでいいのです」と、それがいった。「逃げたければ、いつでも逃げられます」

「学校に、あんたみたいなのの写真があったよ。ずっと昔に姿を消しちまったと……とにかく、

ぼくはそう聞いていたが」
「わたしの種族がノウンスペースから逃げだしたとき、わたしは、いっしょにいかなかったのです。ノウンスペースに残って、種族のお役に立つためです」
「どこに隠れてたんだい？　それに、いったいここはどこなんだ？」
「あなたには関係ないことです。あなたは、ルイス・ウー・MMGREWPLHですね？」
「それを知ってる？　わざわざぼくをつけていたのかい？」
「はい。この惑星の転移ボックスのネットワークに、手を加えました」
ありうることだろうと、ルイスは思った。よほど買収をうまくやればだが、可能なことはたしかだ。しかし――「なぜ？」
「それにはいろいろ説明しなければ――」
「ここから出してくれる気はないのかね？」
パペッティア人は考えこんだ。「そうしなければなりますまい。まず、わたしのほうにも防備があることを知っておいてください。襲いかかろうとしても無駄ですからね」
ルイス・ウーは、うんざりした口調で、「どうしてぼくが襲いかかるなんて？」
パペッティア人は答えない。
「そうか、思いだしたよ。あんたたちは、臆病なんだったな。あんたの種族の全道徳律は、その臆病さの上に成り立ってるんだっけ」
「不正確な表現ですが、そう思っていて結構です」
「まあ、その程度のことで助かったよ」ルイスは思いなおした。どんな知的種族にも、それぞれ

変わったところはある。パペッティア人など、むしろ扱いやすいほうだろう。あの、種族全体総パラノイアのトリノック人や、天性の触発的殺人狂クジン人や、定着生物グロッグ……その、手のかわりをするしろものなどにくらべれば。

　パペッティア人の姿をじっと見つめているうち、過去の埃の中に埋もれていた記憶が、いっせいにもどってきはじめた。パペッティア人とその商業帝国のこと、地球人との関係、そして突然のショッキングな消失など――それにかさなって、生まれてはじめての喫煙の味や、ぎごちなくタイプのキイを押した感触、記憶しなければならない共通語(インターワールド)の単語のリストと英語のひびきや感じ、ごく幼かったころのわけのわからぬ不安感など。パペッティア人のことを教わったのは、カレッジの歴史の時間だが、そのあと百八十年のあいだ、まったく思いだしたこともなかった。人間の心の記憶容量には、まさに端倪すべからざるものがある。

「このままでもいいんだぜ」と、彼はパペッティア人にいった。「そのほうが、そっちに好都合ならね」

「いいえ。こちらへきてもらわなければなりません」

　パペッティア人の内心の緊張に応じて、そのクリーム色の皮膚の下で、筋肉がもりあがり、ひきつるのがわかった。と同時に、転移ボックスのドアがカチリとひらいた。ルイス・ウーは、室内へ足をふみいれた。

　パペッティア人が、数歩うしろへさがる。

　ルイスは、椅子に身を沈めた。自分よりもむしろパペッティア人のためを思ってのことである。腰かけているほうが、無害に見えるだろう。椅子は規格型の、人間用自動調節式マッサージ椅子

だった。香辛料と化学薬品をいっしょにしたような、かすかな香りがただよってきた。けっしていやな匂いではない。

異星人は、うしろ脚をたたんですわりこんだ。「どうしてここへ呼ばれたのか、ふしぎに思っているのでしょう。説明しなければなりません。わたしの種族のことを、どのくらい知っていますか？」

「学校へいったのは、ずいぶん昔のことだからね。たしか、あんたたちは、一大商業帝国をきずいていたんだっけ？　われわれの称する〝ノウンスペース〟なんて、その一部にすぎなかった。トリノック人のことも、人間は、あんたたちから聞いていただけで、実際に、トリノック人と出会ったのは、いまから二十年前のことだ」

「はい、わたしたちは、トリノック人とも貿易していました。たしかほとんどの場合は、ロボットを仲介にしたと思います」

「少なくとも数千年の歴史と直径数十光年の版図を持った貿易帝国だった。それが、ふいに誰もいなくなっちまった。何もかも放棄してだ。なぜ？」

「もう忘れられているのですか？　わたしたちは、銀河の中心核の爆発から逃げているのですよ！」

「そのことは知ってる」ルイスも、銀河系の中心部における新星(ノヴァ)の連鎖反応の発見が、事実上異星種族の手でなされたものだということは覚えていた。「しかし、なぜいまから逃げだすんだ？〈核〉の恒星が新星になりはじめたのは、一万年前のことだぜ。あと二万年たたないと、その光もここまではやってこない」

「地球人は、逃げようとしない。そして、自滅する。危険がわからないのですか？　衝撃波にともなう放射能で、銀河系のこのあたりには、まったく生物が住めなくなるのですよ！」
「二万年ってのは、相当の時間だぜ」
「二万年後でも、全滅は全滅です。わたしの種族は、マゼラン雲の方向に逃げています。ただし、いまが、その場合なのです」
わたしたち何人かは、移民団が危険に遭遇した場合を考慮して、ここに残りました。そして、いまが、その場合なのです」
「へえ？　どんな危険？」
「まだそれには答えられません。しかし、これだけは見せてあげます」パペッティア人は、テーブルの上から何かをとりあげた。
で、いままでパペッティア人の手はどこにあるのだろうといぶかっていたルイスは、その口が手に当たるのだということを、はじめて知ったのである。
みごとな〝手〟だ、と彼は感じいった。その手がそろそろとのびて、ルイスに、一枚の立体写真（ホロフリ）をわたした。伸縮自在のくちびるが、歯よりも数インチさきまで突きだしている。人間の指と同じように乾いており、縁が、いくつかの小さな指のようになっている。菜食向きの四角い歯ならびの奥に、とがった舌の動くのが、ちらりと見えた。
立体写真をうけとり、見つめる。
はじめはなんだか全然わからなかったが、彼はじっと目をこらして、その正体を見さだめようとした。まっ白に光るG0ないしK9かK8くらいの恒星のような小さな円形のものの一隅が、まっすぐな黒い縁にそって裁ちおとされたようになっている。しかし、これが恒星であるはずは

ない。背景をなす宇宙の暗黒の中に、あざやかな空色の帯が走っているのだ。その青い帯は、完璧な直線で、縁は鋭く、固く、人工物のように見え、幅は光る円形よりも大きい。
「星のまわりをフープがとりまいているみたいだな。これはなんだい？」
「おのぞみなら、そのまま持っていてよろしい。さて、あなたをここへ連れてきた理由ですが、四人の探険隊を組織したいのです。わたしもあなたも、その一員です」
「何を探険するんだ？」
「それはまだ話せません」
「おやおや。何も知らずに身を投げろってわけか」
「二百歳のお誕生日おめでとう」とパペッティア人がいった。
「どうも」当惑気味で答える。
「なぜ、自分のお誕生日パーティからぬけだしたのですか？」
「あんたには関係ないよ」
「それがあるのです。ルイス・ウー、まじめに答えてください。なぜあなたは、自分の誕生日のパーティからぬけだしたのですか？」
「二百歳の誕生日を祝うのに、二十四時間じゃ不足だと思っただけさ。そこで、深夜線の前へ逃げて、そいつを引きのばしにかかったんだ。異星人のあんたにゃ、わからんだろうが――」
「たいした気勢ですね。で、結果はどうでした？」
「だめさ。正直なところ、ね……」
気勢をあげるどころじゃなかった。まったくあべこべの思いが残っていた。パーティのほうは、

成功していたというのに。
パーティをはじめたのは、その日の朝、午前零時一分過ぎだった。そうしていけないわけがどこにあろう。彼の交友関係は、あらゆる時間帯にわたっている。その一日の一分間たりとも無駄にする手はない。邸内には、いたるところ、短時間用の睡眠セットが備えてある。かたときの時間も惜しい手合いのためには覚醒剤が、面白い副作用のあるのから全然ないのまでとりそろえてあった。
ここ百年間会っていない客もあれば、毎日顔を合わせている相手もいた。ずっと昔は不倶戴天の敵だった連中もまじっていた。すっかり忘れていた女の顔も見え、それが彼に、自分の好みがいかに変わってきたかを、何度となく思い知らせてくれた。
当然ながら、おたがいの紹介におそろしく時間をとられることになる。その名前のリストも、前もって頭にいれておかなければならない。ほとんど初対面に近いほど疎遠になっている友人が、わんさといたのだ。
そして、深夜の訪れの数分前、ルイス・ウーは転移ボックスにはいって、ダイアルし、消えたのである。
「もううんざりだったのさ。「ルイス、この前の休養(サバティカル)のことを話してよ」「でも、どうしてそんなに長いことひとりでいられるの？」「トリノック人の使節を招くなんて、すてき！」「やあ、ずいぶん長く会わなかったね、ルイス」「おい、ルイス。大きなビルを塗装するのに、ジンクス人が三人要るのは、なぜだ？」」
「なぜです？」

「なぜだって、何が？」
「ジンクス人のことです」
「ああ、ひとりがペンキのスプレイを持って、あとふたりが、ビルを上下に動かすっていうんだ。幼稚園できかされたジョークさ。あらゆる過去の残りかす、あらゆる古い冗談、大きな邸もそれでいっぱい。どうにもがまんできなくなっちまったんだよ」
「あなたはまめな人ですね、ルイス・ウー。あなたの休養(サバティカル)――あんなことを、はじめてやりだしたのは、あなたでしたね？」
「どこでやりだしたかは忘れたけど、大いにうけたようだね。いまじゃ、ぼくの友だちは、みんなやってるよ」
「でも、あなたほど頻繁ではありません。四十年かそこらごとに、あなたは、人間とのつきあいに飽きてしまい、人びとの住む世界を離れて、ノウンスペースの外縁へ逃げだす。ひとり乗りの船で、人恋しさがもどるまで、外宇宙にとどまっている。この前の、四回めの休養(サバティカル)からもどってきたのは、二十年前でした。
まめな人ですね、あなたは。人間の住むあらゆる惑星で、それぞれその土地の生えぬきになるほどの年月を暮らしてきた。今夜あなたは、自分の誕生日パーティをぬけだした。なのに、またいそがしい生活にもどる気ですか？」
「こっちの勝手だ。そうじゃないかい？」
「はい。わたしはただ、隊員を募集しているだけです。わたしの探険隊にとって、あなたは最高の人材なのです。危険は冒すが、その前によく考える。孤独でいることをおそれない。二百年も

生きられるほど用心ぶかくて利口で、それに、医学的処置を怠らずにうけているから、肉体的にはまだ二十歳代の若さをたもっている。最後に、もっとも大事なことですが、あなたは異星人とつきあうのが好きですね」

「もちろん」何人か知っている異星人恐怖症患者を、ルイスは頭から馬鹿にしていた。話相手に人間しかいないとしたら、人生はおそろしく退屈なものになってしまうだろう。

「むろん何も知らずに身を投げたくはないでしょうが、ルイス・ウー、パペッティア人のわたしが、いっしょだというだけで、充分ではありませんか？　わたしがおそれないものを、あなたがどうしておそれるのですか？　わたしの種族の用心ぶかさは、ことわざになっているほどなのですよ」

「それはそうだな」ルイスは答えた。端的にいって、もうすっかりその気になっている。異星人好きと、まめさと、野次馬根性が、いっしょになった結果だ。パペッティア人がいくというなら、ルイス・ウーもいこうじゃないか。しかし、もう少し詳しいことをきかなければ。

それにしても、取り引きの立場は最高のようだ。異星人が好きこのんでこんな部屋に泊まるわけはない。このいかにも平凡なホテルの一室、地球人の観点から文句なしに正常なこの部屋は、まさしく隊員募集のために用意されたものにちがいなかった。

「探険の目標は話せないってことだったな。それでも、その所在くらいは教えてくれるかい？」

「ここから小マゼラン雲の方向へ、二百光年のところです」

「しかしそれじゃ、超空間駆動（ハイパードライブ）でも、そこまでいくのに二年近くかかっちまうぜ」

「いいえ。

す。それだと、一光年いくのに一分間の四分の五しかかかりません」

ことばもなく、ルイス・ウーは、口をあんぐりあけた。一分と十五秒だと？

「驚くことはないはずですよ、ルイス・ウー。銀河の〈核〉へ人をやって、新星爆発の連鎖反応が起こっていることを知るのに、ほかのどんな方法があったと思いますか？ そういう船があることを、あなたは推理できて当然だったはずです。探険が成功したら、わたしはこの船を、もっと建造できるように設計書もそえて、隊員に譲渡する考えです。

したがって、この船が、あなたへの……支払い……給与……つまり、あなたのものになります。その航行性能は、わたしたちがパペッティア人の移民船団と落ちあうまでにわかります。そのとき、探険の目的が何かということも教えます」

パペッティア人の移民船団と落ちあうんだって？……「仲間にはいるぜ」ルイス・ウーは答えた。ひとつの知性種族全体が、そっくり移動しているところを見るチャンスだ！ 何隻もの巨大な船が、それぞれ数千数万のパペッティア人を乗せ、惑星の環境（エコロジー）をそのままに……。

「よろしい」パペッティア人が立ちあがった。「探険隊の人数は四人です。これから、三人めを、選抜にいきます」とことこと、転移ボックスにはいっていく。

ルイスは、謎の立体（ホロ）写真をポケットにしまって、あとにつづいた。ボックスの中で、彼はダイアルのナンバーを読みとろうとした。ここがいったいどこなのか、知りたいと思ったからだ。しかし、パペッティア人の操作が早すぎて、何もわからぬまま、ふたりはそこから消えた。

パペッティア人のあとについて、ルイス・ウーが、ボックスから出たところは、照明のほの暗

い、豪奢なレストランの中だった。黒と金色とを使った装飾と、ゆったり場所をとって配置された馬蹄形のボックス席から、その場所がどこかわかった。ニューヨークの〈クルシェンコの店〉だ。

信じられない、といったささやきが、パペッティア人の通っていくあとから、まき起こった。ロボットのように表情を変えない人間の給仕頭(ヘッドウエイター)が、ふたりをテーブルへ案内した。そのテーブルをかこんでいる椅子のひとつが持ち去られ、かわりに置かれた大きな四角い枕のようなものの上に、異星人は、尻とうしろ脚でそれをはさむように腰をおろした。

「予約してあったようだな」ルイスがたずねる。

「はい。前もって連絡しました。この店は、異星人の客も扱いなれていますから」

このときはじめて、ルイスは、ほかにも食事にきている異星人がいることに気づいた。隣のテーブルに、四人のクジン人、部屋の半分ほど向こうには、クダトリノ人がひとり。そういえば、このすぐ近くには、国連ビルがある。ルイスはテキラ・サワーをダイアルし、とどいた杯をあげた。「ご配慮ありがとう。すっかり腹ぺこになってたよ」

「わたしたちは、食事にきたのではありません。三人めの隊員を選ぶためにきたのです」

「へえ？　レストランで？」

それに答えるように、パペッティア人は声を高めた。が、それはルイスの質問への答えではなかった。「あなたにはまだ、クジン人のクチュラ・ルリットを見せていませんでしたね。わたしが飼っているやつですが」

ルイスは危うくテキラの杯をとりおとすところだった。パペッティア人の背後のテーブルにつ

い。豪奢なレストランの中だった。黒と金色とを使った装飾と、ゆったり場所をとって配置された馬蹄形のボックス席から、その場所がどこかわかった。ニューヨークの〈クルシェンコの店〉だ。

信じられない、といったささやきが、パペッティア人の還っていくあとから、まき起こった。ロボットのように表情を変えない人間の給仕頭（ヘッドウェイター）が、ふたりをテーブルへ案内した。そのテーブルをかこんでいる椅子のひとつが持ち去られ、かわりに置かれた大きな四角い枕のようなものの上に、異星人は、尻とうしろ脚でそれをはさむように腰をおろした。

「予約してあったようだな」ルイスがたずねる。

「はい。前もって連絡しました。この店は、異星人の客も扱いなれていますから」

このときはじめて、ルイスは、ほかにも食事にきている異星人がいることに気づいた。隣のテーブルに、四人のクジン人、部屋の半分ほど向こうには、クダトリノ人がひとり。そういえば、このすぐ近くには、国連ビルがある。ルイスはテキラ・サワーをダイアルし、とどいた杯をあげた。「ご配慮ありがとう。すっかり腹ぺこになってたよ」

「わたしたちは、食事にきたのではありません。三人めの隊員を選ぶためにきたのです」

「へえ？　レストランで？」

それに答えるように、パペッティア人は声を高めた。が、それはルイスの質問への答えではなかった。「あなたにはまだ、クジン人のクチュラ・ルリットを見せていませんでしたね。わたしが飼っているやつですが」

ルイスは危うくテキラの杯をとりおとすところだった。パペッティア人の背後のテーブルにつ

いている、オレンジ色の毛皮の壁と見まがう四つの姿、いずれもクジン人だ。それが、パペッティア人のことばをきくと同時に、いっせいにこっちをふり向き、巨大な針のような牙をむきだした。笑っているような表情だ。が、クジン人のその口のあけかたは、笑顔ではない。

ルリットという名は、クジン族の族長一家に属するものである。ルイスは、いまさらどうにもならないと観念して、残りの酒を飲みほした。ちょっとした不注意から出た侮辱でも、ぱくりとやられれば、それで一巻の終わりだ。

いちばんこちら側のクジン人が立ちあがった。

ふさふさしたオレンジ色の毛皮の、目の上あたりに黒い斑点があり、その図体は、いわば背たけ八フィートの太った猫といった感じだ。太ってはいるが、なめらかで強靭な筋肉。そのつきかたは、かなり異様だし、中の骨格も、同じくらい異質である。黒い皮手袋のような両手の指先には、鋭く光る鉤爪がニュッと突きでていた。

四分の一トンもありそうな、その知的食肉獣が、パペッティア人のうしろからのしかかるようにしていった。「クジン族の長老を侮辱して、生きて帰れると思うのか？」

パペッティア人は、声にふるえも見せず、そくざに答えた。「琴座ベータ星をめぐる惑星で、チュフト船長（キャプテン）というクジン人を、うしろ脚の蹄で蹴とばして、胴体の骨を三本へし折ったのは、このわたしです。わたしは、勇気のあるクジン人をさがしているのです」

「つづけろ」と、黒目のクジン人がいう。その口の構造からうける印象とうらはらに、クジン人は高度の知性をもった種族なのだ。彼の声には、感じているはずの憤怒のかけらもなかった。このクジン人とパペッティア人の感情を欠いたやりとりは、ルイスには、まるでスローモーション

の儀式のように感じられた。
しかし、クジン人のテーブルに出ているのは、湯気のたった血のしたたる生肉だ。体温にまでさっとあたためて供されたものである。そのクジン人が全員、こっちを見て、笑っている。
「この地球人とわたしは、クジン人など思いもよらぬところへ、これから探険にいくのです」パペッティア人がいう。「それで、メンバーのひとりに、クジン人がほしいのです。パペッティア人についてくる勇敢なクジン人は、いませんか？」
「パペッティア人は、菜食動物で、戦いにはつねにうしろを見せると聞いていたがな」
「さあ、どうしますか？　生きのびてもどれたら、報酬は、新型のすばらしい宇宙船の設計仕様と、それに見本の船一隻です。たいへんな危険に対する報酬と考えてください」
このパペッティア人は、思いきりクジン人の誇りを傷つけるつもりらしい、と、ルイスは思った。だいたい危険報酬などというもちかけかたが、クジン人に対してはタブーなのだ。彼らにはそもそも危険という概念がないのだとさえいわれているのである！
しかし、そのクジン人の答えはただひとこと、「承知した」それだけだった。
あと三人のクジン人が、彼に向かってうなり声をあげた。
こっちのひとりも、うなりかえす。
クジン人の声たるや、ひとりでも、猫のいがみあいさながらだ。四人のクジン人がいい争いをはじめたとなると、声をひそめているつもりでも、さながら猫族大戦争といったところ。自動的に、店内の消音装置が作動しはじめ、いがみあいはぐっと低くなったが、議論はまだつづいている。

ルイスはもう一杯オーダーを出した。クジン族の歴史に関する彼の知識からみるかぎり、この四人は、すばらしい抑制力の持ち主であるにちがいない。なにしろ、このパペッティア人が、まだ生きているのだから。

議論がやみ、四人のクジン人がこっちをふりかえった。目の上に黒い斑のあるのが、口をひらく。「おまえの名は？」

「地球での名前は、ネサス」と、パペッティア人。「本当の名前は――」オーケストラのような音楽が、一瞬、パペッティア人の驚くべきのどから流れた。

「よしわかった、ネサス。われわれ四人が、クジン族の地球駐在代表団だということをいっておく。これがハーチ、あちらがフタンス、黄色い傷のあるのがフロス。おれは単なる随員で、下層の出身なので、名前はない。役職名で呼ばれるのだ。〈獣への話し手〉（スピーカー・トウ・アニマルズ）とな」

ルイスは、ぐっと怒りをこらえた。

「問題は、われわれ四人とも、ここに仕事をかかえているということだ。これは微妙な問題だ……が、おまえには関係ない。この中で、おれだけは、かわりが得られるということで、話がきまった。おまえのいう新型の船が、手にする価値のあるものであれば、おれがいく。もし、そうでなければ、べつのやりかたで、おれの勇気を見せてやらなければなるまい」

「それで結構」と、パペッティア人が答えて、席を立った。

ルイスは、坐ったまままたずねた。「クジン語では、あんたの役名はなんというのかね？」

「わが〈ますらおことば〉では――」ぐうっと高まるようなうなり声。

「じゃ、なぜそのほうを使わなかった？　わざと侮辱しようとしたのか？」

「そうだ。おれは怒っているのだ」と〈獣への話し手〉が答えた。
自分の常識から推して、ルイスはクジン人が、その場を適当にごまかそうとするものと思いこんでいた。そこでそれを信用するふりをしておけば、このクジン人も、いずれもっと礼儀を身につけるかもしれない……そう考えたのだが、もうあとの祭りだ。一秒の何分の一か躊躇したのち、彼はたずねた。「で、こういう場合のしきたりは？」
「素手同士で闘う――おまえが挑戦するなら、いますぐにでも。あるいは、どちらかいっぽうが謝罪するかだ」
ルイスは立ちあがった。委託自殺にひとしいが、慣習がどんなものかは、カホなほどわかっている。「挑戦しよう。歯には歯、鉤爪にはこの爪。倶に天をいただくわけにはいかん」
と、フロスとよばれたクジン人が、顔もあげずに声をかけた。「わが友〈獣への話し手〉になりかわって、わしが謝罪するぞ」
「はあん？」と、ルイス。
「これがわしの役職だ」黄色縞のクジン人はつづけた。「つねに、闘うか謝罪するかの瀬戸ぎわに立つのが、クジン人の本性だ。闘えばどうなるかは、もうわかっている。現在わが種族の数は、はじめて地球人に出会ったときの八分の一にすぎない。わが植民地は地球の植民地となり、わが奴隷種族は解放されて、地球の技術と道徳を教えこまれている。謝罪するか戦うかの二者択一をせまられたとき、謝罪するのがわしの役目だ」
ルイスは腰をおろした。どうやら命びろいをしたらしい。「いや、そんな仕事にだけは、つきたくないもんだな」

「もちろんのことだ。クジン人と素手で闘う気があるほどならな。しかし、わが族長が、わしはほかの役には立たぬと判断した。知能は低く、病弱で、運動機能もひどい。わが家名をたもつのに、他にどんな方法があろうか？」

ルイスは、飲みものをすすりながら、誰かが話題を変えてくれることを願った。哀れなクジン人の様子が、うとましかった。

〈獣への話し手〉（スピーカー・トゥ・アニマルズ）と名乗るクジン人がいった。「食事をすませるぞ。ネサス。いますぐ出発しなくてもよければな」

「急ぎはしません。まだ隊員がそろわないのです。仲間が四人めをさがし当てたら、知らせてきます。とにかく、食事にしましょう」

〈獣への話し手〉（スピーカー・トゥ・アニマルズ）は、テーブルに向きなおるまえに、ひとことつけ加えた。「ルイス・ウー。おまえの挑戦は、口かずが多すぎたぞ。クジン人に本気で挑戦する気なら、怒りの雄たけびひとつでたくさんだ。ひと声わめいて、とびかかれ」

「ひと声わめいて、とびかかれ、か」と、ルイス。「そいつはいい」

ルイス・ウーは、転移ボックスを使うとき目をつぶる人のいることは知っていた。一瞬にしてまわりの景色が変わるため、目まいがするのだという。ルイスには、およそナンセンスな話に思われた。もっとも彼の友人たちの中にだって、もっとずっとおかしな癖を持った人間もいる。

目をあけたまま、ダイアルをまわす。異星人の姿が消える。そして誰かの声、「いよう！　もどってきたぞ！」

ドアの前に、大ぜいがおしかけてくる。それにさからって、ルイスはドアをあけた。「やあ、みんな！　まだ誰も、帰っちまったやつはいないだろうね？」抱きこむように、大きく両手をひろげたが、その腕で彼は、ラッセル車のように、みんなを押しもどした。「さあ、道をあけてくれ。気のきかんやつだな！　あとからお客がくるんだよ」

「いいぞ！」耳もとで大きな声。誰かの手が彼の手をつかみ、飲みものの壜(バルブ)を握らせる。ルイスは七、八人の招待客を、いっしょに腕の中に抱きこみ、満面の笑みをふりまく。

ルイス・ウー。遠目には、淡黄色の皮膚と、長く垂れた白髪のせいで、東洋人のように見える。無雑作にひっかけた青い上衣(ローブ)は、動きの邪魔になりそうだが、そんなことはない。

近づいてみると、何もかも見かけ上にすぎないことがわかる。皮膚の色は、けっしてうすい黄

褐色ではなく、なめらかなクローム・イエロー。コミック・ブックのフー・マンチューのあの色だ。ちょっと豊かすぎるほどの弁髪。その白さも年のせいではなく、すきとおるような白色に、あるかなきかの青を加えた、矮星型太陽の輝きだ。フラットランダーがみんなそうであるように、ルイス・ウーの色彩のすべては化粧品による染色なのだ。

まさに平地人（フラットランダー）である。誰にもひと目でそれがわかる。白人でも黄色人でも黒人でもないが、その三つとも残っている。つまり、何世紀にもわたって、均一に混合されたものなのだ。毎秒九・九八メートルの重力下では、無意識に自然に立っていられる。飲みものを手にし、周囲の客たちを、笑顔で見まわす。

と、偶然その笑顔が、ほんの一インチ前で、銀色に光る一対の目と向かいあった。

どういうわけか、ティーラ・ブラウンが、鼻と鼻、胸と胸のふれあうほどの近さに立っていたのだった。青い皮膚に銀色のネットをまとい、髪はまっかなかがり火（ボン・ファイア）、両眼はさながら球面の鏡だ。彼女の年齢は二十歳。以前、会話をかわしたこともある。話しぶりは、安っぽく、きまり文句を連発してはしゃぎまわるだけだ。しかし美しさだけは抜群だった。

「ききたかったの」せきこむように、「どうやってトリノック人を連れてこられたの？」

「ちょっと。あいつ、まだここにいるんじゃないだろうね」

「いないわ。空気が切れるから、うちへ帰るって」

「かわいい嘘だね」と、ルイスは応じた。「トリノック人の空気製造機は、数週間も保つんだ。まあどうしても知りたいなら話すが、あのトリノック人は、昔二週間ほどのあいだ、ぼくのお客乗客だったのさ。ノウンスペースのはずれで、あいつの船と乗員が、彼ひとりを残して遭難し

ちまってね。そこで、アーグレイヴまで連れていって、彼に合うような環境ボックスをつくってもらったんだよ」

娘の目は、喜びと驚嘆の色をたたえていた。その両眼が、自分のそれと同じ高さにあることに気づいて、ルイスは奇妙な喜びを感じた。ティーラ・ブラウンの、かぼそいばかりの美しさが、実際の背たけよりも彼女を小さく見せていたのだ。その彼女の目が、ルイスの肩ごしに向こうを見て、ふいにいっそう大きく見ひらかれた。ふり向いて、ルイスは、にやりと笑った。

パペッティア人のネサスが、転移ボックスから、とことこと出てくるところだった。

〈クルシェンコの店〉を出るときから、このことは考えずみだった。その前に、彼はなんとかネサスをくどいて、目的地をききだそうとしたのだが、パペッティア人は、スパイビームを気にして、何も話そうとしなかったのである。

「じゃ、ぼくの家にいこう」と、彼は提案した。

「しかしお客がいます！」

「書斎にいけば、誰もいないよ。それに、ぼくの書斎は、完全盗聴防止つきだ。おまけに、あんたがきてくれたら、パーティは大成功だ！　まだ、誰も帰っちまったものはないと思うけどね」

じっさい、そのまき起こした効果たるや、まさにルイスの予想以上であった。突然しいんとしずまりかえった室内に、パペッティア人の、ポク、ポク、ポクという蹄の音だけがひびいた。そのうしろに、〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉の姿が、光のひらめきとともに実体化した。転移ボックスをとりかこんで見つめている人の波を見わたし、それから、ゆっくりと歯をむきだした。

誰かが、飲みものを半分ほども、棕櫚の鉢植えにぶちまけた。オーバーなしぐさだ。その枝のひとつでガミジイ産の蘭状生物が、怒って文句をつけはじめた。人びとは、そろそろと転移ボックスからあとじさりしている。その中のささやき――「くるっちゃいないさ。おれの目にも見えるか」「悪酔いの薬？　この手さげ袋にあるはずだよ」「あいつ、パーティをめちゃめちゃにするかも」「ルイスのやつ、いったいどういう気だ？」「あいつら、なんていったっけ？」

ネサスの出現を、どううけとめたらいいのかわからないらしい。パペッティア人の姿に気づかぬふりをしているものも多かった。何かしゃべって、無知をさらけだすのをおそれているのだ。

〈獣への話し手〉（スピーカー・トゥ・アニマルズ）に対しては、みんなもっと率直に好奇心をみせた。かつて地球人に対する最大の強敵だったクジン人は、ある種の英雄と同じく、畏怖と敬意の目で見られている。

「こっちだ」と、ルイスはパペッティア人にいった。たぶんクジン人も、ついてきてくれるだろう。「失礼」と大声をあげながら、彼は人ごみを押しわけて進んだ。興奮とも当惑ともつかぬ人びとの疑念にこたえて、彼はただ、秘密めかした微笑を浮かべていた。

無事に書斎へつくと、ルイスはドアに錠をかけ、盗聴防止装置のスイッチをいれた。

「これでよし。何か飲むかね？」

「バーボンの瓶をつけてくれれば、飲めるぞ」と、クジン人。「つめたいままでも、まあ飲めるかな」

「ネサス、あんたは？」

「野菜ジュースならなんでも。温めたにんじんジュースができますか？」

「ゲェ」とルイス。しかし、バーのボタンをきちんと押すと、温かいにんじんジュースのはいった器が出てきた。

ネサスは、うしろ脚をたたんですわりこみ、クジン人は、ふくらませた小さなマットの上に、どしんと腰をおろした。その重みで、マットはいまにも破裂しそうになった。人類にとって宇宙史上二番めに遭遇した敵であったクジン人が、小さすぎるマットの上であぶなっかしいバランスをとっているのは、もの珍しくもあり、こっけいな眺めでもあった。

人類とクジン族の戦いは、幾度となく回をかさねた悲惨なものだった。その最初の衝突に、もしクジン側が勝っていたら、人類はその後永遠に、彼らの奴隷かつ食用家畜となっていたことだろう。が、クジン族が真に打撃をうけたのは、むしろそれにつづく戦いでだった。彼らには、自分の側の戦備がととのう前に攻撃をかけてくる傾向があった。忍耐力に欠け、慈悲のかけらも持たぬ彼らは、戦いの限度というものを知らず、衝突のたびに人口のかなりの部分を失い、領有惑星をつぎつぎと手放す結果をまねいた。

この二百五十年間、クジン族は人類の版図に一度も攻撃をかけていない。もはや攻撃のいかなる手段も持たぬからだ。そして、その二百五十年間、人間側もクジン側の惑星を攻撃していないのだが、その理由がまた、クジン人には理解できない。人類のやりかたは、彼らにとって永遠の謎だろう。

乱暴で、頑固な彼ら。だがそのクジン人のおとな四人に、自他ともに許す臆病もののネサスが、公衆の面前で侮辱を与えたのだ。

「パペッティア人の、ことわざ級の用心ぶかさってやつについて、もう一度話してくれないか。

どうも度忘れするたちなんでね」と、ルイス。
「もしかすると、わたしのは、あまり当てにならないかもしれません。わたしたちのあいだでは、わたしは、気ちがい扱いされているのです」
「いや、よくわかるよ」ルイスは、さっき誰とも知れぬ相手に押しつけられた飲みものを、ひと口すすった。それは、ウォッカとドルーブルベリー・ジュースとかき氷のカクテルだった。
クジン人は、しっぽをそわそわと動かしている。「どうしてわれわれは、この自称気ちがいと、行をともにしようというのだ？　いや、そもそもクジン人と行をともにしようと考えるなど、狂人以上だろうかな」
「そう心配することはありません」とネサス。やわらかく、押しつけがましく、そのくせいやになるほど官能的な声だ。「わたしたち種族の基準でくるっていないパペッティア人と会った人間は、ひとりもいません。パペッティア惑星を見たことのある異星人もいません。いやしくも正気のパペッティア人なら、宇宙船のあやふやな生活システムに身をあずけたり、どんな未知の危険が待ちうけているかわからぬ異星世界を訪れたりは、けっしてしないのです」
「気のふれたパペッティア人と、おとなのクジン人と、そしてこのぼくか。四人めの隊員は、精神病医にでもしたほうがよさそうだな」
「いいえ、ルイス。候補者の中には、精神病医はいません」
「ふむ、どうしてわかる？」
「無作為に選んでいるわけではありません」パペッティア人は、いっぽうの口で飲みものをすす

たちの種族のためのものです。したがって、代表として加わるものが必要です。それも、未知の世界に立ち向かえるくらい気がふれていて、しかも生きのびるために頭を使えるくらいまともでなければなりません。わたしがたまたまその境界線上にあったわけです。

　クジン人を加えるのにも理由があります。〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉、これからいうことは秘密ですよ。わたしたちは、あなたの種族を、もう長いあいだ観察しつづけてきました。あなたたちが、人間種族と衝突するよりも前からです」

「こっそり身をひそめて、のぞいていたのだな」クジン人がうなった。

「もちろんです。最初わたしたちはクジン人を、無益で危険な種族だと判断していました。調査の目的は、あなたの種族を安全に絶滅させてしまえるかどうかを見さだめる点にありました」

「その頸を蝶むすびにしてやるぞ」

「暴力に訴えることはできませんよ」

　クジン人が立ちあがった。

「彼のいうとおりだよ」とルイス。「すわりたまえ、〈話し手(スピーカー)〉。パペッティア人を殺したって、なんの益もないぜ」

　クジン人が腰をおろす。マットは、今度も破れずにすんだ。

「その計画は取りやめになりました」ネサスがつづける。「地球人とクジン人の戦争のおかげで、クジン族の発展に充分のブレーキがかかり、危険が減ったからです。それでも、わたしたちは監視をつづけました。

　数世紀のあいだに、あなたたちは六回、人間の世界に攻撃をかけました。そして六回、打ち負

かされるたびに、男性人口のほぼ三分の二を失いました。その点で示された知性のレベルについても話しましょうか？　必要ない？　とにかく、実際に絶滅する危険など、ぜんぜんなかったのです。クジン族の女は非知性生物で、戦争の影響もあまりうけずに、失われた人口を埋めあわせるだけのつぎの世代を生みだしたからです。それでも、あなたたちは着実に、数千年かけてきずきあげた帝国の版図を失っていきました。

　わたしたちにとって、クジン人がめざましい進化をとげつつあることは明白でした」

「進化？」

　ネサスは、〈ますらおことば〉でひと声うなった。ルイスはとびあがった。パペッティア人にそんな発音ができるなど、思いもよらなかったからだ。

〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉は、「うむ」とうなずいた。「そのとおりの意味だ。しかし、この状態を進化とはどういうことだ？」

「進化は、最適者の生存によって起こります。クジン年でこの数百年間、あなたたちの種族にとって最適者とは、人間と戦わずにすませられるだけの気転と自制心を持ったもののことだったわけです。結果は明白でした。もう二百クジン年近くのあいだ、人類とクジン族のあいだには平和がたもたれています」

「しかし、それではなんの足しにもならん！　われわれは、勝てなかったのだぞ！」

「それでも、あなたたちの先祖は、戦いをやめようとしなかったのですよ」

〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉は、熱いバーボンをがぶりとのどに流しこんだ。毛のない、ピンク色の、ねずみそっくりの尾が、いらだたしげにはげしくゆれている。

CamScannerでスキャン

「あなたの種族は、大幅に減りました」パペッティア人はつづける。「こんにち生きているクジン人は、全員が、人間－クジン戦争で死なずにすんだものの子孫です。わたしたちの中には、クジン人は異質の種族と共存する必要から、知性というか感性というか自己規制といったものを、持つようになったと考えるものもいます」
「そこで、クジン人と同行する危険を冒していいと考えたわけか」
「はい」答えるネサスの全身に、大きく身ぶるいが走った。「わたしには強力な動機があります。もし、わたしの勇気が、使いようで種族の役に立つということを示すことができれば、わたしは子供をつくることを許されるかもしれません」
「いやにたよりない話だな」と、ルイス。
「クジン人を連れていく理由は、ほかにもあります。未知の危険を秘めた未知の環境に直面して、誰を護衛に選んだらいいでしょう？　クジン人以上の適任者があるでしょうか？」
「パペッティア人の護衛だと？」
「狂気の沙汰だと思いますか？」
「思うぞ」と〈獣への話し手〉。「おまけに、こっけいのきわみだ。で、この男、ルイス・ウーはどうなのだ？」
「わたしたちにとって、人間と手を結ぶことは、これまで大きなプラスでした。当然、少なくともひとりは人間を加えます。このルイス・グリッドレイ・ウーは、無頓着で無謀な行動をとりますが、その行動でもっとも生存率を高めるタイプであることが証明された人間なのです」
「無頓着、そして無謀。こいつはおれに、一対一の決闘を挑んだな」

「あのとき、フロスがいあわせなかったら、あなたはその挑戦をうけたでしょうか？　そして、彼を殺したでしょうか？」

「そして重大な種族間の紛争をひきおこし、名誉を剝奪され母星に送還されるようなことをしたか、そういいたいのだろう？　しかし、それは問題がちがう。そうではないか？」

「ちがいません。げんにルイスは生きています。もう、彼を威嚇によって動かすわけにはいかないことが、あなたにもわかったはずです。結果的には、よかったのではありませんか？」

　ルイスは慎重に口をつぐんでいた。パペッティア人が、冷静な思考の持ち主という太鼓判をおしてくれるなら、それも結構だろう。

「おまえの動機はわかった」と〈話し手(スピーカー)〉がいった。「つぎは、おれの動機だ。この探険に同行して、おれになんの得があるのだ？」

　こうして、三人は、ようやく本格的な取り引きにかかった。

　パペッティア人にとって、みずから開発した量子第二段階超空間駆動装置(クワンタムII・ハイパードライヴ・シャント)は、まさしく宝の持ちぐされだった。これを積んだ船は、ふつうの船で三日かかる一光年の距離を一分十五秒で飛ぶことができる。が、ふつうの船には、貨物をのせるゆとりがある。

「そのモーターを、ゼネラル・プロダクツ製の四号船殻に組みこみました。わが社で製造できる最大のものです。科学者と技術者が協力して、それを仕上げてみると、船体内部はそのハイパードライヴ装置でほとんどいっぱいになってしまいました。これが、わたしたちの探険のネックになっています」

「実験用の船だろう」とクジン人。「テストは完全やったのか？」
「銀河系の〈核〉へ、一往復しています」
だが、ただそれ一回だけなのだ！　パペッティア人みずからテストすることもできず、また種族をあげて大移動のまっ最中とあっては、ほかの種族を見つけて依頼するわけにもいかない。直径一マイルをこえていながら、この船は、事実上何も運搬できないのである。さらには、通常空間へとびおりる以外に、減速の方法もないのだという。
「わたしたちには不要のものです」と、ネサス。「しかし、あなたたちには有用でしょう。この船に、もっと多数製造できるような建造仕様書をつけて、探険隊のメンバーに贈る予定です。あなたたちなら、まちがいなくもっと優れたものが設計できるでしょう」
「それで、おれは名前が買える」クジン人がいう。「名前だ。その船の動くところが見たいな」
「出かける途中ずっと見られます」
「長老に、そういう船をさしだせば、名前がもらえるだろう。まちがいない。どんな名がいいかな。たぶん――」ぐうっと尻あがりのうなり声。
パペッティア人も、同じことばで答え、話しあいがはじまった。
ルイスは、いらいらして背を向けた。〈ますらおことば〉とやらは、皆目わからない。このままほったらかして席を立とうかとも思ったが、そのときもっといい考えが浮かんだ。パペッティア人のよこした立体写真をポケットからとりだすと、向こうの隅にすわっているクジン人の膝の毛皮の上へ、ねらいさだめてポンと投げだしたのだ。
クジン人は、黒いぼってりした指で、そうっとそれをひろいあげると、じっと見つめながら、

「環のついた恒星のようだな。なんだ、これは？」

「探険の目標に関係のあるものです。今はまだ、それ以上はいえません」と、パペッティア人。

「秘密か。まあいい。いつ出発する？」

「あと数日でしょう。わたしのエージェントが、探険隊の四人めのメンバーを、さがしているところなのです」

「では、そのあいだ待つとするか。ルイス、おまえの客の仲間入りをしてもよいかな？」

ルイスは立ちあがり、背をのばした。「いいとも。連中の肝を冷やしてやろう。〈話し手〉、出ていく前に、ひとついっておきたいことがある。いや、きみの威厳を傷つけるようにとらないでほしいんだが、ただ、ちょっと思いついたもんだから……」

パーティは、いくつものグループに分かれていた。三次元テレビを見ているもの、ブリッジやポーカーのテーブルをかこんでいるもの、愛しあっているふたり組やもっと大ぜいのグループ、話しているもの、倦怠をもてあましているもの。まぶしい早朝の陽をあびた芝生の上には、倦怠組と異星人好きの連中があつまっている。そのグループの中に、ネサスと〈話し手〉がいる。ルイス・ウーと、ティーラ・ブラウン、それに過労気味のバーテンダーも一台、仲間にはいっていた。

芝生は、かの古式ゆかしい大英帝国ふうに仕上げられたものだ。種子をまき、ローラーでならして五百年。その五百年めに株式市場が崩壊し、ついでルイス・ウーが大金を握ると同時に、ある由緒ある貴族の一家が凋落したというわけだ。芝は緑濃くつややかで、原種そのままだった。

この品種に手をかけて怪しげな改良を試みたものは、ひとりもいない。なだらかに起伏するその緑のスロープのいちばん下には、テニスコートがあり、豆つぶのような人影がかけまわったりとびあがったり、必死で大きな蠅たたきをふりまわしているのが見える。

「運動っていいもんだなあ。一日じゅう見ていても飽きない」と、ルイス。

ティーラがけたたましい声で笑った。ものうい気分で、彼は、彼女がまだ聞いていないはずの数知れぬジョークや、古くなりすぎてもう誰も口にしなくなったそれらのことを思い浮かべた。ルイスの知っている何万ものジョークの九十九パーセントは、もう時代遅れである。過去と現在の、どうにもならぬまざりあい。

バーテンダーが、からだを傾けて、するするとルイスに近づいてきた。傾いているのは、彼がティーラの膝に頭をあずけたままの姿勢で、キイボードへ手をのばそうとしたからである。セカふたつと注文をたたくと、スロットから落ちてくる壜(バルブ)をうけとめ、ひとつをティーラに手わたした。

「きみは、前に知り合いだった女の子とそっくりだよ」と彼。「ポーラ・チェレンコフって名前を聞いたことないかい？」

「漫画家の？　あの、ボストン生まれの？」

「ああ。今は、ウイ・メイド・イット星に住んでる」

「あたしのひいーひいおばあさんよ。一度会ったこともあるわ」

「彼女のおかげで心臓(ハート)がひどい鞭打ち症にかかっちまった。ずいぶん昔のことさ。きみは、まるで双生児(ふたご)みたいに似てるね」

CamScannerでスキャン

ティーラのくすくす笑いが、ルイスの背骨に当たって心地よくはずんだ。「そのハートの鞭打ち症ってなんのことか説明してくれたら、あたし、そんなことのないようにしたげる」

ルイスは小首をかしげた。自分で思いついた形容だが、あのときの彼の気持をよく表現しているように思える。めったに口にしないいいかただし、説明したこともなかった。いつでも、誰にでも、その意味は通じてきたようだ。

おだやかで、平和な朝。いま眠りこんだら、十二時間は目がさめないだろう。疲労の毒素がたまって、彼は消耗しきっていた。ティーラの膝まくらは実にいい気分だ。招待客の半分は女性で、それも多くは、かつて彼の妻だったり愛人だったりした女たちだ。パーティの最中のひと区切り、彼は三人の女と内密に誕生祝いをやったが、三人ともかつては彼にとって大事な女だったし、その逆もまた真であった。

三人？　四人？　いや、やはり三人だ。そして、今の彼はもうその鞭打ち症にも免疫になっている。二百年のあいだに、彼の人柄は、無数に折りかさなる傷あとで蔽いつくされてしまった。そしていま、彼はのんびりと夢見心地で、ポーラ・チェレンコフそっくりの知らない女の子の膝に頭をのせている。

「恋に落ちたんだよ。何年もつきあってた、そのあとでね。デートしたことさえあった。そしてその夜、話をしているうちに、ホワンさ。恋しちまった。彼女も同じだとぼくは思いこんでいた。その夜は、ベッドにははいらなかった——ともにしなかったってことだよ。ぼくは結婚してくれといい、そして、ことわられた。彼女はちょうど、売りだしかけたところだった。結婚しているひまなんてないっていわれた。それでも、いっしょにアマゾン国立公園へ出かける計画をたて

た。一週間の、まあハネムーンもどきといったところかな。
その一週間が、まさに大ゆれさ。はじめは、はりきって、切符やホテルの予約までとった。きみは、ひとりの相手に惚れこみすぎて、自分が相手とつり合わないような気分になったこと、あるかい？」
「ないみたい」
「ぼくも若かった。二日間、ぼくはポーラ・チェレンコフとぴったり合うんだと、自分に思いこませようとつとめた。そして、そう思いこんだ。そこへ彼女が電話で、旅行をことわってきた。理由は覚えていない。何か、ちゃんとした理由があったんだと思う。
その週のうちに二回ほど、夕食にさそった。べつにどうってこともなかった。気まずくならないように、ぼくは必死だった。彼女はそんなことには気づきもしなかったろう。ぼくの気分はヨーヨーみたいに上がったり下がったり。そのあげくに、肘鉄さ。彼女も好意は持ってくれていた。いっしょにいると、ふたりとも楽しかった。いい友だちのままでいればよかったんだ。
結局、ぼくが彼女向きのタイプではなかったんだな。ぼくは愛してるつもりだったし、彼女も一週間かそこらは、そのつもりだったろう。薄情な女じゃなかった。ただ、ことの次第が、自分でわかっていなかったんだな」
「でも、鞭打ち症ってなんのことなの？」
ルイスは思わずティーラ・ブラウンの顔を見あげた。銀色の目にはなんの反応もなく、ルイスは、自分のことばを彼女がひとことも理解していないことに気づいた。
ルイスは、異星人とも、いろいろつきあってきた。本能的にか、訓練の結果か、何かある概念

が異質すぎて話が通じないときには、敏感に感じとれるようになっている。まさにそれに似た基本的なギャップが、ふたりのあいだにもあった。

ルイス・ウーと、二十歳の娘とを隔てる、とほうもないギャップ！　本当に自分は、そんなに年老いてしまったのだろうか？　いったい、このルイス・ウーは、まだ人間だといえるのか？

ティーラの無邪気な瞳が、ルイスのはっきりした答えを待っている。

「カホナ」悪態をついて、ごろりと横ざまに身をおこした。上衣（ローブ）についた泥のしずくがゆっくりと表面をつたって、へりからしたたり落ちた。

パペッティア人のネサスは、倫理観について話しこんでいた。その話を中断して（とはいえまい。彼は、まわりの人たちと、両方の口を使ってそれぞれ話していたのだから）ルイスの問いに答えた。いいえ、エージェントからはまだなんの連絡もありません。

〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉も、同じように人びとにとりかこまれ、芝生の上にオレンジ色の小山のように寝そべっていた。ふたりの女性が、その耳のうしろの毛皮をかいてやっている。奇妙な耳だ。ひろげればピンク色の中国の日傘みたいになるし、たたむと頭にぴったりはりついてしまう。が、それが、いまはひろがって、両方とも表面に刺青された紋様が見えた。

「どうだ、さっきいったとおりだろう？」と、ルイスは声をかけた。

「そうだな」クジン人は、身じろぎもせず答えた。

ルイスは、おかしさをこらえていた。クジン人は恐るべき猛獣なのではなかったか？　しかし、こうして耳のうしろをかいてもらっているクジン人を、こわがるものがあるだろうか？　ここでは、ルイスの客たちも、クジン人も、同じようにのんびりとくつろいでいる。野ねずみ以上のレ

ベルにある生物ならなんでも、耳をかかれるのが好きなものなのだ。「交替しているようだな」眠たげに、クジン人がいう。「耳をかいてくれている女性に、男性が近づいて、同じことを自分にもしてくれといい、ふたりいっしょにいってしまう。すると、べつの女性がかわりにやってくる。まことに面白いな。男女ともに知性をそなえた種族というのは」

「そのせいで、ものごとがひどくこんぐらかってくることもあるがね」

「本当か？」

クジン人の左肩のところにいた娘――大宇宙のように漆黒の皮膚を星や星雲の模様で飾り、彗星の尾のようにつめたい白色の髪を長く垂らしている――が、手をやすめて顔をあげた。「ティーラ、代わってよ」華やいだ声で、「おなかがすいたわ」

ティーラは、しかたなさそうに、巨大なオレンジ色の頭のそばに膝をついた。ルイスが、「こちら、ティーラ・ブラウン、こっちが〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉。きっと、気が――」

とたんにすぐそばで、調子はずれの音楽がバーンと鳴った。

「――合うと思う。な、なんだ？　おい、ネサス。いったい――？」

音楽と思ったのは、パペッティア人のすばらしいのどから出たものだった。そのネサスは、もう、ふたりのあいだに乱暴に割りこんでいた。「あなたが、ティーラ・ヤンドローヴァ・ブラウン、認識番号IKLUGGTYNですか？」

娘はびっくりしていたが、おびえてはいなかった。「そう、あたしの名前よ。認識番号なんて覚えてないけど。それが、どうかしたの？」

「わたしたちは、もう一週間近くのあいだ、地球じゅうしらみつぶしに、あなたをさがしていた

のです。それが、たまたま来あわせた人たちの中で見つかるとは！　エージェントには、きびしくいってやります」
「おい、ちょっと」ルイスが、おだやかに声をかけた。
ティーラは、ぎごちない動作で立ちあがった。「かくれてたわけじゃないわ。あなたからも、ほかのどんな——異星人からもね。でも、いったい何がどうしたっていうの？」
「まあ、待て！」ルイスは、ネサスと娘のあいだに割ってはいった。「ネサス。ティーラ・ブラウンは、どう見たって探険家ってがらじゃない。誰かべつのにしろよ」
「しかし、ルイス——」
「ちょっと待った」クジン人も身をおこした。「ルイス。隊員のメンバーをきめるのは、あの菜食動物だぞ」
「でも、この娘を見てみろよ！」
「自分のことも見てみろ、ルイス。背も二メートルそこそこ、人間としてもやせたほうだ。おまえが探険家というがらか？　それに、ネサスはどうだ？」
「なにをバカなこといってるのよ！」ティーラが叫んだ。
時をうつさず、ネサスがいった。「ルイス、あなたの書斎へひっこみましょう。ティーラ・ブラウン、あなたに話すことがあります。むりに引きうけなくてもいいし、ききたくなければきかなくてもいいのですが、たぶん興味を持ってもらえるでしょう」

「捨てておくわけにはいきません」
「地球上でただひとりの候補ってわけじゃあるまいに！」
「はい、ルイス。それはそのとおりです。しかし、ほかの候補者には、まだ連絡がつかないのです」
「あたしのどこがどうだっていうの？」
　パペッティア人は、彼女に話しはじめた。話すにつれ、ティーラ・ブラウンは、宇宙になどまったく興味がないし、月までいったこともないし、ましてノウンスペースの境をこえていく気などぜんぜんないことがわかった。量子(クワンタム)第二段階ハイパードライヴにも、好奇心をいだく様子はない。すっかり混乱し、当惑しはじめている彼女を見て、ルイス・ウーがふたたび割りこんだ。
「ネサス。彼女がそんなにぴったりだという条件は、いったいなんだい？」
「わたしのエージェントは、出産権抽籤で当選したものの子孫をさがしているのです」
「辞めたぜ。あんたは、正真正銘の気ちがいだ」
「いいえ、ルイス。この命令は、わたしの種族全体を指導する〈至後者(ハインドモースト)〉から出たものです。彼の正気は疑う余地もありません。説明しましょうか？」

　人類にとって、産児制限がたいした問題ではなくなってから、すでに久しい。こんにちその処置は、前膊部の皮膚の下に小さな結晶体を埋めこむだけだ。結晶がすっかり溶けるのに、一年かかる。そのあいだ、被術者には子供ができない。何世紀か前には、もっと不器用な方法がとられていたものであった。

　地球の人口は安定し、二十一世紀中葉には約百八十億だった。国連の下部組織である出生管理局が、産児制限法を制定し施行していた。五百年以上にわたって、その法律は不変であった。一夫婦につき子供ふたり、それも出生管理局の承認を要するきまりだ。同局が、各人の持ってよい子供の数を裁定する。何かの功で余分の子供を持てる夫婦も、ひとりも持てない夫婦も出るわけだが、その裁定はすべて遺伝子の優劣にもとづいておこなわれてきたのである。
「信じられん」とクジン人。
「なぜ？　なにもかもカオスなくらいに混みあってたんだ。原始的な生産技術に、百八十億人がおんぶしていたんだからね」
「もしクジン族で、そんな法律を強制しようとする族長がいたら、増上慢のかどで、一家みな殺しにされるだろう」
　しかし、人類はクジン族とはちがう。五百年のあいだ、その法令は守られてきた。だが二百年前、出生管理局内に不正があるという噂がひろまった。このスキャンダルが、結局のところ、従来の産児制限法を根底からひっくりかえすこととなった。
　現在では、人間なら誰でも、遺伝子の如何によらず、一児の親となる権利が与えられている。それに加えて、ふたりめ、ないしは三人めの権利が、IQテストの成績とか、あるいは〈山頂平原〉能力や絶対的方向感覚のような、すでに立証ずみの有用な精神能力とか、さらには、テレパシー、長寿、完璧な歯といった遺伝因子に対して、自動的に付与されるのである。
　百万スター積んでひとりぶんの権利を買うこともできた。なぜいけないわけがあろう？　蓄財のすべもまた、まごうかたなき有用な能力だ。またそれによって、贈収賄の企てをおさえる効果も

あった。

ひとりめの権利をまだ行使していないものは、闘技場で余分の権利を戦いとることもできた。勝てば、ふたりめ、三人めの出産権を手にいれ、敗ければひとりめの権利といっしょに自分の命をも失う。それで帳尻も合うわけだ。

「その決闘なら、前に娯楽番組で見たことがある」と〈話し手(スピーカー)〉。「しかし、連中は楽しみで闘っているものとばかり思っていたぞ」

「いんや、真剣そのものさ」とルイス。ティーラがくすくす笑った。

「で、その抽籤とやらは？」

「そのすぐあとのことです」と、ネサス。「人類が、加齢防止用の細胞賦活剤(ブースタースパイス)を使っても、毎年、死ぬ人の数が生まれる数をうわまわるようになりました……」

そこで出生管理局は、その年度内の死亡と出国の和から、出生と入国の数を差引き計算して、その数だけの出産権を、元旦の抽籤会で配分することにしたのだった。

誰でも参加できる。運に恵まれれば、十人二十人の子供を持つことができる——もしそれが幸運といえるならばだが。有罪の宣告をうけた犯罪者でも、この出産権抽籤から締めだされることはない。

「ぼくは四人の子供をつくった」と、ルイス・ウー。「ひとりは抽籤でね。十二時間前には、そのうち三人がここへきていたよ」

「まことに複雑怪奇な話だ。わがクジン族では、人口が多くなりすぎたら——」

「手近な人間の世界を攻撃するんだろう」

「いや、ちがうぞ、ルイス。われわれは、たがいに戦うのだ。数が増えるほど、クジン人ひとりあたりの攻撃の可能性もふえる。わが人口問題は、自然に解決されるのだ。ただひとつの惑星上に、二掛ける十の八乗もの人口など、われわれには思いもよらないことだ！」

「ちょっとわかってきたみたい」と、ティーラ・ブラウン。「あたしの両親は、ふたりとも抽籤が当たって生まれたの」ちょっと神経質に笑って、「さもないと、あたしも生まれなかったわけね。ちょっと、そういえば、あたしのおばあさんも――」

「あなたの祖先は、五代前まで、全員が抽籤に当たって生まれた人たちなのです」

「ほんと？　ぜんぜん知らなかった！」

「記録は、はっきりしています」ネサスが請けあった。

「まだわからんね」とルイス。「だから、どうだというんだい？」

「パペッティアの船団を統率する人びとは、地球人が運に強い血統を生みだしつつあると判断したのです」

「なんだって！」

ティーラ・ブラウンが、強く興味をひかれた様子で、椅子から前に身をのりだした。当然ながら、気のふれたパペッティア人など、これまで見たこともなかったのだ。

「抽籤とはなんでしょう、ルイス。そして、進化とは？　七百年も前から、あなたの種族は、数字にたよって子孫をつくってきました。ひとりにつきふたりの出産権、夫婦ひと組に子供ふたり。三人めの出産権を手にいれるものもあれば、糖尿病の遺伝子とかそういった妥当な理由で、ひとりも持てないものもありました。が、人類のほとんどは、子供をふたりつくってきたのです。

ついで、法律が変わりました。過去二世紀のあいだ、世代ごとに十ないし十三パーセントの人間は、抽籤に当たったことによって生まれています。生き残り子孫をつくる条件とはいったいなんでしょう？　地球上では、それは〝運のよさ〟なのです。

そして、ティーラ・ブラウンは、その賭けに勝ちつづけてきた血統の六代目に当たるのです……」

## 3 ティーラ・ブラウン

ティーラは、もうとめどがないほど笑いこけていた。

「冗談じゃない」とルイス・ウー。「幸運の血統なんて。眉毛の濃い血統みたいにいくもんか！」

「しかし、テレパシーの血統は、認められているではありませんか」

「それは別問題さ。テレパシーは、精神能力なんかじゃない。右頭頂葉にある機構の位置関係もわかっている。ただ、ほとんどの人間は、そこが働かないだけなんだ」

「テレパシーも、以前は超心理の一形態と思われていました。今あなたは、運のよさが能力でないという」

「運は運さ」こっけいな場面だったことはたしかだし、ティーラがそう思っているのも無理はない。が、ルイスは、ティーラのまだ気づかぬことに思い至っていた。パペッティア人は、本気なのだ。「平均の法則は、ゆらぎの大きなもんだ。つきが去れば、恐龍の一族みたいにゲームを失う。もし、ダイスの目が思うように出れば――」

「ダイスの目を思いどおりに出せる人間もいるそうですが――」

「だったら、ぼくの持ちだした例が悪かっただけさ。要するに――」

「そうだ」とクジン人がうなった。その気になれば、彼の声は、壁をビリビリと振動させた。
「要するにわれわれが、ネサスの選んだものを、うけいれればよいのだ。ネサス、おまえは船を持っている。で、その四人めの隊員は、どこにいるか、いうがよい」
「ここに、この部屋の中です！」
「ちょっと待ってよ。そんなカホなことって！」ティーラは立ちあがった。青い皮膚の上で銀色のネットが、ほんものの金属のように光り、髪は、エア・コンから流れだす微風で、炎のようにゆらいでいる。「何もかも、馬鹿げてるわ。あたし、どこへもいきませんからね。どうして、いかなきゃならないことがあるの？」
「ほかの誰かにしろよ、ネサス。ちゃんとした候補者が何百万人もいるはずだ。何をこだわってるんだい？」
「何百万人もいません。せいぜい数千人。それも大部分は、映話か個人用転移ボックスのナンバーくらいしかわかっていません。ぜんぶ、五代前の先祖まで、抽籤に当たって生まれてきた人たちです」
「それで？」
ネサスは、床の上を歩きまわりはじめた。「その多くは、明白な不運を示す資料（データ）があって、はずされました。残りは、まだひとりもつかまりません。映話すると外出中。もう一度かけると、コンピュータがつなぎまちがえる。ブラント姓の誰かを呼びだそうとすると、南アメリカじゅうの映話が鳴りだす。苦情をいわれる。失敗ばかりです」ポク、ポク、ポクという蹄の音。
ティーラが、「まだあたしには、行先もいってないじゃないの」

「目的地は、いえないのです、ティーラ。しかし、ルイスの——」

「なんてことを！　それもいわないつもりなのね？」

「ルイスの持っている立体写真を見てください。いまのところ、わたしが知らせてよいことはそれだけです」

ルイスは、彼女に写真をわたした。暗黒をバックに、白く光る円形のうしろを空色の帯が走っている、それである。ティーラはそれをためつすがめつしていたが、ルイスには、彼女が怒りをおさえきれずにいるのが、よくわかった。

口をひらくと、彼女はまるで、みかんの種を吐きだすように、一語ずつ区切ってしゃべった。

「こんな馬鹿げたことって、はじめてだわ。ルイスとあたしを、パペッティア人やクジン人といっしょに、ノウンスペースの外まで飛ばすといいながら、行先といったら、青いリボンに光った丸をひとつ見せてくれるだけ！　そんなの——馬鹿げてるわ！」

「すると、つまり、仲間にははいらないというのですね」

娘は眉をつりあげた。

「はっきり答えてください。もうすぐエージェントが、べつの候補者を見つけるかもしれません」

「ええ」と、ティーラ・ブラウン。「おことわりしますとも」

「では、人間の法律により、ここで話したことの秘密を守ることを忘れないように。もう相談料を支払ってありますから」

「誰に話すっていうの？」ティーラは、けたたましく笑った。「誰が本気にするっていうの？　ん

イス、あなた本当に、こんな馬鹿げた話に——」

「ああ、乗るつもりだよ」ルイスはもう、べつのことに思いをめぐらせていた。例えば、彼女をそれとなく、この書斎から出してしまうことだ。「もっとも、いますぐ出発ってわけじゃない。まだパーティも終わってないしね。そうだ、ちょっと頼まれてくれないか？　ミュージック・マスターのテープを、四番から五番に切りかえて。それから、誰かがきいたら、ぼくは一分かそこらのうちに出てくるっていっとくようにね」

彼女が去り、ドアがしまると、ルイスはしゃべりだした。「こっちのいうこともきいてくれよ。みんなのためにもなることだ。未知の宇宙へちょっと散歩としゃれるのに、どんな人間が適当か、その判断は、ぼくにまかせてほしいんだ」

「候補者に絶対必要な資格については、もう話しましたね」と、ネサス。「それに該当するものは、まだひとりしか見つかっていないのです」

「何万人だっているさ」

「そんなことはありません。多くが不適格とわかりましたし、ほかのものは見つからないのです。それはそうと、あの人間が、どういう点であなたの基準に合わないのか、話してください」

「若すぎるよ」

「候補者はみんなティーラ・ブラウンと同じ世代です」

「幸運の血統か！　いや、べつにその議論をまたむしかえそうってわけじゃないよ。それ以上におかしなことを考える人間もいるしね。げんに、このパーティにも、ふたりほど来ている……そう、あんたも自分で会って、わかってるはずだが、あの娘は異星人好きじゃないぜ」

CamScannerでスキャン

「しかし、異星人嫌いでもありません。わたしたちを、ちっともこわがりません」

「感受性のひらめきがないのさ。それに――あの娘は――それに――」

「不安感というものがないのです」と、ネサス。「どこへいっても幸福でいられる。まさにそういう状況なのです。まったく何不足なく過ごしています。もっともその点は、たずねてみないとわからないでしょう」

「わかった。勝手に候補者をきめろよ」ルイスは、ゆっくりと書斎を出ようとした。

そのうしろで、パペッティア人が、かん高い声をあげた。「ルイス！　〈話し手（スピーカー）〉！　合図がありました！　エージェントが、もうひとり、候補者を見つけたのです！」

「そうだろうとも」うんざりして答えた。居間の向こうの端では、もうひとりの〈ピアスンの人形師（パペッティア）〉と、ティーラ・ブラウンが、ぱったり顔を合わせたところだった。

ルイスは、ゆっくりと目をさました。簡易睡眠セットをかぶり、一時間に合わせたことを思い出した。だから当然、一時間しかたっていないはずだ。自動スイッチが切れると、セットの不愉快な感触で目がさめるはずだったが……。

セットがはずれている。

あわてて起きあがった。

「あたしがはずしたの」ティーラ・ブラウンがいった。「とっても疲れてるみたいだったから」

「まいったな。いま何時だ？」

「十七時ちょっと過ぎ」

「主人役失格だ。パーティはどうなってる？」

「いま残ってるのは二十人くらいかしら。大丈夫よ。みんなに、あたしがセットをはずしたってこと話したから。みんな、そりゃよかったっていってたわ」

「わかった」ルイスは、ベッドからごろりところげ出た。「どうも。それじゃ、残った人たちに会いにいこう」

「その前に、話したいことがあるの」

彼はふたたび腰をおろした。起きぬけでぼやけた頭が、やっとすっきりしてくる。「なんのこと？」

「本当に、あのめちゃくちゃな旅に出かけるつもりなの？」

「そうだよ」

「どうしてだかわかんないわ」

「ぼくは、きみの十倍も年をくっている」と、ルイス・ウーは答えた。「食うために働く必要もない。科学者になるほどの忍耐力もない。ものを書いてみたこともあるが、思いがけないことに、すぐ重荷になっちまった。あと、何がある？ 遊びまわるだけだ」

彼女が首をふると、明かりが四方の壁でふるえた。「遊びだなんて、思えない」

ルイスは肩をすくめた。「倦怠が、ぼくの最大の敵なんだよ。それで自殺した友人も大ぜいいる。だが、ぼくは大丈夫だった。退屈すると、どこか生命を賭けるようなところへ出かけるのさ」

「でも、その危険がどんなものかくらいは、知りたいと思わないの？」

「報酬がいいからね」

「お金なんて必要ないはずよ」

「人類にとって、パペッティア人の知識が必要なんだよ。ねえ、ティーラ。さっき、第二量子域（セカンド・クワンタム）のハイパードライヴの話が出たね。あれは、ノウンスペースで、一光年を三日というふつうのスピードよりも速く飛べる唯一の船なんだ。実際には、その四百倍の速度が出せる！」

「そんなに速く飛ぶ必要があるの？」

銀河の中心核の爆発について、解説してきかせるようなムードではなかった。「パーティへもどろう」

「だめ。待って！」

「ああ、いいとも」

女にしては大きな手、細く長い指だ。いらだたしそうに、燃えるような髪にからませたその指が、きらりと光に映える。「カホナ！　すっかりこんぐらかっちゃった。ルイス、いま誰かを本気で愛してる？」

思いがけない質問だった。「いないらしいね」

「あたし、本当に、ポーラ・チェレンコフみたいに見える？」

ほの暗い寝室の中で、彼女の姿は、まるでダリ描くところの〈燃えるキリン〉のように見えた。髪そのものが光を放ち、オレンジと黄色の炎が流れるさきは煙となって消える。この暗さでは、髪のきらめきのせいで、ティーラのほかの部分は闇にとけこんでしまっている。しかし、ルイスの記憶が、あらゆる細部をおぎなってくれた。長い完璧な脚、円錐形の乳房、小さめの顔の輪郭

な美しさ。はじめて会ったのは四日前のことで、パーティに出席するため地球へやってきたひょろ長い不時着人種（クラッシュランダー）テドロン・ドーニイの腕に抱かれて、姿を見せたのだった。

「あのときは、ポーラが現れたのかと思ったよ。彼女はウイ・メイド・イット星に住んでいるし、ぼくがテッド・ドーニイに会ったのもそこだった。いっしょに現れたんで、テッドとポーラが同じ船でやってきたのかと思った。

よく見ると、やっぱりちがっている。きみのほうが、脚はきれいだ。でもポーラの歩きかたのほうが優雅だった。ポーラの顔は――ちょっとつめたい感じだったね。ただそんな記憶が残っているだけかもしれないが」

ドアの外で、コンピュータ音楽が鳴りだした。粗野で単純で、相ともなう光のパターンの明滅がないと、救えないしろものだ。ティーラが不安げにからだを動かすと、壁の影がゆらめいた。

「何を考えてるんだい？　ねえ、パペッティア人は、何千という候補者をかかえてるんだ。四人めの隊員が、いつ見つかるかはわからない。そしたら、出発する」

「それはいいの」と、ティーラ。

「そのときまで、ここにいてくれるね？」

彼女の燃えたつ髪が、こくりと前へうなずいた。

パペッティア人は、二日後にまたやってきた。

ルイスとティーラは、芝生の上で日光浴をしながら、おとぎチェスの勝負に夢中になっているところだった。ルイスは、片方のナイトを落としてやっていたが、いまはそれを後悔していた。

ティーラは、ちゃんと読んで指すかと思うと、つぎには直観によるか。どんな手を指してくるか、予想がつかないのだ。しかも、彼女はすっかりむきになっている。

　つぎの手を考えて、彼女がゆっくり下くちびるをかんでいるところへ、給仕(サーボ)がすべってきて、ポンと合図の音を鳴らした。ルイスが見あげると、給仕(サーボ)の胸のモニター・スクリーンから、ひとつ目の蛇が二匹、こっちを向いている。「ここへ案内しろ」彼は気軽にそういった。

　いきなりティーラが、ぎくしゃくと立ちあがった。「秘密のお話でしょ？」

「かもね。何を考えたんだい？」

「いま読んどきたいものがあるの」ぐいとひとさし指をつきつけると、「その盤にさわっちゃだめよ！」

　ドアのところで、彼女は、出てくるパペッティア人と出会った。すれちがうとき、彼女が何げなく手をあげると、ネサスは六フィートも横にとびのいた。「すみません」笛のような声。「びっくりしたものですから」

　ティーラは、片方の眉をみごとにあげてみせ、それから中へはいっていった。

　パペッティア人は、ルイスのそばへくると、脚を折りたたんで腰をおろした。頭のひとつはルイスを見つめ、もうひとつは神経質そうに、ぐるぐると四囲を見わたしている。「あの女性は、見ていないでしょうね？」

　ルイスは驚きをかくそうともしなかった。「あたりまえさ。それに、こんなあけっぱなしのところじゃ、スパイビームの防ぎようがないことぐらいわかってるだろう。で、どうなった？」

「誰が見ているかわかりません。ルイス、あなたの書斎へいきましょう」

「そんなカホな」ルイスはこの場所で、すっかりいい気分になっているところだった。「後生だから、その頭をぐるぐるまわすのは、やめてくれないか？　死ぬほどおびえてるみたいだ」

「わたしが死んでも、どうということのないのはわかっていますが、こわいのは本当です。地球には、一年にいくつくらい、隕石が落ちますか？」

「知るもんか、そんなこと」

「ここは、危険なほど小惑星帯に近いのです。まあ、それもどうということはありません。四人めの隊員が、いまだに見つからないのですから」

「それはいけないな」とルイス。それにしても様子がおかしい。もしネサスが人間だったらこれは——しかし、そうではない。「まだあきらめてはいない。そうだと思うが」

「はい、しかし、まったくいまいましい話です。この四日間、わたしたちは、ノーマン・ヘイウッドKJMMCWTADをさがしていました。隊員として完璧な人材です」

「それで？」

「健康で、活潑で、年齢は地球年で二十四歳と四ヵ月。六代の先祖がすべて抽籤で生まれています。いちばんいいのは、彼が旅行好きなことです。気ぜわしそうな態度も、わたしたちの要求にぴったりでした。

当然、わたしたちは彼に会おうとしました。三日にわたって、わたしのエージェントは、つぎからつぎへと転移ボックスをわたり歩く彼を追いかけて追いつけず、そのあいだにノーマン・ヘイウッドは、スイスへスキーにいき、セイロンでサーフィンをし、ニューヨークで買物をし、ロッキーとヒマラヤではパーティに出席しました。昨夜、エージェントは、ジンクス星行きの客船

に乗りこんだ彼をつかまえました。が、あなたの操縦する仮装備の船がこわいという彼を説得できないうちに、船は出てしまいました」
「ぼくにもそんな時代があったな。超空間通信(ハイパーウエーヴ)で、メッセージを送ってやれないのかい?」
「ルイス、この探険は秘密なのですよ」
「そうか」とルイス。その目の前で、蛇のような頭のひとつが見えない敵の姿を求めて、ぐるりぐるりとまわりつづけている。
「いずれは、なんとかなるでしょう」とネサス。「数千人もいる有資格者が、いつまでも姿をかくしつづけていられるはずはありません。それとも、あるのでしょうか? 彼らは、わたしたちがさがしていることすら知らないというのに!」
「そのうち見つかるさ。まちがいないよ」
「見つからないほうがましです! ルイス、どうしてわたしにできるでしょうか? 三人の異星人と、ひとり乗りの実験船に乗っていくなんて、わたしにできることでしょうか? まったく狂気の沙汰です!」
「ネサス、何をいったい悩んでるんだ? この探険は、もともと全部あんたの立てた計画なんだぜ!」
「そうではないのです。二百光年もかなたにいる〈指導する人びと〉の命令なのです」
「何かにおびえてるみたいだぜ。なんだか知りたいな。何がわかったんだ? この探険は、本当はなんのためなんだ? レストランで、四人のクジン人を侮辱しようとしたあんたが、いったいどうしたんだ? おい、しっかりしろよ!」

CamScannerでスキャン

パペッティア人は、ふたつの頭と頭を、前脚のあいだにはさみこんで、ボールのように丸まってしまっていた。

「さあ、さあ、出ておいで」ルイスは、パペッティア人の頸のうしろ——その肌の現れている部分を、両手でなでてやった。パペッティア人が身ぶるいする。その皮膚はやわらかく、シャミー皮のように手ざわりがよかった。

「さあ、出てくるんだ。誰もいじめるものなんかいない。お客の安全は、ちゃんと守るよ」

パペッティア人の泣き声が、そのからだの下から、くぐもってひびいてきた。「わたしは気がふれてるんです！　気ちがいなんです！　四人のクジン人を侮辱したなんて！」

「出てこいったら。ここは安全なんだよ。ほら、大丈夫だろ？」ひらたい頭のひとつが、そうっと外をのぞいた。「わかるね？　何もこわがることはないんだよ」

「クジン人が四人？　三人じゃありませんでしたか？」

「そうか。ぼくのかぞえちがいだ。三人だったよ」

「申しわけありません、ルイス」もうひとつの頭が、目だけをのぞかせた。「躁期（マニック）が終わったのです。いま、心理サイクルが、鬱期（デプレッシヴ）にはいったのです」

「自分でどうにもできないのかい？」ネサスが肝腎なときにこんなふうになった場合のことを、ルイスは頭にえがいていた。

「終わるのを待てばいいのです。できるだけは、自分で始末をつけます。判断にも影響がないようにします」

「かわいそうに。で、何か新しい情報があったのかい？」

「正気だったら、いまわかっていることだけで、おびえるには充分でしょう？」パペッティア人は、いくらかよろよろしながら立ちあがった。「ティーラ・ブラウンは、なぜまだここにいたのです？　もういないものと思っていました」

「四人めが見つかるまで、いてくれるようにたのんだのさ」

「なぜです？」

なぜだかは、ルイス自身にもわからなかった。

ポーラ・チェレンコフの思い出とは関係あるまい。つきあっていたころとは、ルイスもすっかり変わったし、また彼は、ひとりの女をべつの女の型にはめようとするたぐいの男でもない。就寝プレートは、ひとりでなくふたり用にデザインされている。しかし、パーティには、ほかにも大ぜい女の子がきていた……ティーラほど美しくはなかったが。賢明なる老ルイス・ウーも、やはり美貌に惹かれる単純な男だったのだろうか？

だが、あの一見平板な銀色の両眼からは、たしかに単なる美以上の何かが訴えかけていた。何かひどくこみいったものが。

「姦通の喜びかな」とルイス。しかし前にいるのは、そんなこみいった問題など理解できるはずもない異星人である。パペッティア人がまだふるえているのに気づいて、彼はことばをついだ。

「書斎へいこう。あそこは丘の下だ。隕石もこないよ」

パペッティア人が去ったあと、ルイスはティーラをさがした。見つけたのは図書室の中で、彼女は読書スクリーンを前に、速読み専門家（スピードリーダー）はだしの速さで、どんどん画面（フレーム）を切りかえていた。

「あーら」貴女は画面をとめて、ふりかえった。「あのふたつ星ちゃんはどうしたの？」
「やたらにおぼえてるよ。くたびれちまった。パペッティア人の精神病医のまねごとをしてたんでね」
ティーラが、顔を輝かせた。「パペッティア人のセックス・ライフについて教えてよ」
「ぼくの知っているのは、あいつが子供をつくれないってことだけさ。それであいつ、くよくよしてる。もしかすると、法律で許されれば、子供をつくれるのかもしれない。わかったのはそれだけ。申しわけないが、それ以外のことはまったく話に出なかったよ」
「じゃ、なんのお話ししてたの？」
ルイスは手をふった。「三百年ぶんの精神的外傷さ。それだけのあいだ、あいつは、人類の世界に残っていたんだ。もうパペッティアの惑星のことも、ろくにおぼえていない。三百年間おびえつづけていたような感じだったな」ルイスは、マッサージ椅子にからだを沈めた。異星人に感情移入しようとした緊張のせいで、精神力を使いはたし、想像力も種切れといったところだ。
「きみはどうなんだ？　何を読んでる？」
「銀河の〈核〉の爆発」ティーラが、スクリーンを指さす。
写っているのは、ぎっしりとひとつにあつまった恒星の一大集団だった。暗黒の部分が見えないほど、無数の恒星が密集している。濃密な球状星団のようにも見えるが、そうではない。そんなものではない。どんな望遠鏡でも、そこまではとどかないし、ありきたりのどんな宇宙船でもだめなのだ。
これは、銀河の〈核〉、その渦状肢の回転軸にあたる部分、さしわたし五千光年の球形にぎっ

しりつまった恒星の密集団塊だった。ひとりの男が、二百年ほど前に、パペッティア人の実験船でそこに到達したのである。画面では、赤や青や緑の星々がたがいにかさなりあい、その中では赤い星がとりわけ大きく明るかった。そのちょうど中心に、コンマ形をふくらませたような形の、白く輝く斑点が見える。その中にも線やしみや影が見えた。が、白斑の中では、その影の部分ですら、外部にあるどの星よりも明るいのだった。

「このために、パペッティア人の船が要るのね。そうでしょ？」とティーラ。

「そうだ」

「どうしてこうなったの？」

「星のあいだが近すぎたのさ」とルイス。「どんな銀河系でも、〈核〉全体を平均すれば、距離は半光年くらいだ。中心のほうでは、もっとくっつきあってる。ある銀河系の〈核〉では、星が近すぎて、たがいにあたためあうようになる。熱くなれば、それだけ速く燃え、急速に齢をとっていくことになる。

この〈核〉の星は、もう一万年も前に、どれも新星（ノヴァ）すれすれのところまできていたんだ。

そして、星のひとつが新星になった。そいつが多量の熱とガンマ線を放出した。そのまわりの星は、それだけ熱くなる。たしか、ガンマ線も、星の活動を促進するはずだ。そこで、近くの星のうちのふたつが、ひきつづいて爆発した。

合計三個だ。その熱がいっしょになって、さらにいくつかを新星段階にひきずりこんだ。つまり連鎖反応で、そうなるともう歯どめがきかない。この白い斑点のところは、ぜんぶ超新星（スーパーノヴァ）なんだ。おのぞみなら、もう少しくわしい数学的説明のテープもあるよ」

[illegible]

[illegible]

「ああ。きみが見ているのは、ずっと昔に出た光さ。まだ銀河のこの空域まではとどいていないけれど、実際の爆発は、もう一万年も前に終わってしまったはずだ」

「じゃ、何をさわぎたてることがあるの？」

「放射線さ。それに、あらゆる種類の高速粒子さ」マッサージ椅子の中で、彼はようやくくつろいだ気分になりはじめていた。深く身を沈めて、振動が筋肉にあたるようにしてやる。「こう考えてごらん。ノウンスペースっていうのは、銀河系の中心から三万三千光年離れた、ちっぽけな島みたいなものだ。新星爆発は、一万年以上前にはじまった。ということは、その大爆発から出た衝撃波が、あと二万年もすると、ここへやってくるってことだ。わかるかい？」

「ええ」

「その波のすぐあとから、百万もの新星から出た放射線粒子が押しよせてくる」

「……まあ」

「二万年のうちに、われわれは、きみの知っているあらゆる世界をひきはらって、移住しなければならなくなる。それも、ずうっと遠くへね」

「ずいぶんさきのことね。すぐ出発すれば、いまある船でだって間に合うわ。簡単よ」

「わからないかなあ。一光年三日のスピードしか出ない船じゃ、マゼラン雲まで達するのに、約六百年かかるんだぜ」

「どっかに寄って、食糧と空気を積みこめばいいわ……一年ごとくらいに」

ルイスは笑いだした。「誰でもいいから、そういって説得してごらんよ。ぼくのいう意味は、わかるね？〈核〉の爆発の光が、ここと、銀河の中心とをへだてている宇宙塵雲をとおして光りだしたとき、はじめて人類世界は、急激な恐慌に陥るだろう。そのときにはもう、退避するのに百年くらいしか時間はないんだ。

パペッティア人は、事態を見ぬいていた。彼らが人間のひとりを雇って、中心核へ冒険飛行をやらせたのは、研究の費用を捻出する宣伝のためだった。その男が、こういう写真を送ってきたのさ。その男が帰りついたとき、パペッティア人は、もう出発してしまっていた。人類世界のどこをさがしても、パペッティア人は、ひとりも見つからなかった。われわれは、そんなふうにはいかない。待って待って待ちぬいて、ついに移住ときまったときには、何兆もの知性生命体を、すっかり銀河系から運びださなくちゃならん。できるだけ大きくて速い船が要る。それも、できるだけたくさん建造する必要がある。いま、パペッティア人の船が手にはいれば、すぐその改良にとりかかれるわけだ。だから——」

「わかった。いっしょにいくわ」

ルイスは、講義の腰をおられて、「え？」とききかえした。

「いっしょにいくっていうのよ」とティーラ。

「気でもくるったのか」

「でも、あなたは、いくんでしょ？」

ルイスは、わめきだしそうになって、歯をくいしばった。そして口をひらいたとき、彼の口調は、この場にそぐわないほどおだやかだった。「ああ、ぼくはいくよ。しかし、きみには、いく

勇気がないし、ぼくは齢をくってるだけ。きみよりは自分を守るすべを知っている」

「でも、あたしのほうが運がいいのよ」

ルイスは、ふんと鼻をならした。

「そりゃ、あなたみたいに、ちゃんとしたものじゃないけど、いく理由ならいっぱいあるわ！」

彼女の声が怒りで高くかすれた。

「さあ、どんなものかな」

彼女は、指でスクリーンの表面を、とんとんとたたいた。ふくらんだコンマ形の新星の光が、その爪の下で燃えている。「これよ。りっぱな理由じゃなくて？」

「きみがこようとこまいと、パペッティア人の船は手にはいるさ。ネサスがいってたじゃないか。きみみたいのは、何千人もいるんだって」

「あたしだってそのひとりよ！」

「そうさ、きみもたしかにそのひとりだよ」ルイスも、むきになっていた。

「なぜ、そんなカホなかまいだてするの？　かまってくれってたのんだことがあって？」

「悪かったね。どうして後見人づらしたのか、自分でもわからないよ。きみは、りっぱなおとななんだからね」

「認めていただいてありがとう。わたくしも、お仲間にいれてくださいな」ティーラも、すっかりつめたく気どった口調になった。

なんてこった。彼女はたしかに、ちゃんとした自由人だ。何も干渉できないというばかりではない。強制することは不作法にあたるわけだし、また（これが大事な点だが）強制しても効果は

なさそうだ。
　しかし、説得することなら、できるかもしれない……。
「ひとつ考えてみようじゃないか」と、ルイス・ウーはいった。「ネサスは、この旅の秘密を守ることに、最大の努力をはらっている。なぜだ？　何をかくさなければならないんだろう？」
「そんなこと。わたしたちにはどうでもいいじゃない？　行先はどこか知らないけど、そこに何か、盗まれると困る大事なものがあるのかもしれないし」
「それがどうした？　目的地は、二百光年も向こうだぞ。ぼくら以外に、そこへいけるやつなどいやしない」
「じゃ、旅そのものが秘密なんだわ」
　ティーラのどこが異常であるにしろ、少なくとも馬鹿じゃない。ルイスも、そこまでは考えていなかった。「じゃ、隊員のメンバーを見てみろ。人間ふたり。パペッティア人とクジン人がひとりずつ。プロの探険家はひとりもいない」
「いいたいことはわかるけど、ルイス、あたし、本当にいくの。とめようったって無駄よ」
「それでも、これからどんな目にあうかくらいは知っとくほうがいい。なぜこんなおかしなメンバーをあつめたんだろうね？」
「それはネサスの考えたことよ」
「ぼくらも考えなきゃならないことさ。ネサスはその命令を、〈指導する人びと〉――パペッティア人の言語　からうけた。どうやら彼は、ほんの数時間前に、その命令の本当の意味に気づいたらしい。そして、ひどくおびえている。その……なんというか、パペッティアの秘密を

ひきいる生存の亡者どもは、四つのサンプルをひとまとめに研究しようとしているだけで、探険の目的地なんかどうでもいいんじゃないかな」

そのことばが、ティーラの興味をひいたらしいと知って、彼はたたみかけた。「まず、ネサスだ。知らない土地に出かけられるほどくるったパペッティア人に、生きてもどれるだけの分別が残っているかどうか？ 〈指導する人びと〉は、それが知りたいんだ。彼らがマゼラン雲に到着したら、そこにまた、商業帝国を建設しなくちゃならん。その貿易の担い手は、気のふれたパペッティア人なんだからね。

それから、あの毛皮を着た友人。異星人向けの使節になるくらいだから、クジン族の中では最高に世間ずれしてるはずだ。だがその彼も、われわれにまじってうまくやっていけるだろうか？ それとも、ちょっと場所がせまいとか肉が食いたいとかで、相手を殺してしまう程度のところだろうか？

第三に、きみとその幸運の信憑性。まあ、いうなれば、非実体性の実証的研究ってところだ。第四にぼく。どうやら典型的な探険家タイプってことになってるらしいから、さしずめお目付け役というわけか。

ぼくの考えてることは、わかるだろう？」ルイスは、いつのまにか、娘の前に立ちはだかり、かつて七十歳代のとき国連の議員に立候補して落選した折に身につけた演説口調で、息もつかせずしゃべりつづけていた。正直なところ、もうティーラ・ブラウンをおびえさせることはあきらめていたが、なんとか納得させようと必死だったのだ。「探険目標の惑星のことなど、パペッティア人は、考えてもいないだろう。銀河系を引きはらいつつある彼らにとって、何を気にするこ

とがある？　彼らの目的とするところは、このちっぽけな探険隊の自壊テストなのさ。われわれがたがいに殺しあってしまうまでの相互関係など、いろいろ豊富なデータがとれるだろう」

ルイスは、かっとなった。「カホナ！　そんなこと考えて、このさいなんになる？」

「あれ、惑星じゃないみたいよ」と、ティーラ。

「そういっちまえばそうだけど、ルイス、もし探険の途中で殺されちゃうとしても、いま知っておいてわるいわけはないわ。あたし、あれきっと宇宙船だと思う」

「そうかい」

「大きな、星間水素をあつめるラムスクープ場（フィールド）を備えた船。それが、じょうごみたいに、水素を中心に圧縮して、融合反応を起こさせるのよ。それで、推力と、太陽が手にはいる。あのリングをまわして遠心力をつくり、内側にガラスの屋根を張るの」

「そうか」ルイスは、パペッティア人のくれた立体写真（ホロ）のことを思い出していた。目的地のことは、思えばまだほとんど考えてもいなかった。「かもしれん。大きいし、原始的だし、向きを変えるのもたいへんだろうがね。でも、どうして〈指導する人びと〉は、そんなものを気にしたんだろう？」

「避難船かもしれないわ。中心核の近くにいる種族なら、ぎっしりつまった恒星から、星の反応を早めに知ることができる。それで、新星（ノヴァ）爆発の起こることを、何千年か前もって予測したのかもしれない……ふたつか三つ、超新星（スーパー・ノヴァ）が現れたときにね」

「ふたつか三つね。そうかもしれん……どうやら、みごとに話題をそらされちまったな。いま、パペッティア人の意図がどんなものかについて、話していたというのに。まあ、どっちにしろ、

ぼくはいく。面白そうだからね。きみは、なぜいく気になった？」
「中心核の爆発」
「利他主義は立派だ。が、きみみたいな娘が、二万年もさきに起こるはずのことを、気にやむとは思えない。ほかに理由は？」
「やめて！　あなたが英雄になれるなら、あたしだってなれるわ。それに、あなたはネサスのこともわかっていない。彼が自殺の旅についてくるはずがないじゃないの。それに――それになぜ、パペッティア人が、人間やクジン人のことを知りたがるの？　なんのためのテストなの？　彼らは銀河系を逃げだそうとしてるのよ。もうわたしたちと会うことなど、二度とないはずよ」
ティーラは、馬鹿どころではない。だが――「そうじゃないんだ。パペッティア人には、われわれを研究する立派な理由がある」
ティーラの見つめる視線にひきずられて、彼はことばをつづけた。
「パペッティア人の大移動については、多くのことが、まだ謎につつまれている。病人でない、狂気でもないパペッティア人の全員が、去ってしまったことはわかっている。また、わずか光速を下まわるスピードで飛んでいるということもわかっている。超空間がこわいんだそうだ。
さて、光速にちょっと足りないスピードだと、パペッティア人の大船隊が小マゼラン雲に到着するのは、約八万五千年後のことだ。そこで彼らは、何に出会うと考えているだろうか？」
彼は、彼女ににやりと笑ってみせ、それから、びしりといった。「われわれさ、もちろん。少なくとも、人間とクジン人だ。たぶん、クダトリノ人や、ピエリン人や、海豚のことも考慮しているだろう。われわれが、最後の瞬間までねばってから逃げだすこと、そして光より速い船を使

うことも、彼らは予測している。パペッティア人がマゼラン雲にいきつくと、またわれわれを相手にしなきゃならん……あるいは、われわれを絶滅させたやつを相手にすることになるかもしれんが、われわれを研究しておけば、その殺戮者についても、予想が立てられるだろう。実際、われわれを研究する理由は、充分あるのさ」

「わかったわ」

「それでもいく気かい？」

ティーラは、うなずいた。

「なぜだ？」

「いくことになってるからよ」ティーラは、憎らしいほど落ちつきはらっている。となると、ルイスに何ができよう？　彼女が十九歳以下だったら、親を呼ぶのもひとつの手だ。しかし、二十歳になれば、一人前のおとなと見なされる。何ごとも、どこかで一線を画さなければならないものだ。

おとなである彼女には、選択の権利がある。ルイス・ウーに対しても、対等の扱いを期待して当然だし、プライバシーの一部は神聖侵すべからざるもの。ルイスは説得する以外にないわけで、それもみごとに失敗に終わったのだった。

したがって、彼女がつづいてとった態度は、べつにその必要があってしたわけではなかった。彼女は、ふいに彼の手をとると、ほほえみながら、弁解するようにいったのである。「ルイス、あたしを連れてって。あたしは運がいいの、本当にそうなのよ。もしネサスがあたしを選んでなかったら、あなたは、ひとり寝をかこつことになるわ。そんなの、好きじゃないでしょう？　わ

かってるのよ」

彼は、途方にくれた。ネサスの船から遠ざけておこうにも、直接パペッティア人のところへいかれたら、それで終わりである。

「よろしい。彼に映話しよう」と、ルイスはいった。

それに、ひとり寝がごめんだという気も、たしかにあった。

# 4　獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）

「探険いっしょにいくわ」ティーラが、映話スクリーンに向かっていった。
パペッティア人は、Eフラットの音を、長くひびかせた。
「なんていったの？」
「すみません」とパペッティア人。「明日の〇八〇〇、オーストラリアのアウトバック空港まできてください。個人の所持品は、地球の基準で五十ポンド以内です。ルイス、あなたも同じようにしてください。アアア――」パペッティア人が頭を上に向けて、またもや声をあげる。
ルイスが、気にしてたずねた。「病気なのか？」
「いいえ。わたし自身の死を予感したのです。ルイス、あなたがもっとくどき下手ならよかったのに。さようなら。アウトバック空港で会いましょう」
スクリーンが暗くなった。
「ちょっと！」ティーラが奇声をあげた。「いったいどうして、あなたがくどき上手だってことになるの？」
「わが黄金の舌の威力よ！　いや、弁舌のかぎりはつくしたんだ。もしきみが、おそろしい死にざまをさらしても、恨まないでくれよ」

その夜、闇の中にただよいながら、ルイスは彼女のつぶやきをきいた。「愛してるわ。愛してるから、あたし、ついていくの」

「ぼくも愛してる」いい気分でうとうとしながら彼は答えた。それから、徐々にその意味が、心にしみこんできた。「ずっと、そう思っていたのかい？」

「ん——ん」

「きみが、二百光年もぼくについてくるのは、ぼくひとりをいかせることに耐えられないからなのか？」

「あ——う、うん」

「寝室、半照明」ルイスがいうと、ぼんやりと青い光が室内をみたした。

ふたりは、二枚の就寝プレートのあいだに、一フィートほど離れて浮かんでいた。宇宙へ出るため、ふたりともフラットランダー・スタイルの皮膚と髪の染色処理を洗い落としていた。弁髪にしていたルイスの髪が、いまは黒くさらりとのび、頭のてっぺんの剃りあとは伸びかかった毛で灰色に見える。黄褐色がかった皮膚と、目尻のほとんど上がっていない褐色の目のせいで、彼のイメージはすっかり変わってしまっていた。

ティーラの変貌ぶりも、同じくらいめざましかった。黒っぽく波うつ髪を、そっくりうしろにひっつめている。皮膚は北欧系の純白。卵形の顔は、大きな茶色の目と、小さくきりっとした口に支配され、鼻の存在は、ほとんど気づかれないくらいだ。就寝フィールドの中で、彼女はすっかりくつろぎ、まるで水の表面の油滴のようにただよっていた。

「しかも、きみは月までもいったことがないというのに」

彼女はうなずいた。

「それにぼくは、世界一の色男ってがらでもない。きみが自分でそういったな」

彼女は、もう一度うなずいた。ティーラ・ブラウンは、口の慎みなどとは、およそ縁のない娘だ。この二日二晩のあいだ、彼女は一度も嘘をつかず、事実を脚色もせず、質問をいなそうとさえしていない。とっくにわかっているべきことだったのだ。彼女は、これまでのふたつの恋のことを話していた。一度は相手が半年で彼女に興味を失ったし、もうひとりの相手は彼女のいとこだったが、マウント・ルッキットザットへ移住のチャンスをものにしていってしまった。ルイスのほうは、過去の話などほとんどしていないし、彼女も彼の沈黙をそのままうけいれていた。が、彼女は沈黙どころではなく、ときたまおよそ突拍子もない質問を発するのだった。

「だのに、なぜぼくを？」と、彼。

「わかんない」と彼女。「何か、偶像（カリスマ）みたいなものかしら？　だって、あなたは英雄なんだもの」

たしかに彼は、現在生存しているものの中では、異星種族との最初の接触（ファースト・コンタクト）をなしとげた唯一の人物である。トリノック人とのいきさつを、どうして忘れることなどできよう。

彼はもう一度、説得を試みた。「ねえ、ぼくの知り合いに、恋愛では世界一の男がいるんだ。親しい友人だ。それが趣味でね。それについて何冊も本を出してる。生理学と心理学の博士号まで持っている。過去百三十年のあいだに、彼は――」

「やめて」彼女は両手で耳をおさえた。「やめて」

「ぼくはただ、きみをどこかでのたれ死にさせたくないんだ。いくらなんでも若すぎる」

彼女の当惑したような表情。彼が前に口にした共通語の単語を、まったくナンセンスなものにしてしまった、あの表情だ。ハートの鞭打ち症だって？ どこかでのたれ死にだって？ ルイスは心の中でためいきをついた。「寝室、結節点合体」彼がいうと、就寝フィールドに変化が生じた。安定した平衡状態をたもっている領域、つまり、ルイスとティーラがフィールドからはずれて落ちないようささえているふたつの特異点が、すうっと近づいてひとつになったのである。ルイスとティーラは、〝斜面をすべる〟ようにそれに引かれて、ぶつかり、いっしょになった。

「ほんとに眠いのよ、ルイス。でも、いいわ……」

「また眠っちまわないうちに、プライバシーのことを考えておこう。宇宙船ってのは、えてして不自由なものでね」

「愛しあえないってこと？ カホナ、あたしは平気よ、ルイス。あんな異星人が見てたって」

「ぼくは気になるね」

彼女はまた、あの当惑の表情を見せた。「異星人じゃないとしたら？ それでもいや？」

「ああ、よほど親しいあいだでなけりゃね。こんなのは、時代遅れかい？」

「ちょっと、そうみたい」

「いまいった友人のことだけどね。おぼえてる？ 恋愛世界一の男。彼に協力している女性が、教えられたことをぼくに教えてくれた。こいつには、重力が必要だな」そして、「寝室、フィールド消去」からだの重みがもどってくる。

「また話題を変えるの？」とティーラ。

「ああ、もう降参だよ」

「いいわ。でもひとつだけ、心にとめておいてほしいことがあるの。ひとつだけよ。パペッティア人が、三つでなく四つの種族をメンバーにいれようとしていたら、あたしじゃなくトリノック人を、あなたは平気でうけいれていたかもしれないっていうこと」

「おそろしいことを考えるね。さてと、こいつには三段階あるんだ。まず、騎乗位からスタートして……」

「キジョウイって、なあに？」

「こうするんだ……」

朝が訪れたとき、ルイスはこの娘と行をともにすることが楽しみでたまらぬ気分になっていた。疑念がもどってきたときは、もうおそかった。もともと、何もかもが、手遅れだったのである。

アウトサイダー人は、情報の交易屋だ。買い値も売り値もとびきり高いが、一度仕入れれば何度でも売れる。交易の範囲が、銀河系渦状肢部分の全域にわたっているからだ。人間世界の銀行における彼らの信用は、事実上天井知らずだった。

彼らはどこか、低密度の巨大惑星の周囲をめぐる低温かつ低重力の衛星で進化したものと推測されている。例えば、海王星の第二衛星ネレイドのような世界だ。現在の彼らは、恒星のあいだの何もない空間で、一隻がひとつの都市ほどもある宇宙船に住んでいるが、その船のタイプたるや、単純な光圧帆船から、人類科学の理解を絶したエンジンにいたるまで、種々雑多のレベルがいりまじっていた。顧客になりそうな惑星系があり、そこに適当な取り引きの相手が見つかると、アウトサイダー人は貿易センター兼休養地域用の場所を借りて、そこに棚おろしをする。例えば

年前に、彼らはネレイドをリースして拠点としていた。
「あのへんが、彼らのおもな交易区域のはずだ」と、ルイス・ウーがいった。「あそこだ」片手を船の制御盤にかけたまま、もういっぽうの手で指さす。
明るい星空の中に、ネレイドのつめたくごつごつした表面がひろがっていた。ここから見る太陽は、大きめの白い点といったところで、明るさも満月くらいしかないが、その光に照らされて、まるで迷路のように、低い壁がうねうねとのびている。半球形の建物が見え、その近くに、オープン式の客席をそなえたスラスター駆動の、地上と軌道を結ぶ小型連絡艇の一群があった。が、眼下の平野のなかば以上を占めているのは、その低い壁の迷路である。
〈獣への話し手〉が、ルイスのすぐうしろに巨大な体躯を浮かべながらいった。「あの迷路はなんのためだ。防備用かな？」
「日なたぼっこ用さ」とルイス。「アウトサイダー人のエネルギー源は熱電作用なんだ。頭を陽にあて、しっぽを日かげにいれておくと、そのあいだの温度差で電流が発生する。壁はその影の境界をつくるためなんだ」
ネサスは、この十時間の飛行のあいだずっと、だまりこくっていた。船内の生活システムのまわりをうろうろ動きまわり、あれこれと装置をしらべ、頭と目を隅につっこんでは、肩ごしにもうひとつの頭と話しあっている。彼の宇宙服は、脳髄のはいったこぶの上にパットをいれた、ゆったりした袋スタイルで、いかにも軽々と心地よさそうだった。空気と食糧の供給パッケージは、信じられないほど小さい。
そういえば出発のときにも、彼のおかげで異様な気分にさせられた。とつぜんキャビンの中で、

複雑な美しい音楽が鳴りわたったのである。哀調をおびた、恋にくるったコンピュータの叫びにも似た音は、ネサスの口笛だった。豊富な神経と筋肉をそなえて、手の役割を果たす、そのふたつの口を持ったネサスは、いわば生きたオーケストラであった。

彼はまた、ルイスが操縦にあたることを強く主張し、そのルイスの腕前に対する信頼から、座席ネットもつけようとはしなかった。ルイスはというと、たぶんパペッティア製の乗り物には乗客を保護する特別な秘密のしかけがあるだろうと思っていた。

〈話し手(スピーカー)〉は、二十ポンドの手荷物をさげて現れたが、あけてみると中味は、肉をあたためるための折りたたみ式電子レンジ以外に、ほとんど何もなかった。あとは、なまのままの腰肉(ハンチ)か何かそんなもので、それも地球産というよりクジン人の肉のように見えた。どういうわけかルイスは、クジン人の宇宙服として、なんとなく中世の甲冑みたいなものを頭にえがいていたが、その予想は完全にくつがえされた。それはおそろしく重い背嚢(バックパック)のついた、透明な袋をつなぎあわせたようなしろもので、金魚鉢のようなヘルメットの中には、いかにも複雑な恰好の通話機がとりつけられている。見たところ武器らしいものはないが、背嚢(バックパック)が戦闘用の装置かもしれない。彼が武器をかくしていることを、ネサスは確信しているようだった。

クジン人は、飛行のあいだほとんど、うとうととまどろんでいた。

が、いまはその全員がルイスの肩ごしに前方を眺めている。

「アウトサイダーの船の向こうにおろすぜ」と、ルイス。

「いいえ。もっと東のほうへいってください。ロングショット号は、ずっと離れたところにとめてあるのです」

「なんのために？　アウトサイダー人のスパイがこわいのか？」
「いいえ。ロングショット号が、スラスター駆動ではなく、核融合エンジンを積んでいるからです。離着陸の熱が、アウトサイダー人には、影響が大きすぎるのです」
「なぜ、〝のるかそるか（ロングショット）〟なんて名を？」
「あの船で飛んだただひとりの男、ベーオウルフ・シェイファーが、そう名づけました。現存する中心核爆発の立体写真（ホログラフ）は、ぜんぶ彼がとってきたものです。〝のるかそるか（ロングショット）〟というのは、賭博師のよく使うことばではないのですか？」
「たぶんその男が、帰ってこられるのぞみは薄いと思ったんだろう。いまのうちにいっとくほうがいいと思うが、ぼくはこれまで、核融合の船なんて、一度も飛ばしたことはないぜ。ぼくの持ってる船は、こいつと同じ、無反動のスラスター駆動なんだ」
「では、練習してください」パペッティア人はいった。
「待て」と〈獣への話し手（スピーカー・トウ・アニマルズ）〉。「おれには、核融合エンジンの経験がある。おれが、ロングショット号を操縦しよう」
「それはできません。操縦室の緩衝席が、人間のからだに合うようにできていますから。制御パネルの配置も、人間のやりかたに合わせてあります」
　クジン人は、怒ったように、のどの奥でうなった。
「あそこです、ルイス。まっすぐ前です」
　ロングショット号は、直径一千フィートをこえる透明な球体だった。その巨体のまわりを、ぐるりと旋回してみると、内部は一立方インチの隙もなく緑とブロンズ色のハイパードライヴ・モ

ーター機構で埋めつくされているのがわかった。ゼネラル・プロダクツ製の四号船殻で、これは宇宙船を見なれたものの目には見誤りようがない。あまりに大きすぎるので、通常は、プレハブの植民集落をひとつそっくり輸送するのに使われるくらいのものだった。が、目の前にあるこれは、ちょっと宇宙船には見えない。どこかそこらの原始的な種族が、限られた費用と幼稚な技術で、どんな隙間も残さないように組みあげた軌道衛星を、極端に拡大コピーしたような感じだ。

「どこにおろす？」ルイスがたずねる。船殻の曲面の下に着けようか？」

「キャビンは下側についています。「てっぺんに着けてください」

ルイスは、黒っぽい氷の地表に船を近づけ、注意ぶかく前へすべらせて、ロングショット号の巨大な船腹の下へもっていった。

生活システムには、灯がともっていた。ロングショット号の船殻をとおして、その輝きが見える。小さな室が、上下にふたつ、下側の部屋は、緩衝席と質量探知機と、馬蹄形に配置された計器類でぎっしりだし、上のほうのも、大きさは変わらない。うしろで、クジン人ののびあがる気配がした。

「これは面白い。ルイスが下の部屋で操縦をうけもち、あとの三人は、上の部屋ということだな」

「はい。あの小さな空間に、緩衝席を三ついれるのは、たいへん困難でした。できるかぎり安全をはかるため、それぞれに停滞（ステイシス）フィールドが備えてあります。停滞状態でいれば、動く余地のないことも、ほとんど問題になりません」

クジン人がふんと鼻をならし、ルイスの背から離れていった。ルイスは船をぴたりと地上につ

け、一連のスイッチを切った。
「ひとつ、要求があるんだがね」やおら口をひらくと、「ティーラとぼくは、ふたりで報酬を分けることになる。〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉は、ひとり占めだね」
「余分の要求ですか？　いってください、考慮します」
「あんたたちには、もうまったく用のないもの。あんたの種族が置いていったものさ」かけひきには絶好のタイミングだった。うまくいくとは思えないが、やってみるにこしたことはない。
「パペッティア惑星の位置を教えてくれないか」
　ネサスのふたつの頭が、ぴょんととびあがり、向きを変えて、たがいに見つめあった。しばらくそうしていたすえ、ネサスはたずねた。「なぜです？」
「昔、パペッティア惑星の所在は、ノウンスペース最大の謎だったね。その秘密をもらすという恐喝をうけて、あんたたちはひと財産支払い、その話でまた、秘密の値うちがあがった。一攫千金を夢みる連中が、パペッティア惑星を求めて、G型とK型の恒星系をしらみつぶしに捜索した。いまでもまだ、その情報は、どこへ売っても、大きな儲けになるはずだ」
「しかし、もしそれが、ノウンスペースの外にあったらどうでしょうか？」
「ほほう」と、ルイス。「ぼくの歴史の教師も、よくそいつを気にしていたよ。外にあるという情報だけでも、価値はあるね」
「わたしたちが最終的な目的地へ向けて出発する前には、パペッティア惑星の座標もわかります」パペッティア人は慎重に答えた。「その情報は、役に立つというより、あなたたちをびっくりさせるほうが大きいと思いますよ」そしてまた、ひと呼吸ほどのあいだ、パペッティア人のふ

たつの目は、おたがいを見つめあった。

その姿勢を解くと、「あの四つの、円錐形に突きだしたものを見てください——」

「ああ」ルイスはすでに、先端に孔のあいたその円錐が、二層キャビンをかこむように下へ突きだしているのに気づいていた。「核融合モーターだな？」

「はい。あれでこの船は、内部重力のない点をべつにすれば、無反動スラスター駆動の船とそっくりの動きをします。余分の空間のまったくないのが残念です。量子第二段階ハイパードライヴについて、ひとつ警告しておきたいのは——」

「これは自在剣だ。みんな、静かにしろ」と〈獣への話し手〉の声。

その意味を理解するのに、ちょっとかかった。ルイスは、急激な動作をしないように気をつけながら、ゆっくりとうしろをふりかえった。

クジン人が、後部の壁の曲線を背にして立ち、三日月形の爪をむきだしたその片手に、縄とびの縄の握りを大きくしたようなものをつかんでいる。その握りから十フィートほど離れて、クジン人の目の高さぴったりに、赤く光る小さな玉が浮かんでいた。玉と握りをつなぐワイヤは細すぎて見えないが、それがあることはまちがいない。スレイヴァー式停滞フィールドで剛性を与えられたそのワイヤは、たいていの金属を切断する力をもっている——ルイスの緩衝席も含めて——だから、そのうしろにかくれても、なんの役にもたたない。クジン人は、ちょうどキャビン内のどこでもひと打ちでとどく場所に位置を占めていた。

クジン人の足もとに、なんのものともわからぬ肉塊が落ちている。その片側に[illegible]

[illegible]

「こういう残酷な武器よりも、衝撃銃のほうがよかったのだが」と〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉。「調達が間に合わなかったのだ。ルイス、手を制御盤（コントロール）からはなして、椅子のうしろへ、見えるようにおけ」

ルイスは、そのとおりにした。キャビン内の重力を操ってひっくりかえすことを考えていたのだが、やろうとしたとたんに、クジン人は彼をまっぷたつにするだろう。

「さて、おとなしくしていれば、つぎの指示を与える」

「なぜそんなことをするのか、理由をいえ」ルイスは、そういいながら、チャンスをねらっていた。あの赤い玉は、〈話し手（スピーカー）〉に、その見えない剣の切っさきのありかを知らせるためのものである。もしあの剣先の玉を、指を切り落とされないでひっつかむことができたら――

だめだ、玉が小さすぎる。

「理由は明らかだろうが」と〈話し手（スピーカー）〉。その両眼をくまどる黒いしるしは、まさに漫画の山賊さながらだ。クジン人は、かたくなってもいないし、のんきにかまえてもいない。しかも、とびかかることのほとんど不可能な位置に立っている。

「おれの世界に、このロングショット号を持ち帰るためだ。この船をもとにして、何隻も同じ船をつくる。それがあれば、次回の人間との戦争では、圧倒的優位に立つことができよう。ただし、そこの男に、ロングショット号の設計図がわたらなければな。わかったか？」

ルイスは、わざと皮肉な口調で、「まさか、この探険がこわいわけじゃあるまい」

「あたりまえだ」侮辱は空振りに終わった。クジン人に皮肉が通じるはずもない。「みんな、服を脱げ。武器のないことをたしかめるのだ。それが終わったら、パペッティア人に宇宙服を着せ、

おれとふたりで、ロングショット号へうつる。ルイスとティーラは、あとに残ることになるが、衣類と荷物と宇宙服は持っていく。この船も動かぬようにしていく。当然アウトサイダー人は、この船がなぜ地球へ帰っていかないのかと怪しんで、助けにくるだろう。船の生活システムは充分保（も）つはずだ。すっかりのみこめたか?」

ルイス・ウーは、筋肉をゆるめながら、クジン人に何か隙でもあればとうかがっていたが……ちらりとティーラ・ブラウンに走らせた視線の一隅が、おそろしい光景をとらえた。ティーラが、クジン人にとびかかろうとして身がまえていたのだ。

〈話し手（スピーカー）〉は彼女をまっぷたつにするだろう。

なんとしても、ルイスのほうが、先んじなければならぬ。

「馬鹿なことはよせ、ルイス。ゆっくり立ちあがって、壁のほうへ寄れ。まず、おまえからアアア……」

〈話し手（スピーカー）〉のことばが、途中からまるで何かの歌声のように、長く尾をひいた。

わけのわからぬ事態の展開に、ルイスは跳躍をひかえた。〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉が、大きなオレンジ色の頭を、がくんと上へ向けた。小猫のようなピイッという鳴き声。終わりは、ほとんど超音波域に達したうなり声だった。両腕を、まるで宇宙に抱きつこうとするかのように大きくひろげる。手にした自在剣（ヴァリアブル・ソード）のワイヤの刃が、片隅の水タンクを、なんの抵抗もなく切り裂いた。タンクの周囲全体に水があふれだす。〈話し手（スピーカー）〉は、それに気づいてもいない。目も耳も、まったく働きを失っているようだ。

「武器をとりあげてください」とネサス。

　ルイスが動いた。もし剣先がこっちへ向いたら身を沈めるかまえで、用心ぶかく近づく。クジン人はその剣を、まるで無雑作に、ゆらゆらと動かしていた。握りをつかんで引くと、クジン人のこぶしは、たわいなくひらいた。根もとのボタンにふれると、ワイヤはするすると引きこまれ、赤い玉が握りの一端におさまった。

「持っていてください」とネサス。彼は、〈話し手〉の腕を、あごでぱっくりくわえると、緩衝席までひっぱっていった。クジン人は、なんの抵抗もしない。もう、鳴き声もやんでいた。視線は無限のかなたを見つめ、毛皮に蔽われた大きな顔は、空虚な静けさをたたえているばかり。

「どうなったんだ？　あんた、何をやった？」

〈獣への話し手〉は、ぐったりと席に落ちつくと、無限遠に目をすえたまま、かすかにのどをならした。

「見ていてください」ネサスは、そういうと、クジン人の席から用心ぶかく身を引いた。ふたつのひらたい頭を高くあげて、じっとしているが、とくに緊張した様子はなく、しかしクジン人から目を離してはいない。

　突然、クジン人の目の焦点が合った。ルイスからティーラへ、そしてネサスへと視線がとぶ。〈獣への話し手〉は、もの悲しげなうなり声をもらすと、まっすぐに身を起こし、共通語でしゃべりだした。

「すばらしい気分だった。おれは――」

　そこで口をつぐみ、ぐっと身をのりだして、パペッティア人に向かい、「どんな手を使ったか知らんが、もう二度とするなよ」

「思っていたとおりでした」と、ネサス。「あなたは教養人ですね。〃タスプ〃をこわがるのは、教養のある人だけです」

「そうだったの」と、ティーラ。

ルイスがたずねる。「タスプだって?」

パペッティア人は、〈獣への話し手〉に訓戒を垂れているところだった。「やむをえなければ、何度でもタスプを使いますから、そのつもりでいてください。わたしをこわがらせたら、使います。あまり何度も、わたしに暴力をふるおうとしたり、たびたび驚かせたりすると、あなたはすぐ、タスプなしではやっていけなくなります。タスプは、外科手術でわたしの体内に埋めこまれていますから、わたしを殺さなければ手にはいりません。そうしてあなたは、下劣なタスプ中毒になるのです」

「抜けめないというか、おそろしく正道をはずれたやりかただな」と〈話し手〉。「もうけっして、おまえの手をわずらわせはせんぞ」

「カホナ! タスプってなんなのか、誰も説明してくれないのかい?」

ルイスがそれを知らなかったことは、みんなを驚かせたらしい。口をひらいて答えたのは、ティーラだった。「脳の快楽中枢を刺戟するのよ」

「離れたところからか?」そんなことが理論的にも可能だとは、ルイスのついぞ知らぬところだった。

「そう。電流のきている電線をさわったみたいに、ピリッとくるの。でも、脳の中へ電線をさしこんだりしなくていいのよ。ふつう、タスプは、片手で使えるくらい小さいわ」

「そのタスプで、刺戟されたことがあるのか？　まあ、どうでもいいことだが」
そんなことを気にやむルイスの神経をあざけるように、ティーラはかすかに笑った。「ええ、どんな感じかは知ってる。一瞬の——そうね、いいようがないわ。でも自分に使っちゃだめ。誰か、ぜんぜん予想もしてない人に使うの。それが面白いのよ。警察は、よく公園なんかで、タスプ遊びをつかまえてるわ」
「あなたたちのタスプは、一秒間以下しか効きません」と、ネサス。「わたしのは、およそ十秒間刺戟がつづきます」
さてこそ、〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉への影響は、絶大だったにちがいない。しかしルイスは、すでにその側面の意味に気づいていた。「へーえ、なんてこった。すばらしいじゃないか！　敵に喜びを与える武器を持ち歩くものが、パペッティア人をおいて、ほかにあるだろうかね？」
「誇り高き教養人をおいてほかに、過度の快楽をおそれるものがあろうか？　パペッティア人のやりくちは、的を射たものだ」〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉がいった。「二度とタスプに打たれるわけにはいかん。パペッティア人のタスプに何度も刺戟されると、おれは、やつの奴隷同様になってしまう。クジン人のおれが、菜食動物につかえるとはな！」
「ロングショット号へ移乗しましょう」と、ネサスが、もったいぶった口調でいった。「つまらぬことで、ずいぶん時間を無駄にしてしまいました」
ルイスが最初に船へ向かった。
ネレイドの岩盤の表面へおり立つとき足がおよぐことは、彼も予期していた。低重力の世界で

の動きかたは、ルイスも充分こころえている。だが、ロングショット号のエアロックにはいるさいに、彼の脳の深層部は、もとの重力がもどってくると思いこんでいたようだ。重力変化がなかったため、ふんばった足がたたらをふんで、彼は危うく転倒するところだった。

「重力調節は当時もあったはずなのに」こぼしながら船室にはいる。「……ほう」

原始的なつくりだった。いたるところに四角い出っ張りがあり、しょっちゅう肘や脛をぶつけそうだ。何もかも、必要以上にかさばっている。ダイアルの配置も、どうも感心しない……。

しかし、原始的というより以前に、船室はあまりにも小さかった。この船が建造された時代には、居住用の重力調節もできていたはずだ。だが、一マイルの直径をもってしても、その装置をいれる余裕はなかったのだろう。操縦者ひとりの部屋をとるのが、やっとだったのだ。

計器盤、質量探知機、調理機のスロット、緩衝席、その座席の背と壁との間隔は、低い天井にぶつからないよう首をまげて、人間のからだがようやくはいるくらいだ。

ルイスは、その隙間に身をおしこむと、クジン人の自在剣（ヴァリアブル・ソード）を三フィートほどぬきだした。〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉が、スローモーションのような注意ぶかい足どりで乗りこんできた。そのままルイスの横をすりぬけ、上の部屋へあがっていく。

上の部屋は、唯一の乗員の休息室に使われたものだった。運動用の装置や読書スクリーンはとりはずされ、三つの新しい緩衝席が備えつけられている。そのひとつに〈話し手（スピーカー）〉は腰をすえた。

そのすぐあとから、ルイスは、片手で桟をつかみながらのぼっていった。何げないふうに自在剣（ヴァリアブル・ソード）を見せびらかしながら、彼はクジン人の緩衝席のカバーを閉じ、スイッチをいれた。緩衝席は、鏡面でできた大きな卵と化した。ルイスが停滞（ステイシス）フィールドのスイッチを切るまで、

その中では時間が経過しない。もしこの船が、たまたま反物質の小惑星にぶつかったら、さしものゼネラル・プロダクツ製の船体も、イオンの蒸気となって四散してしまうだろうが、この緩衝席だけは、鏡面の輝きを失わないだろう。

ルイスはようやく緊張を解いた。いままでの経過がすべて儀式的な舞踊の一種だったような気がした。が、実際は真剣そのものだったのだ。クジン人には、船を奪いとろうとするりっぱな動機がある。タスプの力も、それを失わせたとは思えない。〈話し手(スピーカー)〉につけいる隙を与えてはならないのだ。

ルイスは、下の操縦室にもどると、宇宙服の回路を船につないだ。「さあ、ふたりとも乗りたまえ」

それからおよそ百時間あまりで、ルイス・ウーは太陽系の外に出ていた。

# 5　薔薇飾り（ロゼット）

ハイパースペースの数学には、いくつかの特異点がある。アインシュタインの宇宙では、その特異点が、ある程度以上の大きさをもった質量のまわりをとりかこむように現れる。その圏内から外へ出ると、船は光速以上で飛ぶことができる。内部でそれを試みたら、船は消滅してしまう。いま、ロングショット号は、太陽からの距離約八光時。太陽をとりかこむ特異圏からは、とっくに出はずれているはずだった。

ルイス・ウーは、反動モーターを切り、慣性飛行（フリー・フォール）にはいった。

睾丸がちぢみ、横隔膜がむかつき、胃から何かがこみあげてくる。が、その気分はすぐにおさまった。奇妙なことだが、むやみと空間を飛びたい衝動にかられる……。

これまでにもう何度も、地球の月の周囲をめぐるアウトバウンド・ホテルの巨大な透明球体の中で、無重力を楽しんだことはあった。しかしここでは、両腕でちょっと羽ばたいただけで、どこかに頭をぶつけてしまうだろう。

いままで二Gの加速で、太陽から外へ向かって飛びつづけてきたのだ。およそ五日のあいだ。彼はこの操縦席についたままで作業し、食事をし、かつ眠った。緩衝席のすばらしい装備にもかかわらず、彼は垢にまみれ、髭だらけになっていた。そのあいだに五十時間も睡眠をとりながら、

なおかつ疲労の極に達していた。
それが自分の未来を暗示しているように思えた。いまの彼にとって、探険とは不快さそのものにほかならなかった。
宇宙の深淵の眺めは、月で見る夜空と、さして変わったところはない。太陽系内でも、惑星が、肉眼での眺望にさほどプラスするわけでもない。銀河の南側にあたって、ひときわ明るく輝く星が見える。あれが太陽だ。
ルイスは姿勢制御用のフライホイールを動かした。ロングショット号は、ゆっくりと回転し、星々が足もとの空間を横切っていく。
二十七、三百十二、一千ちょうど——ネサスが緩衝席について、ルイスがそのカバーを閉じる直前に渡された数字だ。パペッティア船団の位置を示すものである。いまになってルイスは、ようやくそれが、どっちのマゼラン雲の方向でもないことに気づいた。ネサスは嘘をついていたのだろうか。
しかし、とルイスは考える。それはまだ、わずか二百光年さきのことだ。しかも、銀河の軸方向にあたる。おそらくパペッティア人は、銀河系を出はずれる最短距離の方向をとり、銀河平面を見おろしながら小マゼラン雲へ向かうのだろう。そうすれば、星間宇宙に散らばる恒星、塵雲、水素濃密帯域などの障害にぶつからないですむ……。
まあ、べつにどうでもいいことだ。ルイスは両手を、これから演奏をはじめようとするピアニストのように、計器盤の上にかざした。
そして、おろす。

ロングショット号が、消失した。

ルイスはつとめて、透明な床から目をそらせていた。どうして壁をぜんぶ窓のように蔽いもせず残してあるのかなどといぶかることは、もうとっくにやめていた。視野全体に盲点がひろがった眺めは、多くの人間を狂気に追いやる。が、むろんそれに堪えられるものもある。ロングショット号を操縦するものは、そうした人間でなければならないのだ。

彼は、質量表示機を見まもっていた。計器盤（パネル）のすぐ上にある透明球で、その中心から、いくつもの青い線がつきでている。部屋の狭さにひきかえ、大きすぎるサイズだ。ルイスは席に身を落ちつけ、その青い線を見つめつづけた。

見ているうちにそれが変化する。一本の線に目をすえると、それが球面上をゆっくりとよぎっていくのがわかった。異常であり、かつ愕然とさせる光景だ。ふつうのハイパードライヴのスピードなら、それらの線は、何時間たってもほとんど位置を変えはしない。

ルイスは左手を、緊急スイッチにかけた。

右側にある調理機のスロットから、奇妙な味のコーヒーが出てきた。少し経って軽食（ハンドミール）が出たが、それを手にとると、肉とチーズとパンと何かの野菜の層にばらばらと分かれた。自動調理機も数百年前のものだから、プログラム調整の期限が切れていて当然だろう。質量探知機の放射状の線が、みるみる大きくなり、時計の秒針のように真上へ向くと、すうっと消えてなくなった。と見るまに、底面からぼやけた線が現れ、ぐんぐんのびてくる……ルイスは緊急スイッチを引いた。

見なれない赤色巨星が、足もとの空間まぢかに燃えているのが見えた。

CamScannerでスキャン

「速すぎる」ルイスは、うなった。「カホなスピードだ！」ふつうの船なら、質量探知機は、六時間かそこらごとにチェックすれば充分なのだ。それが、ロングショット号の場合には、ほとんどまばたきする余裕もない！

ルイスは、その明るいが輪郭のぼやけた赤い円盤から、その周囲の星々へと目を転じた。

「カホナ！　もうノウンスペースから外へとびだしちまってるじゃないか！」

ルイスは、周囲の星を眺めようと、船をぐるりとまわした。異郷の星空が足もとを動いてゆく。

「やったぞ、あれがみんなおれのものだ！」ルイスは両手をこすりあわせて哄笑した。休養にさいして、ルイス・ウーは、みずから楽しむすべを身につけていた。

ふたたび赤い星が正面にもどってくると、ルイスはそれを九十度横にずらせた。この星に近づきすぎたため、迂回しなければならない。

このときまでに、もう彼は一時間半進んでいた。

三時間いったところで、彼はふたたび通常空間にドロップアウトした。

異郷の星々の眺めも、べつに苦にはならなかった。地球では、都市の照明のため、星の光はほとんど消されてしまっている。そしてルイス・ウーは生まれついてのフラットランダーだ。二十六歳になるまで、彼は星などひとつも見たことがなかったのである。近くに天体のない安全な空間にいることをたしかめると、彼は計器盤（パネル）のカバーを閉じ、そしてようやくからだをのばした。

「わあ、目がゆでた玉ねぎになっちまったみたいだ」

緩衝席のネットをほどくと、彼は左の手をもみほぐしながら、宙にただよい出た。三時間のあいだ、彼はその手でハイパードライヴのスイッチを握りしめつづけていたのである。肘から指先

までが、一様にひきつっている。

天井に、整体運動のための環がついていた。それを使って体操すると、ようやく筋肉の痙攣はとれたが、疲れはまだ残っていた。

そうだ、ティーラを起こそうか？ いま彼女と話でもしたら、いい気分だろうな。いや、これはいい思いつきだ。このつぎ休養（サバティカル）に出るときは、女をひとり停滞（ステイシス）フィールドにいれて持っていこう。地球と宇宙のいちばんいいところをひとつに合わせるわけだ。しかし、いまの彼は、まさに墓地から洪水で流れだしてきたような姿である。まともにあいさつできるような気分でもなかった。まあ、しかたがない。

そもそも彼女を、ロングショット号になど、乗せるべきではなかったのだ。

彼自身の都合でそうしたわけでもない！ 彼女が泊まってくれたあの二日間、彼はじつに楽しかった。さながら、ルイス・ウーとポーラ・チェレンコフの恋物語が、ハッピーエンドに書きなおされたようなものだった。いや、おそらくそれ以上だったろう。

もっともティーラには、何かもうひとつ深みが感じられない。年齢のせいだけだとは思えない。ルイスの交遊は、あらゆる年齢層にわたっているが、その中のいちばん若い連中にも、ずっと奥行きを持ったものがいる。いうまでもないが、大きな苦悩を味わったことのある人びとだ。傷つくことは、学ぶことの重大な要素であるかのように見える。たぶん実際にそうなのだろう。

たしかに、ティーラには、感情移入能力に欠けるところがある。いや、他人の苦痛を感じとる能力の欠如といえるかもしれない……。

が、その彼女も、他人の喜びを感じ、それに応えることはできるし、また喜びをつくりだす

べをもこころえている。愛のパートナーとしては最高だ。いたいたしいほど美しく、わざとらしい技巧もなく、猫のように敏感で、しかもびっくりするほど無防備だ……。
まったく、どれひとつとして、探険家に向いたところはない。
ティーラのこれまでの人生は、幸福と倦怠そのものだったことだろう。猛烈な緊張を強いられる状況におかれたこともなければ、二度恋に落ち、二度ともも自分からそれに飽きている。もし、正真正銘の緊急事態に、はじめて身をさらすときがきたら、彼女は事実上怪我をしたこともない。
はたぶんパニックに陥るだろう。
「しかし、ぼくは愛人として、彼女を連れてきちまった」と、彼はひとりごちた。「あの、ネサスのやつめ！」もしティーラがこれまで、緊張を強いられるような状態に陥ったことがあったら、ネサスはそれを不運の徴候として、彼女を候補からはずしていたはずなのだ！
彼女を連れてきたのは、まちがいだった。足手まといになるだけだ。彼女の身を守ることに時間をとられて、自分が危険に陥る羽目になるかもしれない。
どんな危険が、一行を待ちうけているのだろうか？　パペッティア人は、優秀な実業家だ。必要以上の報酬など出すわけがない。ロングショット号は、想像もつかないほどの価値を持っている。それが手にはいると思うだけで、背筋が寒くなるくらいである。
「きょうはもうたくさんだ」ルイスは、自分にいいきかせると、緩衝席にもどり、簡易睡眠セットを頭につけて眠った。目がさめると、また船を目標に合わせ、盲点空間（ブラインド・スポット）へと突っこんだ。
太陽から五時間半行程のところで、彼はまた通常空間にもどった。
パペッティア人のくれた座標は、太陽の位置からみた天球上の小さな長方形の区域と、その方

向への距離とを与えている。この距離だと、その座標の精度は、一辺約半光年の立方体を決定することになる。その空間内のどこかに、たぶん船団がいるのだろう。そして、もし計器類にくるいがなければ、ロングショット号は、すでにその内部に到着しているはずだ。

そしてどこか後方には、直径七十光年くらいの、恒星の集落があるはずなのだ。ノウンスペース、それは、いまやはるか彼方の存在だった。

ここで船団をさがす手はない。何を目標としたらいいのかもわからないのだ。ルイスは、ネサスを起こしにいった。

体操用の環を歯にくわえて、からだを固定しながら、ネサスはルイスの肩ごしにのぞきこんだ。

「参照用に、いくつかの星が必要です。あの青色巨星を中心として、望遠スクリーンで投影してください……」

操縦室は、ふたりでもうぎゅう詰めだ。ルイスは、計器盤(パネル)にかがみこむようにして、パペッティア人の蹄がボタンのどれかにふれないよう気をくばっていた。

「分光計を……はい、そうです。二時の方向に、青と黄の連星がありますね……。それで方角がわかります。三四八・七二へ向けてください」

「実際のところ、何をさがせばいいんだ、ネサス？　核融合の炎の群れか？　いや、あんたたちは、スラスター駆動を使っているはずだな」

「望遠スクリーンを使ってください。ひと目見れば、それとわかります」

スクリーン上には、名も知れぬ星々がきらめいている。ルイスは、倍率をあげていった。と……

…「正五角形に並んだ点が見える。あれか?」
「それが目的地です」
「よし、距離をはかってみよう。――カホナ! まちがいだ、ネサス。速すぎるぜ」
答えはない。
「だいたい、あれは船じゃないよ。距離計がくるっていたにしてもだ。パペッティア船団は、光速すれすれの速さで飛んでいるんだ。ここからでも、動きが見えるはずだよ」
正五角形をなす五つのかすかな星。距離は約五分の一光年で、肉眼ではまったく見えない。スクリーンの倍率から推して、大きな惑星といったところだろう。ひとつだけ、ほかのよりも青みがうすくかすかなのがある。
ケンプラーのばら飾り(ローゼット)だ。なんという奇妙な眺めだ。
三つかまたはそれ以上、等しい質量の物体をとる。それらを、等辺多角形の頂点にくるよう配置し、質量の中心に対して等しい角速度を与えたとする。
そうすると、この多角形は、安定した平衡をたもつのだ。各質点の軌道は、円でも楕円でもいい。その中心に、もうひとつ質量があってもいいし、そこが何もない空間であってもいい。それは問題ではない。多角形のかたちは、トロヤ点の場合と同じく安定なのである。
この対比の難点は、トロヤ点の場合、物体がたやすくそこにとらえられる過程が、いくつも考えられることだ(木星軌道上にあるトロヤ群小惑星のことを考えてほしい)。しかし、五つの物体が、たまたまケンプラーのばら飾り(ローゼット)のかたちになって、安定するということは、万にひとつもありえないだろう。

「すごい」ルイスは、うなった。「それにユニークだ。まだ、ケンプラーのばら飾りを、実際に見たものは、ひとりもいない……」そのことばは、途中でふっととぎれた。
この星間宇宙で、あの小天体を、何か照らしているというのか？
「おい、まさか」と、ルイス・ウー。「とてもじゃないが、信じられん。いくらなんでも、そんな馬鹿な！」
「何が信じられないというのです？」
「そんなカホなこと、信じろというのが無理だよ！」
「どうぞご勝手に。でもあれが目的地です。もう少し近づけば、船が迎えにきて、速度を合わせてくれます」
出迎えの船は、三号船殻だった。両端のまるくなった扁平な円筒形で、どぎついまでのピンク色に塗られ、窓はない。エンジンの開口部もなかった。無反動エンジンにちがいない。人間の使っているスラスター駆動か、あるいはもっと進歩した何かだろう。
ネサスの指示で、ルイスはいっさいを先方の船にまかせていた。核融合推進のロングショット号では、あのパペッティアの〈船団〉の速度に合わせるのに、何カ月もかかっただろう。パペッティア船は、その調整を一時間もたたないうちにやってのけて、ロングショット号のすぐそばに実体化し、いまやそこから連絡チューブが、ガラスの蛇のように、ロングショット号のエアロックを、とらえようとしているところだった。
移乗がまた難問だった。一度に全員を保護フィールドから出すだけの広さの余裕がない。何より重要なのは、〈話し手〉にとって、これが船を奪いとる最後のチャンスになるということだった。

「ルイス、彼は、わたしのタスプでいうことをきくと思いますか？」

「いや。船を盗むためなら、もう一度くらい危険をおかすと思うね。しかし、こうやっておけばいい……」

ふたりは、ロングショット号の核融合モーターから、計器盤(パネル)をとりはずした。クジン人の手でも、時間と、ちょっとした機械工なみの腕があれば、なおせないというほどのものではない。が、時間さえ与えなければ……。

パペッティア人がチューブをくぐっていくのを、ルイスは見送った。ネサスは、〈話し手(スピーカー)〉の宇宙服を持ち去っていった。透明なチューブの中をわたっていきながら、彼は目をつぶっていた。惜しい話だ。というのは、周囲の宇宙が、いまやすばらしい景観を呈しはじめていたからである。

「慣性飛行(フリー・フォール)中なのね。あんまり気分がよくないわ」緩衝席のカバーがはずされると、ティーラはつぶやいた。「連れてって、ルイス。どうなってるの？　もう着いたの？」

彼女をエアロックまで連れていきながら、ルイスはだいたいの経過を話してきかせた。彼女は一応耳をかたむけていたが、むしろ胃の腑のほうに気をとられているふうだった。不快感がひどいらしい。「あっちの船へいけば重力があるはずだよ」と、ルイスは彼女にいった。

その指さすところへ顔を向けた彼女は、小さなばら飾り(ローゼット)のかたちを目にとめた。すでに肉眼でも見えはじめている。五角形に並ぶ、白い五つの星だ。驚いてふりかえった反動で、彼女のからだは半回転した。その表情の変化を、ルイスは、彼女がエアロックに締めこまれる直前にみとめた。

ケンプラーのばら飾り(ローゼット)はすばらしい。だが、無重力酔いはまた別問題だ。その奇妙な星に向か

って、チューブの中を進んでいく彼女を、ルイスはじっと見まもった。

最後の緩衝席のカバーをひらきながら、ルイスはいった。「ぼくを驚かすようなまねをするなよ。こっちには武器があるからな」

クジン人のオレンジ色の顔は、表情も変えなかった。「到着したのか?」

「ああ。核融合の機構は、はずしてある。つなごうとしても間に合わないぜ。でっかいルビー・レーザーが二挺、こっちをねらっているからな」

「では、ハイパードライヴで逃げたらどうする? いや、いかんな。ここは特異圏の内部だろうから」

「聞いておどろくなよ。ここには、五つの特異圏がかさなってるんだ」

「五つだと? 本当か? しかし、レーザーの件は嘘だな、ルイス。恥を知れ」

が、ともかくクジン人は、穏やかに座席を離れた。ルイスが自在剣(ヴァリアブル・ソード)をかまえて、あとにつづく。エアロックのところで、クジン人は突然、ぐんぐんひろがりつつある星の五角形に気づいて、動きをとめた。

これ以上はのぞめないほどの眺めだった。

ロングショット号は、ハイパードライヴから出たとき、パペッティアの〈船団〉から半光時ほど前方に着いていたのである。これは地球と木星の距離よりも近いくらいだ。しかし、〈船団〉が、光のすぐあとから追ってくるていの猛烈な速度で飛んでいるせいで、ロングショット号にとどいていた光は、もっとはるか遠くで出たものだったのである。船が停止したとき、ばら飾り(ローゼット)は、まだ目に見えないほど小さかった。ティーラがエアロックをくぐったとき、それはもう肉眼でも

はっきりと見えた。それがいまや、圧倒的な大きさになり、さらにおそるべき速さで拡大しつつある。

空に五角形をなしてちらばる青白い五つの光点が、さらにひろがって……。

一瞬、五個の惑星が、ロングショット号をとりかこんだ。そして、消えた。遠ざかるのではなく、消えたのだ。後退するスピードのために、光の波長が、赤外領域へずれてしまったのである。

気がついたとき、〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉の手に、自在剣(ヴァリアブル・ソード)があった。

「こん畜生!」ルイスが怒鳴った。「きさまには、好奇心ってものがないのか?」

クジン人は、ちょっと考えてから、ワイヤの刃を握りにおさめ、それをルイスに手渡した。

「おれにも好奇心はある。だが、プライドのほうが強いのだ。脅しは挑戦と同じだからな。それでは、いくとするかね?」

パペッティア船は、自動操縦だった。エアロックの向こうの生活システムは、大きな一室になっていた。メンバー四人の体形に合わせてそれぞれちがった四つの緩衝席が、サービス用のキャビネットをかこんで向かい合わせに並んでいた。

窓はひとつもない。

重力があるので、ルイスはほっとした。しかしそれは地球の重力と同じではなく、空気も、かなりちがった感じだった。気圧はいくらか高めだ。奇妙な匂いがしたが、不愉快というほどではない。オゾンと、炭化水素と、パペッティア人の——それも大ぜいの——匂いのほか、何か見当もつかない臭気がまじっているようだ。

そしてこの部屋には、角(かど)といえるものがいっさいなかった。壁は曲面をなして、天井や床につ

ながり、緩衝席や中央のキャビネットも、半分床にとけこんだようなかたちをしている。パペッティア人の世界には、堅いもの、鋭いもの、流血や打撲の原因になるようなものは、まったく何もないのだ。

ネサスが、くにゃりと自分の席にすわった。彼は、ふしぎなほど、そしておかしいほどくつろいでいるように見えた。

「何も教えてくれないのよ」ティーラが笑っている。「あなたたちがそろってから、話せばいいのですから。もちろん、あなたたちが気にしているのは――」

「あの飛んでいった惑星だ」クジン人が口をはさんだ。

「それから、ケンプラーのばら飾り（ローゼット）の由来だ」とルイス。かすかなハム音で、船がもう動いていることがわかる。彼と〈話し手（スピーカー）〉は、荷物をしまいこむと、席に落ちついた。ティーラが、押しだしチューブにはいった赤い果実らしい飲みものを、ルイスに手渡した。

「到着までどのくらいかかる？」パペッティア人にたずねる。

「上陸できるまで一時間です。それから、最終目的地のことをきかされるでしょう」

「じゃ、時間は充分だな。よし、話してくれ。なぜあんな惑星を飛ばせてるんだ？　住民のいる惑星を、ああ派手にすっとばせるなんて、安全とは思えないがね」

「安全なのですよ、ルイス」パペッティア人は、おそろしく熱意をこめていった。「例えば、この船よりもずっと安全です。この船にしても、人間の設計したたいていの船よりは安全ですが。惑星を動かすことにかけては、充分練習を積んでいましたし」

「健全だって？　そんな馬鹿な！」

「この点を説明するには、まず熱について話さなければなりません……それと、人口の抑制についてもです。それを話題にして、困る人や怒る人はいませんね？」

三人とも異議はなかった。ルイスは笑いをかみころしていたが、ティーラは笑いだしていた。

「まず知っておいてほしいのは、わたしたちの場合、産児制限がたいへんむずかしいということです。子供をつくらないようにするには、ふたつの方法しかありません。ひとつは大手術です。もうひとつは、性交渉をいっさい断つことです」

ティーラは愕然としたらしい。「だって、そんなひどいこと！」

「まことに困ったことです。しかし誤解しないでください。外科手術をすれば、性交渉をしてもいいというのではありません。性交渉を不可能にする手術なのです。いまでは、その手術は、もとへもどせますが、以前はそれも不可能でした。すすんでそういう手術をうけようとするものは、めったにいません」

ルイスは、ひゅうと口笛をならした。「そうだろうとも。そうすると、あんたの種族の人口抑制は、意志力によるほかないことになるな？」

「はい。わたしたちにとっても、ほかの種族と同様、禁欲は不愉快な副作用を生じます。その結果が、当然ながら、人口過剰を起こしました。いまから五十万年前、わたしたちの人口は、人間のかぞえかたで約五千億でした。クジン人のかぞえかたでは――」

「計算は、おれの得意だ」とクジン人。「しかし、その問題と、あのおかしな〈[illegible]〉とに、関係があるとは思えんな」そのことを気にやんでいるふうでもなく、淡々といいながら、〈話し

手〉は前のキャビネットから、クジンふうの二重把手のついた半ガロンもはいりそうな酒瓶(フラゴン)をとりだしていた。
「それが関係あるのです、〈話し手(スピーカー)〉。高度に文明化した五千億の人口は、その文明の副産物として、多量の熱を出します」
「そんなに昔から文明化していたのか？」
「当然です。未開な文化が、それだけの人口を支えていけると思いますか？　ずっと昔に、農地が足りなくなり、星系内のふたつの惑星を農業向けに改造しなくてはなりませんでした。このため、そのふたつの惑星を、もっと太陽の近くへうつすことが必要でした。わかりましたか？」
「それがはじめての経験というわけか。もちろん自動操縦の船を使ったのだろうな」
「もちろんです。……それ以後、食糧の問題はなくなりました。居住スペースも問題ではありません。そのころすでに、高層建築があり、しかもみんないっしょに住むことが好きでしたから」
「群居本能だ、たしかにね。それでこの船も、パペッティア人の群れみたいな匂いがするわけかい？」
「はい。自分の種族の匂いがあると、気が休まるのですよ、ルイス。そこで、当時のわたしたちにとって、唯一無二の問題は、熱でした」
「熱？」
「熱は、文化の廃棄物として出てきます」
「どうもわからんぞ」と〈獣への話し手〉。
ナチャトサンダーとしてその問題を[illegible]しているルイスは、口を出すのをさしひかえた。[illegible]

は、クジン人の惑星よりずっとこみあっていたのだ)。

「一例をあげましょう。あなたたちも、夜には照明がほしいと思うでしょう、〈話し手〉？　光源がなければ、いろいろやることがあっても、眠るほかないことになります」

「初歩的な話だな」

「そこで、その光源が、完全な、いいかえると、クジン人の可視範囲のスペクトルだけを出すものとしましょう。その場合でも、窓から外へ逃げださなかった光は、壁や家具に吸収されます。そこで粒子運動はランダムになり、熱に変わります。

　べつの例をあげましょう。地球が、自然の状態で産出する真水は、百八十億の人口にはとても足りません。塩水を核融合で蒸溜しなければならず、ここでも熱が出ます。地球が現在よりももっとこみあってきたら、蒸溜工場がなければ一日で死滅してしまうでしょう。

　もうひとつの例として輸送機械は、速度の変化のたびに熱を発生します。農業地域から穀物を満載してくる宇宙船は、再突入のさいに出た熱を大気中にばらまきます。出航のときには、それ以上の熱を放出します」

「しかし、冷却装置が――」

「冷却装置の大部分は、周囲へ熱を汲みだすだけで、その出力がまた余分の熱を発生します」

「う、うーん。わかりかけてきたぞ。パペッティア人の人口がふえるにつれて、熱の出かたもふえるわけだな」

「それで、文明の発生する熱のために、わたしたちの惑星が住めなくなってきたことも、わかりますね？」

スモッグだ、とルイス・ウーは思う。――内燃機関。大気圏内の核爆発や、核融合ロケット。湖や海に投棄される産業廃棄物。われわれは、自分たちの出した廃棄物で、何度となく半殺しの目にあってきた。産児制限法がなかったら、地球はいまごろ、みずからの廃棄熱に埋もれて死滅しかけていたことだろう――。

「信じられん」と〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉。「どうして、宇宙へ出ないのだ？」

「死の危険がいっぱいの宇宙に、誰が生命を賭けようとするでしょうか？　わたしのようなのがいるだけです。そして、わたしのように気のふれたものが、いろいろな惑星に植民してやっていけるでしょうか？」

「凍結した受精卵を船にのせ、気のふれた連中が操縦すればいいのだ」

「セックスについて議論をすると、どうも気分がわるくなります。わたしたち種族の生理は、そういう方法には適しませんが、似たようなやりかたで発展することはできたでしょう……しかし、なんのために？　それで人口が減るわけではありませんし、やはりわたしたちの世界は、自分の廃棄熱のために死にかけていたことでしょう！」

唐突に、ティーラがいいだした。「外が見たいわ」

パペッティア人はびっくりしたようだった。「本気ですか？　墜落の恐怖が、ないのですか？」

「パペッティア人の船で？」

「そ――そうですね。たしかに、外を見たところで、危険が増すわけではありません。よろしい」ネサスが、その種族の音楽のようなことばで何かいった。とたんに、船が消失した。

おたがいの姿は見えた。四つの緩衝席と、中央のサービス用キャビネットも見える。が、それ以外のすべては、暗黒の空間と化した。そして、ティーラの暗色の髪の彼方に、あの五つの惑星が白い光輝を放っていた。

五つとも等しい大きさだ。地球から見る月の二倍くらいだろう。みごとな五角形をなして並んでいる。そのうちの四つは、小さなぎらぎら光る点を、ぐるりとまわりにめぐらせていた。人工的な黄白色の陽光を放って軌道上をめぐる人工太陽である。その四つは、明るさも外観も、よく似ていた。いずれもぼんやりした青っぽい球体で、その距離では、大陸の輪郭まではわからない。しかし、第五のは……。

第五の天体には、周囲をめぐる光点がなかった。大陸のかたちを示す部分が、みずから太陽のような白光を放っている。その部分のあいだには、周囲の空間の暗黒と競うほどの黒色がある。そこにも星のようなきらめきがいっぱいだった。あたかも空間の闇が、輝く陸地を蚕食しているかのようだ。

「こんなきれいなの、見たことない」涙ぐんだ声でティーラがいった。数多くのものを見てきているルイスも、それに同意したい気持であった。

「信じられん」と〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉。「本当のこととは思えんぞ。自分の惑星をいくつも、そっくり持ってくるとはな」

「パペッティア人は、宇宙船のたぐいを信頼しないんだ」ルイスが、呆（ほう）けたようにつぶやいた。もしこれを見そこなっていたらと思うと、心の奥をつめたいものが走った。パペッティア人が、彼ではなくほかの誰かを選んでいたら、一生このパペッティアのばら飾り（ロゼット）を見るチャンスはなか

ったのだ……。

「それで、どうやったのだ？」

「いま説明したように、わたしたちの文明は、みずからの廃棄熱の中で死にかけていました。エネルギーの完全転換法によって、あらゆる文明廃棄物の処理はできましたが、熱だけはどうにもなりません。わたしたちは、自分の惑星を、主星から遠ざけるほかありませんでした」

「危険なことはなかったのか？」

「たいへんでした。まったく狂気の沙汰で、そのため、この事業のおこなわれた年は、歴史上でも有名です。しかしわたしたちは、アウトサイダー人から、無反動・無慣性駆動法を購入してありました。その値段は想像できるでしょう。わたしたちは、いまだにその割賦を払いつづけているのです。アウトサイダー人の駆動法で、すでにわたしたちは、ふたつの農業用惑星を動かしており、その前には、同じ星系内の役に立たない惑星を使って実験もしました。

ともかく、わたしたちは、やりとげました。自分の住む惑星を動かしたのです。

その後、わたしたちの総数は、まる一兆に達しました。自然日照が不足なため、日中でも街路を照明しなければならず、それも余分の熱を出しました。わたしたちの太陽は、おかしなものになっていました。

かいつまんでいえば、わたしたちは太陽を、資産というより重荷に感じはじめていたのです。わたしたちは自分の惑星を、十分の一光年の距離にまで離し、主星は単なるおもしということになりました。農業用の惑星が必要なので、居住惑星を宇宙へさまよいださせてしまうのは危険でした。そのことがなければ、わたしたちにはもう太陽などまったく必要がなかったのです」

「だから誰も、パパラティアン人の惑星を発見できなかったのか」と、ルイス・ウー。

「それは、理由の一部にすぎません」

「ぼくは、ノウンスペース内のあらゆる黄色矮星を捜索したし、その外へも探しに出た。待ってくれ。ネサス、誰かひとりくらい、農業用惑星を見つけたものがいていいはずだ。あの、ケンプラーのばら飾りのようなね」

「ルイス、彼らは、目標を誤っていたのですよ」

「なんだと？　あんたたちは、どう見たって、黄色矮星系の出だぜ」

「わたしたちが進化したのは、プロキオンのような黄色矮星のもとでした。あの星が、あと約五十万年で、赤色巨星段階にかかることは知っていますね？」

「な、なんてこった！　あんたたちの太陽は、赤色巨星になっちまってたのか？」

「はい。わたしたちの惑星移動が終わったあと間もなく、その太陽は膨張の過程にはいりました。あなたたちの先祖が、狗羊の大腿骨を、ふりまわしはじめたころのことです。あなたたちが、わたしたちの惑星の所在を気にしはじめたとき、その捜索は、見当ちがいの星系に向けられていたのです。

わたしたちは、近くの星系から適当な惑星を動かしてきて、農業用の惑星を四つにふやし、それをケンプラーのばら飾りのかたちに配置しました。太陽が膨張をはじめたときには、ぜんぶを一度により遠くへ移動させ、同時に、赤みがかったその放射を補うための紫外線源をつけてやることが必要でした。二百年前、銀河系から撤退しなければならなくなったとき、わたしたちは、もうりっぱに準備ができていたわけです。惑星を動かす練習も積んでいました」

五つの惑星のつくるばら飾り(ローゼット)は、さらにひろがりつづけた。いまやパペッティア人の惑星が、足もとで光り輝いていた。その表面が、船をつつみこむように、ぐんぐんあがってくる。黒い海にちらばる星もかたちをなしはじめ、それが何十もの島であることがわかった。大陸は、まるで太陽の炎のように燃えていた。

ずっと昔、ルイス・ウーは、マウント・ルッキットザットの無の深淵の縁にたたずんだことがある。この世界のロングフォール河が、そこで、ノウンスペース内における最長の滝となって終わっていた。ルイスの目は、はるか下方の虚無を蔽う霧をとおして、それが落ちていくのを追った。虚無の、形のない白さそのものが、彼の心をぎゅっとつかみ、そしてルイス・ウーは、なかば催眠状態の中で、これから永遠に生きようと心に誓ったのだった。こういう見ものをすべて見つくそうとしたら、そうする以外に、どのような方法がありえようか?

そして今、彼はそのときの決心を、ふたたび新たにしたのだった。加うるに、パペッティア人の世界が、目の前にひらけようとしているのだ。

「ぞっとするような話だな」と〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉。毛皮に蔽われた顔と、のどにこもるような声には、なんの感情も現れていないが、毛のないピンク色の尾は、内心の興奮を示してはげしくゆれ動いている。「ネサス、われわれは、おまえたち種族の度胸のなさを軽蔑していたが、その軽蔑のせいで、大事なことに目がくらんでいたようだ。まったくおまえたちは、危険な存在だな。おまえたちが、われわれに本当の脅威を感じていたら、われわれは根絶やしにされていただろう。おそるべき実力だ。おまえたちに攻撃されたら、ひとたまりもなかったはずだ」

「まさか。クジン人が、菜食生物をおそれるはずはないでしょうに」

ネサスに、ひやかしのつもりはなかったろう。が、〈話し手〉はそれに対して、腹を立てた。
「およそ知性ある存在が、あれほどの実力に恐怖を感じないと思うのか？」
「困りましたね。恐怖は憎悪と紙一重です。クジン人は、恐怖を感じる相手を攻撃するのだというものもいますよ」
会話にこだわりが出はじめていた。ロングショット号を数百万マイルの後方に、そしてノウンスペースを数百光年の彼方に残して、一行はもう、パペッティア人の手のうちに、すっかりはまりこんでいる。もしパペッティア人が、ここの三人に脅威を感じる根拠をつかんだとしたら――。早く話題を変えなくては！　ルイスは、口をひらこうとした――。
「ねえ」いいだしたのは、ティーラだった。「さっきから、みんな、ケンプラーのばら飾りの話ばっかり。ケンプラーのばら飾りって、いったいなあに？」
ふたりの異星人が、先をあらそうように答えはじめるのを見て、ルイスは、いったい自分はどうしてティーラのことを底の浅い女だなどと思っていたのだろうかといぶかしんだ。

# 6 クリスマス・リボン

「お笑いだったな」ルイス・ウーがいった。「これで、パペッティア人の惑星の所在もわかったしね。結構だよ、ネサス。あんたは約束を守ったわけだ」
「だから、その情報は、役に立つというよりびっくりする効果のほうが大きいといったでしょう」
「みごとなジョークだ」とクジン人。「おまえのユーモア感覚には驚くぞ、ネサス」
眼下には、うなぎのような形の小さな島が、黒い海にとりまかれていた。さらに近づくと、その島はさながら火龍（サラマンダー）のように見え、ひょろ長い摩天楼が、いくつか目にとまった。信用のおけない外来者を、主大陸のほうへ迎えいれる気にはなれないらしい。
「わたしたちはジョークなどいいません」とネサス。「わたしたちの種族には、ユーモア感覚というものがないのです」
「ふしぎだな。ユーモアは、知性のしるしだと思っていたが」
「いいえ。ユーモアは、防衛機能の作用の障害にともなって生じるものです」
「結局同じことでは——」
「いいえ。知性ある存在は、防衛機能に障害を起こしたりはしません」

船が下降するにつれ、まぶしい光の正体が見わけられるようになった。道路ぞいに並ぶ照光パネル、建物の窓、公園のような空地にある光源などである。最後に、まるで細身の剣のように数マイルも上空へのびたビル群が、ちらりと見えたと思うと、船はもうそのただ中にのみこまれ、やがて着地した。

そこは、色とりどりの異星の植物が咲きみだれる公園の中だった。

誰も、動こうとしなかった。

パペッティア人は、ノウンスペースの中では、二番めに無害な知性種族と考えられていた。ひどく臆病で、小さく奇妙な体形のため、危険だなどとはとても思えなかったのだ。その存在は、むしろ滑稽さをさそうだけのものだった。

しかし、いま、ネサスの属するその一族は、人間が夢想だにしなかったほど強力であることがわかったのだ。気のふれたパペッティア人は、静かにすわったまま、頭を昂然とのばして、みずから選んで連れてきた三人の隊員を見おろした。いまのネサスには、こっけいなところなど、みじんもない。彼の種族は、惑星を、それも一度に五つも動かしたのだ。

で、ティーラのくすくす笑いは、一同にとってショックだった。

「考えてみたのよ」と、彼女は説明した。「パペッティア人が子供をあまりふやさないためには、セックスしないでいるより方法がないのね。そうなの、ネサス？」

「はい」

彼女はまた笑いだした。「パペッティア人にユーモア感覚がないのも無理ないわね」

おそろしくととのった、きちんと対称形につくられた公園を横切って、一同は、宙に浮かぶ青

い光体のあとについていった。

空気中には、香辛料と、化学薬品をまぜたようなパペッティア人の匂いが立ちこめていた。どこへいっても同じ匂いだ。あの輸送船の生命維持システムの中の匂いは、人工的に強めてあったのだろうが、エアロックがひらいたあとも、それは消えはしなかった。一兆のパペッティア人が、大気中に匂いを放散しており、今後も永遠に、この匂いが消え去ることはあるまい。

ネサスの足どりは、まるで踊っているようだ。小さな曲がった蹄は、弾力のある地面に軽く触れているにすぎない。クジン人は、猫に似たすべるような歩きぶりで、毛のないピンクの尾が、リズミカルに前後にはねる。パペッティア人の足音は、まるで四分の三拍子のタップ・ダンスだ。クジン人は、そよとの音もたてずに歩いている。

ティーラの歩みも、ほとんど音をたてない。いつも、なんとなく不器用な歩きぶりに見えるが、そうではなかった。彼女はけっしてよろけたり、つまずいたりすることがないのである。結局、ルイスが四人のうちでは、いちばん優雅さからほど遠かった。

しかし、ルイス・ウーに、優雅さを期待する根拠があろうか？　猿からの長い進化も、しょせん平地上の歩行に完全に適応するまでには至っていないのだ。数百万年にわたって、彼の祖先は、必要があれば四本足で歩き、樹木のあるところではそれを利用してきたのである。

鮮新世にそれは終わりを告げ、数百万年にわたる旱魃の時代がつづいた。森林は、ルイス・ウーの祖先を置き去りにして、高くのび、乾燥して食用にならなくなった。絶望的な環境の中で、彼らは肉食に転じた。羚羊（アンテロープ）の大腿骨の使いかたを学んで以後、状況は好転し、その二重こぶのある肩関節で打ちくだかれた痕が、無数の頭蓋骨の化石に発見されることとなった。

現在いまだに退化した指をそなえている二本の足で、ルイス・ウーとティーラ・ブラウンは、異星人（エーリアン）とともに歩んでいく。

異星人（エーリアン）だって？　彼らは、すべてここでは外来者（エーリアン）なのではなかったか。気のふれたものとして外地にとどまっていた、茶色いもじゃもじゃのたてがみと休みなく周囲を見まわす頭をもったネサスとて、条件は同じである。〈話し手（スピーカー）〉もまた、不安げな様子だった。黒いみごとなくまどりのあるその両眼は、周囲の茂みに毒針や鋭い歯をもった何かがひそんでいないかと、たえず見まわしている。むろん本能的な動作にすぎない。パペッティア人の公園に、危険な生物などいるはずがないからだ。

一行は、巨大な真珠を半分地面に埋めたような、光り輝くドームの前へ出た。そこで、宙に浮かぶ光は、ふたつに分かれた。

「ここで別れなければなりません」とネサス。その彼が、何かにおびえあがっていることに、ルイスは気づいた。

「〈指導する人びと〉の前に出るのです」低く、緊迫した口調だ。「〈話し手（スピーカー）〉、いますぐ答えてください。もしわたしがもどってこなかったら、あの〈クルシェンコの店〉でわたしの与えた侮辱に報復するため、わたしをさがしだして殺そうとしますか？」

「もどってこられない可能性があるというのか？」

「いくらかあります。〈指導する人びと〉は、わたしのいうことが気にいらないかもしれません。くりかえしますが、わたしをさがして殺そうとしますか？」

「この異境で、しかもおそるべき力と、クジン人の平和性への不信とを合わせもった連中のただ

中でか？」クジン人の尾が、強調するように大きくゆれた。「そういうことはしない。しかし、この探険をつづけようとも思わんが」

「それで結構です」ネサスは、まだ目に見えてからだをふるわせながら、青い誘導光のあとを追って駆け去った。

「何をこわがってるのかしら？」ティーラがつぶやいた。「彼は、命令どおりに、ちゃんとやったじゃないの。なぜ、おこられるわけがあるの？」

「何か企ててるみたいだな」とルイス。「何か分不相応なことを。しかし、なんだろう？」

青い光点が、つと前へ進んだ。そのあとに従って、三人は、真珠色の光を放つ半球体の中へと……。

その半球形のドームは、もう、どこにも見えない。三角形にならんだソファーで、地球人ふたりとクジン人は、周囲にひろがるすばらしい異星植物の森の中から、ひとりのパペッティア人がこっちへやってくるのを眺めていた。ドームが、内側から透明なのか、それとも、この公園の眺めそのものが、投影なのかもしれない。

空気には、相変わらず大ぜいのパペッティア人の匂い。

ネサスではない、べつのパペッティア人――それが、ひょいと首をさげて、手前に垂れさがった赤い蔓の下をくぐりぬけた（ネサスに対しても、以前のルイスは"それ"という代名詞でとらえていた。ネサスが"彼"に昇格したのは、いつだったろう？〈話し手〉のほうは、異星人でも人間に近いせいか、はじめから"彼"と考えていたのだが？ 近づいてきたパペッティア人は、

あの真珠色のドームの境界とおぼしいあたりで、歩みをとめた。ネサスのたてがみは褐色だったが、それのは銀色で、リングをつらねたような複雑なかたちに、みごとに結いあげられている。
しかしその声は、ネサスと同じく、ふるいつきたくなるようなコントラルトだった。
「直接お目にかかれなくてすみません。わたしの名は、キロンと呼んでください」
とすると、やっぱり投影だったわけだ。ルイスとティーラは、口のなかでつつましく悪態をついた。〈獣への話し手（スピーカー・トウ・アニマルズ）〉が、歯をむきだした。
「これからお話しすることは、あなたたちがネサスと呼ぶあのものも知っていることですが、彼はほかの場所に用があってこられません。しかし彼は、わたしたちの工学技術を知ったときのあなたたちの反応ぶりを、話してくれました」
ルイスは、たじろいだ。パペッティア人はつづけて、「これは幸いなことでした。わたしたちが、さらに進んだ工学技術の成果にぶつかったとき、どう反応したか、これであなたたちにも、よく理解できるでしょう」
ドームの半分が、暗黒になった。
面倒なことに、暗くなったのは、パペッティア人が写っているのと反対側の半分だった。ルイスはすぐに椅子の向きを変えるスイッチを見つけた。が、反射的に、こんなとき回転自在のふたつの頭と目があって、それぞれ別個にドームの両半球を同時に見ていることができたらなと思った。暗くなった側には、宇宙の星空をバックに、小さな輝く円形のものが写っていた。
環（リング）のついた円形だ。ルイスのポケットにはいっている立体写真（ホロ）の引きのばしだ。
中央の光源は、小さくまっ白で、木星軌道の近辺からみた太陽のように見える。環（リング）の直径は大

きく、ドームの暗い半面のなかばを占めている。が、その幅はせまく、中央の光源よりもいくらか大きい程度である。こちら側の面は黒く、へりがくっきりと鋭いことが、光源をさえぎっている部分からわかった。向こう側は、さながら宇宙に横たわる空色のリボンといったところだ。

もしルイスが、奇蹟的なものに親しんでいる男だったら、かえってそれに慣れて、あまりに白痴的な推量をひかえていたかもしれない。が、彼はあえてたずねた。

「まるで、環（リング）をめぐらせた恒星みたいだな。いったいこれはなんだい？」

キロンの答えも、同じように平然たるものだった。

「環（リング）をめぐらせた恒星です。その環（リング）は固体でできています。人工物なのです」

ティーラ・ブラウンが、手のひらを打ちあわせて、たまりかねたようにふきだした。もちろんすぐに笑いをかみころして、びっくりするほどまじめな表情をつくってみせたが、その瞳のきらめきはかくせない。ルイスには、その意味がはっきりわかった。彼女と同じ気分を、彼も一瞬味わっていたからだ。環（リング）をめぐらせた太陽のイメージは、ふたりにとっては秘密のおもちゃのようなものだったが、現実の宇宙としては、たしかに目新しかった。

（幅一インチの青いクリスマス・リボンを用意する。プレゼントを包むのに使うような種類のものをだ。何もない床の上に、火のついたろうそくを一本立てる。リボンを五十フィートほどとり、それで、ろうそくを中心とする円形の輪をつくり、内側の面が照らされるように、床の上に縁で立てて置いたと思えばよい）

しかし、クジン人の尾は、しきりに前へうしろへとはげしくゆれ動いていた。

（結局、中心にあるのは、ろうそくではなく、太陽なのだ！）

CamScannerでスキャン

「わたしたちが銀河の軸方向に北へ向かっていたことは、もう知っていますね」ネサスは、ことばをついだ。「地球年で二百四年。クジン年では——」

「二百十七年だ」

「はい。当然そのあいだ、わたしたちは、行手の空間に危険の徴候や思いもかけぬものがないかどうか、観測をつづけてきました。そのEC－一七五二という星が、不明の濃度をもった暗黒物質の細い帯にとりまかれていることは、わかっていました。たぶん塵か岩くずでできた環(リング)だろうと考えられました。が、それにしては、驚くほど規則正しいかたちをしていました。

およそ九十年ほど前、わたしたちの惑星団は、その環(リング)が中心の星の光をさえぎってみえる位置に達しました。そこで環(リング)がくっきりしたへりを持っていることがわかりました。さらに研究してみると、その環(リング)がガスでも塵でも、また岩くずでもなく、おそるべき強度を持った固体の帯であることがわかりました。当然わたしたちは、ふるえあがりました」

〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉がたずねる。「どうしてそんな強度があると推測できたのだ？」

「スペクトル分析と、その波長偏移で、相対的な速度の差がわかったのです。環(リング)は、その主星を中心に、秒速七百七十マイルで回転していることが、たしかめられました。この速度だと、主星による引力に打ち克って、毎秒九・九四メートルの求心加速度を生じていることになります。この張力でちぎれない物質の強度がどれほどのものか、考えてみてください！」

「重力をつくってるんだね」とルイス。

「そうだと思います」

「重力か。地球よりも、わずかに小さい。その環(リング)の内側に住んでるやつがいるってことだな。ふ

う――」その意味するもののショッキングな内容に打たれて、ルイス・ウーは、背筋が総毛立つのを感じた。クジン人の尾が、シュッ、シュッと空を切る音がきこえる。

人類が、より優れた種族に出会うのは、これがはじめてではない。これまでのところ、人類は幸運に恵まれていたが……。

唐突に、ルイスは立ちあがると、ドームの壁に向かって歩いていった。なんの効果もなかった。環(リング)と星の像は、後方へしりぞいていき、彼の手はなめらかな表面に触れただけだった。が、そこで彼は、それまで気づかなかったものを見つけた。

環(リング)が縞になっているのだ。後方の青い表面が、規則正しく四角い影で区切られている。

「もっとはっきり写ってるのはないのかい？」

「拡大ならできます」コントラルトの声が答えた。G2型の恒星が、みるみる大きくなり、ついと尾を引いて右へ移動すると、ルイスは環(リング)の内側を、正面から見おろしているのだった。ぼやけているため、ほかの部分より白く光っているのが雲で、濃い青のところが陸地、淡い青が海だろうと推測される程度だ。

ただし、影になった地域は、はっきりとわかった。環(リング)は、まさしく直角に仕切られていた。明るい空色の帯につづいて、それよりも短い濃紺の部分があり、それにつづいてまた長い空色の帯。トンとツーの連鎖だ。

「何かが影を落としてるのかな。上空の軌道にある何かが？」

「はい、そのとおりです。環(リング)のずっと内側に、二十個の長方形のものが、ケンプラーのばら飾(ロゼット)りをかたちづくっているのです。どうしてそういうことをしたのかはわかりません」

CamScannerでスキャン

のは、夜と昼をつくりだすために、そこにおかれたにちがいない。そうしなければ、環(リング)の世界では、一日じゅう正午ってことになる」

「あなたたちの助けを求めた理由が、もうわかったでしょう。異星的なものの見かたに、価値があるのです」

「ふむ。ところで、環(リング)の大きさは？　研究は、相当に進んでいるのかい？　調査船を送ってみたかね？」

「わたしたちの移動速度を遅らせない範囲で、また、わたしたちの存在が注目をひくおそれのない範囲で、できるだけのことは研究しました。もちろん調査の船など出していません。調査船は、ハイパーウェーヴで制御しなければならないので、わたしたちの所在をつきとめられるおそれがあります」

「ハイパーウェーヴの信号の出どころをつきとめたりできるもんか。そいつは、理論的に不可能なんだ」

「環(リング)をつくった人びとは、べつの理論を開発しているかもしれません」

「うーん」

「しかし、わたしたちは、もっとべつの方法で、研究しています」キロンの声とともに、ドームの壁の映像は、黒や白や灰色に変化した。輪郭が波をうつように動く。「電磁波のあらゆる帯域で通常写真と立体写真を撮りました。もし見たいのなら――」

「どうせ、うんとこまかいところは、写ってやしないんだろう」

「はい、光波は、重力場や、太陽風や、あいだにある塵やガスなどから大きな影響をうけます。わたしたちの望遠鏡でも、これ以上こまかい点はわかりません」

「じゃ、本当に研究したとはいえないな」

「それでも、多くのことがわかりました。ひとつ、奇妙なことがあります。あの環（リング）は、どうやら、中性微子（ニュートリノ）を、四十パーセント前後、さえぎっているのです」

ティーラはきょとんとしているだけだったが、〈話し手（スピーカー）〉は驚きのうなり声をあげ、ルイスは低く口笛をならした。

その一事だけで、もうあとのことはどうでもいいほどだった。

通常の物質は、恒星の中心部でおそろしいほど圧縮された物質ですら、中性微子（ニュートリノ）を遮蔽する力は、ゼロにひとしい。中性微子（ニュートリノ）の流れの半分を吸収するには、数光年の厚さの鉛が必要なのだ。スレイヴァー式停滞（ステイシス）フィールドに囲まれた物体は、中性微子（ニュートリノ）線を全反射する。ゼネラル・プロダクツ製の船殻も同様である。

が、中性微子（ニュートリノ）の四十パーセントをさえぎり、残りを透過するなどというものは、まったく知られていない。

「たしかに新物質だな」とルイス。「キロン、環（リング）の大きさはどれくらいあるんだ？　それに、質量は？」

「環（リング）の質量は、二掛ける十の三十乗グラム。寸法は、半径が〇・九五掛ける十の八乗マイル、幅が十の六乗マイル弱です」

抽象的な十の何乗ということを考えるのは、ルイスには苦手だった。彼はその数字を、イメー

ジの浮かぶ量に換算しようとした。

前に考えた、クリスマス・リボンを輪にして床におく感じは、正しかった。環(リング)の半径は九千万マイル以上だ——全長は約六億マイルになる——が、縁から縁までの幅は百万マイルに足りない。質量は、木星より少し多いくらいか……。

「質量が足りないみたいだね。あれだけ大きなものは、一人前の恒星くらいの重さがあって当然だろうに」

クジン人も賛意を表した。「何十億もの人口を、書籍フィルムほどの厚さもない構造物の上に住まわせようとしている戯(ざ)れ絵を見たことがあるな」

「その感じはまちがっています」と、銀色巻き毛のパペッティア人は答えた。「どんな物質かを考慮しなければなりません。例えば、もしこのリボンが船殻用金属でできているとすれば、厚みはおよそ五十フィートになります」

五十フィート？　とても信じられぬ数字だ。

しかし、ティーラは目を天井に向けると、くちびるを無言のまま、しかしすばやく動かしていた。「そのようね。計算してみると、そうなる。でも、なんのために？　なぜ、誰かさんは、そんなものをつくったのかしら？」

「場所です」

「場所？」

「生活のための場所さ」ルイスが敷衍した。「それが目的のすべてだろう。六百兆平方マイルの面積は、地球の表面積の三百万倍にあたる。三百万個の惑星の表面を、たいらにならして、端と

端をつないだようなもんだ。三百万の惑星のあいだが、エア・カーで往き来できるわけだ。どんな人口問題も、これで解決できる。
　それにしても、よっぽど深刻な事態だったんだろうな！　ちょっとやそっとのことで、そんな計画を実行にうつそうとするやつはいないだろう」
「たしかにな」と、クジン人。「キロン、その近くの恒星に、もっと同じような環がないか、さがしてみたか？」
「はい。ですが――」
「ひとつもなかったか。思ったとおりだ。もしその環をつくった種族が、超光速駆動法を発見していたら、他の星系へも植民できたはずだ。環など必要ないことになる。したがって、環は、ただひとつなのだな」
「はい」
「これで元気が出たぞ。少なくとも、ひとつの点でだけは、環をつくったやつらよりも、われわれのほうが、優位にあることになる」クジン人は、いきなり立ちあがった。「そこでわれわれは、その環の居住表面を探険するわけか？」
「実際に着陸するのは、いくらなんでも無鉄砲というものです」
「何をいうか。探険用に準備した船を見せてみろ。着陸装置はどんな表面でも役に立つか？　出発は、いつだ？」
　キロンは、驚きのあまり、調子はずれの笛のような声をだした。「狂気の沙汰だ。環をつくった種族の力を考えてみなさい！　あれにくらべたら、わたしたちでさえ、未開人の文明といって

ないでしょう」

「あるいは、臆病ものの文明といってもよかろうがな」

「結構です。あなたたちがネサスとよぶあのものがもどってきたら、船を見てください。それまでのあいだ、環(リング)に関して、もう少しデータをお見せします」

「おれの忍耐力をためすつもりか」そういいながらも、〈話し手(スピーカー)〉は腰をおろした。

心にもないことを、とルイスは思う。みごとなゼスチュアだ、が、たよりになるやつだ。彼自身はといえば、椅子にもどったときもなお、胃の腑がむずがゆくなる思いだった。星空に横たわる空色のリボン。——人類は、またもや、より進んだ種族に遭遇したのだ。

クジン人との出会いが最初だった。

人間が、星間宇宙を航行するのに、はじめて核融合推進を利用したころ、クジン人はもう、彼らの宇宙戦艦の動力として、重力偏向装置を用いていた。そのために彼らの船は、地球人のよりも速く、しかも操縦性に優れていた。クジン人との最初の接触で学んだ一事がなかったら、クジン艦隊に対する人類の抵抗など、無きにひとしいものであったろう。すなわち、反動推進エンジンは、駆動に役立つと同様に、おそるべき破壊の武器ともなりうるということである。

人類版図へのクジン人の最初の侵入の結果は、クジン側にとっておそるべきショックだった。もう何世紀も平和がつづいた人間の社会では、事実上戦争などという概念が消えかけていた。しかし、人間の星間宇宙船は、核融合による光波推進エンジンを備え、出航用には、光圧帆走と、小惑星に設置した巨大なレーザー砲が併用されていた。

したがって、クジン側のテレパシー能力者は、人間の世界に武器は皆無だという報告を送りつづけ……そのいっぽうでは、侵入したクジン船が、巨大レーザー砲でまっぷたつにされたり、また自分の出すビームの光圧にのって小型の自走砲と化したしろものが暴れまわるというような事態があいついだ……。

思いもかけなかった人間の抵抗と、光速度の壁にはばまれて、戦争は数年ではなく数十年にわたった。しかし、結局はクジン側が勝利をおさめる趨勢にあった。

ところが、たまたま、アウトサイダー人の船が一隻、ウイ・メイド・イット星にあった人間の小さな植民地に漂着したのである。彼らはそこの首長に、ハイパードライヴ装置（シャント）の秘密を、交易品として提供した。このときまだ、ウイ・メイド・イット星では、クジン族との戦争のことを知らなかった。が、数隻の超光速船が建造されると、当然ただちに戦争の知らせは伝わった。

ハイパードライヴに対して、クジン人は、もはや手も足も出なかった。

その後、パペッティア人がやってきて、人類版図内に、交易所を設けた……。

人類は、じつに幸運だったといえよう。技術的に卓越した種族に出会うこと三たび。アウトサイダー人のハイパードライヴがなかったら、クジン人に蹂躙されていたところだ。アウトサイダー人も、明らかに人間より進んでいた。が、彼らはべつに無理難題をふっかけることもなく、ただ貿易基地（ベース）と、貿易の対象となりうる情報のたぐいを要求しただけだった。そもそもアウトサイダー人は、ヘリウムⅡで新陳代謝する弱々しい生物で、戦士としては熱と重力に対しあまりにも脆かったのだ。そしてパペッティア人は、夢にも思い及ばぬほど強力だが、あまりにも臆病だった。

環状世界をつくったのは何ものだろう？　そして……彼らは好戦的だろうか？

ずっとのちになって、ルイスは、〈話し手（スピーカー）〉のあのゼスチュアが、彼にとってひとつの転機をなしていたことに気づいた。彼ひとりだったら、さっさと手をひいていたかもしれない——ティーラがいっしょであってみれば、なおさらのことである。環（リング）の世界のおそろしさは、抽象的な数字で見る以上のものがあった。そこへ宇宙船で接近し、しかも着陸までするとしたら……。

しかしルイスは、さきほどパペッティア人の飛ぶ世界に、さしものクジン人がふるえあがったのを見ていた。〈話し手（スピーカー）〉のゼスチュアは、すばらしい勇気から出たものなのだ。いまさらルイスが、うしろを見せられるだろうか？

腰を落ちつけ、輝く映像に顔を向けた。ちらりとティーラを見ると、その無知さかげんを口の中でのろった。彼女の顔は、驚異と喜悦に、生き生きと輝いていた。クジン人に劣らぬ熱意である。これに恐怖を感じないほど、彼女は愚かなのだろうか？

環（リング）の内面には大気層があった。スペクトル分析で、気圧も組成も、地球とほとんど同じであることがわかっている——人間もクジン人もパペッティア人も呼吸可能なことはまちがいない。それがとんでいってしまうのを防いでいるのが何かは、いまのところ推量するしかない。いってみなければわからないのだ。

G2型のその太陽の系には、環（リング）そのもの以外に、まったく何もなかった。惑星も、小惑星も、彗星もない。

「すっかり一掃しちまったんだな」とルイス。「環（リング）にぶつかるようなものを残したくなかったんだろう」

「当然です」銀色たてがみのパペッティア人がいった。「もし何かがぶつかるとすれば、それは環自体の回転速度である秒速七百七十マイル以上で衝突するでしょう。環の物質はいかに丈夫でも、その物体が外側に当たらず、太陽の近くを通って、保護するもののない内側の、住民のいる場所へ落ちる可能性もあるわけですから」

中心の主星は黄色矮星で、太陽よりもいくらか温度が低く、心もち小さいようだ。「環におりたら防寒服が要るかな」とクジン人——つまらぬことを、とルイスは思った。

「いいえ」とキロンが答えた。「内側の表面の温度は、わたしたちどの種族にも、充分堪えられるものです」

「どうしてそれがわかる?」

「外面から放射される赤外線の周波数から推定して——」

「おれを甘く見ているようだな」

「そんなことはありません。わたしたちは環を発見して以来、ずっと研究をつづけていますが、あなたたちはまだ十数分間しか見ていません。その赤外波長は、平均して絶対温度で二百九十度を示しており、それはもちろん、環の外側だけでなく内側にもあてはまります。〈獣への話し手〉、あなたにとって、これは最適温度より約十度上です。ルイスとティーラには、ぴたり最適です。

あまりこまかいことに気をとられて、誤解したり、心配したりしないように」と、キロンはつづけた。「わたしたちは、環の側の技術者が強要しないかぎり、あなたたちに着陸を許可しません。単に、不測の事故にそなえていてほしいと思うだけです」

「表面の状況については、何もわかってないのかい？」
「不幸にして、そのとおりです。わたしたちの装置の分解能が不充分なのです」
「わかることもあるはずよ」ティーラがいった。「例えば、昼と夜が三十時間でくりかえすというようなこと。彼らのもと住んでいた世界も、同じ速さでまわっていたにちがいないでしょ。でも、もともとこの星系にいた種族だと思う？」
「そうだと思います。ハイパードライヴを持っていなかったはずですから」とキロン。「しかしたぶん、自分の惑星を、わたしたちのと同様な技術で、他の星系に持っていくことはできたでしょう」
「そうしたはずだ」クジン人がうなった。「そのほうが、環をひとつつくるために自分の系をつぶすよりましだろう。おれは、どこかこの近くに、これと同じく惑星のひとつもない、もとの星系が、見つかると思うぞ。たぶん、環境造成技術を用いて、自分の系の全惑星に植民しつくしたあげく、ついにこんな死にものぐるいの手段に訴えたのだろう」
ティーラが口をはさんだ。「死にものぐるいって？」
「それから、環ができあがったとき、住んでいる全惑星を、住民もろとも、この系へ動かしてきたのにちがいない」
「そうとはかぎるまい」とルイス。「距離がわりと近ければ、大きな亜光速船で住民だけを環にはこんだかもしれん」
「どうして、死にものぐるいなのよ？」
ふたりはいっしょに、まじまじと彼女の顔を見つめた。

「だってあたし、あの環をつくった人たちは、ただ――その――」ティーラは、ことばにつまった。「つくりたいからつくったんだと――」

「刺戟を求めて？　それとも、眺めるためにかい？　なんてこった！　ティーラ、この事業につぎこまれた資源のことを考えてみろよ。いいか、彼らは、どうにもならないほどの人口問題をかかえこんでいたにちがいないんだ。居住のためにこんな環が要る段階になっても、まだこれをつくるだけの余裕はなかったかもしれん。が、とにかくやってのけたのは、それが必要だったからだよ」

「ふうん」ティーラはやはり、釈然としない様子だ。

「ネサスがもどってきます」とキロン。それだけいうと、そのパペッティア人は、くるりと向きを変えて、とことこと公園の茂みの中へ去っていった。

## 7　跳躍円盤

「失礼ね。あれ」ティーラがいった。
「キロンは、ネサスと顔を合わせたくないのさ。前にいったろう？　ネサスは、みんなに、気ちがい扱いされてるって」
「そいつらが、みんな気ちがいなんだわ」
「いや、彼らはそう考えてないわけだが、といって、きみがまちがっているとはいえない。さあ、まだいくつもりかい？」
　それに対するティーラの反応は、前に、〝ハートの鞭打ち症〟の話をしたときに彼女が見せたのと同じ、きょとんとした表情だった。「やっぱり、いっしょにいくつもりなんだね？」悲しい気分で、ルイスは念をおした。
「もちろん。いけないわけがあるの？　パペッティア人は、何をこわがってるの？」
「パペッティア人が臆病なのはわかるが」と〈獣への話し手〉がいいだした。「しかし、彼らがなぜ、いまわかっている以上のことを知りたがるのかが、おれには解せない。ルイス、彼らは光に近い速度で、もうあの環のある星を通りすぎている。環をこしらえたものたちは、超光速飛行の手段をもっていないだろうという。とすれば、彼らは今後永久に、パペッティア人に害を加

えるおそれはない。そうすると、この件に関してわれわれの役割は何か、それがわからん」
「なるほどね」
「これを侮辱ととるべきだろうかな？」
「いや、とんでもない。われわれだって、人口問題をなんとかしようとしてる、それだけのことじゃないか。なぜ、役割なんてことを気にするんだ？」
「気になるのだ。どうか説明してくれ」
ルイスは、ネサスの姿を求めて、まわりの森林を見まわした。「たぶんネサスのほうが、はっきり答えてくれるだろうがね。どうも、よわったな。この惑星の上に、一兆のパペッティア人がいるところを想像してみろ。できるかい？」
「ひとりひとり嗅ぎわけられるくらいにな。考えるだけで、からだがむずむずするぞ」
「で、それが、あの環(リング)の世界に移住したとしたら、少しはましなんじゃないかね？」
「ううむ。なるほど。八の七乗倍ものスペースがあるわけか……。しかし、やはり理解できんな。パペッティア人が、あそこの征服をくわだてていると思うのか？　それにしても、どうやって環(リング)にうつるのだ？　彼らは、宇宙船には乗れないのだぞ」
「わからんね。どうせ戦争する気なんてないだろうよ。そんなことじゃないんだ。問題は、リングワールドが、住むのに安全かどうかさ」
「ううむ」
「わかったかい？　たぶん彼らは、自分たち独自のリングワールドを、建設することを考えているんだ。もしかするとマゼラン雲に、からっぽのやつが見つかると思っているのかもしれない。

まあ、ありえないとはいえまいよ。しかし、それはどうでもいい。とにかく彼らは、何かなするときには、前もって安全かどうかをたしかめなければ気がすまないのさ」

「ネサスが、こっちへくる」ティーラが立ちあがって、見えないドームの壁のほうへ進み出た。

「酔っぱらってるみたい。パペッティア人もお酒を飲むことがあるの？」

たしかに、ネサスの歩きかたは、奇妙だった。つま先立ちの千鳥足といったていで、四フィートほどの黄色い羽毛状の茂みを、大げさな用心ぶかさで迂回し、一度に一本ずつ脚を動かすと同時に、ひらたい頭をきょときょとと八方に向けている。ドームのそばまでやってきたとき、大きな黒い蝶のようなものが、その尻にとまった。ネサスは絹をさくような悲鳴をあげ、高い塀をとびこそうとするように前へはねあがった。下へ落ちると同時にごろごろところがり、それがとまったとき、彼のからだは大きなボールのように、背を曲げ、脚をたたみ、ふたつの頭と頸を前脚のあいだにはさみこんで、まるくなっていた。

ルイスはかけだしながら、「鬱期(デプレッシヴ)だ」とうしろへ声をかけた。幸い、記憶にたよって、見えないドームの入口をさぐりだすことができた。公園の茂みへ、彼はとびこんでいった。

あたりの花は、どれもパペッティア人の匂いがした。（もしパペッティア惑星の全生命が同じ化学組成を基礎にしているのだったら、どうして温かいにんじんジュースが、ネサスの栄養になったのだろう？）ルイスは、くすんだオレンジ色の生垣の、みごとにととのえられた直角ジグザグの道にそって走り、パペッティア人のころがっているところへたどりついた。

そのそばに膝をつく。「ルイスだよ。もう大丈夫」彼はそろそろとパペッティア人の頭蓋を蔽っているもじゃもじゃのたてがみに手をのばし、そっとなでてやった。手のふれた瞬間、パペッ

ティア人はびくっと動いたが、そのまま静かになった。

かなり重症のようだ。まだ、無理に外を見せても、なんの益もあるまい。「あいつは、危険なのかい？　あの、あんたにとまったやつは」

「あれですか？　いいえ」コントラルトの声は、くぐもっていたが、美しく澄んで、しかも抑揚を欠いていた。「あれは……ただ、花から花へ飛ぶだけです」

「〈指導する人びと〉とはどうだった？」

ネサスは、またちぢみあった。「うまくいきました」

「よかったな。何を手にいれたの？」

「子供をつくる資格と、ひと組の配偶者です」

「それでこわがってるのかい？」本当にそうなのかもしれない、とルイスは思った。ネサスは、恋で身をほろぼすクロヒメグモの雄の役割なのか。それとも、神経過敏な処女の立場かもしれない。……どっちの性、いや、なんの性に当たるのか……。

パペッティア人がいう。「あぶないところでした、ルイス。わたしは彼らを脅迫したのです。はったりをかけたのです」

「それで？」ルイスは、ティーラと〈獣への話し手〉(スピーカー・トゥ・アニマルズ)が、そばへきているのに気づいた。静かに、ネサスのたてがみをなでつづける。ネサスは、じっと動かない。

くぐもった抑揚のないコントラルトの声が答える。「〈指導する人びと〉は、もしわたしがこの探険を生きのびてもどったら、子孫をつくる正式な権利を与えるといいました。しかし、それだけでは不充分なのです。親になるには、配偶者が必要です。こんな、もじゃもじゃ髪の気ちが

いに、誰がすすんで連れそってくれるでしょうか？

はったりが必要でした。配偶者をひとり見つけてください、さもないと、探険にはいきません、と、わたしはいいました。もしわたしがいかないと、クジン人もいきませんよ、といいました。彼らは怒りました」

「そうだろうね。あんた、ちょっとやりすぎたんじゃないのか？」

「わざとそうしたのです。計画がだめになるという脅迫に、彼らは手をあげました。わたしはいってやりました。わたしが環(リング)の探険から帰ってきたら、誰かがすすんで、わたしの配偶者にならなければならない、と」

「すばらしい。りっぱじゃないか。それで、志願者は、いたのかい？」

「わたしたちのセックス関係では、伴侶のひとりは、その……家畜みたいなもの、知性のない存在なのです。だから、志願者は、ひとりでいいわけです。〈指導する人びと〉は——」

ティーラがさえぎった。「どうして、もっと簡単に〈指導者(リーダー)〉っていえないの？」

「わたしはただ、あなたたちのことばに翻訳していっているだけです」とパペッティア人。もっと正確に訳すると、むしろ〈うしろから指図する人びと〉となるでしょう。その中からひとりえらばれたものが、議長というか、スポークスマンというか……その称号の正確な訳は〈至後者(ハインドモースト)〉となります。

その〈至後者(ハインドモースト)〉が、わたしの配偶者になるといったのです。彼は、自分の自尊心にかけて、他のものにそのような犠牲を強いることはできない、といいました」

ルイスは、ひゅうと口笛を鳴らした。「こいつは、ちょっとしたもんだな。それだけ認められ

たと考えて、ありがたく受けるほかあるまい。いくらおびえたっていいぜ。もう何もかも終わったんだからね」

　ネサスは身をふるわせ、いくらかくつろいだようだ。

「その、代名詞のことだが」とルイス。「どうもわからない。あんたのことを〝彼女〟とよぶべきなのか、その〈至後者（ハインドモースト）〉のほうが〝彼女〟なのか」

「あなたもぶしつけな人ですね、ルイス。異種族と、性の問題を議論する人がありますか」脚のあいだから、頭のひとつがのぞき、不満げな表情をみせた。「あなたとティーラだって、わたしの目の前で、配偶者としての行為はしないでしょう？」

「妙な話だが、その件が一度話題になってね。ティーラのいうには――」

「怒りますよ」パペッティア人がいった。

「なぜよ！」ティーラがききかえしたとたん、パペッティア人の頭は、またひっこんでしまった。

「まあ、出てきてよ！　いじめやしないから」

「本当ですか？」

「本当。正直にいってるのよ。あなたって、とてもかわいいわね」

　パペッティア人の全身がほぐれた。「わたしを、かわいいといいましたか？」

「ええ」彼女は、オレンジ色の壁のような〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉を見上げ、気前よく、「あなたもよ」といった。

「否定するつもりはないが」とクジン人。「しかし、二度とそういうことをいうなよ。絶対にだ」

高さ十フィートほどの、くすんだオレンジ色の生垣が、完璧な直線をなしてつらなり、そのところどころに、コバルト色の細い蔓が垂れさがっている。見たところ、かつては肉食の植物だった感じだ。そこが公園の境界線だった。

その生垣のどこかに出口があいているものと、ネサスについて、一同はそれに向かっていった。ネサスはその生垣の中へふみこんでいった。すると、生垣はふたつに分かれ、彼を通すと、また、もとどおりに閉じてしまった。

みんなもそれにつづいた。

公園の中では、空はいわゆる空色だった。が、生垣を通りぬけたとたんに、空の色は一変して、黒と白になった。永遠の夜をたたえた暗黒の空に、都市からの光に下面を照らされてまっ白に輝く雲が浮かんでいるのだ。まさしく、どこまでもつづく都市が、一同の目の前にそそり立っていた。

ひと目見た感じでは、地球上の都市と大差ないように思われた。ただ、どのビルも、大きくずん胴で、しかもよく似たかたちをしていた。どれもがおそろしく高く、そのため空は、天頂の暗い一条の割れ目を残すのみで、あとはすべて、窓やバルコニーの灯りに埋めつくされている。室内にはみられなかった直角が、ここにはふんだんにあった。なにぶん、脛をぶつけるには大きすぎる。

しかしなぜ、公園の中では、このそびえ立つ都市が見えなかったのだろう？　地球には、高さ

一マイル以上の建物などめったにない。ここにはそれ以下のがひとつもないようだ。公園の周囲に、光線屈曲フィールドがあるのだろうと、ルイスは推測した。あえてきこうとも思わなかった。パペッティア世界の奇蹟の中では、とるに足らぬものであろう。

「船は、この島の反対側の突端にあります」とネサス。「跳躍円盤（ステッピング・ディスク）でいけば、一分かそこらで着けます。わたしが見本を示します」

「もうすっかり恢復したの？」

「はい、ティーラ。ルイスのいったとおり、最悪の時期は過ぎたようです」パペッティア人は、さっそうと先頭に立っていた。「〈至後者（ハインドモースト）〉がわたしの愛人なのですよ。あとは、無事に、リングワールドから、もどってきさえすればいいのです」

足もとの地面はやわらかかった。見たところは真珠色の粒子をもったコンクリートのようだが、踏んでみると、スポンジのように弾力のある地面なのだ。長い一ブロックを過ぎて、一同は交叉点にさしかかった。「こっちの道です」ネサスは、ぐっと前に頸をのばしながら、「こちら側のディスクに、足をのせないように。わたしについてきなさい」

交叉点の中央に、大きな青い四辺形の区域があった。それをかこむように四つの円盤が、それぞれここへあつまる四本の道路の出口に対応している。「中央の四角には、乗っても大丈夫です。でも、まちがったディスクに乗らないように。ついてきなさい」ネサスは、手前のディスクをよけて、交叉点を横切り、向こう側のディスクへ、とことこと歩いていくと、そのまま、ふっと消えた。

一瞬、あっけにとられて、誰も動こうとしなかった。ついでティーラが、けたたましい声をあ

げて、ディスクへかけより、そして消失した。

〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉が、ひと声うなって、飛んだ。どんな虎も及ばぬ正確さだ。そうして、ルイスはひとりあとに残された。

「いやはや。こいつは、オープン式の転移ボックスなんだな」驚きあきれてつぶやきながら、彼は前方へ歩をすすめた。

つぎの交叉点の中央、ネサスと〈話し手（スピーカー）〉のあいだに、彼は出現した。ネサスがいう。「お仲間は、先に駆けていってしまいました。待っていてくれるといいのですが」

パペッティア人は、三人の向いているそのままの方向へ歩きだした。三歩でディスクに達し、そして消える。

「なあんて仕掛けだ！」ルイスは、感にたえぬようにつぶやいた。クジン人がネサスにつづいていってしまったので、彼はまたひとり残されていた。「歩きさえすりゃいいんだ。三歩で一ブロック。まるで魔法だ。これで、一ブロックの長さも、好きなだけ長くできる！」彼は前方へ足をふみだした。

千里の靴をはいているようなものだ。軽い足どりで三歩あるくごとに周囲の眺めが変わる。ビルの角に円形の掲示があるのが、地番にちがいない。目的の場所へ着けばわかるようになっているわけだ。そこへ着いたら、ディスクをよけてブロックの中へ歩をすすめればいいのである。

道路に面して、ショーウィンドウがあり、ルイスはのぞいてみたいものだと思った。それとも、あれは、まったく別のものなのだろうか？　しかし、ほかの三人は、もう何ブロックも前を歩いている。その姿が、ビルの谷間にひらめくのがみえた。彼は歩度を速めた。

CamScannerでスキャン

何歩かいったところで、ふたりの異星人が前に立ちはだかった。
「ここで曲がります。まちがえぬように」とネサスがいい、左へ向かった。
「待て——」しかし、もうクジン人も消えていた。ティーラは、いったいどこへいっちまったんだ？
いや、たぶん先へいってるんだろう。ルイスも左へ向きを変えて歩きだした——。
まさしく千里の靴だ。都市の眺めが、まぼろしのように流れ過ぎていく。ルイスは夢見心地で走った。十ブロックほどいったところに、都市間交通用とおぼしい、べつの色のついたディスクが並んでいるのが目にとまった。何百マイルも離れた都市の中心をマークする長距離用のディスクで、そこにはまた、到着点の四辺形が、ほとんど一ブロックにわたって並んでいた。海を渡るものもあろう。ひと足でつぎの島へ！　まるで、島が飛び石がわりだ！
まさにオープン式の転移ボックスだった。パペッティア人の文明は、おそろしいほど進歩している。ディスクは、直径一ヤードほどで、その上にすっかり乗りうつらないうちに作動する。一歩ふみこむと同時に、つぎの到着点の四辺形の中へふみだしているのだ。走路なんて、これにくらべたら、カホなほどなさけない！
走りながら、ルイスは、身のたけ数百マイルもあるパペッティア人の幻影が、飛び石のように並ぶ島づたいに、足をぬらさぬよう用心ぶかく歩をすすめている情景を、頭に描いていた。ついでそのパペッティア人の幻影は、ぐっと大きくなり、惑星を飛び石にして宇宙を……おそろしいほど進んだその文明……。
ディスクの連鎖がとぎれて、着いたのは、静かな黒い海に面した海岸だった。その果てに、四

つの巨大な月が、星空を背景に垂直にかかっていた。水平線までのちょうど中間あたりに、こっちよりも小さな島が、きらきらと輝いている。異星人のふたりは、彼を待ちうけていた。

「ティーラはどこだい？」

「知りません」とネサス。

「なんだって！　ネサス、どうやって見つけだすんだ？」

「彼女のほうで見つけますよ。ルイス、心配することはありません。そのうち――」

「ぜんぜん知らない土地で道に迷ってるんだぜ！　何が起こるかわからないじゃないか！」

「ここでは何も起こりませんよ、ルイス。ここほど安全な世界はないのです。ティーラが、この島の海岸に着いたら、そこから他の島にはわたれないことがわかるでしょう。そこで、海岸線にそってディスクをたどってくれば、ここに着くしかありません」

「コンピュータが道に迷ってるわけじゃないんだぜ。ティーラは二十歳の女の子なんだぞ！」

ティーラが、彼のすぐ横に出現した。「あーら、ちょっと迷っちゃったみたい。みんな、何をさわいでるの？」

〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉が、ルイスに向かい、短剣のような歯をのぞかせて、にやりと笑った。ルイスは、ティーラの当惑した、もの問いたげな視線を避けながら、顔から火の出る思いだった。しかし、ネサスはただひとこと、「わたしについてきなさい」といっただけだった。

パペッティア人のあとからついていくと、ステッピング・ディスクが海岸に沿って一列に並んでいる。その中に、くすんだ褐色の星形があった。一同がその上へ足をふみだすと……。

そこは、太陽灯（サンランプ）にさんさんと照らされた、むきだしの岩の上だった。私設宇宙港くらいの大

きさの島である。その中央に、高い建物と並んで、一隻の宇宙船が横たわっていた。
「あれが探険船です」とネサス。
ティーラと〈話し手（スピーカー）〉は、失望の色を見せた。クジン人の耳は、たたみこまれて見えなくなったし、ティーラは、もの足りなさそうに、後方をふりかえった。そこには、いまあとにしてきた島の上に、高さ数マイルものビル群がひしめき立ち、星間宇宙の夜に対抗して、光り輝く城壁をかたちづくっているのがのぞまれる。しかしルイスは、これまで張りつめていた筋肉が、ようやくほぐれてくる思いだった。奇蹟は、もうたくさん。ステッピング・ディスク、途方もない大都市、地平線上に高くかかっている四つの黄褐色の農業惑星……何もかもが威圧的だった。船はそうではない。それは、一枚の三角翼の中にぴたりとおさまった、ゼネラル・プロダクツ製二号船殻で、翼には、いくつものスラスター駆動ユニットと核融合モーターが光っていた。そのすべてが、ごく見なれたものばかりだ。もうこれ以上何も質問することはあるまい。
が、クジン人のことばで、彼は自分の思いちがいを知らされた。「パペッティア人の技師がつくったにしては、いかにも奇妙な設計だな。ネサス、おまえは、船全体が船殻の内部にはいっているほうが安全だとは思わないのか？」
「思いません。この船の設計は、革命的な新機軸を結集したものです。こっちへきて、見てごらんなさい」ネサスは、とことこと船に向かっていく。
クジン人の指摘は、的を射たものだった。
パペッティア人所有の貿易会社、ゼネラル・プロダクツは、ノウンスペースで、多種多様の品物を売りさばいていた。が、その成功は、このゼネラル・プロダクツ製船殻によって確立された

CamScannerでスキャン

のだった。これには、バスケットボールくらいの球体から、同じ球体でも直径一千フィートをこえるものまで、四つの種類がある。四号船殻は、あのロングショット号のそれだ。三号船殻は、両端をまるめた円筒形の一面をたいらにした形状で、複数の乗員をのせた客船として最適である。数時間前、四人をパペッティア惑星におろしたのも、この型の船だった。二号船殻は、蜂の腰のように中央のくびれた円筒形で、前後端ともぐっと細くなり、針のようにとがっている。通常の装備をすれば、ひとり乗りでちょうどいいくらいの余裕しかない。

ゼネラル・プロダクツ製船殻は、可視光に対しては透明だ。それ以外のいかなる電磁エネルギーや、いかなる種類の物体をも、まったく通さず、うけつけない。その保証を、会社の人気が裏づけ、数百年にわたり数百万隻の船に用いられて、破綻を見せなかった。ゼネラル・プロダクツ製船殻は、安全性において、まさに究極的なものであった。

四人の前にある船は、ゼネラル・プロダクツ製二号船殻をベースにしていた。

しかし……ルイスにわかるかぎり、船殻の内側におさめられているのは、生命維持システムとハイパードライヴ装置(シャント)だけだった。それ以外のものはすべて——下を向いている一対の円盤形のスラスター駆動ユニット、前向きの小さな核融合モーター二基、翼の後端に並ぶもっと大きな二基の核融合モーター、翼の左右の先端にとりつけられた一対の大きなポッド——これはたぶん、探測と通信用の装置をおさめているのだろう、ほかにはその関係の装置が見当たらなかったから——にいたるまで、それらがぜんぶ、大きなデルタ翼にとりつけられているのだ！

装備の半分は、結局、翼の上にあって、あらゆる危険にさらされている。心配性のパペッティア人が、なぜ三号船殻を使って何もかもその内部に収めてしまう方法をとらなかったのか？

ネサスは、デルタ翼の下をくぐって、船殻後端のとがった先へと一同をみちびいた。「わたしたちの目的は、できるかぎり船殻に穴をあけずにおくことでした。わかりますか？」

ルイスは、彼の太腿ほどもある電纜（コンディット）が、ガラスのような船殻をつらぬいて、翼部へつづいているのをみとめた。その開孔部が、何やらひどくこみいった仕掛けになっている。ほどなくルイスは、あらゆる回路をひとつにまとめたその電纜（コンディット）が、ある箇所で切れて、船殻内へ引っこむよう設計されているのに気づいて仰天した。ついで、その操作をやってのけるモーターと、あとに残る孔をふさぐ金属のとびらをも、彼は見つけだした。

「ふつうの船では、船殻に多数の孔をあけなければなりません」とパペッティア人。「可視光以外に対する検出装置のために、反動モーターを備えている場合はそのために、また燃料タンクからの補給孔のためにも。しかし、この船殻には、ただふたつの孔しかありません。電纜（コンディット）と、エアロック用です。ひとつは乗員の、もうひとつは情報の出入り口です。その両方とも、密閉ができます。

船殻の内面には透明な導体がコーティングされています。エアロックと電纜（コンディット）の孔が閉じれば、内部はまったく隙間のない導体面を形成することになります」

「停滞（ステイシス）フィールドか」ルイスはやっと思いあたった。

「そのとおりです。もし危険にさらされると、数秒のうちに、生命維持システム全体がスレイヴァー式の停滞（ステイシス）フィールドに包まれます。停滞（ステイシス）フィールド内には時間の経過がなく、したがって何ものも、内部にいるものに危害を加えることはできません。わたしたちは、船殻だけにたよるような愚かなことはしません。可視光を用いたレーザーなら、ゼネラル・プロダクツ製の船殻をと

おして内部のものを殺傷し、船体に傷をつけずにおくこともできます。また、反物質に出会うと、この船殻はたちまち崩壊してしまいます」

「そいつは知らなかったぜ」

「とくにPRしていませんから」

ルイスが、デルタ翼の下から出てみると、〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉がモーターをしらべていた。

「どうしてこんなにいろんなモーターをつけたんだろうね？」

クジン人は、ふんと鼻をならした。「人間は、クジン族との戦いで学んだ教訓を、忘れたわけではあるまい」

「ああそうか」クジン人と地球人の歴史を学んだパペッティア人なら、そのクジン戦訓のことは、充分に知っているはずだ。反動推進機関は、まさしくその効率に比例した力をもつ兵器なのである。ここには、安全なスラスター駆動だけでなく、武器にもなりうる核融合推進が併用されているのだった。

「たしか、あんたは、核融合推進の船を操縦できるといったな」

「おれは戦士の訓練をうけているのだぞ、ルイス」

「つぎの人間－クジン戦争のためかね」

「戦士の腕をみせてやろうか？」

「そうしてください」と、パペッティア人が割りこんだ。「この船は、クジン人の操縦に適するようにつくられています。〈話し手(スピーカー)〉、制御盤(コントロール)をしらべてみますか？」

「すぐにな。それから、性能データや、試験飛行の記録なども見たい。ハイパードライヴ装置(シャント)は、

標準型のものか？」
「はい。それから、試験飛行はまだすんでいません」
　さもありなん、とルイスは、エアロックのほうへ歩をうつしながら考えていた。パペッティア人の技師たちは、こいつをつくりあげたきり何もせずに、われわれの到着を待っていたというわけだ。そうするほかなかったのだ。試験飛行をひきうけようというパペッティア人がいるはずもない。
　ティーラは、どこだろう？
　彼女が、突然、星形の到着プレートの上に出現したとき、彼は思わず声をあげそうになった。彼女は、船など見向きもせず、ステッピング・ディスクで遊んでいたのだ。一同が船に乗りこもうとしているのを見ると、黒い海の向こうにそびえるパペッティア人の都市のほうを、まだ名残り惜しげにふりかえりながら、みんなのあとにつづいてきた。
　ルイスは、エアロックの内側のドアのところで、彼女を待ちうけた。彼女のあまりの軽率ぶりに、一発くらわせてやるつもりだった。誰でも、一度道に迷ったら、もっと用心ぶかくなっていいはずだ！
　ドアが開く。ティーラは有頂天だった。「ルイス、きてほんとによかったわ！　あの都市──おもしろかった！」彼の手をぎゅっと握りしめ、興奮でものもいえない。その笑顔は、燦然と輝く太陽さながらだ。
　彼には、どうすることもできなかった。「よかったね」といい、固いキスをかわした。いっしょに操縦室へ向かうとき、彼は腕を彼女の細い腰にまわし、親指を肋骨の上にさまよわせていた。

CamScannerでスキャン

彼は、いまようやく確信を持った。ティーラ・ブラウンは、まだ一度も怪我をしたことがないのだ。用心を教えられることもなかった。おそれということを知らないのだ。はじめて傷みを知ったとき、彼女は驚きおののくだろう。それ一度で、打ちのめされてしまうかもしれない。

そして、彼女が傷つくとき、ルイス・ウーは死んでいるだろう。

神は、愚かものを守ってはくれない。愚かものを守るのは、より愚かになりうる人間だけなのだ。

ゼネラル・プロダクツ製二号船殻は、幅二十フィート、長さ三百フィート、前後とも細くとがっている。

事実上、船の装備の大半は、船殻外のうすい翼の上にのっているといってよい。生活システムは、三つの居室兼寝室、細長い休憩室(ラウンジ)、操縦室、それにロッカーの並ぶ船倉をゆったりとつつみ、炊事台、自動医療装置、物質再生装置、電源などの設備もある。制御パネルはクジン式の配置で、クジン語のラベルがついていた。ルイスは、いざとなれば自分でも操縦できるだろうが、それはよくよくの場合だけのことにしようと思った。

ロッカーには、無気味なほど多量の探険用機器がつまっていた。はっきり、「これは武器だ」と指摘できるようなものはひとつもない。が、武器として使えるものは、いろいろと見つかった。フライサイクルが四台、飛行パック(フライング)(背負いベルト式の触媒ラムジェット)が四基、食品検査機、何種類もの食品添加物、医療セット、空気検査機に濾過機などもあった。あたかもこの船が、どこかへ着陸することを、確信しているような装備ぶりだった。

いや、着陸していけないわけがどこにあろうか？ リングワールドを建設するほどの実力を持ちながら、ハイパードライヴを備えた船がないおかげでそこに釘づけされている種族なら、双手をあげてその到着を歓迎してくれるだろう。たぶんパペッティア人もそれを期待しているのにちがいない。

それでいて、ネサスが、「これは武器ではない。これこれの目的で積んだのだ」と強弁できないような品物は、何もないのである。

三つの種族が乗り合わせている。もし人間の女を別種族とするなら四つだが、実際、クジン人やパペッティア人はそう思っているかもしれなかった。（ネサスと〈至後者(ハインドモースト)〉は同性なのだろうか？ 子供をつくるのに、雄の二個体と、知性のない雌の一個体が要る、そんなことが、ありえないといえようか？）とすれば、リングワールド人が実在した場合、彼らはひと目みただけで、各種の知性種族が仲よくやっていけるということを、そこから学びとることができるだろう。

だがそれにしても、武器として使える品物――携帯レーザー、決闘用の衝撃銃など――が、いろいろありすぎる。

島に被害を与えないよう、無反動のスラスター駆動で離陸した。約半時間後には、パペッティア人のばら飾り(ローゼット)のつくる弱い重力井戸から出はずれていた。このときになって、ルイスははじめて、あのパペッティア人の世界で、行をともにしているネサスと、映像として現れたキロン以外には終始、ひとりのパペッティア人にも会わなかったことに気づいたのだった。

船がハイパードライヴにはいったのち、ルイスはおよそ一時間半かけて、ロッカーにおさめら

CamScannerでスキャン

れているあらゆる品目を点検した。備えあれば憂いなしだ、と自分にいいきかせる。それでも、武器に類する装備は、何かを暗示するような、にがいあと味を残さずにはいない。

武器がいっぱい。そのくせ、武器として以外に使いみちのないものはひとつもないのだ。携帯レーザー。核融合モーター。ハイパードライヴにはいった最初の日に、一同は船の命名式をおこない、ルイスはこれを〝うそつき野郎(ライイング・バスタード)〟とよぶことを提案した。それぞれ自分なりの理由から、ティーラも〈話し手(スピーカー)〉もそれに賛成した。自分なりの理由から、ネサスもあえて異議をとなえなかった。

一週間のハイパードライヴで、船は二光年あまりを飛んだ。アインシュタインの空間にもどったところは、すでに環(リング)のあるG2型恒星の系内だった。が、いやな予感は、まだルイス・ウーにつきまとっていた。

一行がリングワールドに降り立つ結果になることを、カホなほど確信している何ものかが、たしかにいるはずなのだ。

## 8 リングワールド

パペッティア人の世界は、光に近い速度で、銀河の北へ向かって動いていた。〈話し手（スピーカー）〉はハイパードライヴで船をG2型太陽の南へもっていったが、その結果、うそつき（ライアー）号は、盲点空間（ブラインド・スポット）から脱けだしたとき、すでにまっすぐリングワールド系へ向けて、高速度で突進しているかたちとなった。

G2型恒星は、まぶしく光る白点だった。ルイスが他の星系からもどったときの太陽（ソル）も、太陽系のはずれからみると、ちょうどこんなふうに見えたものだ。が、この星は、かすかに目につくほどの暈（ハロー）をまとっている。この最初の一瞥は、ルイスの記憶に焼きついた。系の外縁からでも、リングワールドは、肉眼でそれと見分けられる存在だったのだ。

〈話し手（スピーカー）〉は、大型核融合モーターを全力噴射させた。さらに、スラスター駆動用の円盤を、翼平面から張り出させ、作動軸を後方に向けて、その出力をもロケット噴射に加えていた。ライヤー号は、双生児の太陽のような光輝を放ちながら、うしろ向きに系内へ進入し、その減速はほとんど二百Gに達した。

ティーラは、そのことを知らなかった。ルイスが彼女にいわなかったのは、心配させたくなかったからだ。もしキャビンの重力調整が、ほんの一瞬でも作動をやめたら——四人とも、靴の底

で踏まれた虫のようにぺしゃんこになってしまうだろう。

しかし重力調整は、完璧にその裏方のつとめを果たしていた。生活システム全体が、つねにパペッティア惑星と同じ重力にたもたれ、他には核融合モーターの咆哮が、微弱な震動となって、たえまなくひびいているばかりだ。その轟音のはいってくる場所は、人間の腿より太くはない電纜（コンディット）用の開孔部しかなく、しかしおよそ船殻内にいるかぎりどこへいっても、微弱ながら、その震動がつきまとってくるのだった。

ハイパードライヴ中においてさえ、〈話し手（スピーカー）〉は船の透明な部分にいることが多かった。とにかく見晴らしのいいことが好きで、視野全体に盲点がひろがったような状況も苦にならないらしい。船体は、個室を除いて、ぜんぶ透明なままになっており、その眺めに慣れるのは容易なことではなかった。

休憩室（ラウンジ）から操縦室へかけて、曲線で一体につながっている壁と床と天井は、目に見えないほど透明なわけではない。一見して何もないようでも、じつはがっちりした障壁があるのだ。馬蹄形のパネルに配置された緑やオレンジ色のダイアルにとりまかれて、〈話し手（スピーカー）〉はゆったりと操縦席にくつろいでいた。そのうしろには、ネオン色の光を放つ入口の境を隔てて、休憩室（ラウンジ）のテーブルとそれをとりまく椅子、つづいて、不透明な個室が後方に並んでいる。左右には大きく張りだした翼の三角形が見えた。その向こうは、満天の星空だ。全宇宙がおそろしく身近に……そして何か動きを欠いたものに見えた。むろん、環（リング）をもった星がまっすぐ後方にあるため、船室にさえぎられて、その輝きが見えてこないせいもある。

空気は、オゾンとパペッティア人の匂いがした。

ふつうなら、うなりをあげる二百Gの恐怖にすくみあがっていて当然のネサスが、なぜかすっかり心地よげに、あとのふたりと、休憩室のテーブルをかこんでいる。
「リングワールド人は、ハイパーウェーヴを持っていません」彼は熱心にしゃべっているところだった。「あの系の数学的構造が、このことを保証しています。ハイパーウェーヴは、ハイパードライヴ数学の一般化で、だから彼らは、ハイパードライヴを持つことができないのです」
「でも、偶然のことでハイパーウェーヴを発見してるかもしれないわ」
「いいえ、ティーラ。なんでしたら、ハイパーウェーヴ帯域をさぐってみましょうか？　どうせ、こうやって減速しているあいだは、何もすることがありませんから。しかし――」
「カホナ！　まだ待たなきゃいけないの？」ティーラは、いきなり立ちあがると、小走りにかけだしていってしまった。
パペッティア人のふしぎそうな顔へ、ルイスは肩をすくめてみせた。
ティーラは荒れていた。一週間のハイパードライヴで退屈し、ご機嫌ななめなところへ、さらに一日半の減速のあいだ、何もすることがないとあって、いささか八つ当たり気味のようだ。だが、ルイスに何ができよう！　物理法則を変えるわけにもいくまい。
「待たなければならんようだな」〈話し手〉が相槌をうってきた。操縦室にいて、彼女のことばのヒステリックな調子には、気づいていないらしい。「ハイパーウェーヴ帯域には、まったくなんの信号もはいってきておらん。リングワールドの連中がハイパーウェーヴを用いたどんな方法でも、呼びかけてきていないことはたしかだ」
コミュニケーションの問題が、いまや最大の関心事だった。リングワールドの技術者との連絡

かつくまでは、相手が居住者のいる系である以上、こっちはどう見ても不法侵入ということになる。もっとも、現在のところ、船が探知された気配はない。

「受信機は、いれてある」と〈話し手〉。「もし連中が、電磁波で通信してきたら、わかるようにな」

「先方が、いちばんありふれた方法できたら、だめだぜ」ルイスが反駁する。

「それはそうだ。ほかの星系に知性の存在をさぐるのに、いろんな種族が、低温水素線を用いていたな」

「クダトリノ人も、それですんなりとあんたたちを見つけたんだっけ」

「そしてわれわれは、すんなりと彼らを奴隷化したのだ」

星間通信の電波帯域は、恒星の出すノイズでいっぱいだ。しかし、幸いなことに、二十一センチメートルの波長域だけは、果てしなくひろがるつめたい星間水素のせいで、雑音が吸収され、きれいになっている。どんな種族にしろ、異星人に通信しようとしたら、まず試みるのがこの線である。不幸にも、ライヤー号の噴出する新星なみの高温水素のせいで、その帯域が使えなくなっているのだ。

「慣性飛行にはいったとき、軌道があの環の中を通らないようにすることを忘れないように」とネサスがいう。

「何度同じことをいうつもりだ、ネサス。おれの記憶力は、抜群なのだぞ」

「環の住民に、危険を感じさせてはならないのです。忘れていないことを信じますよ」

「パペッティア人は、何も信じないはずだったな」と〈話し手〉。

「もうよせよ」ルイスは、うんざりしていた。口論は、もうたくさんだ。彼は部屋にひっこんで、ひと眠りすることにした。

数時間が過ぎ去った。ライヤー号は、新星（ノヴァ）の光輝と熱をもった二本の光芒を先に立てて減速しながら、環（リング）を持った星への下降をつづけていた。

コヒーレント光が船にぶつかってくる気配も、まったくなかった。リングワールドの住人が、ライヤー号を、まだ見つけていないのか、それとも彼らはレーザー通信を持っていないのだろうか。

ハイパードライヴの一週間、〈話し手（スピーカー）〉と人間たちは、たがいに相手の個室を訪問しあった。クジン人の部屋は、ルイスやティーラにも、好もしいものに感じられた。地球よりやや大きな重力に合わせた周囲の壁の立体投影（ホロスケープ）は、黄色っぽいオレンジ色のジャングルに、古代クジン風の要塞をあしらった眺めで、それにふさわしいいろんな香りが、つぎつぎと変わっていくのだった。ふたりの個室はいうと、都市の景観やら、改良された海藻になかば蔽われた海中農場の眺めやらで、ちょっと想像もつかぬほど強烈に飾り立てられており、クジン人は、居住者のふたり以上に、それが気にいった様子だった。

クジン人の個室で、いっしょに食事をすることまでやってみた。しかし、クジン人の食事作法たるや、まるで飢えきった狼さながらで、しかもその間ずっと、人間の食いものはごみ焼場みたいな匂いがするとかなんとか、文句をつけている始末だった。

そして今、ティーラと〈話し手（スピーカー）〉が、休憩室（ラウンジ）の一隅でぼそぼそと話しあっている。ルイスの耳には、遠雷のような核融合モーターのうなりに妨げられて、話の内容まではとどいてこない。

船内重力下での生活は、昔からおなじみのものだった。彼の持っているヨットも、三十Gまでの出力がある。が、その船はスラスター駆動で、まったく音がしないのだ。

「ネサス」と彼は、低い轟音に身をまかせながら呼びかけた。

「はい、なんですか？」

「あの盲点空間（ブラインド・スポット）のことだが、あんたたちは、何かぼくらの知らない知識を持ってるんじゃないかい？」

「質問の意味がわかりません」

「あんたはハイパースペースをひどくこわがってるね。それなのにこの——炎の柱に乗って後退していく——こいつを少しもこわがらない。あのロングショット号をつくったのもあんたたちだ。ぼくらにない知識が、あんたの種族にはあるはずだよ」

「そうでしょうね。何かあるのでしょう」

「それはなんだい？　もし極秘事項でなかったら、教えてほしいな」

〈話し手（スピーカー）〉とティーラが、いまは聞き耳を立てていた。たたむと毛皮の中にかくれてしまう〈話し手（スピーカー）〉の両耳が、まるで半透明なピンク色のパラソルのようにひろがっている。

「不滅のものなどありえないことを、わたしたちは知っています」と、ネサスがいう。「あなたの種族では、どうか知りませんが、わたしにはわからないことです。しかし、わたしたちの種族には、不死の要素など何もないのです。科学者がそれを証明しました。わたしたちは、死ぬことがおそろしい。死は永遠のものですから」

「それで？」

「盲点空間（ブラインド・スポット）の中で、船が何隻も行方不明になりました。ハイパードライヴで特異圏に近づくパペッティア人など、いるわけがありません。でも、消失したのです。まだ操縦士が乗っていた時代の話です。ライヤー号をつくった技師の腕は信頼できます。ですから、船内重力については、万にひとつのおそれもありません。しかし、その技師も、盲点空間（ブラインド・スポット）をおそれていました」

船内では昼と夜の時間をきめていたが、夜になってもルイスはあまりよく眠れず、夢ばかり見ていたし、昼になるとティーラもルイスも顔を見合わせておたがいにうんざりする、そんな毎日であった。彼女は、少しもおびえてはいなかった。おびえた姿を見ることなどできないだろうと、彼は思った。彼女はただ退屈しきっているだけだった。

居室兼寝室にかくれて見えなかった環（リング）のある星が姿を現したのは、その日の夜まであと三十分というときだった。恒星はまだ小さく白く、太陽（ソル）よりも強烈に輝き、そしてそのうしろに、青鉛筆でひいたような細い空色の線が見てとれた。

一同は、望遠スクリーンのスイッチをいれる〈話し手（スピーカー）〉のうしろに立って、肩ごしにのぞきこんでいた。彼はリングワールド内面の青い線を視野にいれると、拡大ボタンを押した——。

ひとつの疑問が生じ、そくざに解けた。

「縁に何かあるぞ」とルイス。

「縁に視野の中心を合わせてください」ネサスが命じた。

環の縁が、スクリーンの上で拡大されてくる。その正体は、そこから主星の方向へとそそり立っている側壁だった。陽に照らされた青い世界をバックに、宇宙にさらされているその黒い外面

が、くっきりと見てとれる。低い外壁だ。むろん、低いというのは、環（リング）そのものと比較してのことにすぎない。

「環（リング）の幅が百万マイルなら、この壁は少なくとも一千マイルの高さがあるだろう」ルイスが目測した。「いや、これでわかったよ。こいつが、大気を保持していたんだ」

「これだけで大丈夫でしょうか？」

「大丈夫なはずだ。環（リング）の回転で、およそ一Gの重力ができている。何千年ものあいだには、いくらかの空気はこの外壁の上をこえて逃げていくだろうが、そいつは補充すればすむ。だいたいこの環（リング）をつくった以上、彼らは、安あがりの物質変換技術をもっていたはずだ――一キロトン一スターにもつかないやつをね――ほかにも何十とある謎は、さておくとしてもだ」

「内側がどう見えるか、知りたいですね」

その声に、〈話し手（スピーカー）〉が制御盤に手をのばすと、景色が横へずれはじめた。拡大が不充分なので、地表のこまかいところまではわからない。明るい青と、それよりもっと明るい白とが、スクリーン上をすべったと思うと、ぼやけた直線を境として藍色に変わる……。

反対側の縁が視野にはいってきた。ここでは、壁は外側に傾いているように見えた。

入口の近くに立ち、〈話し手（スピーカー）〉の両肩の上にひとつずつ頭をのばしているネサスがいった。

「できるだけ倍率をあげてください」

景色が、拡大される。

「山だわ」とティーラ。「まあきれい」つまり外壁の内側は、浸蝕された岩のようなかたちにつくられ、月の表面のような色をもった不規則な表面でできていたのだ。「千マイルの高さの山な

のね」
「これ以上拡大はきかんぞ。もっとこまかいことを知るには、もっと近づかなければならん」
「まず、住人に連絡することです」とパペッティア人。「船はもう停止しましたか？」
〈話し手〉は船の頭脳に問い合わせて答えた。「主星に対し、秒速約三十マイルで接近している。このくらいで充分だろうか？」
「はい。では交信機に向かってください」
レーザー光がやってきていないことは、もうわかっている。
電磁波帯を調べるのは、もっと困難だった。電波、赤外線、紫外線、X線——その全帯域を、リングワールドの暗い底面の出す室温放射から、物質‐反物質のペアでもつくれそうな高エネルギーの光量子まで、しらべなければならない。二十一センチ波帯は、からっぽだったし、また、あまりにありきたりなこの水素吸収帯域をさけて、ごくたまに用いられる、その倍数波や分数波も同じだった。一応のチェックが終わると、〈獣への話し手〉は、こちらからの一方的な送信にかかった。
ライアー号の翼端にある、通信用の装置をおさめた大きなポッドは、すでにひらかれていた。水素吸収帯域はじめその他さまざまな波長で電波メッセージが送られ、十種類の周波数のレーザー光線がこっちへ向いている環の内面全域をなめまわし、さらに核融合モーターを間歇的に噴射して共通語モールスまでが試みられた。
「向こうから信号が来ていれば、いずれは船の自動機構が翻訳してくれるでしょう。先方の地上にあるコンピューターが、少なくとも同じくらいの性能を持っているとしてですが」とネサス。

〈話し手(スピーカー)〉が毒のある口調で答えた。「おまえの気ちがいコンピュータは、この完全な沈黙も翻訳できるのか?」

「送信を、縁(リム)の近くに集中しなさい。もしあの世界に宇宙港があるなら、それは縁(リム)の近くにあるはずです。宇宙船を離着させるのに、他の場所は危険すぎますから」

〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉は、その〈ますらおことば〉で、何かおそろしい侮蔑のうなり声をあげた。それが効果的に会話を終わらせた。が、ネサスは、もう何時間も前からクジン人の両肩の上に浮かべているふたつの頭を、ぴくりとも動かさなかった。

船殻をへだてた向こうには、リングワールドの、空を横切る縞模様の青いリボンが、待ちうけているのだ。

「あなた、前に、ダイスン球(スフィア)のこと話してたわね」ティーラがいった。

「ああ。話そうとしたら、向こうで頭のしらみでもとってろってきめつけられたっけ」ルイスは、ダイスン球(スフィア)に関する説明を、船の図書室で見つけ、そのアイデアに狂喜したあまり、カードのひとり遊びを楽しんでいたティーラに説明を試みる愚を犯したのだった。

「いま、それ、話して」おだてるような口調だ。

「頭のしらみでもとっておいで」

彼女は、だまって動かない。

「負けたよ」とルイス。ここ一時間、環(リング)を熱っぽく見つめていたあげく、彼も彼女に劣らず退屈しきっていたのだ。

「ぼくはリングワールドが、一種の妥協の産物だってことをいいたかったのさ。技術的には、ダ

イスン球と、ふつうの惑星を折衷したようなものなんだ。
　ダイスンっていうのは、古代の自然哲学者の名だ。小惑星時代以前、いや、原子力以前かもしれない。彼は、文明の発展が、その利用可能なエネルギーによって頭打ちになるということを指摘した。人類が、手のとどく範囲の全エネルギーを利用する道は、太陽のまわりに球形の殻をこしらえて、太陽のあらゆる輻射をとらえることにある、と彼は唱えたんだ。
　笑うのをやめて、ちょっと考えてみれば、きみにもその意味するものはわかるだろう。地球に当たる太陽の輻射は、その全出力の約二十億分の一にすぎない。もしそのエネルギーのすべてを利用できたら……。
　いや、当時としてはこれは、けっして突拍子もない思いつきじゃなかった。超光速飛行の理論的な根拠さえ信じられていない時代だ。ハイパードライブも、われわれが発明したものじゃないことは、きみも知ってるだろう。偶然そいつを発見する可能性もなかった。空間の特異圏外で実験することなど、思いつきもしなかっただろうからね。
　もし、アウトサイダー人の船が、国連の無人探査艇に出会わなかったらどうなっていたか？　産児制限法がうまくいっていなかったら？　一兆もの人間がすしづめになった上に、ラムシップより速い乗り物がないような状態で、しかも核融合動力だけにたよって、どれだけやっていけたろう？　地球の海にある水素なんて、百年で使い果たしてしまったはずだ。
　しかし、ダイスン球の利点は、太陽エネルギーをあつめることだけじゃない。
　例えば、半径一天文単位の球殻をつくるとしよう。いずれ太陽系内は掃除しなきゃならないんだから、そこの全惑星の物質をつぎこんで建設するとする。この場合、殻の厚さは、例えばクロ

ーム鋼で数ヤードといったところだ。そこで、その全表面に、重力発生機を装備すれば、これで地球表面の十億倍の面積が手にはいることになる。これは一兆の人口が、一生のあいだ、ひとりも他人に出会わずに暮らせるくらいの広さだ」

ティーラがようやく口をはさんだ。「その重力発生機で、何もかも下にとめておくわけね？」

「ああ、内側の表面が地面になるわけだ。そこは、全面を土で蔽って――」

「もし、重力発生機のひとつがこわれたらどうなるの？」

「こまかいことをいうね。そう……数十億の人間が、太陽に向かって吹きあげられるだろうよ。大気がまわりから押しよせてくるからね。地球をのみこむほどの大龍巻だ。この種の嵐に遭ったら、修理隊を送りこむのぞみもないだろう……」

「つまんないのね」断定的な口調。

「結論をいそぐんじゃない。重力発生機をまぬけ防止式(フールプルーフ)にする方法だってあるだろう」

「そんなんじゃないの。内側じゃ、星が見えないでしょう」

その点は、ルイスも、考えたことがなかった。「気にするなって。ダイスン球(スフィア)は、要するに、知性と産業をもったどんな種族も、いずれはそんなものを必要とするようになるという警告なんだよ。工業文明ってやつは、時間とともに大きなエネルギーを消費する傾向があるからね。環(リング)は、つまりふつうの惑星と、このダイスン球(スフィア)との折衷案なんだ。環(リング)では、球にくらべると、広さも、受ける太陽エネルギーも、ずっと少なくなる。が、そのかわり星は見えるし、重力発生機の故障を気にやむ必要もない」

操縦室のほうから、〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉の、何やらこみいった咆哮がひびいてきた。船内の空

気を毒に変えるほどのすさまじさである。ティーラがまた、たまりかねたように笑いだした。
「もしパペッティア人が、ダイスンと同じように考えているとしたら」と、ルイスはつづける。
「マゼラン雲に着いたとき、そこが端から端までリングワールドだらけになっている事態を予想しても、少しもおかしくはないだろうね」
「だから、あたしたちにお声がかかったってわけね」
「パペッティア人の考えの肩を持つのは気がすすまないが、ほかに考えようがなければ、そうするしかあるまい」
「ずいぶんお勉強してたようね」
「けしからん！」クジン人がどなった。「これは侮辱だ！　やつらは、故意にわれわれを無視しているのだ！　わざと背を向けて、攻撃をさそっているのだ！」
「そんなことがあるものですか」とネサス。「電波がとらえられないのは、先方が電波を出していないからです。電波レーザーを日常使っているだけでも、わたしたちは、そこからの洩れを探知できるはずです」
「やつらは、レーザーも使わなければ、電波も使わなければ、ハイパーウェーヴも使わないのか。では、何で通信するのだ？　テレパシーか？　字を書いてとどけるのか？　大きな鏡でも使うのか？」
「おうむを使うのさ」ルイスが、操縦室の入口まで立っていって、口をだした。「でっかいおうむで、特別のえさで肺を大きくしたやつをね。でかすぎて飛べないから、山のてっぺんにとまって、大声で鳴きあうんだ」

〈話し手〉がふりかえって、ルイスを見つめた。「四時間にわたって、おれはリングワールド人と連絡をつけようとした。その四時間のあいだ、やつらはおれを無視しつづけた。軽蔑していることは確実だ。ただひとことの返事もよこしておらん。わが筋肉は運動不足のためうちふるえ、わが毛皮はもつれ、わが目は焦点を定めず、わが呪われたる居室はせまくるしく、電子ヒーターの目盛りはくるったまま固定して、なおすこともできぬ。ルイス、おぬしのいまのことばが、ただひとつの救いであったぞ」

「リングワールド人は、文明を喪失したのでしょうか?」ネサスは考えこんだ。「いくらなんでも、そんなことはありえないと思いますが」

「死滅しているかもしれんぞ」〈話し手〉が底意地の悪い口調で、「これもありえないことかな? そもそも、連絡してこないというのが、ありえないことなのだ。このうえは、着陸してたしかめなければならん」

ネサスは、おびえあがった高い笛のような声をあげた。「着陸ですと? 土着の生命体を死滅させたかもしれない世界に? 気でもくるったのですか?」

「ほかに方法があるか?」

「あるもんですか!」ティーラが味方した。「わざわざここまでやってきて、まわりを飛ぶだけなんて、まっぴらだわ!」

「いけません。〈話し手〉、リングワールドへの通信をつづけなさい」

「もうこれだけやればたくさんだ」

「もう一度やるのです」

「絶対にやらんぞ」

ルイスが調停役を買って進みでた。「まあ気をしずめろよ、毛皮の親分。ネサス、彼のいうとおりだぜ。リングワールド人には、通信の方法がないんだ。そうでなきゃ、もう何かわかっているはずだよ」

「しかし、通信の試みをつづけるほかに、何ができますか?」

「本来の探険の仕事を進めるのさ。リングワールド人に、こっちの通信をどう扱うか、もう少し考える時間をくれてやろうぜ」

しぶしぶとパペッティア人は同意した。

　　　　　　　　　　・

船は、リングワールドへ向かって、徐々に接近していった。

〈話し手(スピーカー)〉は、ライヤー号を、リングワールドの外縁をかすめる方向に向けていた。その点はネサスにゆずったかたちだ。パペッティア人は、船がもし環(リング)の中をつっ切るコースをとると、存在するかもしれないリングワールド人に脅迫ととられるだろうことを、おそれているのだった。彼はまた、ライヤー号の核融合モーターが武器のように見えることを心配し、そのため船は、スラスター駆動のみを使っていた。

目で見ただけでは本当のスケールはわからない。数時間にわたって、環(リング)は次第に向きを変えていった。じれったくなるほどの遅さだ。推力ゼロから三十Gの範囲だと、船内重力の補償作用は完璧で、内耳では動きの気配すらも感知できない。空虚な時間が過ぎ、そしてルイスは、地球を離れてからこのときはじめて、爪でもかみたい衝動にかられていた。

ついに環が、ライヤー号へ、その側面を見せた。〈話し手〉はスラスター駆動で船にブレーキをかけ、主星をめぐる円軌道にのせた。ついで縁に向かって近づいていく。

いまや、その動きが見てとれた。

リングワールドの縁（リム）が、いくつかの星をかくすぼんやりした線から黒い壁へと成長した。高さ一千マイルのその外壁は、のっぺらぼうに見えたが、おそろしい速さで動いているためにぼやけているだけかもしれない。いまや距離およそ五百マイル。空を九十度の幅で蔽いかくす壁面が、秒速七百七十マイルという猛スピードで走り過ぎていく。壁の上下の線は、左右の消失点（ヴァニシング・ポイント）へ収束しているが、その点がともに宇宙の無限の果てにあるように見える。しかも、その無限遠にあるふたつの点から、空色の二本の線が、まっすぐ上方へのびているのだ。

消失点を見つめていると、別の宇宙にひきずりこまれるような気分になる。直角とその他いくつかの性質だけを持った、一次元の直線宇宙だ。ルイスは催眠術にかけられたように、消失点に目をすえていた。あの点は、いったいどっちの点なのだ？　黒い壁は、あそこから湧きだしているのか、それともあそこへ吸いこまれているのだろうか？

……と、その無限に遠い点から、何かがこっちへ向かってきた。

台のような張り出しだ。外壁の基底と平行に、何か抽象模様めいた感じで突き出ている。まず、その張り出しが目にとまり、ついでその上面に垂直な輪（ループ）が立ち並んでいるのがわかった。その輪（ループ）がまっすぐライヤー号へ、そしてルイスの鼻先へと突進してくる。ルイスは思わず目を閉じ、両手で頭をかかえた。誰かがヒュウと恐怖の息をつくのが聞こえた。

その瞬間に、死が訪れていたはずだった。それがやってこないとわかって、彼は目をひらいた。

CamScannerでスキャン

船のすぐ下を輪(ループ)の列が、定常流となって飛び過ぎていく。輪(ループ)の大きさは、直径五十マイルもないくらいだろう。

ネサスは、ボールのようにまるまっていた。ティーラは透明な船殻に手のひらを押しあてて、むさぼるように外を眺めている。〈話し手〉(スピーカー)はおそれも感じないふうで、制御盤を操作していた。たぶん彼のほうが、ルイスよりも、距離の目測が得手なのだろう。

それとも、ただ虚勢を張っているだけなのだろうか。さっき恐怖の声をもらしたのは、〈話し手〉(スピーカー)だったかもしれない。

ネサスが、からだをほどいて起きあがった。彼が外を見たとき、並んでいる輪(ループ)は前よりも小さく、間隔がつまってきていた。「〈話し手〉(スピーカー)、リングワールドに、速度を合わせてください。一Gで加速して、位置関係をたもつのです。この輪(ループ)の列は、宇宙港(スペースポート)にちがいありません」

いわゆる遠心力というのは、仮想的なもので、慣性の法則のひとつの現れにすぎない。実在するのは、その物体の速度ベクトルと直角方向に働く求心力のほうで、それに対し、直線的に運動をつづけようとする物体が抵抗するわけである。

リングワールドは、その速度と慣性のため、つねに飛び散ろうとしている。が、強靱な構造がそれを許さない。リングワールドは、この遠心力に堪えて回転しているのだ。これに対し、ライヤー号は、秒速七百七十マイルに合わせたとき、求心力でそれに同調していかなければならないことになる。

〈話し手〉(スピーカー)がその操作をした。ライヤー号は、外壁と並んで浮かび、〇・九九二Gの推力でバランスをたもつ。そうしながら、一同はこの宇宙港(スペースポート)をしらべにかかった。

CamScannerでスキャン

宇宙港の張り出しは、見たところひどく細く、一本の直線のように見えたが、〈話し手〉が船を近づけるにつれて大きくひろがり、やがてその広い台の上に、豆つぶのような二隻の宇宙船が横たわっているのが見えた。それは両方とも同じような、端のたいらな円筒形で、見なれない設計ではあるが、明らかに核融合ラムシップの形状だった。つまり、恒星間水素を電磁場の力で集束することで燃料を補給しながら航行する船なのである。一隻は、部品を利用するために解体されており、内部が真空にさらされたかたちで、構造がむきだしになっているように見えた。

手をつけられていないほうの船の一端を、窓がぐるりととりまいているので、それによってだいたいの大きさが想像できる。時おり星の光をうけてきらりと光るのが、ちょうどケーキの上に砂糖の結晶をばらまいたような感じだ。数千もの窓。この船は巨大だった。

そして、暗い。宇宙港全体が暗いのだ。たぶんここを使用している生物が、〝可視〟範囲の周波数の光を必要としないのだろう。しかし、ルイス・ウーには、どうもこの宇宙港が、もはや使われていないもののように感じられた。

「あの輪はいったいなんなの？」とティーラ。

「電磁砲みたいなものさ」ルイスは、うわの空で答えた。「出航用のね」

「ちがいます」ネサスがいった。

「はあん？」

「電磁砲は、到着用にちがいありません。使いかたを推測することも可能です。船はこの外壁に沿って進入します。速度を合わせる必要はなく、ただ外壁の下端から二十五マイルの距離に位置をとればいいのです。環が回転して、あの電磁砲のコイルが船をつかまえ、加速して、環の速度

に合わせます。まことに、これを設計したリングワールドの建設者には感心しますね。船は危険なほど外壁に近づく必要もないのですから」
「輪(ループ)を出航用に使うことだって、できるだろう」
「いいえ、左のほうにある仕掛けを見てください……」
「カホナ！　一本まいったよ」とルイス。
その〝仕掛け〟とは、ちょうどあのラムシップ一隻がはいるくらいの大きさの、落とし戸のようなものであった。
たしかに、理屈に合っている。秒速七百七十マイルというのは、ラムスクープモーターの使えるスピードだ。出航用の施設は、単に船を空間へすべり出させる仕掛けにすぎなかった。船はすぐさまラムスクープによる核融合モーター加速をはじめることができる。
「宇宙港の設備は、使われていないようだな」〈話し手(スピーカー)〉がいった。
「動力は探知できないのかい？」
「このメーターには何も出ておらん。とくに熱を持っている場所もないし、大規模な電磁気の動きもない。あの直線加速機(リニア・アクセレーター)を発動させる検出装置があるにしても、それもこちらで感知できないほどの出力しか使っていないということだ」
「何かいい考えは？」
「装置自体は、まだ生きているかもしれん。それは、あの直線加速機(リニア・アクセレーター)の輪(ループ)の中へ進入してみればわかるだろう」
ネサスが、また、ボールのように丸くなった。

CamScannerでスキャン

「うまくいかないだろうな」とルイス。「あれを作動させる特別な信号があるかもしれないが、こっちにはわからない。金属の船体にしか反応しないかもしれない。リングワールドの速度で飛びこんだら、輪(ループ)にぶつかって、何もかもふっとばしてしまうだけだろう」
「これと似たような条件の実戦訓練で、船を飛ばしたこともあるのだぞ」
「昔のことだろ？」
「かなり昔だな。まあいい。おまえはどう思う？」
「環(リング)の底へまわってみよう」と、ルイス。パペッティア人が、すぐにからだをほどいて立ちあがった。

船は、リングワールドの底面の下に、速度を合わせ、外向きに毎秒九・九四メートルの推力を加えながら浮かんでいた。「照明を当ててみなさい」とネサスがいった。

五百マイルかなたの面へ、投光器が向けられた。が、その光がとどいているにしても、もどってはこなかった。なんといっても、着陸用の照明にすぎないのだ。

「おまえのところの技術者は信用できんな。え、ネサス？」
「こういう特殊な事態に即応することまでは、考えていなかったのでしょう」
「おれは考えているぞ。おれなら、リングワールドを照らしてみせる。核融合モーターを使うのだ」
「そうしてください」

〈話し手(スピーカー)〉は、四つ同時に点火した。前向きの二基と、うしろ向きの大きな二基である。ただし

前の二基は、もともと緊急制動用ないしは武器として使われるもので、〈話し手〉（スピーカー）はそのノズルを、できるかぎり広角にひらいた。反応管内の水素の流れが早くなりすぎ、不完全燃焼のまま放出される。核融合チューブの温度はぐっと低下し、ふつうなら新星（ノヴァ）の核よりも高温の排気が、今は黄色矮星の表面ほどの低さだ。光芒が、二条の槍のように、リングワールドの漆黒の下面をさしつらぬいた。

　まずわかったのは、下面が平坦でないことだった。起伏している。いたるところ、ふくらみとくぼみが見えるのだ。

「たいらだとばかり思ってたのに」ティーラが叫んだ。

「型になっているんだ」とルイス。「賭けてもいい。あのふくらんだところが、表面では海なんだ。へこんだところは山なんだ」

　が、その起伏はいかにも小さく、もっと近づいてみなければ、はっきりとしたことはいえそうにない。ライイング・バスタード号は、リングワールドの底面まで五百マイルの距離をたもちながら、その縁から中央へと進入していった。ふくらみと凹みが後方へ流れ去っていく。まったく不規則で、見ていると楽しくなるほどだ……。

　もう何世紀も前から、地球の月の表面では、観光用の宇宙船が、これと同じように遊弋したものだった。状況は、こことかなりよく似ている。月の夜の側では、そうした船が必ず備えている強力な投光器によって、空気のない地表の凸凹が、黒と白の截然たる境界をなして浮かびあがるのである。が、むろんちがうところもあった。月面では、どんな高度をとっているにしろ、黒い宇宙へ向かって鋭い鋸歯のような輪郭を見せながらゆるく湾曲している月の地平線が見えるから

だ。

このリングワールドの地平線には、鋸歯も湾曲もない。そこにあるのは、想像を絶するほどかなたの直線、それもまさに幾何学的直線が、黒と黒の境界として、かすかにみとめられるばかりだ。こんな光景に〈話し手（スピーカー）〉はどうして耐えられるのだろう？　ルイスはいぶかしい思いにかられた。一時間、また一時間……ライヤー号は、この、まぎれもない〝構築物〟の底面の下をくぐって進みつづける。

ルイスは、われ知らず身ぶるいした。徐々に、この眺めのスケール、リングワールドの本当の大きさが、彼にものみこめてきたのだ。愉快な気持ではなかった。何によらず、ものがわかってくるというのは、こういう気分のものだ。

彼はつとめて、おそるべき地平線の眺めから視線をそらし、眼下の、いや頭上の、照明の当たった地域に心を集中した。

ネサスがいいだした。「海の大きさが、どれも同じくらいの規模ですね」

「池みたいのもあったわよ」ティーラが反駁する。「それに――ほら、河がある。河にちがいないわ。でも、とくべつ大きな海はないみたいね」

無数の〝海〟を、ルイスも見ていた――もし彼のいうとおり、ふくらみの部分が海だとしたらだが。それらは、全部が全部同じ大きさというわけではないが、ちょうど均等に分布しているようで、とくに水不足の地域はなさそうだ。しかも――「たいらだ。どの海も、底が平坦になっている」

「はい」とネサス。

「これでひとつわかったぞ。海が浅いということは、リングワールド人が、水棲じゃないってことだ。彼らは海の上っつらを利用するだけなんだ。ぼくらと同じにね」
「でも、どの海も、ずいぶんゆがんだかたちをしてるわね」ティーラがいった。「それに、緑のかたちもぎざぎざ。これ、どういうわけなの？」
「湾だな。湾ってのは利用できるもんだ」
「つまり、リングワールド人は、陸の住人であるけれども、船には乗るということですか」とネサス。「そうでなければ、湾の必要はありません。ルイス、ここの住人は、きっと地球人とよく似た外見を持っていますよ。クジン人は水がきらいですし、わたしの種族は溺れるのをこわがりますから」
この下面を見るだけで、ずいぶんいろいろなことがわかってくるものだ、とルイスは思った。いつかこのテーマで論文でも書くとしようか……。
ティーラがいった。「自分の思うとおりに世界をつくれるなんて、すばらしいわ」
「もとの世界がきらいになったのかい？」
「わたしのいう意味は、わかるでしょう」
「権力志向かい？」ルイスのほうは驚異を求めているばかりで、その種の力に対しては無関心だった。創造的な人間ではない。自分では何もつくらず、観察を楽しむほうなのである。
前方に何かが見えてきた。前より大きなふくらみ……そしてそこから突き出たいくつものひれが、出力を絞った核融合の照明の中で黒く影を落としている。それも、数千平方マイルに及びそうな広さだ。

これまで見えたのが海なら、これは大洋だった。それもあらゆる大洋の王者だ。どこまでも果てしなく続き、しかもその底は平坦ではない。ちょうど等高線をいれた太平洋の地図のようだ。谷あり屋根あり、深浅さまざまで、たぶん島になっていると思われるほどの海嶺もある。

「海に生物を住まわせてるんだわ」ティーラが推測した。「ひとつだけは、深い大洋をつくったわけね。ひれは、深い海の底を冷やすためよ。放熱用なんだわ」

深さはともかく、広さでは、地球をそっくりのみこんでしまうほどの大洋。

「これでもうたくさんだ」ふいにクジン人がいいだした。「では、これより内側を見にいこうではないか」

「その前に、計測をおこなわなければなりません。環が真円かどうか？　わずかなくるいがあっても、大気は宇宙へ洩れていってしまいます」

「大気があることはわかっているのだぞ、ネサス。また、表面の海の分布を見ても、環が真円かどうかはすぐわかる」

ネサスは一本まいったようだ。「よろしい。向こうの縁へ着いたら、すぐ内側へまわりましょう」

隕石の衝突でできたとおぼしい穴が、ぽつぽつとあった。数多くではないが、たしかにそれである。リングワールド人は、この太陽系をすっかりきれいにすることができなかったのだろうかとルイスは考えこんだ。が、そんなはずはあるまい。たぶん、系外の恒星間宇宙から飛来したものであろう。円錐形のクレーターがひとつ、光芒の中に浮かびあがり、その底面が、きらりと光るのをルイスはみとめた。何か光を反射するものがあるのだ。

環（リング）を構成している物質が、むきだしになっているのにちがいない。中性微子（ニュートリノ）を四十パーセントもさえぎる密度と、そしておそるべき強度を持つと思われる物質だ。その環の床面（リング・フロア）の上、つまり内側には、土や海や都市があり、その上に大気層がある。床面の下つまり外側では、たぶん発泡プラスティックのような、やわらかい物質が、隕石の直撃をうけとめているのだ。隕石の大部分は、その厚いプラスティック層の中で蒸発してしまうのだろう。しかし中には、それをつきぬけて、光る平坦な底を持った円錐形の穴を残すものもあるのだ。

リングワールドの回転していく方向はるかかなたの、そのわずかな曲率による地平線に近いあたりに、ルイスはひとつの凹みを見つけた。巨大な隕石孔にちがいない。あれほど遠いのに、星の光で見分けられるほどの大きさだ。

しかし彼は、その凹みのことを、誰にもいわなかった。彼の目と心は、まだリングワールドの巨大なスケールに慣れていなかったのである。

# 9　遮光板(シャドウ・スクエア)

燃えたつG2型恒星が、黒い直線をなす環(リング)の縁(リム)の向こうから、姿を見せた。それがあまりに明るすぎたので、〈話し手(スピーカー)〉は偏光装置のスイッチをいれた。これでルイスも、その円盤像を直視できるようになり、見ていると、円弧の一部が直線で切りとられていることがわかった。遮光板(シャドウ・スクエア)のひとつだ。

「注意してください」ネサスがいう。「環(リング)と速度を合わせたまま、内側のほうへ出ていったら、必ず攻撃をうけます」

〈話し手(スピーカー)〉の返事は、もごもごと、うなるような口調だった。何時間も、馬蹄形の操縦席にすわりきりで、疲れていたのかもしれない。「どんな武器で攻撃されるというのだ？　リングワールドには、電波を出す設備もないことが、わかっているのだぞ」

「通信の形式については、何も推測はできません。たぶんテレパシーか、あるいは環(リング)の床を媒体とする共振か、あるいは有線の電気通信ということもあります。同じように、彼らの武装についても、何もわからないのです。内側の表面に出ていったら、わたしたちは、おそるべき脅威と見なされるでしょう。あるかぎりの武器で攻撃してくるにきまっています」

ルイスがうなずいて同意を示した。生まれつき用心ぶかいわけでもなく、リングワールドへの

興味で胸ははちきれそうだったが、それでも、パペッティア人のいいぶんが正しいと感じたからである。

表面の上空にある船は、いわば隕石と同じだ。しかも大きい。こんなものが、しかもふつうの軌道速度で飛びこんできたら、これはおそるべき脅威だろう。大気の上層に一度触れたがさいご、それは秒速数百マイルの速さで突入し、地表に激突するはずだ。軌道速度より速く動きながら、駆動によってその回転に合わせて飛んでいるこの船は、脅威は少ないだろうが、反面それだけ確実な危険を孕んでいるともいえる。もしその動力が故障したら、〝遠心力〟のため、船は外方すなわち下方の居住地帯を直撃することになるからだ。リングワールド人が、隕石の脅威を軽視しているはずがない。環（リング）の床面にひとつ孔があいただけでも、この世界の大気は、ぜんぶそこから洩れて、星間宇宙へ噴きだしていってしまうのである。

制御盤から〈話し手（スピーカー）〉がふり向いた。とたんに、パペッティア人のふたつの頭と、まっ正面から向かいあうかたちとなった。「では、どうしろというのだ？」

「まず、船の速度をゆるめて、軌道速度に合わせてください」

「それから？」

「太陽の方向へ加速するのです。環（リング）の居住表面も、下方へ遠ざかっていくところが観察できるでしょう。目標は、あのシャドウ・スクェアです」

「そういう用心は、不必要でしかも恥さらしだ。シャドウ・スクェアなどを見てもなんにもならんぞ」

カホナ！　ルイスは心の中で舌うちした。くたびれて、腹も減っているのに、またもや異星人

CamScannerでスキャン

の仲裁を買って出なければならないのだろうか？　そういえば、もうずいぶん長いあいだ、誰ひとり食事も睡眠もとっていない。ルイスが疲れているのだから、クジン人は消耗しきって、いつもよりもっと喧嘩っぱやくなっているだろう。

パペッティア人がしゃべっている。「シャドウ・スクェアをしらべることは大切です。その表面は、リングワールドそのものよりも多量の太陽光線をうけます。これがリングワールドに動力を供給する、理想的な熱電発生機になっているかもしれません」

クジン人が〈ますらおことば〉で、悪意にみちたうなり声をあげた。が、共通語（インターワールド）に切りかえたその語調は、ふしぎなほどおだやかだった。「それは理由にならんぞ。リングワールドの動力源など、どうでもよいことだ。必要なら着陸して、原住民を見つけだし、動力のもとについて聞きただせばすむ」

「着陸は許可しません」

「おれの操縦の腕を疑うのか？」

「わたしの指揮権に文句があるのですか？」

「おまえがそれをいうなら――」

「わたしはまだ、タスプを持っていますよ、〈話し手（スピーカー）〉。わたしのことばひとつで、ロングショット号と、その第二量子域（セカンド・クワンタム）ハイパードライヴの行方がきまるのです。この船では、わたしが絶対権を持っています。そのことを、よくわきまえて――」

「ちょっと待った」とルイス。

ふたりがいっせいにふりかえる。

「まだその議論は早すぎるよ。ひとつ、シャドウ・スクェアに望遠鏡を向けてみたらどうだい？ それで実際に見きわめるほうが、ただいがみあっているよりは収穫も大きいし、第一、そのほうがずっと楽しいぜ」

ネサスはふたつの頭を向かいあわせて、たがいに見つめあった。クジン人は、爪をひっこめた。

ルイスはつづける。「それより、正直なところ、みんな、もうへとへとなんじゃないのか？ くたびれて、腹をすかして、これで戦(いく)さができるもんか。ぼくは一時間ほど、睡眠セットにはいるぜ。みんなもそうしたほうがいいと思うね」

ティーラが、愕然とした表情でいった。「見ていたくないの？ これから、内側の世界が見えるっていうのに！」

「なら、見ていて、何があったかあとで教えてくれよ」いいすてて、ルイスは踵をかえした。

目がさめたときは、空腹で目がまわりそうだった。だが、そそくさと就寝プレートからとびだしたあとは、軽食(ハンドミール)をダイアルする時間も惜しく、出てきたのをつかんでひと口かぶりつくと同時に、彼は休憩室(ラウンジ)へとびだしていった。

「どうなってる？」

ティーラが、読書スクリーンの向こうから、つめたくいいはなった。「もうすっかり終わったわ。スレイヴァーの船や、霧の悪魔(ミスト・デーモン)や、宇宙の悪龍(スペース・ドラゴン)や、人食い星間種子(カンニバル・スターシード)なんかが、いちどきに襲いかかってきたのよ。〈話し手(スピーカー)〉が、素手でそいつらを片づけてくれたわ。見てれば面白かったのに」

「ネサスは？」

パペッティア人の返事は、操縦室からもどってきた。「〈話し手（スピーカー）〉とわたしは、まずシャドウ・スクェアへ向かうことに意見が一致しました。〈話し手（スピーカー）〉は、いま寝ています。もうすぐ邪魔ものの何もない宇宙へ出ますよ」

「何か目新しいことは？」

「いろいろあります。見てごらんなさい」

パペッティア人は、望遠スクリーンを操作した。どこかでクジン語の文字を学んでいたらしい。望遠スクリーンに現れた眺めは、はるか高いところから見おろした地球の表面とよく似ていた。山、湖、谷、河、それに砂漠のような大きいむきだしの地域など。

「砂漠かな？」

「そのようです、ルイス。〈話し手（スピーカー）〉が、温度と湿度のスペクトルをとりました。どうみても、リングワールドは、未開へ逆もどりしたとしか思えません。少なくとも部分的には、そのはずです。そうでなければ、どうして砂漠などができるでしょう？

環（リング）の反対側にも、もうひとつ大きな塩水の海がありました。こっち側にあるのと同じくらいの大きさです。スペクトルが、塩分を示しています。たぶん、多量の水のバランスをとるために必要だったのでしょう」

ルイスは、手の中の軽食（ハンドミール）に、またひと口かぶりついた。

「あなたの提案はとても有益でした」ネサスが念をおすようにいう。「〈話し手（スピーカー）〉もわたしも、異星人との交際の訓練をうけていますが、あなたには及びもつきません。望遠鏡をシャドウ・ス

クェアに向けた結果、〈話し手(スピーカー)〉も、そばへいってみることに同意しました」
「ほう？　どうして？」
「奇妙なところがあるのです。シャドウ・スクェアは、あの位置の軌道速度よりも、かなり早く動いているのです」
ルイスは思わず食事をかむ口をとめた。
「ありえないことではありません」パペッティア人がつづける。「シャドウ・スクェアが、楕円軌道をとっているのだとも考えられます。べつに主星からの距離が一定である必要はないわけですから」
ルイスは、口の中のものをむりやり呑みこんだ。「そんなことがあるもんか。一日の長さが変わっちまうぜ！」
ティーラが、「それで夏と冬をつくることも考えてみたの。夜を長くしたり短くしたりしてね。でも、それでもやっぱりおかしいのよ」
「あたりまえさ。シャドウ・スクェアは軌道を一巡するのに、一カ月以下しかかからない。三週間の一年なんて、とんでもない話だ」
「わかったでしょう」とネサス。「わたしの星系からの観測では、このような異常は小さすぎて見つかりませんでした。主星の近くでは、重力が変則的に強くなって、軌道速度を増しているのでしょうか？　いずれにしても、あの遮光物質を、そばへよってしらべるのが得策でしょう」
シャドウ・スクェアの黒いシャープな影が、陽をかげらせてひとつずつ通りすぎていくにつれ

て、時間も刻々と過ぎていった。

　ようやくクジン人が個室から姿を見せて、休憩室（ラウンジ）にいる人間ふたりと丁重なあいさつをかわし、それからネサスといれかわって、操縦室にはいっていった。

　はいったと思うと、とびだしてきた。べつにどなり立ててはいない。が、そのおそろしい目ににらみすえられて、パペッティア人があとじさりするのを、ルイスは目にとめた。〈話し手（スピーカー）〉は、まさしく相手を殺しかねないけんまくだった。

「まあ、まあ」と、ルイスは、やむをえずあいだにはいった。「どうしたというんだ？」

「この、草食いめが！」クジン人は、怒りに口もきけないほどだ。「この精神分裂の督戦隊めが、おれの眠っているあいだずっと、最少燃料軌道で船を進めおったのだ。この割合だと、シャドウ・スクェアの並んでいる軌道までいきつくのに、四カ月もかかってしまうぞ」〈ますらおことば〉による悪罵が、ひとしきりそれにつづいた。

「船をその軌道にのせたのは、あなたですよ」パペッティア人が、穏やかにいいかえした。

クジン人の声は、一段と大きくなった。「内側のものようをなるべく長く眺めるため、リングワールドからゆっくり離れていくようにしたのだ。それからまっすぐ、シャドウ・スクェアへ向けて加速すれば、数カ月ではなく数時間で到着できたのだ！」

「そんなに怒鳴ることはありませんよ、〈話し手（スピーカー）〉。いま加速をはじめたら、船の軌道がリングワールドを横切るかもしれません。それは避けたいことです」

「太陽に向かえばいいのよ」とティーラ。

　みんな、いっせいに彼女のほうをふりかえった。

「もしリングワールド人が、この船のぶつかることを心配しているとしたら、たぶんコースを測定しているはずよ」ティーラは、かんでふくめるように説明する。「だから、まっすぐ太陽の方向へ進んでいれば、危険はないってことになるでしょう。わかって？」

「それなら大丈夫だな」と〈話し手〉。

パペッティア人は、ぶるっと身をふるわせた。「あなたが操縦士です。好きなようにやりなさい。しかし、いっておきますが——」

「本当に太陽にとびこんだりはしない。シャドウ・スクェアのところへ着いたら、それに速度を合わせるのだ」クジン人は足音も荒く操縦席へもどっていった。クジン人の足が大きな音を立てるというのは、よほどのことである。

ただちに船は、環と平行に向きを変えた。何も起こっている気配はない。クジン人が、前にいわれたとおり、スラスター駆動を使っているからだ。まず船の軌道速度をゼロにまで落として、太陽へ自由落下の状態にし、ついで船首を内側へふり向けると、速度を加えはじめた。

幅ひろい青い帯のようなリングワールド表面のあちこちに白く光る雲が、ひだになったり、こんもり固まったりしている。それがいまや、目に見えて後退しはじめた。〈話し手〉はかなり急いでいるようだ。

ルイスは、モカの壜をふたつ、ダイアルすると、ひとつをティーラにわたした。

クジン人が腹を立てた理由が、彼にはよくわかっていた。リングワールドがおそろしいのだ。いずれ着陸しなければならないことはわかっている……彼は、神経がまいってしまう前に、それをすませてしまいたいという、死にものぐるいの欲求にかられているのにちがいなかった。

その〈話し手〉がやがて休憩室にもどってきた。「あと十四時間でシャドウ・スクェアの軌道に着く。ネサス、われら誇り高き戦士の一族は、幼時より忍耐を教えられてきた。それも、おまえたち草食いのような、ただじっとしているということではないのだ」

「船が動いてるぞ」ルイスがつぶやいて、腰をあげた。船首がいつのまにか、太陽の方向からそれかけている。

ネサスが金切り声をあげてとびあがった。そのからだが、休憩室をひとっとびに横切って、まだ床に着かないうちに、ライヤー号は、まるで船自体が一個の閃光電球と化したような光輝につつまれ、ぐらっとよろめいた——

——断絶——

——よろめいたのが、船内重力があるにもかかわらず、はっきり感じられた。ルイスは、椅子の背をつかんで、それにすがりついた。ティーラはおそろしく正確に自分の緩衝席のどまんなかへ倒れこみ、パペッティア人はボールのようにまるくなって、壁にぶつかった。ついで、あたり一面、すみれ色の強烈な輝き。暗黒の一瞬が過ぎると、まるで紫外線灯のような光輝が船を包んでいた。

外からの光、船殻の外からくる光だ。

〈話し手〉は、ライヤー号の目標を定め、あとを自動操縦機構にゆだねたのにちがいない。そこ

で、自動操縦機構のほうは、与えられたコースを点検し、その正面にある太陽を、大きすぎて危険な宇宙塵と判定して、回避のコースをとりはじめたのだろう、とルイスは思った。

船内重力は、もう正常にもどっている。ルイスは、床から身をおこした。怪我はない。ティーラも見たところなんともないようだ。彼女は壁のところに立ち、船尾へ向かって、すみれ色の輝きの中をすかし見ていた。

「装置の半分が、だめになっているようだ」と、〈話し手〉がいった。

「じゃ、半分なくなったのね」と、ティーラ。「翼がなくなってるんだもの」

「なんだと?」

「翼がなくなったの」

そのとおりだった。同時に、その両翼についていたスラスター駆動盤、核融合装置、通信機器ポッド、着陸装置なども消えていた。船殻は、まるできれいに磨かれたようだ。ゼネラル・プロダクツ製の船殻に保護されているもの以外は、いっさい拭い去られたように姿を消していた。

「射たれたのだ」と〈話し手〉。「そしていまも射たれている。たぶんX線レーザーだ。本船はいま戦闘状態にある。よって、いまからおれが指揮をとる」

ネサスの抗議はなかった。彼はまだ、丸くなったままだ。ルイスが、そばに膝をついて、両手でそのからだをさぐった。

「異星人を診たことなんて一度もないんだぜ。怪我をしていても、わかりゃしない」

「やつはおびえただけだ。自分のからだのかげにかくれようとしているのだ。おまえとティーラで、ベルトをかけてやれ」

その命令に唯々として従いながら、ルイスはべつにそれを意外にも思っていなかった。自分のからだがいうことをきかぬほどふるえている。一瞬前に堂々たる宇宙船だったものが、いまや太陽に向かって落下する一本のガラス針と化してしまったのだ。

ふたりがかりでパペッティア人をもちあげ、その席におとしこむと、緩衝ネットをしっかりとかけた。

「彼らは平和な種族ではない」とクジン人。「X線レーザーは、まぎれもなく戦争のための兵器だ。この絶対に破壊されぬ船殻がなければ、われわれは死んでいたところだぞ」

ルイスが、「スレイヴァー式停滞(ステイシス)フィールドが作動したんだろうな。どれだけの時間、ぼくらがその中にいたかはわからないが」

「二、三秒よ」ティーラが口をだした。「あのすみれ色の光は、船の翼が蒸発した霧が、蛍光を発してるんだと思う」

「レーザーに励起されてか？　なるほど。だんだんうすれていくようだな」たしかにその光は、前よりかなり弱くなっていた。

「自動装置が、かくも守勢一本であったのは残念だ。パペッティア人は、攻撃用の武器の配置のことなど、何も考えていなかったのだ！」と〈話し手(スピーカー)〉。「せっかくの核融合モーターすらも、翼につけてあったとは。しかも敵はまだ射ってくる！　だが、クジン人を攻撃するとどんなめにあうか、思い知らせてやるぞ」

「おい、おりていって、やっつけるつもりかい？」

「そうだ」〈話し手(スピーカー)〉には、皮肉など通用しない。

「どうやっておりるんだ？」ルイスは一喝した。「何も残ってないことが、わからないのか？　ハイパードライヴと、生活システム。ここにあるのはそれだけじゃないか！　姿勢制御ジェットも残っていない。これで戦争をやらかそうなんて、誇大妄想もいいところだよ！」

「と、敵は考えておる。彼らは、何も知らず――」

「敵ってなんだ？」

「――わがクジン族に戦いを挑む――」

「自動装置だよ、この間抜け！　敵だったら、こっちが射程距離にはいったときに、射ってきたはずだろうが！」

「まったく予想外の戦略で、おれもふしぎに思っていたのだが」

「自動装置だったら！　隕石破壊用のX線レーザーなんだ。環にぶつかる可能性のあるものは、なんでも射ち落とすようにプログラムされてるんだ。船の自由落下軌道が、環に向かったとたんに、ピカッ！　レーザーさ」

「それこそ……いや、なるほど」クジン人は、制御盤の役立たずになった部分の、スイッチを切りはじめた。「しかし、敵がいないというのは気にくわんな」

「そうだろうとも。相手がはっきりしているほうが、ずっとましだよな」

「船のコースが、環をはずれていると、もっとましなのだがな」クジン人は、もう制御盤の半分をかたづけていた。ひきつづきスイッチを切っていきながら、「船は高速度で動いている。このまま、この星系からぬけだし、その不連続点を出はずれれば、ハイパードライヴで、パペッティア人の〈船団〉まで帰投できよう。が、まず環に当たらぬことが先決だ」

CamScannerでスキャン

ルイスも、そこまでは考え及んでいなかった。「落ちついたもんだな。もっとあわてふためいて当然なのに」苦い気分でつぶやく。
「少なくとも、太陽には突っこまずにすむだろう。太陽をよけるコースにはいらぬかぎり、自動装置は射ってこなかったはずだ」
「レーザーは、まだ射ってきてるみたい」ティーラが報告した。「ぎらぎらする光の向こうに星が見えるんだけど、ぎらぎらはいっこうになくならないの。ということは、船がまだ、環（リング）の表面に向かってるってことね？」
「レーザーが自動式なら、そういうことだね」
「環（リング）にぶつかったら、あたしたち死ぬの？」
「ネサスにきいてみたまえ。ライヤー号をつくったのは、彼の種族なんだ。なんとか、からだをほどいて出てくるように、やってごらん」
クジン人が、うんざりしたように鼻をならした。すでに制御盤の大部分は光を失い、いくつかのランプが、心細げに、船のまだ生きている部分を示しているばかりである。
細い緩衝ネットにくるみこまれて丸くなっているパペッティア人の上に、ティーラ・ブラウンはかがみこんだ。ルイスの予想とはうらはらに、彼女はこのレーザー攻撃がはじまってから現在まで、パニックの徴候すら見せていない。いま彼女は、パペッティア人の首のつけ根に両手をすべりこませ、前にルイスがやるのを見たとおり、静かになでさすっていた。
「ほんとに臆病なおばかさんね」おびえあがっているパペッティア人をとがめるような口調だ。
「さあ、おつむを出しなさいったら。出てきて、見てごらん。そりゃあ、すっごい眺めよ！」

十二時間後、ネサスは、世にもみごとな緊張性硬直症に陥ったきり、いまだに恢復していなかった。

「出てこさせようとすればするほど、きつくちぢこまっちゃうんだもの！」ティーラは半泣きになっている。ふたりとも、夕食のため個室にひっこんだが、ティーラは何ものどをとおらない様子だ。「やりかたがまずかったのね、ルイス。自分でもわかったわ」

「やたらに興奮をあおりたてようとしたからさ。ネサスは、好奇心でとびだしてくるタイプじゃないんだ」とルイス。「まあいい。べつに彼にもぼくらにも、害にはならないし、必要なときがくれば、出てくるよ。自分を守るためだけにもね。当分はあのまま、自分の腹の下へ逃げこませておこうや」

ティーラは、おぼつかない足どりで、ぎごちなく歩きまわりはじめた。いまだに地球の重力と船内重力とのちがいに、充分なじみきっていないようだ。彼女は、何かいいだそうとして思いとどまり、また思いなおした様子で、唐突に口をひらいた。「あなたも、こわいの？」

「ああ」

「そうだと思った」彼女はうなずき、また歩きだす。思いついたようにたずねた。「なぜ〈話し手〉はこわがらないの？」

なぜなら、あの攻撃からあと、クジン人は行動をつづけているからだ。武器になるものをリストアップしたり、船のコースを概算してみたり、そしてときたま必要があると、簡単な指示を出してふたりに何かやらせたりしている。

「[illegible]も、これなんじゃないかと思うよ。パペッティア人の世界をはじめて見たとき、どんなだったかおぼえてるかい？」彼は、おびえあがっていながら、ネサスにはそれをさとられまいと必死だった」

彼女は、はげしく首をふった。「どうしてだかわからない。わからないの！ どうしてみんな、これがわかってるのに、あたしだけこわくないの？」

ルイスのお腹で、愛情と憐れみがふたつに裂け、古い心の痛みがもどってきた。ほとんど忘れていたせいで、あたかもはじめてのように感じられる痛みだ。ぼくはよそものなんだ、みんな知ってるのに、ぼくだけが知らない！

「ネサスも、半分だけは正しかったようだな」彼は説明しようとつとめた。「きみは怪我をしたことがない、そうだろう？ そのくらい運がよかったんだ。ぼくらは、怪我をすることを恐れるが、きみにはその気持がわからない。一度も怪我をしたことがないからだ」

「みんなの嘘よ。たしかに、足の骨を折ったり、そんなことはなかったけど――それは超能力なんかとはちがうわ！」

「そう、幸運は超能力じゃない。幸運は統計的なもので、その数学的なまぐれのひとつがきみなんだな。ノウンスペースには四百三十億以上の人間がいるんだから、その中に、きみみたいのがいなかったら、おかしいくらいのものさ。きみを見つけだすために、ネサスが何をやったか、知ってるかい？

まず彼は、出産権抽籤で当たって生まれてきている家系の子孫を選びだした。彼のことばで数千人ということだったが、その中にめざす相手が見つからなかったら、おそらく先祖にひとりは

上抽籤で生まれたものがいるもっと大ぜいのグループからスタートしたことは、まちがいないだろう。そうなるとおそらく数千万人をチェックしていくことになるだろうが……」
「めざす相手って？」
「きみさ。彼はその数千人の中から、不運の徴候のあるものを消去していったんだ。この男は十三歳のとき指の骨を折ったことがある。この女性は性格上の悩みをかかえている。あいつはにきびもちだ。この男は喧嘩をしては負けてばかりいる。こっちのは、喧嘩には勝ったが訴訟で負けた。こいつは模型ロケットを飛ばしたとき親指の爪をふっとばした。この女はいつもルーレットですってばかりいる……わかるかい？　きみは、いつも勝つ側なんだ。トーストをおとしても、バターのついた面が下向きになったことはないって口さ」
ティーラは深刻な表情になった。「つまりは、確率の問題ってわけね。でもルイス、あたしだって、ルーレットでいつも勝つわけじゃないわ」
「しかし、手ひどい負けかたはしない」
「そう――そうね」
「それがネサスの目標だったのさ」
「あたしが、一種の奇形だっていうのね」
「カホなことを！　ぼくは、そうじゃないっていってるのさ。ネサスは、候補者の中から、不運の徴候をもったものを消していったすえ、きみに到達した。何か基本的な原理を発見したつもりだったんだろう。実のところ、その発見は、分布曲線のいっぽうの端にすぎなかったんだ。
確率の法則からいって、きみみたいのがいるのは当然だ。が、同じ確率の法則からいって、き

みがこのつぎコインを投げて負ける可能性は、ぼくと同じはずだ——半々さ。幸運の女神は、まったく記憶というものを持っていないんだから」

ティーラは椅子の上にくずれるように腰をおろした。「あたしの役はすばらしい幸運のおまもりだったのね。かわいそうなネサス。あたし、彼を裏切ったわけね」

「あいつにゃ当然の報いさ」

彼女のくちびるの端が、きゅっとひきつった。「どうだか、ためしてみる」

「なんだって?」

「トーストをダイアルして、それを投げてみたいの」

シャドウ・スクェアの色は、黒よりさらに黒く、高校理科の黒体実験で使われる完全黒体そのものだった。青い紐のようなリングワールドを、そのひとつの角がかっきりと切り欠いている。それをたよりに目と頭を使うと、あとの部分の、宇宙の闇の中で星のまったく見えない細長い四角のかたちが、識別できる。それはすでに、空の中でかなりの面積を占め、さらに大きさを増しつつあった。

ルイスは、垂直にさしこむ光が強くなりすぎると遮蔽する物質でできた、半球形のゴーグルをかけていた。船殻の偏光性ではもう不充分なのだ。〈話し手〉は操縦席でまだ制御できる範囲のものを制御しつづけていたが、その彼も同じようなゴーグルをつけていた。ふたつべつべつに細いバンドのついたのをみつけて、ネサスにもむりやりかけさせた。

ルイスのゴーグルをとおして見ると、千二百万マイルかなたの太陽は、黒い大きな円盤のまわ

りを、ぼんやりした炎の輪がとりまいているように見えた。船内のものはどれも、熱くてさわれないほどだ。空調装置（エア・プラント）がうなりをあげ、その烈風のような轟音とともに空気を吹きつけてくる。

ティーラが個室のドアをあけて、あわててまたひっこんだ。つぎに出てきたときは、彼女もゴーグルをつけていた。休憩室（ラウンジ）のテーブルに向かい、ルイスと並んで腰をおろす。

シャドウ・スクェアは、まさしくふくれあがる虚無だった。チョークで星の点をいっぱい打った黒板を、濡れ雑巾でそこだけ拭きとったみたいだ。

空調装置（エア・プラント）の怒号のせいで、話し声も聞こえない。

こんなに太陽が燃えさかる間近で、どうやってあの装置は熱を汲み捨てているのだろうか？　不可能だ、とルイスは思う。あれはただ、ひたすら熱を吸収して蓄えているだけなのだ。装置の中のどこかは、もう恒星のような温度に達し、しかも一秒ごとにその温度は高まっているはずだ。

もうひとつ、気になることがある。

あの、どんどん大きく見えてくる、黒い長方形のことだ。

あまりにも大きいため、ひどくゆっくりと近づいてくるようにしか見えない。シャドウ・スクェア一枚の大きさは、幅が太陽ほど、百万マイル近くあり、長さははるかに長い。二百五十万マイルくらいだろう。ふいにそれが、おそろしく巨大なものとなった。一端がさっと太陽をかくすと、あたりに闇が落ちた。

シャドウ・スクェアは、宇宙の半分を蔽っていた。その端はすでに無限のかなたにあり、闇の中の闇で、とうてい見さだめることもできない。

船尾の個室が並んでいるうしろのほうで、何かが白光を放っている。この機を逃がさず、空調

装置（プラント）が、熱を捨てているのだ。ルイスは肩をすくめ、あらためてシャドウ・スクェアに目を向けた。

　空気のうなりがぴたりとやんだ。じいんと耳鳴りがあとに残る。

「あはあ」とティーラが、ぎごちない声をだした。

〈話し手（スピーカー）〉が操縦室から姿を現した。「望遠スクリーンの使えないのが残念だ。あれがあれば、さまざまな疑問も解けたはずだ」

「どんな？」ルイスは、半分どなるようにききかえした。

「なぜシャドウ・スクェアは、どれも軌道速度より速く動いているのか？　本当に環（リング）へ動力を供給しているのだろうか？　どういう仕掛けで、ちゃんと太陽に片面を向けているのか？　あの草食いめの出した疑問は、望遠スクリーンさえあれば、ぜんぶ解けたはずなのだ」

「船が太陽にぶつかる心配は？」

「むろん、ない。ルイス、そのことはもういったはずだぞ。この半時間ほどはシャドウ・スクェアのうしろだ。そのあと約一時間で、つぎのシャドウ・スクェアと太陽のあいだにはいる。もし船内が暑くなりすぎたら、いつなりと停滞（スタシス）フィールドを発動すればよい」

　じいんという沈黙が、あたりをつつんだ。シャドウ・スクェアを見つめても、そこは何もない闇が、果てしなくつづくばかりだ。人間の目は、純粋な黒から情報をひきだすようにはできていない。

　やがて太陽が、ひょっこりと現れた。ふたたび船内は、空調装置（エア・プラント）の轟音でみたされた。

ルイスは船外に目をこらし、ついに行く手のシャドウ・スクェアを見つけだした。それが近づ

いてくるのを眺めていたとき、またもや稲妻がきらめいた。

まさに稲妻だった。予告もなく、いきなりやってきたのだ。紫がかった強烈な白光とともに、船がびりびりと震動――

――断絶――

――震動して、光は消えた。ルイスは、ゴーグルの下にひとさし指をさしこんで、くらんだ目をこすった。

「あれ、なんだったの？」ティーラが叫んだ。

ルイスの視力が、ゆっくりともどってきた。みるとネサスが、ゴーグルをかけた頭をひとつだけのぞかせている。〈話し手〉(スピーカー)はロッカーのひとつをかきまわしている。ティーラが、こっちを見つめている。いや、彼のうしろにある何かを見つめているのだ。彼はふりかえった。

太陽はやはり黒い円盤だったが、それは前よりも小さく、まわりを黄色っぽい光の輪がとりまいていた。停滞(ステイシス)フィールドにはいっていた一瞬のあいだに、ぐっと小さくちぢんでしまったのだ。その〃一瞬〃は、おそらく数時間にわたったのだろう。空調装置(エア・プラント)の音も、もう小うるさい虫の羽音くらいになっている。

船のすぐ外で、何かが燃えていた。

それは、ゆるやかにうねっている糸だった。すみれ色の光につつまれた、きわめて細い黒い糸だ。見たところ、どこにも切れ目はない。いっぽうの端は、太陽をかくしているあの黒い板に向

CamScannerでスキャン

かって消え、反対の端は、ライヤー号の船首の方向へどこまでものびて、そのままかすんで見えなくなっている。

その糸が、まるで傷を負ったみみずのように、大きくのたうっているのだ。

「何かにぶつかったようですね」ネサスの静かな声。まるで今まで丸まっていたのが、うそのような口調だ。「〈話し手（スピーカー）〉、船外へ見にいくのです。宇宙服をつけてください」

「まだ戦闘状態なのだぞ」クジン人が答えた。「命令は、おれが出す」

「結構。で、どうするつもりです？」

クジン人は何もいわない。そのはずで、彼はもうほとんど、球形をつらねたような宇宙服を着おわり、重い背嚢（バックパック）を背にするところだった。明らかに彼は、船外へ検分に出ようとしていたのである。

彼はフライサイクルの一台にのって外へ出ていった。これは亜鈴形をした、スラスター動力の乗り物で、中央のくびれたところに肘つき椅子形の座席がある。

それがのたうつ黒糸ぞいに進んでいくのを、みんなじっと見まもっていた。糸は今、目に見えて冷えつつあるようだ。ゴーグルをとおしているせいで黒く見える糸のまわりの光輝が、徐々にすみれ色に近い白さからただの白光へ、ついで黄色がかった白へと変わってくる。みんなの目の前で、〈話し手（スピーカー）〉の黒っぽい姿がフライサイクルをはなれ、のたうつ灼熱の糸に近づいた。

その息の音が、はっきりと聞きとれる。一度、驚きのうなり声が聞こえた。が、宇宙服のマイクでは、彼はついにひとこともしゃべらなかった。半時間もそこへ出ているあいだに、糸の光は

CamScannerでスキャン

視せていき、ほとんど見えないくらいになった。

やがて彼は、ライヤー号へ引きかえしてきた。休憩室(ラウンジ)へはいってくる彼を、全員の期待にみちた視線が迎えた。

「糸くらいの細さだ」クジン人がいう。「だが見ろ。このペンチが、半分になってしまったぞ」

だめになったペンチをとりだしてみせる。それはすっぱりと平面で切り落とされ、切り口は磨きあげた鏡面のように光っていた。

「近づいて、どのくらい細いかたしかめようと、何げなしにこのペンチをひっかけた。とたんに糸が、この鋼鉄をすぱりと切ってしまった。まったく手ごたえもなしにだ」

ルイスが、「自在剣(ヴァリアブル・ソード)でも、そのくらいのことはできるぜ」

「しかし、自在剣(ヴァリアブル・ソード)は、スレイヴァー式停滞(ステイシス)フィールドで金属線をつつんだものだ。曲げることはできん。あの——糸は、見てのとおり、のたうっている」

「じゃ、何かべつのものだな」自在剣(ヴァリアブル・ソード)と同じように切れる何かなのだ。軽く、細く、強く、人間の技術水準をはるかにこえている。ふつうの物質ならプラズマ化してしまう温度下でも固体状をたもつ何か。「決定的に新しい何かだ。しかし、そんなものが、どうしてここに?」

「考えてみろ。われわれの船は、ふたつのシャドウ・スクェアのあいだを通りぬけるとき、何かえたいの知れぬものに進路を阻まれたのだ。それにひきつづき、この、恒星の内部ほどの熱をもった、見たところ無限に長い糸が現れた。明らかに船は、この糸にぶつかったのだ。この糸は、恒星の熱を、いままで蓄えていた。そこでおれは、これがシャドウ・スクェアのあいだに張りわ

たされていたものと推測する」
「たぶんな。でも、なぜ?」
「単なる推論だ。が、考えてみろ。リングワールドを建設した連中は、昼夜の別を設けるために、シャドウ・スクェアを用意したのだ。その目的をみたすためには、それが太陽の光を吸収しなければならん。もし縁が太陽に向いたりしたら、まずいことになる。
そこでやつらは、あのふしぎな糸で、シャドウ・スクェアのあいだをつなぎあわせたのだ。それがつながったまま、軌道速度よりも速くまわって、糸に張力を与える。そこで糸はぴんと張り、板は環と平行にたもたれることになる」
思うだに奇怪なイメージであった。二十枚のシャドウ・スクェアが、メイポール・ダンスよろしく、長さ五百万マイルもの糸で端と端をつながれてまわっているとは……。「あの糸がほしいもんだな」ルイスがいった。「あいつがあれば、用途にはこと欠かないだろう」
「あれを船内にいれる方法がない。適当な長さに切ることもできないのだ」
パペッティア人が割りこんだ。「あの衝突で、船のコースが変わったかもしれません。リングワールドにぶつからずにすむかどうか、たしかめられませんか?」
誰もまだ、そのことには気づいていなかった。
「ぶつからずにすむにしても、衝突で、かなり運動量は変わったでしょう。悪くすると、永遠に楕円軌道をえがいてまわりつづけるのではないでしょうか」パペッティア人は悲しげだった。
「ティーラ、あなたの幸運にも見放されたようです」
彼女は肩をすくめた。「あたし、自分が幸運のおまもりだなんていったおぼえないわ」

「わたしにそういったのは、〈至後者(ハインドモースト)〉でした。彼がいまここにいたら、あの威張りくさったフィアンセを、どなりつけてやりたいものです」

その日の夕食は、いわば最後の晩餐だった。全員が休憩室(ラウンジ)に顔をそろえて、かたちばかりの食事をとった。テーブルについたティーラ・ブラウンは、いたいたしいばかりに美しかった。身につけている、ふわりと流れるような黒と朱色の衣裳は、重さ一オンスもなさそうだ。

彼女の肩ごしに、ゆっくりと大きくなってくるリングワールドが見えた。ときどきティーラもふりかえって、それを眺めた。みんなが同じようにした。だが、ルイスから見て、異星人たちの胸中は想像するしかないにしても、ティーラは単にその眺めに夢中になっているとしか思えなかった。もう船がリングワールドからはずれっこないことは、彼と同様、彼女にもわかっているはずだった。

その夜、愛の営みで、彼の粗暴さは彼女を驚かせ、ついで喜ばせた。「あなたって、こわいと、こんなになるのね！　覚えとかなくちゃ」

彼は、ほほえみかえす気にもなれなかった。「ぼくは、これが最後かもしれないってことしか頭にないんだ」誰ともこれっきりなんだ、と、彼は心の中でつけくわえた。

「あら、ルイス。これ、ゼネラル・プロダクツの船殻なのよ！」

「もし、停滞(ステイシス)フィールドがうまく作動しなかったら？　船体は無事でも、中のものはめちゃめちゃにつぶれちまう」

した。彼はぎゅっと彼女のからだを引きよせ、自分の顔を見られまいとした……。

彼女がぐっすり寝入って、就寝プレートのあいだに甘い夢のようにただよいはじめたとき、ルイスは彼女から離れた。消耗し、充足しきって、彼は熱いバスにつかった。冷えたバーボンの壜をダイアルして出すと、浴槽の縁にそうっとのせた。

最後にもう一度ためしてみる楽しみの種は、いろいろとありそうだった。

空色に白い筋模様、それに並んで、細部のわからぬ濃紺色。リングワールドは、いまや視野いっぱいにひろがっていた。はじめにこまかい構造を見せはじめたのは、雲の模様だった。嵐のかたち、平行に流れるもの、羊毛状のもの、いずれもおそろしく小さい。それがだんだん大きくなる。ついで、海岸線が見分けられるようになった……リングワールドは、およそ半分が海だった……。

ネサスは自分の緩衝席にはいって、ネットをかけ、例の丸まった防御の姿勢をとっている。〈話し手〉とティーラとルイス・ウーも、ネットをかけて、外を眺めている。「見ておくほうがいいぜ」ルイスが、パペッティア人に声をかけた。「地形を覚えておくと、あとで役に立つかもしれない」

ネサスはそれに従った。ひらべったい蛇のような頭がひとつだけ出てきて、近づいてくる地上の景観に見いる。

大きな海、稲妻形に曲がった河、紐のように連なっている山々。

生命の徴候は、何もない。文明のしるしを見てとるには、一千マイル以下まで近づかなければ

なるまい。すでにリングワールドは、ぐんぐんと横に動きはじめ、こまかい点をはっきり見さだめるひまもないくらいだ。こうなってみると、詳細はもうどうでもいい。何もかもが、足もとからひっさらわれていってしまう。船は、どこか見知らぬ地域へ、落下することだろう。

船の固有速度概算、秒速およそ二百マイル。リングワールドが邪魔さえしなければ、安全に系外へ脱出するには充分すぎるほどの速さである。

地表が近づくと同時に横に流れる。毎秒七百七十マイルで流れ過ぎていくのだ。斜めから、火龍(サラマンダー)のようにうねうねしたかたちの海が接近してくる。真下に。そして見えなくなる。ふいにその景観全体が、ぐわっとすみれ色の光につつまれた！

——断絶——

# 10 環（リング）の床面（フロア）で

一瞬の、すみれ色に近い白熱の閃光。百マイルの大気層が、ライヤー号の船首に切りさかれ、瞬時に恒星のような高温プラズマの円錐を形成したのだ。ルイスは、目がくらんだ。

目がくらみ、そして、船は地表に到着していた。

ティーラの未練がましい声が聞こえた。「カホナ！　すっかり見のがしちゃった！」

パペッティア人が答える。「大事件の一部始終を見とどけるのは、いつでも危険ですし、多くは苦痛ですし、ときには命にかかわります。あなたのたよりない幸運はさておき、停滞（ステイシス）フィールドには感謝しなければなりません」

そのやりとりも、ルイスの耳にははいらなかった。ひどい目まいだ。水平方向を見さだめようと、目をさまよわせる……。

おそろしい墜落が、とつぜん地上での静止へ変わっただけでも、目をまわすには充分だというのに、船の姿勢が、それに輪をかけていた。ライヤー号は、あと三十五度でちょうど上下転倒という恰好になっていたのだ。船内重力がまだ正常に働いているせいで、地表の景観が、帽子をかたむけたように、頭上にかかって見えるのである。

空の色は地球の温帯における正午の空そのままだ。が、地上の景色は奇妙だった。まったいら

な半透明の床がひろがったさきに、赤褐色の土手が立ちはだかっている。ちゃんと見さだめるには、誰かが外へ出てみなければならない。

ルイスは、緩衝ネットをはずすと、立ちあがった。

どうしてもからだのバランスがとれない。視覚と、内耳からくる下方の感覚が、一致しないためだ。だんだんそれにも慣れてくると、つとめて気分を楽にし、急がぬよう気をつけた。危急は一応去ったのである。

ふりかえると、ティーラが、エアロックの中にはいっていた。宇宙服もつけていない。内側のドアが閉まりかけている。

ルイスは怒鳴った。「ティーラ！　やめろ、ばか、そこから出てくるんだ！」

おそすぎた。ぴったり閉じたドアをとおして、彼の声が聞こえるはずはない。ルイスは、ロッカーにとびついた。

ライヤー号の翼についていた空気検査機は、その他の船外の検出装置もろとも、先刻蒸発してしまっている。自分で宇宙服を着て外に出、その胸についた検査機を使って、リングワールドの大気が安全に呼吸できるかどうか、しらべてみなければならない。

それも、彼が外へ出る前に、ティーラが破裂して死んでしまわないとしてだ。

外側のドアが開きはじめている。

自動的に、エアロック内の船内重力は消えた。ティーラのからだは、頭からさきに、開いたドアから墜落し、あわてて入口の柱をひっつかんだおかげで、その手が離れたときには、ちょうど

[illegible]

ルイスは自分の宇宙服にもぐりこみ、胸のジッパーを引きあげ、ヘルメットをかぶると止め金具を閉じた。外では、頭上の地面に、べつだん呼吸のとまる様子もない。ティーラが立ちあがり、落ちて打ったところをさすっている。なんともありがたいことに、ルイスはエアロックにはいった。服の洩れをチェックしても意味はない。外の空気が呼吸可能かどうか、装置が知らせてくれるあいだ、保てばいいのだ。

船の傾きのことを思いだして柱をつかむと同時に、外のドアが開きはじめていた。船内重力が消失すると、ルイスのからだは、ぶらんと向きを変え、一瞬両手でぶらさがったのち、落下した。足が地面にふれた瞬間、みごとにつるりとすべって、彼ははげしくしりもちをついた。船の下の、たいらで半透明な灰色の物質は、おそろしくすべりやすかった。一度立ちあがろうとしてあきらめ、すわりこんだまま、彼は胸のダイアルをあらためた。

ヘルメットの中で、〈話し手(スピーカー)〉の、耳をさすような声がひびいた。「ルイス」

「ああ」

「空気は、呼吸できるか？」

「ああ。だが少し薄いようだ。海面上一マイルといったところかな。地球の標準でだ」

「われわれも、出ていこうか？」

「ああ。ただし、エアロックにロープを持ちこんで、何かに結びつけてくれ。そうしないと、船へもどれなくなる。降り立つときには注意しろ。この表面は、まるで摩擦がないみたいだ」

ティーラには、すべりやすい表面も、なんともないようだ。おっかなびっくりの姿勢で、両手をひろげてバランスをとりながら、ルイスがもたつくのをやめてヘルメットをはずすのを眺めて

いる。

脱ぐと同時に、「きみには、いっておくことがある」たたきつけるような口調で、彼はしゃべりだした。

二光年離れた位置からの分光分析が、いかにたよりないものかということ。微量の毒物、金属化合物、それに、本来なら呼吸可能なはずの大気を汚染し、しかも実際のサンプルにあたらぬかぎり検出不能な特殊な塵や、有機的廃棄物や、触媒などがあること。まさしく犯罪的な不用心さと不埒きわまる無思慮のこと。みずからモルモットの役を買って出るのがいかに愚劣かということ。それをぜんぶ、異星人たちがエアロックから出てくる前に、彼はいってのけた。

〈話し手（スピーカー）〉が両手をたぐりながらおりてくると、地面を踏みしめ、猫のように用心ぶかく、ダンサーのようにバランスをとりながら、二、三歩足をふみだした。ネサスは、ふたつの口で、がっちり交互にロープをくわえながらおりてきた。三脚をひろげたような恰好で着地する。

ティーラがふくれていることは、彼らにもわかったかもしれないが、どちらもそういうそぶりはみせなかった。一同は、ライヤー号の傾いた船殻の下に立つと、あらためて周囲を見まわした。

そこは、浅いが雄大な峡谷の中だった。谷の底面は、半透明の灰色で、完璧に平坦かつなめらかなこと、まるで巨大なガラスのテーブルの面のようだ。船から各方向へ約百ヤードのところで、黒い熔岩のゆるやかなスロープが、この底面を仕切っている。ルイスが見つめる前で、その熔岩は、波うち流れているように見えた。ライヤー号の着地の衝撃を考えると、それはまだ熱いのにちがいない。

浅い熔岩の壁は、左右から船の後方へのび、はるかずっとかなたまで、完全な直線をなして、その果ては一点に消失していた。

ルイスは、立ちあがろうとつとめた。四人のうち彼だけ、どうしてもバランスがとれないでいる。足の上にからだをあずけると、あぶなっかしい恰好でやっと立ちあがりはしたものの、それっきり一歩も動けなかった。

〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉が、携帯レーザーを抜くと、下へ向けて引き金をしぼった。足もとの一点が緑色に光りだす……みんなだまってそれを見つめた。物質が破壊され、蒸発して当然なのに、なんの音も聞こえず、また蒸気や煙らしいものも見えない。〈話し手(スピーカー)〉がボタンをオフにすると、光点は瞬時に消えた。その場所には、光のあともない。とにかく、地表にはなんの痕跡も残されていないのだ。

〈話し手(スピーカー)〉は、判決をくだすようにいいだした。「現在われわれがいるのは、船の不時着でえぐられた谷の中だ。究極的には、環(リング)を構成している物質が、船の墜落をうけとめてくれた。ネサス、この物質について、何かわかることがあるか?」

「まったく新しい何かです」パペッティア人が答える。「少しも熱を持たないようですが、ゼネラル・プロダクツ製の船殻の変種でもなく、スレイヴァー式の停滞(ステイシス)フィールドでもありません」

「あの壁をのぼるには、防護服か何かが必要だな」とルイス。「環(リング)を構成する物質には、とくに興味もない。とにかく、いまのところは。「みんな、ここにいてくれ。ぼくがのぼってみる」

要するに、断熱式の宇宙服を身につけているのは、彼ひとりだったのである。

「あたしがいっしょにいってあげる」とティーラ。すいとなんの苦もなく歩みより、彼の腕を自

分の肩にかけた。彼はよろめいて、彼女に体重をあずけてしまったが、それでも倒れることもなく、ふたりは黒い熔岩のスロープの下へたどりついた。

近くで見ると、熔岩の傾斜はかなり急だが、足がかりにはこと欠かない。「どうも」といいおいて彼はのぼりだした。ふと見ると、ティーラがついてのぼってくる。彼はわざとだまっていた。彼女が、跳ぶ前に見ることを早くおぼえてくれれば、それだけ長生きできるだろうと思ったからである。

斜面にそって十ヤードかそこらのぼったとき、ティーラは叫び声をあげて躍りだした。足を高くあげながら、向きを変えてスロープをかけおりる。底面に着くと同時に、スケートをはいたようにすべりだした。すーっとすべっていきながら、彼女は向きを変えて、両手を腰におくと、困惑と傷みと怒りのこもった目でこっちをにらんだ。

もっとひどいことになったかもしれないんだ、とルイスはひとりごちた。その場でころんで、両手のひらにやけどする可能性もあった——が、それでも彼のやったことは正しかったはずだ。苦い罪の意識をおし殺して、彼はのぼりつづけた。

熔岩の土手の高さは、およそ四十フィートで、頂上は白い砂が蔽っていた。

船は、砂漠に墜落したのだった。手近のどこにも、緑の植物や青い水のようなものは見あたらない。一応幸いだったといえよう。ライヤー号は、都市をこんなふうにほじくりかえす可能性もあったのだから。

それとも、いくつもの都市を串ざしにしたかもしれない！　おそろしい溝を掘ってしまったもんだ……。

その溝は、白い砂の上に、何マイルもつづいていた。それがとぎれた場所から、またはるか遠く離れたところで、別のがはじまっている。船はバウンドしたのだ。それも一度だけではなく、何回もだ。ライヤー号着陸のあとは、さきへさきへとつづいて、しまいには細い点線となり、かすかな跡となり……それを目で追っていったルイスは、自分がまさしく無限のかなたを見とおしていることに気づいた。

リングワールドには、地平線といえるものがない。地表がカーヴして空とのあいだを区切る線のようなものが、まるでないのだ。むしろ、地面と空とがいっしょに、大陸ほどの大きさのものも点にしか見えないような彼方へとけこみ、そこでは地上のあらゆる色がまじりあって、徐々に空の青へとつながっているかに見える。その消失点に、彼は目を吸いよせられた。が、ついに彼は、ようやくの思いで一度まばたきして、そこから視線をもぎはなすことができた。

何十年も前、ここから何光世紀も彼方のマウント・ルッキットザットで見た虚無の霧のように……ひとり乗りの艇で小惑星帯の探鉱者が見る、歪みのない宇宙の深淵のように……リングワールドの地平は、見るものが危険を感じるより早く、まずその目と心を、ぎゅっととらえてしまう存在なのだった。

ルイスは、溝の底面に向かって叫んだ。「この世界は、平坦なんだ！」

一同が彼を見あげる。

「着陸するとき、おそろしい傷をつけちまった。このあたりに、生きものらしいものの姿がみえないのは、幸いだったよ。はじめにぶつかった場所では、大地がまっぷたつになってるだろう。この溝にそってもどっていけば、二次的な隕石や、それでできた小さなクレーターがいっぱい見

つかるだろうな」
　くるりと向きを変えると、「反対の方角には……」そこで絶句した。
「どうした、ルイス？」
「これまで見たこともない、カホなでっかい山だ」とつぶやく。
「ルイス！」
　彼の声が、あまりに静かで聞きとれなかったのだろう。
「山だよ！」と彼は叫んだ。「あとで見てみろ！　リングワールドをつくった連中は、でっかい山がひとつ要ると思ったんだろうな。大きすぎて、使いみちがない。コーヒーを植えるにも、いや、どんな樹を育てるにも高すぎるし、スキーをやるにも大きすぎる。豪勢な山だ！」
　たしかに豪勢としかいいようがない。だいたい円錐形で、どこにも山脈をつらねる気配はなく、孤高を誇っている。外見は火山のようだが、リングワールドの底には火山を形成するマグマなどないのだから、むろんにせ火山である。裾野は霧の中に沈んでいた。山頂のほうは、空気のうすくなった高みへつき出ているとおぼしく、くっきりと輪郭を見せ、そこには雪が光っていた。それもかなり汚れているらしく、新雪のような輝きはない。どうやら永久凍土のようだ。
　頂上の縁は、結晶の稜のようにみごとな直線だった。もしかすると、大気層の上までつきだしているのではなかろうか？　ほんものの山だったら、これだけ大きいと、自分の目方で崩壊してしまうかもしれない。しかし、この山は、環（リング）の構成物質でできた、中空の殻にすぎないのだ。
「リングワールドの建設者が、好きになれそうだぜ」と、ルイスはつぶやいた。仕様のきまった人工の世界に、こういう山が存在しなければならぬ論理的な理由など何もない。それでも、どこ

の世界にも、登攀不能の山というものが、すくなくともひとつはあってもいいだろう。

船殻の下に一同は身をよせていた。彼にあびせられる質問は、煮つめたところ、「何か文明の痕跡はなかったか？」というものであった。

「なかったね」

彼は、見たものをあたうかぎり説明させられた。方角のよびかたは、すでにきめてあった。イヤー号の着陸で掘られた溝ののびていく方向が、僕の"回転方向"だ。それと反対の"反回転方向"だ。あの山があるが回転方向に向かってまっすぐだが、この世界の"右舷"と"左舷"に当たる。

「右舷か左舷、どちらかの方に、僕の大陸が見えてはいなかったか？」

「いや、そうはずだろう。あるいは、まだ遠いのだ」

「不運だったね」と彼。

「見えないはずはないんだ。前年ヤーが上陸地点から見えたはずだから」

「見えないこともあるでしょう。不運なのですよ」

それならそれで、「陸地の頂上」とは、何か見えなかったのですか？」

「ああ、お望みならば、何か白いものが見えたが、雲かもしれないが、ただ僕にはどちらともいえない雪のようなものかもしれない」

「雪壁か……」

「雪か」

「空に飛行機雲は？　高速道路のような直線は？」
「何も」
「文明の徴候は、何も見えなかったのですね？」
「見えたら話してるさ。どうやら、リングワールド十兆の住民は、先月あたり、ぜんぶほんもののダイスン球(スフィア)に引っ越していったらしいぜ」
「ルイス、わたしたちは、文明を見つけなければならないのです」
「ぼくにだってわかってる」
わかりすぎるほどだった。なんとしてでもリングワールドからぬけださなければならないのだが、ライヤー号をこの四人でひっぱっていくことは不可能だ。まったくの未開人は、たとえどれだけ大ぜいいいて、またどんなに友好的だったとしても、なんの足しにもならないだろう。
「ひとつだけ、いいこともある」ルイス・ウーがいった。「船を修繕する必要はないんだ。こいつを、環(リング)の外へほうり出すことさえできれば、環(リング)の自転のいきおいだけで、船は主星の重力圏からぬけだせる。そこまでいけば、あとはハイパードライヴが使えるわけだ」
「それにも、まず援助してくれる相手を見つけなければなりません」
「あるいは、見つけた相手に援助をさせるかだ」〈話し手(スピーカー)〉がいった。
「でも、どうしてみんな、ただつっ立って話ばかりしてるの？」ティーラが爆発した。ずっと三人のあいだで、結論が出るのを黙って待っていたのだ。「まず、ここから出なきゃ。そうでしょう？　どうしてフライサイクルを、船から出さないの？　まず行動するのよ！　話はそれからでいいわ！」

「船を離れることは、気がすすみません」パペッティア人がいった。

「気がすすみませんですって！　助けがやってくると思ってるの？　誰かが、ちょっとでも、あたしたちに興味を持つと思うの？　いろんな波長で呼びかけたとき、誰かが答えてくれた？　ルイスが、ここは砂漠のまっただなかだって、いったじゃないの。いつまでここにじっとしてる気なの？」

ネサスが勇気を出すには、たいへんな努力を要することなど、彼女はまったく気づいていない。それに、ルイスの見るところ、忍耐力もゼロのようだ。

「もちろん、ここを離れなければなりません」パペッティア人は答えた。「ただ、気がすすまないということをいっただけです。しかし、まず、行先をきめなければなりません。そうでないと、持っていくものとおいていくものとがきめられません」

「いちばん近い縁(リム)の壁へいくのよ！」

「そのとおりだ」とルイス。「もし文明があるとしたら、それは縁(リム)の近くだろう。だが、そのどこかはわからない。空からそれが見えるとよかったんだがな」

「見えませんでしたね」とパペッティア人。

「カホナ！　あんたは見てやしなかったじゃないか。見ようとすれば、いくらでも見られたというのに！　さえぎるものもなく、何千マイルもね！　いや、ちょっと待てよ」

「リングワールドの幅は、百万標準マイル近くあるのですよ」

「そのことに、いま、気づいたのさ」と、ルイス・ウー。「スケールの問題だ。おかげで、いつも混乱しちまう。これだけ大きいと、どうしてもイメージが湧かないんだ！」

CamScannerでスキャン

「そのうち湧くでしょう」パペッティア人が保証した。

「さあね。たぶん、ぼくの頭じゃ、容量が小さすぎるだろう。いつも、宇宙から見たときの、環(リング)の細さを思いだしちまうんだよ。まるで青いリボンみたいだった。青いリボンだ」ルイスは、くりかえし、そして思わず身ぶるいした。

両端の側壁の高さが一千マイルあるとすると、それが見えなくなるためには、そこからどれだけ離れなければならないだろうか？

こまかい塵や水蒸気を含んだ、ある程度地球的な大気をとおして、ルイス・ウーの目が、一千マイルの距離を見とおせるものとしよう。ここでもし、大気層が、四十マイル上空で、事実上の真空に席をゆずっているとしたら……。

その場合、縁(リム)の外壁のいちばん近いところから、ここは少なくとも二万五千マイル以上離れているということになる。

地球上でまっすぐにそれだけ飛んだとしたら、もとの出発点へもどってしまう距離だ。しかし、外壁は、それよりずっと遠いのかもしれない。

「フライサイクルで、ライヤー号の船体を引っぱっていくことはできんな」〈話し手(スピーカー)〉がいっている。「もし途中で襲われたら、どうせ切り捨てなければならん。はっきりした目じるしが近くにあるこの場所に残していくほうが得策だ」

「誰が船を引っぱっていくなどといいました？」

「優れた戦士は、あらゆる場合を想定してみるものだ。もし縁(リム)の近くで助けが得られなかったら、

[illegible]

「援助は見つかります」とネサス。
「そうだと思う」とルイス。「宇宙港は、縁(リム)にあった。もしリングワールド全体が石器時代まで逆行した上で、ふたたび文明が復活してきたとしても、それは宇宙からラムシップがもどってきた場所からひろがりはじめるだろう。そうなるはずだ」
「荒っぽい推理だな」と〈話し手(スピーカー)〉。
「まあね」
「しかし、おまえのいうとおりだ。それに加えて、もしこの世界が大がかりな技術のすべてを失っていたとしても、その宇宙港で機械装置が見つかることも考えられる。まだ動く機械、修理できる機械がな」
しかし、どちらの縁(リム)のほうが、ここから近いのだろうか？
「ティーラのいうとおりだ」ルイスが、唐突にいった。「仕事にかかろう。夜になったら、もっと遠くが見えるかもしれない」
数時間の重労働がつづいた。機械類を持ちだして分類し、重いものは船のエアロックから、ワイヤで釣りおろした。急に重力の変わるのが問題だったが、装備の中で、とくにやわなものはひとつもなかった。
その途中、ちょうどふたりの異星人が外へ出ているとき、ルイスは船内でティーラをつかまえた。「まるでずっと、お気に入りの蘭状生物に刺されたみたいな顔をしてるじゃないか。何か文句があるのかい？」
彼女は、彼の視線をさけながら首をふった。つんととがらした彼女のくちびるが、またすばら

しい。彼女は、泣き顔がけっして醜く見えない、あの稀な幸運に恵まれた美女のひとりであった。
「じゃ、ぼくからいおう。きみが宇宙服を着ずにエアロックを出たとき、よく叱っておいたはずだ。それなのに、十五分もしないうちに、きみは船内用のスリッパひとつで、かたまったばかりの熔岩をのぼろうとした」
「あたしが足にやけどすればいいと思ってたのね！」
「そのとおり。そんなにびっくりした顔をするなよ。ぼくらには、きみが必要なんだ。きみを死なせたくない。だから、用心することをおぼえてほしいんだ。これまで学ぶチャンスのなかったことを、いま学ばなければいけない。ぼくの話なんかよりも、足の傷みのほうが、長いあいだ、心にきざみこんでおけるはずだ」
「あたしが必要ですって？　お笑いだわ。ネサスが、あたしを連れてきたわけは、あなたも知ってるでしょう。あたしは、ちっとも効かない幸運のおまもりなのよ」
「そんなんじゃない。幸運のおまもりとしてのきみは、もうお払い箱さ。さあ、笑ってみせないか。みんな、きみが必要なんだ。きみがいると、ぼくは幸福で、おかげでネサスを強姦せずにいられる。きみがいれば、ぼくらみんな日なたぼっこしているあいだに、重労働をぜんぶやってもらえる。きみがいれば、有用な指示を与えてくれる」
　彼女は、笑ってみせようとした。それが、ふいにくずれて、彼女はわっと泣きだしていた。彼女の肩に顔を埋め、指の爪を彼の背にくいこませながら、彼女は絶えいりそうに泣きじゃくった。
　厳密にいえば、女の子がルイス・ウーに抱きついて泣いたのは、これがはじめてではない。し

彼女をささえ、その背に指をあてて、なかば無意識のうちにマッサージしてやりながら、その激情がおさまるのを待った。

　彼の宇宙服に顔を押しつけながら、彼女がいいだした。「岩が熱いなんてこと、どうしてあたしが知ってるはずがあるのよ！」

「ぺてん師（フィネイグル）の第一法則を覚えておくんだ。宇宙の悪意は、最大値をとろうとする。宇宙はつねに敵対的である」

「でも、熱かったわ！」

「あの岩がきみを攻撃したのさ。襲いかかってきたんだよ。いいかい、きみは、なんでも疑ってかかることをおぼえなくちゃならない。ネサスみたいな考えかたをしなくちゃならない」

「できやしないわ。彼の考えかたなんて、わからない。ぜんぜん理解できない」涙でぐしょぐしょの顔をあげて、「あなたのことだって、理解できないわ」

「ううむ」彼は拇指を、彼女の肩甲骨の上に押しつけ、背骨にそって下へはしらせた。やがて、「いいかい。もしぼくが、全宇宙はぼくの敵だといったら、きみはばかばかしいと思うかい？」

　彼女は怒った顔で、強くうなずいた。

「宇宙は実際に、ぼくの敵なんだよ」とルイスはつづけた。「宇宙はぼくを憎んでいる。宇宙は、二百歳の老人のためになど、何もしてくれないんだ。

　種族をかたちづくるものは、いったいなんだろう？　進化だね？　進化によって〈話し手（スピーカー）〉は、夜でも見える目と優れた平衡感覚を手にいれた。進化によってネサスは、危険に対しとっさに背を向ける反射運動を身につけている。進化によって、人間の性は、五十歳から六十歳で失われる。

そこで進化は、手をひいてしまう。

なぜなら進化は、年老いてそれ以上繁殖できない生命体には、もう用がないからだ。わかるね？」

「ええ。あなたはお爺ちゃんで、もう子供をつくれないからなのね」あざけるような口調だ。

「そのとおり。数世紀前、生物工学者たちは、ブタクサの遺伝子を分析して、細胞賦活剤（ブースタースパイス）をつくりだした。その直接の結果、ぼくはいま二百歳でまだ健康そのものだ。しかしそれは、宇宙がぼくを愛してくれたからじゃない。

宇宙はぼくを憎んでいるんだ。何度となく、ぼくを殺そうとした。その傷あとを、見せてやれたらと思うよ。いまでも、宇宙はぼくを殺そうと狙っている」

「あなたがお爺ちゃんで、もう子供がつくれないからなのね」

「ヒステリーはよせ！　きみは、自分の面倒の見かたも知らないんだぞ！　ぼくらはいま、宇宙の未知の領域にいる。ここを律する法則もわからなければ、どんなものに出くわすかもわかっていない。このつぎ熱い熔岩の上を歩こうとすれば、こんどは足のやけどくらいじゃすまないだろう。用心するんだ。そんなこともわからないのか？」

「わからない」とティーラ。「わからないったら！」

少したって、彼女が顔を洗ってから、ふたりは四台めのフライサイクルを、エアロックへ持ちこんだ。もう半時間も、異星人たちは船内へははいってきていない。ふたりの人間が、まさしく人間的な問題の解決に当たっているとみて、避けていたのだろうか？　たぶんそうだろう。充分ありうることだ。

黒い熔岩でできたふたつの高い壁にはさまれて、磨きあげたテーブルの面のように平坦な環(リング)の構造物質が、無限に長い紐のようにまっすぐのびている。それを背景に、巨大なガラスの真空管が、横倒しになっている。その透明な円筒形の曲面の下に、ひと山の機械類と、ちょっとばかり途方にくれたかたちの四つの奇妙な姿がある。

「水はどうするんだ？」ルイスがたずねた。「湖らしいものは見えなかったぜ。自分の飲む水を運んでかなきゃならないのか？」

「いいえ」ネサスは、自分のフライサイクルの後端の一部をひらいて、水タンクと、空気中の水分を抽出する冷却－凝縮機を見せた。

フライサイクルは、まさに小型軽量化設計(コンパクト・デザイン)の奇蹟であった。それぞれの体形に合わせてつくられた座席(サドル)をべつにすると、いずれもそっくり同じにできている。直径四フィートほどの球形がふたつつながれ、中央のくびれたところに座席がのっている。後方の球体の半分はトランクで、さらに余分の機械類を積んで紐をかけられるような装具もついていた。今は、四本の脚が出て、ひらたい足が地面をふまえているが、飛びあがっているあいだはふたつの球の中にひっこむ仕掛けである。

パペッティア人のフライサイクルの座席は、うつ伏せに乗るリクライニング・シートで、三本の脚をいれるように三つの穴があいている。その上におさまったまま、ふたつの口で操縦するわけだ。

ルイスとティーラ用のサイクルの座席は、パッドのはいった、からだの線に合った椅子形で、それにヘッドレストや姿勢調節機構もついている。ネサスや〈話し手(スピーカー)〉のと同様、その座席はサ

イクルの亜鈴形にくびれた部分にあり、下方はふたつに分かれて、ぴったりした足のせがあった。〈話し手（スピーカー）〉の座席は、人間のよりはるかに大きく広く、ヘッドレストはない。両サイドには、道具入れがついていた。それとも、武器をいれるためだろうか？

「武器として使えるようなものを、何か持っていかなければならん」〈話し手（スピーカー）〉が、散らばっている機器類のあいだを、そわそわと歩きまわりながらいう。

「武器は持ってきていません」ネサスが答えた。「わたしたちが平和を求めていることを示すためです。武器は、まったく持ってきていません」

「それなら、これはなんだ？」〈話し手（スピーカー）〉は、早くもいくつかの軽量器具を、自分のまわりにあつめていた。

「ぜんぶ、ただの道具です」ネサスは、指し示しながら、「これらは可変ビームの携帯レーザー灯です。この輪をまわすと、ビームをいくらでも細くできるので、夜でもこれを使えば、はるか遠くを見ることができます。実際このビームは完全に平行にまでなり、また強度もかなりあげられるので、近くのものや人間に焼け穴をつくらないよう注意しなければなりません。

この決闘用ピストルは、わたしたちのあいだの争いの決着をつけるためのものです。十秒間、相手に気を失わせる力があります。しかしこの安全装置に手を触れないようにしないと――」

「触れると、一時間のあいだ相手を倒しておける。たしかジンクス星の製品だったと思うがね？」

「はい、ルイス。それからこれは、改良型の掘削機械です。スレイヴァーの停滞（ステイシス）ボックスから発

スレイヴァーの物質分解機のことだなと、ルイスは気づいた。その装置は、たしかに穴掘り用に使える。その収束ビームが触れると、そこの物質の中にある電子の電荷が、一時的にゼロになるのだ。どんな硬い物質も、突如として強度を失うと同時に、想像を絶するほどのプラス電荷を帯びることになり、原子一個ずつばらばらの塵雲と化して飛散してしまうのである。

「武器としては役に立たんぞ」とクジン人がうなった。「おれも知っている。敵に対して使うには、効果がおそすぎるのだ」

「そのとおり。無害なおもちゃです。しかし、これは——」パペッティア人がつまみあげている装置は、二連装のショットガンのようにみえる。ただその銃床が、パペッティア人向きに、水銀が、ある型から流れだした途中でそのまま固まったような恰好になっていた。

「これは、スレイヴァー式の物質分解機と同じものですが、ただし、片方のビームは、陽子の陽電荷を無効にします。両方のビームを同時に出さないよう注意しなければなりません。ふたつのビームは、平行に、分かれて出ますから」

「わかった」とクジン人。「そのふたつのビームが、一度に当たると、そこに電流が流れることになるな」

「そのとおりです」

「こういう間に合わせの道具ですむと、本気で思っているのか？　われわれは、どんなものに出くわすか、まったくわかっていないのだぞ」

「というわけでもあるまい」とルイス・ウー。「結局、ここは自然の惑星じゃないんだ。リングワールド人の好みに合わない動物は、故郷の惑星においてきているだろう。ここには、虎とか、

蚊といったものは、いないと思うね」

「もし、リングワールド人が、虎を好きだったら？」ティーラが疑問をぶつけてきた。

一見冗談めいてきこえるが、これは的を射た疑問であった。リングワールド人の心理を、どうして知ることができよう？　わかっているのは、彼らが、だいたいG2型に近い恒星のまわりをめぐる水の多い惑星からやってきたということだけなのだ。その点からして、彼らは人間、パペッティア人、クジン人、グロッグ、海豚(いるか)、鯱(しゃち)、抹香鯨(まっこうくじら)などのどれに似ていてもおかしくない。が、実際にはそのどれにも似ていない可能性が大きいだろう。

「おそろしいのは、動物などよりむしろリングワールド人そのものだろうな」〈話し手(スピーカー)〉が予想する。「できるかぎり、武器を持っていかなければならん。この探険では、いよいよ環(リング)を離れるときまで、おれが全体の指揮をとることを提案するぞ」

「わたしにはタスプがありますよ」

「忘れてはおらんぞ、ネサス。だからそれを、絶対的な拒否権(ヴェトー)としておくがいい。だが、みだりに使おうとするなよ。さあ、みんな考えてみろ！」クジン人は、ぬうっとのびあがって、あたりを睥睨した。牙と爪を持った五百ポンドもありそうなオレンジ色の毛皮の巨体だ。「四人とも、知性はあるはずだ。現状をよく考えてみるがよい！　われわれは攻撃をうけた。船はなかば破壊された。これから未知の世界を、どれだけ遠くまで旅しなければならぬともわかっておらん。リングワールド人の力はおそるべきものであった。その力を、彼らはまだ維持しているか、それとも今では、骨をけずった槍以上に複雑なものを作れぬまでに退化しているだろうか？　だが、物質変換技術や、超能ビームなどを、まだ保有している可能性も同じくらいある。この

「――」ふと、まわりのすべりやすい地肌や、黒い熔岩の壁を見まわす。心なしか身ぶるいしたようだ。「――このおそるべき構造物をこしらえたさいの装置類をな」
「わたしにはタスプがあります」とネサス。「探険の指揮は、わたしがとります」
「そんなことでいい気になっているのか？　これは侮辱ではないし、あえて挑戦するつもりもないが、指揮官にはおれを据えるべきだ。四人のうちで、戦いの訓練をうけているのは、おれだけなのだ」
「待ってよ」ティーラが口をはさんだ。「敵なんて、いないかもしれないじゃない」
「同意」とルイス。クジン人の命令で動くのは、どうも気がすすまなかった。
「よろしい。だが、みんな、武器は持っていかなければならんぞ」
一同は、フライサイクルへ、荷物の積みこみにとりかかった。

武器のほかにも、いろいろな装具があった。野営用の装備、食料の試験と再生用のセット、栄養調整のための食品添加物、超軽量の空気濾過器（エア・フィルター）など……。
ディスク形の通話機もあった。人間やクジン人は手首に、パペッティア人は頸のひとつにつけるようになっている。かなり大きく、つけていると、気になるほどだ。
「なぜこんなものを？」とルイスはたずねた。フライサイクルにも交信システムのついていることは、パペッティア人からもうきかされていた。
「これは元来、ライヤー号の自動操縦機構（オートパイロット）に合図して、必要なとき呼びよせるためのものでした」

「じゃ、なぜいまこれが要るんだい?」

「通訳に利用するのですよ、ルイス。知性のある種族に出会う可能性は大きいのです。船内の自動操縦機構(オートパイロット)を、翻訳機として用いるのです」

「ああ、そうか」

積みこみが終わった。船体の下に、まだ多くの機器は残っていたが、それらはいまのところ無用の長物だ。空間での無重力に対処する器具、宇宙服、リングワールドの防備レーザーで雲散霧消してしまった機構の取替部品などである。空気濾過器(エア・フィルター)まで持っていくことにしたのは、必要を感じたからというより、むしろそれが、ハンカチに毛のはえたくらいの重さしかなかったからであった。

ルイスはもう、骨の髄まで疲れきっていた。フライサイクルの座席にまたがり、周囲を見まわして、もう忘れたものはないだろうかと気をくばる。そのとき、上をふり仰いだティーラが、愕然としたように身をふるわせるのが、ルイスの消耗しきった目にもはっきりとうつった。

「カホナ! まだ真昼だなんて!」

「あわてるなよ。あれは――」

「ルイス! 荷物を積みはじめてから、もう六時間はたってるはずよ。まちがいないわ! どうしてまだ、お昼のまんまなの?」

「あわてるなって。ここじゃ、陽は沈まないんだ。忘れたのかい?」

「沈まない?」彼女のヒステリーは、はじまったのと同じくらい唐突に消えうせた。「ああ、そ

「こいつに、これから慣れなきゃいけない。もう一度見てごらん。あの、太陽の縁に見えてるのは、シャドウ・スクェアの一辺じゃないかな？」

何かが、たしかに、太陽の円盤像の一端を、直線で切りとったように侵蝕していた。見ているうちに、太陽が欠けていく。

「出発したほうがよさそうだな」と〈話し手(スピーカー)〉がいった。「暗くならないうちに、高みへのぼっておくべきだ」

## 11　天空の懸け橋（アーチ）

四台のフライサイクルが、方陣を組んで、徐々に弱まる陽光の中を上昇しはじめた。環（リング）の構成物質のあらわになった灰色の地面が、すうっと下方に沈んでいく。

追従機構（スレイヴ・サーキット）の使いかたは、ネサスから前もって説明をうけていた。いま、四台のフライサイクルは、いずれもルイスの操縦を正確になぞって動くようプログラムされている。ルイスが、四台ぜんぶを動かしているわけだ。マッサージ椅子からマッサージ機構だけをとりはずしたような、からだにぴったりの座席におさまって、彼はふたつのペダルと一本の操縦桿でサイクルをあやつっている。

正面のダッシュボードの上に、まるでまぼろしか何かのように、四つの小さな頭が透明な映像となって浮かびあがっていた。ひとつは愛らしい黒髪の魔女（シレーヌ）、ひとつはおそろしげな虎もどきだがその両眼はれっきとした知性をたたえている。三つめは、ひとつ目玉の大蛇（パイソン）の首が一対だ。交信機の視覚システムは完璧であり、その結果がこの、まるで精神錯乱による幻視のような映像となって現れているのだった。

フライサイクルが、黒い熔岩壁の上へ出たときの、三人の表情を、ルイスは見つめていた。

ティーラが、最初に反応した。視線を中景に走らせ、ついと目をあげると、[illegible]

るべきところが、どこまでも無限にひろがっているのだ。目が大きくまん丸く見ひらかれ、サィーラの顔は、まるで雲間から太陽が顔を出したように、ぱっと輝いた。「まあ、ルイス！」

「なんという大きな山だ！」と、〈話し手〉。

イサスは何もいわなかった。ふたつの頭を、神経質そうに、ひょこひょこと動かしながら、周囲を見まわしている。

意外に早く、あたりが暗くなってきた。黒い影のへりが、巨大な山をさっと横切る。一瞬のうちに、山はもう見えなかった。太陽はすでに、暗黒をとおして輝く、月のようなうす白い黄金色の円盤にすぎない。そして、闇の落ちていく天空に、何かがかたちをなしはじめていた。

巨大なアーチだ！

その全体像が、みるみるうちに、はっきりしてくる。大地と空が暗くなっていくにつれ、リングワールドの夜界をいろどるその眺めは、くっきりと大空に姿を現した。

このリングワールドそれ自体が、ところどころ白い雲のたなびく空色の帯となって、黒っぽい夜の部分で規則的に区切られたその姿を、上空に浮かべているのだ。下端に近いところでは、その幅はぐっと広い。それが上へいくにつれ、急速に細くなり、天頂の近くでは、ただの青白く輝く紡線としか見えない。そしてむろん、真上では、昼間だと見えないシャドウ・スクェアが、そのつながりを断ち切っていた。

フライサイクルは、ぐんぐん上昇をつづけるが、乗っているものにはなんの音も聞こえなかった。音波シールドが効果的に働いているためだ。風を切る音すら、ルイスの耳にはとどいてこない。そこへとつぜん、金切り声のオーケストラがひびきわたったので、彼は思わずとびあがった。

右側、すなわち右舷（スターボード）の方向にも、同じような外壁らしいものが、虚像のように浮かびだしていた。同じ高さ、同じような外見、やはりじっと見つめようとすると消えてしまいそうな、かすかな線だ。

どうやら、ライヤー号は、環（リング）の中央線の近くに墜落したらしい。どっちの外壁も、同じくらいの距離に見える……ということは、これからおよそ五十万マイル近くの旅をしなければならないということだ。

ルイスは、えへんと咳ばらいした。「〈話し手（スピーカー）〉、あんたはどう判断するね？」

「左舷（ポート）の壁のほうが、いくらか高いな」

「よろしい」ルイスは左へ舵をとった。他のサイクルも、追従機構（スレイヴ・サーキット）の作用で、それにならう。

ルイスは、交信機のスイッチを入れて、ネサスの様子を見た。パペッティア人は、三本の脚で、座席をしっかりとかかえこんだまま、ふたつの首をからだの下にたくしこんでしまっている。まったくの盲目飛行だ。

ティーラがいった。「〈話し手（スピーカー）〉、それはたしかなの？」

「もちろんだ」とクジン人。「左の壁のほうが、たしかに大きく見える」

ルイスは心の中でにやりとした。戦闘教育はうけていないものの、戦いのなんたるかは彼も知らないではない。ウンダーランドの革命のあいだ、その地に釘づけにされ、船にたどりつくまでおよそ三カ月にわたって、ゲリラ活動をやったことがあるのだ。

彼は思いだしたのだった。りっぱな指揮官の資質は、一にかかってすばやく判断をくだす能力にある。その判断が、たまたま正しければ、それにこしたことはない……。

暗い地表の上を、一行は飛びつづけた。環の夜景は、地球の満月の夜よりも、はるかに明るい。が、月の光というのは、空中から地形を照らしだすほどのものではない。ライヤー号がリングワールドの表面をひきさいてつくった溝は、はるか後方に、銀色の糸となって遠ざかっていき、ついにはすっかり闇の中にのまれて見えなくなってしまった。

フライサイクルは、音もなく加速をつづけている。音速に近づくにつれて、空気を切りさく音が、音波シールドの内部まで伝わってきた。音速に達したところで、その音は最大となり、ついで、ふっと消えた。音波シールドが、超音速向きの形に切りかわって、ふたたび静寂が訪れた。

やがて四台のサイクルは、巡航速度に達した。ルイスは、ゆったりと座席にもたれてくつろいだ。これから一カ月以上、この座席の中で過ごすことになるかもしれないが、いずれそういう生活にも慣れるだろうと、彼は思った。

さてそこで（なにしろ操縦をまかされている身としては、眠りこむわけにもいかないので）、彼は自分の乗っているサイクルの検分にとりかかった。

休息用の設備は簡単で居心地よく、使いかたもやさしい。だがいささか信頼性に欠けるような気がする。

彼は、片手を、音波シールドに向かってのばした。シールドは一種の力場で、フライサイクルの占める空間のまわりにそって外の空気を流してやる一連のベクトル場で成り立っている。べつにガラスの壁があるような感じではない。ルイスの手にふれたそれは、強烈な風が、まわりじゅうから押しよせてくるような手ざわりだった。まさしく風の壁の中に包みこまれているわけだ。

そのシールドは、どうやらまぬけ防止式(フールプルーフ)らしい。

それをためすために、彼は化粧用のティッシュを、用具入れのスロットからひっぱりだして、下におとしてみた。ひらひらとサイクルの下まで舞いおちたティッシュは、そこで空中に浮かんだまま、はげしくびりびりとふるえている。彼がこの座席からころげおちることなどありそうにないが、万一そんなことになったとしても音波シールドがうけとめてくれ、そこからまた座席にはいのぼることができるという寸法なのだ。

パペッティア人の設計としては、たしかに理屈に合っている……。

飲料水チューブからは蒸溜水が出てきた。食料スロットから出てきたのは、赤茶けた、ごく薄手の煉瓦のようなしろものだった。六回、彼はダイアルをまわして、同じような煉瓦をとりだし、ひと口かじってみては、材料取入れ孔へほうりこんだ。どの煉瓦もちがった味で、それぞれにおいしかった。

少なくとも、食事に飽きがくることはなさそうだ。とにかく当分のあいだは。

しかし、どこかで植物なり水なりを見つけて、材料孔へいれてやらなければ、いずれは食料スロットも、煉瓦の供給が底をついてしまうだろう。

またダイアルして、七つめの煉瓦をとりだし、こんどはすっかり食べた。

救助の手がどれほど遠いかを考えると、気が滅入ってくる。地球ははるか二百光年の彼方にあり、パペッティア人の〈船団〉までは一光年だが、それは光速に近いスピードで遠ざかりつつある。なかば爆発したライヤー号の残骸にしても、この飛行がはじまった直後にはもう見えなくな

ないのではあるまいか？

そんなわかりきったことがあるはずはない、と、ルイスは気づいた。後方から反回転方向(アンチスピンワード)よりには、あの見たこともないほど巨大な山がそびえている。いくらリングワールドでも、あれほどの山は、そうあるものではないだろう。ライヤー号を見つけるには、あの山の近くから、回転方向(スピンワード)へ、数千マイルばかりつづいている直線状の溝をさがせばいいわけである。

――それにしても、頭上に輝くリングワールドの〈アーチ〉は、地球の約三百万倍の面積を持っている。完全に迷子になるには、充分ことたりる大きさだ。

ネサスがようやくもぞもぞと動きだした。はじめに片方の、ついでもうひとつの頭が、胴体の下から現われる。首をのばしてスイッチに触れると、話しかけてきた。

「ルイス、ふたりだけで話したいのですが？」

〈話し手(スピーカー)〉とフィーラの透明な映像は、どうやら眠っているらしい。ルイスは、そのふたりに通じる受信機をオフにした。「なんだい？」

「どういうことになっているのですか？」

「聞いてなかったのか？」

「わたしの耳は、頭についています。耳はふさがれていたのです」

「いま、気分はどうだい？」

「たぶんまた硬直を起こすでしょう。がっくりした気分です」

「ぼくもさ。とにかく、この三時間で、二千三百マイルほど飛んだ。転移ボックスはもとより、ステッピング・ディスクだって、これよりは早いだろうな」

「残念ながら、ステッピング・ディスクを、ここに用意することはできませんでしたね」パペッティア人のふたつの頭が、向かいあい、たがいに目を見つめあった。そうしていたのは、ほんの一瞬だった。が、ルイスはその恰好を、前にも幾度か見たことがあった。

そして、ふいに、それが、パペッティア人の笑いなのだと、彼は悟った。パペッティア人は気がふれると、ユーモアの感覚が備わるのだろうか？

彼は、ことばをつづけた。「われわれは、左舷(ポート)に向かっている。〈話し手(スピーカー)〉が、左舷(ポート)の壁のほうが近いと判断したからだ。これはコインを投げてきめても同じことさ。しかし、〈話し手(スピーカー)〉は、いま指揮官だ。あんたが硬直を起こしてるあいだに、とってかわったんだよ」

「残念なことですね。〈話し手(スピーカー)〉のフライサイクルの距離までは、タスプがとどきません。これはひとつ——」

「ちょっと待った。どうして彼に指揮をまかせちゃいけないんだ？」

「ですが、しかし——」

「考えてみろよ」ルイスは語気を強めた。「あんたは、いつでも、タスプで拒否権(ヴェトー)を発動できるんだぜ。彼に指揮をまかせなくったって、あんたが首をひっこめるたびに、どうせあいつはしゃしゃり出てくるんだ。しょっちゅう指揮権がうつるんじゃ、こっちがたまらない」

「べつに、実害はないでしょうね」パペッティア人は一歩ゆずった。「わたしが指揮をとったところで、たいしたちがいはないでしょう」

「その意気だ。〈話し手(スピーカー)〉をよびだして、彼を〈[illegible]〉に任命するっていってやれよ」

ルイスは〈話し手(スピーカー)〉との[illegible]

けでもないが、もしそうだったら、彼は失望したことだろう。クジン人とパペッティア人のあいだには、ふたこと三こと、しゅっと吐きだすような〈ますらおことば〉の応酬があっただけで、クジン人のほうは、すぐに交信機のスイッチを切ってしまった。

「申しわけのないことをしました」と、ネサスがいいだした。「わたしたちの遭難は、すべてわたしの責任です」

「くよくよするなよ。あんたは、鬱期(デプレッシヴ)のサイクルにはいっているだけさ」

「わたしも知性種族の一員ですから、事実を直視することくらいはできます。ティーラ・ブラウンを選んだのは、たいへんなまちがいでした」

「そりゃそうさ。しかし、あんたの罪ってわけじゃない」

「ところがわたしの罪なのです、ルイス・ウー。どういうわけで、ティーラ・ブラウン以外の候補がつかまらなかったのか、もっと早く気づくべきでした」

「なんだって？」

「彼らは、幸運すぎたのです」

ルイスは、しゅうと歯のあいだで口笛をならした。どうやらパペッティア人は、極めつきの新理論を発見したつもりらしい。

「特別に幸運なために、そもそもこういう危険な探険には、まきこまれずにすんだのです。出産権抽籤が幸運の能力の遺伝子を生みだしていたことはまちがいありませんが、わたしはそれをとらえることができなかったのです。多くの家系に連絡を試みましたが、結局、つかまったのはティーラ・ブラウンただひとりでした」

「おい、しかし――」

「他のものにコンタクトできなかったのは、彼らが幸運すぎたからです。ティーラ・ブラウンが、この呪われた探険に参加できたのは、彼女が幸運の遺伝子を受けついでいなかったためでした。ルイス、申しわけありません」

「まあ、ひと眠りしろよ」

「ティーラにあやまらなければ」

「いや。そいつはぼくの責任だ。ぼくが、なんとしてでもとめるべきだった」

「あなたが?」

「とめられたかどうかはわからない。正直なところ、何もわからないんだ。寝ろよ」

「眠れませんよ」

「じゃ、あんたが操縦してくれ。ぼくが、寝かしてもらおう」

そういうことになった。が、寝入る前に、彼はフライサイクルのじつに安定した飛行ぶりに驚かされた。ネサスの操縦の腕は、すばらしいものであった。

曙光がさすと同時に、ルイスは目ざめた。

重力の作用下で眠ることには慣れていなかったし、まして、すわったままの姿勢で一夜を明かしたことなど、これまで一度もなかった。大きなあくびをして背すじをのばすと、眠っていた筋肉がぎしぎしと鳴った。うめき声をあげ、

太陽に目をさらしてしまった。馬鹿な、と自分を叱りつけながら、あふれだした涙のとまるのを待った。反射神経のほうが、脳の判断よりも早かったわけだ。

左のほうには闇がひろがり、遠ざかるほど濃くなっている。見えない地平は、まだ夜の闇の中にあり、その上の藍色の空では、リングワールドの大〈アーチ〉が、徐々にかすんでいくところだった。

右側、つまり回転方向（スピンワード）は、真昼だ。

リングワールドの、いささか風変わりな、朝の眺めであった。

砂漠が終わりかけていた。うねうねとつづくその境界線は、鋭くくっきりとした曲線を描いて、左右にずっとのびている。サイクルの後方は、見わたすかぎり黄白色に光る荒野だ。その果てには、あの大きな山が、依然として空の一部を大きく占めている。反対の前方には、緑や茶の植物地帯の向こうに、河や湖がかすかに眺められた。

サイクルは、まだもとのまま、大きく開いた菱形の編隊を維持している。これだけ離れていると、肉眼ではどれも似たような銀色の羽虫のようにしかみえない。ルイスの機が先頭だ。記憶によると、〈話し手（スピーカー）〉の機が回転方向（スピンワード）つまり右側で、ネサスが左、そしてティーラが真うしろのはずだった。

あの大きな山から回転方向（スピンワード）のほうへ向かって、何かホバークラフトが砂漠の上を飛んだあとのような砂けむりがつづいている。むろんはるかに大規模だ。この距離だと、一条の線としか見えないが、おそろしく大きなものだろう……。

「目がさめましたか、ルイス？」

「おはよう、ネサス。ずっとあんたが操縦していたのかい？」

「その仕事なら、数時間前、〈話し手〉に押しつけました。もう七千マイルちょっと飛んだはずです」

「ああ」だがそれは、ただの数字にすぎない。これから旅しなければならぬ距離にくらべれば、まことに微々たるものだ。生まれてからずっと、転移ボックスのネットワークにたよっていたせいで、ルイスの距離感覚はすっかりそこなわれていた。

「うしろを見てくれ。あの埃の線が見えるね？　いったい、あれはなんだろう？」

「もちろん、わたしたちが隕石のように墜落したとき、蒸発して四散した岩が、空中で凝縮したものです。あれだけの量だと、まだ地上に落ちつけないでいるのでしょう」

「ふうむ。砂嵐か何かかと思ったよ……まったく、かかな距離をすべったもんだ！」その砂塵のあとは、船からの距離からすると、少なくとも長さ二千マイルに及ぶだろう。

天と地は、まるで無限の広さをもった二枚の平面が合わさったようだ。人間など、その二枚の板のあいだをうごめきまわる微生物にすぎない……。

「大気の圧力が増加したようです」

ルイスは、はるかの消失点から視線をはなした。「どういう意味だ？」

「気圧ゲージを見てみなさい。着陸した場所は、少なくともここより標高二マイルは上だったはずです」

ルイスは、例の食品製造機をダイアルして、朝食をとった。「ふーん、気圧なんかおかしくなったん

「こういう真空の環境では、あらゆるものに目をくばっていなければなりません。どんな些細なことが、致命的なものになるかわからないのです。例えば、あのうしろの、大きな目標にした山ですが、どうも最初に考えていたよりは、ずっと大きいらしい。ところで、前方に光っている銀色の点は、いったいなんでしょうかね？」

「どれ？」

「だいたい、ふたつならんだ稜線があるあたりの位置です。ちょうど正面です」

あたかも、砂の地平を、真横から見て、点を見つけようとするようなものだった。とにかくそれは見ていると、ときおりきらきらと鏡のようにきらめく大きめの一点だ。

「太陽の反射らしいな。なんだろう？　ガラスの街かな？」

「ちょっと無理なようです」

ルイスは笑いだした。「ずいぶん弱気だね。でも、大きさはガラスの町に匹敵するだろう。それとも、何キロもある鏡かもしれない。巨大な反射望遠鏡かもしれん」

「それが、たぶん残骸になっているのでしょう」

「どうしてだ？」

「その証明は、どう見ても不断の状態にもどっています。そうでなければ、どうしてあんな大きな面積が、映像にもどんなすきまにもなっていたのでしょうか？」

さっきまでは、ルイスもそう思っていたが、いまは……。「ちょっと話を単純化しすぎてるんじゃないかな。リングワールドの大きさは、われわれの想像を絶したものだ。たとえば、太陽も照明も、その時間のあらゆるものも、同時にいれる余地があるだろう」

「文明はひろがるものですよ、ルイス」
「ああ」
ともあれ、あの光る点の正体を見さだめなければならない。それはちょうど、一行の進路にあるのだった。

ダイアルをさがしてみたが、コーヒーの出てくる取出し孔（スピゴット）はなかった。

ルイスが、朝食の煉瓦の最後のひとかけを飲みくだしたとき、ダッシュボードにふたつの緑の点が光った。何ごとかといぶかったが、すぐに昨夜、〈話し手（スピーカー）〉とティーラの交信機を切っておいたことを思いだした。ふたたびスイッチをいれる。
「おはよう」と〈話し手（スピーカー）〉。「夜の明けるところを見たか、ルイス？　じつに芸術的感興にみちた眺めだったな」
「見たよ。おはよう、ティーラ」
ティーラは答えない。
その顔に、ルイスは目をよせた。ティーラは、まるで、涅槃（ニルヴァーナ）の境地に達したかのような、忘我の境をさまよっていた。
「ネサス、まさか、彼女にタスプを使ったんじゃないだろうな？」
「いいえ、ルイス。どうしてそんなことをするわけがありますか？」
「いつから、彼女はあんなふうだった？」

「あんな、とはどういうことだ？」〈話し手〉がききかえす。「ここずっと、彼女は連絡してこなかったな。そのことをいうならだが」

「カホナ！　あの顔を見ろ！」

　ダッシュボードに浮かぶティーラの映像は、ルイスの頭をとおして、無限の彼方を見つめていた。ひどくもの静かで、完璧な愉悦にひたっているような表情だ。

「くつろいでいるではないか」とクジン人。「わるいところもなさそうだ。人間の表情としては、最高の——」

「もういい。着陸させてくれないか？　彼女は〈山頂平原〉催眠にやられたんだ」

「なんのことかわからんぞ」

「とにかく、降ろしてくれ」

　一マイルの高さから、機は降下にはいった。自由落下のむかつくような気分がちょっとつづいたが、〈話し手〉がすぐに推力をもどした。ダッシュボードに浮かぶティーラの反応ぶりを、ルイスはじっと見まもっていたが、どうということもない。何も気づかぬ様子で平然としている。口の両端が、かすかに上へひきつれているようだ。

　降下するにつれ、ルイスのいらだちは、ますますつのっていった。催眠状態のなんたるかは、彼もいくらか知っている。二百年間、三次元テレビを見てきた男の、断片的な知識のよせあつめにすぎないが、もう少し思いだせれば……。

　地表の緑と褐色が、平原と森と、銀色の河とに分かれていく。眼下にある世界が、ちょうどプラットランダーが植民地に適当だと考えるような青々とした原野なのが、この場合いかにも残念

に思われた。

「できたら谷間へおろしてくれ」ルイスが〈話し手〉にいう。「彼女を、地平の見えないところへ連れていきたいんだ」

「よろしい。おまえとネサスは、自動操縦を切って、自分であとからついてこい。おれは、ティーラを着地させる」

フライサイクルは方陣を解き、編隊を組みなおした。〈話し手〉は、ルイスがさきほど指さした流れに向かって、左舷回転方向に舵をとった。他の三機もそれにつづく。

降下していくうちに、流れを横断した。〈話し手〉は、そこで川筋にそって右へ曲がった。樹木の梢すれすれにかすめて、上下の動きをくりかえす。そうしながら、木立ちのない堤を物色する。

「植物は、まるで地球そっくりだ」とルイス。ふたりの異星人が、それぞれに同意のつぶやきをもらした。

流れの大きな屈曲にそって旋回する。

その流れがひろくなった中ほどに、一団の原住民の姿があった。漁網を操作していたところらしい。一列縦隊のサイクルが現れると、いっせいにふり仰いだ。そのまま、ぽかんと口をあけてこっちを見つめ、網を流れるにまかせている。

ルイス、〈話し手〉、そしてネサス、誰の反応も同じだった。一直線に上昇したのだ。原住民の姿は、たちまち豆つぶのようにちいさくなり、川の流れは曲がりくねった[illegible]となった。青々とした[illegible]

「自動操縦に切りかえろ」〈話し手〉が、まごうかたなき命令口調でいった。「べつの場所をさがす」

この命令調は、訓練で身につけたものだ――もっと厳密にいうなら、人間を相手にするための訓練でだ。使節の一員となるための教育にもいろいろあるのだろうと、ルイスは思いに沈んだ。

ティーラは、相変わらず、まったく何も気がついていない様子だ。

「で？」とルイス。

「あれは、人間でした」とネサス。

「そうさ、そのとおりだ。幻覚を見たのかと思ったよ。どうして、人間がここに？」

誰も答えようとするものはなかった。

# 12 神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド）

一行は、原野の中の、低い丘を周囲にめぐらせた窪地に着陸した。擬似地平線は丘にかくされ、天空のアーチは真昼の光にとけこんで見えず、あたりは人間の住む世界そのままの風景だ。草は厳密にいえば地球のとちがっているが、色は緑だったし、当然草で蔽われているべきところに、絨毯を敷きつめたように生えている。土があり、岩があり、こんもりした緑の葉をつけてもっともらしくふしくれだった灌木もある。

ルイスの見たところ、植物相は、気味がわるいほど地球的だった。茂みがありそうな場所には茂みがあり、地肌の現れていそうな場所には地肌が現れている。フライサイクルに装備された測定機によると、植物は分子レベルまで地球と同じだった。ルイスと〈話し手（スピーカー）〉が先祖のヴィールスの段階で血のつながった親戚同士といえるとすれば、ここの樹々は、兄弟といっていいくらいだろう。

生垣におあつらえむきの植物があった。一見ふつうの樹のようだが、地面から四十五度の角度でのび、王冠のように葉を茂らせ、そこから同じ角度で下へのびて、一群の根を生やし、また四十五度で上へ……ルイスは前に、ガミジイ星で、これと似たようなのを見たことがあった。が、この三角形の連鎖の、つややかな緑となめし革のような褐色とは、まさに地球植物の色そのもの

だ。ルイスはこれを、ひじ根植物（エルボー・ルート）と名づけることにした。

ネサスは、この小さな森の空地を歩きまわり、植物や昆虫を採集しては、サイクルの簡易実験設備でテストをくりかえしている。彼は宇宙服を着こんでいた。あの、透明な球形に、三本の脚部と、二本の手袋兼マウスピースのついたやつだ。この防壁をとおして彼に危害を加えられるものは、リングワールドにはひとつもあるまい。食肉植物も、昆虫も、花粉の粒子も、むろん菌類の胞子もヴィールス類もだ。

ティーラ・ブラウンは相変わらず自分のフライサイクルにまたがったまま、繊細というにはちょっと大きすぎる両手を、その操縦盤の上にかるくかけた姿勢で、じっとしている。両方の口の端が、かすかに上へ曲がっている。フライサイクルの加速につり合った、くつろぎながらもしゃんとした姿勢で、そのからだの線は、あたかもスタイルの研究のためにポーズをとっているかのようだ。緑色の両眼は、ルイス・ウーを、そしてその向こうの低い丘をもとおして、無限のかなた、リングワールドの架空の地平線を見つめている。

「わからんぞ」と、〈話し手〉（スピーカー）。「どこがいかんのだ？　眠っているわけでもないのに、奇妙にたよりなくみえるな」

「一種の催眠状態なのさ」とルイス。「ほうっておけば、ひとりでになおる」

「では、危険はないのだな？」

「ここなら大丈夫。ぼくはただ、彼女が、サイクルから落ちたり、操縦盤で無謀なことをやったりするのが心配だったんだ。地上におりていれば、問題ないよ」

「だが、どうしてわれわれにまったく関心を示さないのだ？」

ルイスは説明にかかった。

太陽系の小惑星帯（ベルト）では、一生の半分ものあいだ、ただよう岩くずのあいだでひとり乗りの船をあやつって過ごすものが多い。船の位置をたしかめるたよりになるのは恒星だ。小惑星帯の探鉱業者は、何時間ものあいだ、星だけを見つめていることがある。すばやく弧を描いて動く光点は、核融合駆動の船だし、ゆっくりただよっていく光は近くの小惑星、そして動かないのが恒星ないしは銀河宇宙なのである。

白い星々だけにかこまれていると、人間は、一種の離魂状態に陥ることがある。ずっとあとになってわれにかえり、それまで自分のからだがひとりでにちゃんと船をあやつっていたことを知るのだが、そのあいだ魂が遊んでいた世界については何もおぼえていないのだ。人びとはそれを〝遠目（ファー・ルック）〟とよぶ。これは危険な徴候だ。魂をとばしたきり、もとにもどらないものもいるのである。

マウント・ルッキットザットの平坦な高原の上に立つと、その虚無への縁から、無限の下方を見おろすことができる。むろん、山の実際の高さは四十マイルかそこらにすぎない。しかし、その山の、水流にえぐられた壁面をのぞきこむ人間の目には、裾野をかくす深い霧のよどんだ表面が、無限に遠くにあるように感じられるのだ。

この虚無の霧は、白く、かたちがなく、しかもまったく動かない。山ひだの裾からはるかな地平まで、完全に一様にひろがっている。その空虚さにいったん心を吸いよせられると、人間は、[illegible]

は〈山頂平原(プラトー)〉催眠(トランス)とよぶ。

リングワールドの地平にも、それと同じ作用があるのだ……。

「しかしまあ、単なる自己催眠だからね」ルイスは、ティーラの目をのぞきこんだ。彼女は、もぞもぞと身じろぎした。「たぶん、目をさまさせることもできるだろうが、わざわざそうする必要もあるまい？　このまま寝かせておこう」

「催眠というのは、わからんな」と〈話し手(スピーカー)〉。「それがどういうものかは知っているが、理解ができないのだ」

ルイスはうなずいた。「当然だろうな。クジン人は、催眠にかかりにくい。そういえば、パペッティア人もそうだな」そのネサスは、やっと異星生物の採集をやめて、音も立てずにもどってきたところだった。

「理解できないものでも、研究することはできます。人間の心の中には、何か、自分で決断をくだしたがらない部分があるのです。心の一部が、誰かの指示を求めているのです。催眠にかかりやすい人間というのは、他人を信じきる能力の強い人です。催眠をかける相手にまず屈服してしまうことが、催眠の第一歩になります」

「しかし、催眠とはなんなのだ？」

「誘導されて偏執狂(モノマニア)になった状態です」

「しかしなぜ、そういう状態になろうとするのだろうな？」

ネサスには答えられないようだ。

ルイスがいった。「なぜなら、催眠をかける相手を信じるからさ」

CamScannerでスキャン

〈話し手（スピーカー）〉は、大きな頭をゆすって、そっぽを向いた。

「そういうふうに他人を信じるのは、狂気のしるしです。わたしにも、催眠は理解できません」とネサス。「ルイス、あなたは理解できるのですか？」

「すっかりというわけじゃない」

「それで安心しました」そういって、パペッティア人は一瞬、ふたつの首を向かいあわせて、たがいの目をのぞきこんだ。「ありえないものをうけいれる人を信用するわけにはいきませんから」

「リングワールドの植物について、何かわかったかい？」

「どれも地球のにたいへんよく似ていることは、もう話しましたね。しかし、ものによっては、形態的に、思いがけぬほど特殊化しています」

「進化が進んでるっていうのかい？」

「おそらくそうでしょう。また、これもおそらくですが、このリングワールドでは、特殊化するだけそれなりに、余裕をもって成育することができます。しかし重大なのは、これだけ似ていると、われわれに対して害になるおそれがあるということです」

「だが、逆もまた正しいだろう？」

「もちろんです。わたしの種族が、食用にできるものもありますし、あなたたちの食用にぴったりの種類もあります。あとは、あなたが自分で、まず毒性がないか、つぎには味がどうか、たしかめてみなければいけません。しかし、だいたいどの植物も、あなたのサイクルの調理機で処理できるでしょう」

じゃ、当分先に心配はないな」

「それだけでは、この危険に対して、わりが合いません。ライヤー号に、星間種子誘引機を積んでおいてくれればよかったのに！　それがあれば、こんなふうに、えんえんと旅することなど、しないですんだのです」

「星間種子誘引機だって？」

「簡単な装置です。何千年も前に発明されたもので、銀河辺縁部の太陽に、星間種子をひきつける電磁的放射パターンを出させる仕掛けです。それさえあれば、星間種子をひとつ、この星系におびきよせて、それについてくるアウトサイダー人の船とわたりをつけられたでしょう」

「しかし、星間種子の速度は、光速よりずっとおそいんだぜ。どれだけかかるかわからないじゃないか！」

「でも、ルイス、考えてみなさい！　どんなに長く待つにしても、安全な船からは離れないですむのですよ！」

「一生待ちつづけることになるだろうよ」ルイスは、ふんと鼻で笑って、〈話し手〉のほうに目をはしらせた。とたんに、目をそらすことができなくなった。

〈獣への話し手〉は、少し離れたところで、低く身をかがめた姿勢でこっちをふりかえり、「不思議の国のアリス」のチェシャー猫さながらに、奇妙な〝笑い顔〟を見せていたのである。

ずいぶん長いあいだ、そうして見つめあっていたような気がした。が、やがてクジン人は、わざとらしくゆっくり立ちあがると、ひととびして、異世界の森の中へ姿を消してしまった。

ルイスはふりかえった。どうやら何か、重大なことが起こったらしいと、彼は気づいた。だが、

それはいったいなんだったのか？　どうしてそうなったのか？　肩をすくめて、彼はその考えを追いはらった。

ティーラは、いまだに自分のサイクルの座席にまたがって、加速に対応する姿勢をとったままだ……まるで、まだ飛びつづけているかのようだ。ルイスは、何度か医療師に催眠術をかけられたときのことを思いだした。それは何か劇でも演じているような感じだった。心地よいあなたまかせの気分にくるまって、催眠術師と、ゲームをやっているような気分だ。いつでもやめることができる。が、どういうわけか、そうはしなかったのだ。

とつぜんティーラの目が、拭われたように生気をとりもどした。ぶるっと頭をふると、彼女はこっちをふり向いた。「ルイス！　どうして着陸したの？」

「予定どおりさ」

「おろして」彼女は、塀にのぼった子供のように、両手をさしのべた。ルイスは両手を彼女の腰にあてて、サイクルから持ちあげた。彼女にふれたことで、背筋をふるえが走り、鼠蹊部と太陽神経叢に熱いものを感じた。彼はしばらく手をそのまま離さずにいた。

「ついいままで、一マイルも空にあがってたのに」とティーラ。

「これからは、地平の方向を見ないようにするほうがいい」

「あそこで眠ってるあいだに、あたし、何かしたのね？」彼女は笑い声をあげて、つんと首をのばすと、黒い髪が大きな雲のようにゆれた。「それで、みんなびっくりしたのね！　ごめんなさい、ルイス。〈話し手〉は、どこへいったのかしら？」

「一瞬でも追っかけてるんだろう。おい、こっちも何かやろう。やっと見つけたチャンスじゃない

か？」
「森の中のお散歩は、どう？」
「いいね」視線が合った。心の中はおたがいによくわかっている。彼女は自分のサイクルのトランクからブランケットをひっぱりだした。「さあ、いいぜ」
「たいしたものですね」ネサスがいった。「あなたたちほどよく交接する知性種族は、ほかに見あたりません。それではいきなさい。腰をおろすときには、あたりに気をつけるんですよ。そこらじゅう、えたいのしれない生命体がいっぱいなのですから」
「はだかということばが、昔は無防備と同じ意味に使われたってこと、知ってるかい？」と、ルイスがいった。
実際、服を脱ぐことで、安全がおびやかされるような気がしたからである。リングワールドの生態圏が、原形質の残滓を処理する虫けらやバクテリアや食肉植物なども含めて、みごとに機能していることは、疑いようがない。
「知らない」ティーラははだかで、ブランケットの上に立ったまま、頭上の太陽に向けて片手をのばした。「いい気持。あたしがまだ、昼の光の中であなたのはだかを見たことがないのは、知っている？」
「ご同様さ。ついでだけれど、そうしてるきみはカホなくらいすばらしいよ。こっちも、いいものを見せてやろう」彼は片手で自分の毛のない胸を指さした。が、「カホナ！　どうして――」
「何もないじゃない」

「なくなっちまった。細胞賦活剤のせいだな。あとかたもない。傷あとがなおったのは、ついこのあいだだったのに……」胸の上を指でなぞってみる。が、そこには、現になんのあとも残っていない。

「ガミジイ星で、リーチャーにやられたんだ。やつは、ぼくの肩からへそまで、幅四インチ深さ半インチの肉をこそげとっていった。つぎの一撃がきたら、ぼくはまっぷたつにされていたのかもしれないが、やつはまず最初に、持っていったぶんをのみこんだ。そいつが、やつには、致命的な毒だったらしい。たちまちボールみたいに丸くなって、死んじまった。

それが、いま見ると何もない。あとかたも残っていない」

「かわいそうなルイス。でも、傷あとがないことでは、あたしも同じよ」

「いや、きみのからだは、統計上稀な存在さ。おまけにたった二十歳なんだからね」

「まあ」

「ふうむ。なめらかな肌だ」

「ほかに、なくなった傷は？」

「一度、穴掘りビームを扱いそこねたこともあるが――」彼女の手をとってみちびく。

やがてルイスは仰向けに横たわり、その腰にまたがって、ティーラは刺しつらぬかれた。そのままの姿勢でずっと、おたがいの目を見つめあい、耐えられなくなるまで待ってから、動きにはいった。

高まるオルガスムの輝きをとおして見る女体は、あたかも天使の栄光の炎をまとっているかのようだ……。

……何か、先ほどの大きさのものが、木かげからとびだしてルイスの頭の上を横切り、下生えのかげにかくれた。一瞬ののち、〈獣への話し手〉が、視界に躍りこんできた。「失礼」とクジン人はいい、また獲物の痕跡を追って姿を消した。

フライサイクルのある場所で、また顔を合わせたとき、〈話し手〉の口のまわりの毛皮は、まっかにいろどられていた。「生まれてはじめて、自分の歯と爪だけを使って、食うための獲ものを仕とめたぞ」得意げにいうその声には、興奮のかけらもなかった。

が、その彼も、ネサスの忠告に従って、汎用の抗アレルギー錠をのんだ。

「そろそろ、原住民のことを話しあいたいですね」ネサスがいった。

ティーラは、びっくりしたようだ。「原住民って？」

ルイスが話してやった。

「でも、どうしてみんな、逃げたの？ 原住民は危険なの？ 本当に人間だったの？」

ルイスは、最後の質問にだけ答えた。それが、彼にも気になっていたからだ。「どうしてだか見当もつかない。こんなに人間世界から遠いところで、人間が何をしているというんだ？」

「疑う余地はないぞ」〈話し手〉がさえぎった。「見たとおりを信じるのだ、ルイス。おまえやティーラの種族とのあいだに、こまかいちがいはあるかもしれん。が、あれは人間だった」

「どうしてそんなに確信があるんだ？」

「匂いだよ、ルイス。音波シールドを切ると同時に感じた。ずっと遠く、薄まってはいるが、人間の大群集の匂いだ。おれの鼻を信じるがいい、ルイス」

ルイスは納得した。クジン人の鼻は、狩猟食肉種族のそれである。「とすると、並行進化だろうか?」

「ありえませんね」とネサス。

「だろうな」人間の体形は、道具づくりには適しているが、他の形態よりとくにすぐれているわけでもない。知性は、どんな姿にも宿りうる。

「時間の無駄だぞ」〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉がいった。「問題は、人間がいかにしてここへたどりついたかなどということではない。今後、彼らにどう接していくかだ。われわれにとっては、彼らと出会うたびに、それが最初の接触（ファースト・コンタクト）ということになるのだからな」

そのとおりだ、とルイスは思う。サイクルの飛ぶ速さは、おそらくここの原住民が持っているだろういかなる情報伝達手段をもしのいでいるはずだ。旗信号のようなものを使っていないかぎりは……。

〈話し手（スピーカー）〉は、つづける。「何よりも、未開状態にある人間の行動パターンを知らなければならん。どうだ、ルイス? ティーラ?」

「人類学なら、少しは知ってる」とルイス。

「では、接触したときには、おまえが代表として話せ。船の自動機構（オートパイロット）が、優秀な翻訳者であることを祈ろう。では、これから最初に出会った原住民と接触する」

そして、空中に出ると、ほとんどすぐに森林はなくなり、耕作地域の格子模様がそれにとってかわった。数秒後、ティーラが都市を見つけて指さした。

それはちょうど、数世紀前の地球の都市とよく似ていた。数階建ての建物が、ぎっしりと軒を

つらねている。そのあつまりの中から、いくつか細長い塔が宙にのび、それらは、地上車用のうねりくねった斜路（ランプ）でたがいに結びつけられていた。その点は明確に地球の都市とちがっている。当時の地球の都市は、斜路（ランプ）よりヘリポートを多く備えていたはずだ。

「ここで何かと出会うだろう」〈話し手（スピーカー）〉が期待にみちた口調でいった。

「いや、きっとからっぽだと思うね」とルイス。

ただの当てずっぽうだったが、事実はそのとおりだった。上空にさしかかったとき、それは明らかになった。

最盛期におけるこの都市の景観は、みごとなものであったにちがいない。ある面において、この都市は、ノウンスペースのどの都市にもないものをもっていた。数多くの建物が、地上に建てられるのでなく、空中に浮かび、地表や他の建物とのあいだを斜路（ランプ）や昇降（エレベーター）タワーがつないでいたらしい。重力の束縛を離れ、垂直と水平を別個に考える必要のなくなった、これらの空中楼閣は、あらゆる形状と好きなだけのサイズをとることができたはずである。

いま、四台のフライサイクルは、その廃墟の上空にさしかかった。浮かぶ小楼閣が墜落したときに、下の低い建物を押しつぶしたらしく、あたりは煉瓦やガラスやコンクリートの破片、ひき裂けた鋼材、ゆがんだ斜路（ランプ）、それにまだ上へ突きだしたままの昇降（エレベーター）タワーの残骸などでいっぱいだった。

その光景がまた、ルイスに、原住民への疑念を呼びおこした。人間が浮かぶ城をつくったという記録はない。人間は、何より安全第一だったのだ。

「ぜんぶ一度に落ちたようです」とネサス。「修復しようとしたあとがまったくありません。ま

ちがいなく動力の故障です。〈話し手(スピーカー)〉、クジン族は、こういう馬鹿げたものを建てますか？」
「高いところさえ嫌いだ。だが、人間ならやるかもしれん。もし生命への執着が、いまほど大きくなかったらな」
「細胞賦活剤(ブースタースパイス)だ」ルイスが叫んだ。「それが答えだ。彼らは生命をのばすことができなかったんだ」
「はい、だから、安全性への関心が少なかったのですね。守るべき生命が短いのですから」パペッティア人が推測を加えた。「これはわるい前兆です。そうではありませんか？　自分の生命を重く見ない連中だとしたら、わたしたちの生命も重く見ないでしょう」
「取り越し苦労がすぎるぜ」
「それももうすぐわかります。〈話し手(スピーカー)〉、あのおしまいの建物を見てみなさい。高い、クリーム色の窓のこわれた——」
パペッティア人がしゃべっているあいだに、その上空を過ぎてしまったので、操縦にあたっていたルイスは、サイクルをぐるりとまわして、もう一度そこへ引っかえした。
「思ったとおりでした。〈話し手(スピーカー)〉、見えますね？　煙です」
その建物は、約二十階建てで、芸術的にひねりを加えたり彫刻をほどこした一本の柱を思わせた。その窓は、ずらりと並ぶ黒い楕円の列だ。一階の窓は大部分ふさがれていたが、いくつか開いたのから、灰色のうすい煙が出て、風に吹き散らされているのだった。
塔は一、二階建ての家々のあいだに、ちょうど足首まで埋まった恰好で立っている。低い家々

の中には、まるで空から落ちてきたローラーに踏みならされたようにつぶれた一群が見える。しかしそのローラーの役を果たした建物もまた、この塔のすぐそばで、分解してコンクリートの堆積と化していた。

塔のうしろが、ちょうど都市のはずれだった。その向こうには、四角い耕地がつづいているだけだ。その畑から、人間のかたちをした姿が、フライサイクルの着陸に応ずるように、いくつもかけよってくる。

高みから見るとちゃんとしていた建物も、その屋根のあたりまで降下すると、明らかに廃墟であることがわかった。無傷で残っているものはひとつもない。動力の故障と、それによる大破壊は、よほど昔に起こったもののようだ。それにつづき、住民による破壊や、雨による浸蝕、小生物によるさまざまな腐蝕、金属の酸化、その他のいろいろなこと——地球の先史時代において、のちに考古学者の興味をあつめる村落あとの小塚群を残したような出来ごとが、あいついで起こったのにちがいない。

機械がこわれたあと、住民たちは、その住む街を再建しなかった。また、そこから立ち去りもしなかった。彼らはただ、廃墟の上に住みつづけたのだ。

そして、その生活から出る廃物が、その場に堆積していった。

廃物だ。それに空き箱。風の吹きよせる塵。食物の残りかす、骨、にんじんの葉やとうもろこしの芯に相当するもの。こわれた道具など。人びとが怠けていたり、疲れきっていてごみ捨てを怠るたびに、それは堆積した。積みかさなって、一部は軟化し溶解し、堆積はみずからの重みで固まり、さらに多くの人びとの足がそれを踏みかため、年月が、そして幾世代もが過ぎていった。

塔本来の入口は、すでに埋もれていた。土地の表面がそこまであがっていたのだ。四台のフライサイクルが、もとは大きな地上車の駐車場だった場所に十フィートも塵芥が固く積みかさなった空地へ舞いおりたとき、塔の二階の窓のひとつから、ヒューマノイド型の原住民が五人、威厳をたたえた足どりで歩み出てきた。

窓は二重の張り出し窓で、とびらとするのに充分なほどの大きさだった。その框と、鴨居にあたる場所には、三、四十個も、人間のとおぼしい髑髏が飾られていた。その配列のしかたにどんなパターンがあるのか、ルイスには見当がつかなかった。

五人はサイクルに向かって歩いてくる。近づくにつれて躊躇が見えるのは、四人の誰が代表かわからず迷っているらしい。この連中も、人間のように見えるが、そっくりというわけではない。人間の、いまだ知られざる人種のひとつででもあろうか。

五人とも、ルイス・ウーよりは、六インチ以上も背が低かった。肌の見えている部分は、ごく色がうすく、ティーラの北欧的なピンクや、ルイスの黄褐色とくらべると、まるで幽霊のような白さだ。どちらかというと、胴が短くて脚が長い。歩きながら、五人とも同じかたちに腕を前にくんでいた。その手の指は、おそろしく長く先細で、地球の、まだ手術がおこなわれている時代だったら、まさしく生まれながらの外科医といったところである。

その手より、毛髪はさらに異様だった。五人の高官の頭はいずれも同じ金白色で、その髪も髭も櫛をいれているが鋏はいれず、しかもその髭が、ふたつの目だけを残して、顔の全面を蔽っているのだ。

いうまでもなく、五人ともまったくそっくりに見えた。

「毛むくじゃらだわ!」ティーラが、ささやく。

「座席を離れるな」〈話し手〉が低い声で命じた。「ここへやってくるまで待つのだ。それから降りる。全員、通話ディスクは身につけているはずだな?」

ルイスはそれを、左手首の内側につけていた。ディスクはいずれも、ライヤー号の自動機構(オートパイロット)に直結している。これだけ離れていても作動するはずだし、ライヤー号の自動機構(オートパイロット)には、どんな新しい言語も翻訳してのける能力があるはずだ。

だが、そのカホなしろものをテストするには、直接使ってみるしかない。それに、あのずらりと並んだ髑髏……。

ほかの原住民たちが、この、かつての駐車場に、どっとあふれだしてきた。大部分は、この対決のもようを目にすると立ちどまり、その結果、群集は、かなり大きく余裕をとった大ざっぱな円形をかたちづくった。ふつう群集というものは、予想や賭けや議論でさわがしいものだ。が、この群集は、異常に静まりかえっていた。

聴衆のできたことが、たぶん高官たちに決定をいそがせたのだろう。彼らは、ルイス・ウーに向かって進んできた。

五人……よく見ると、まったくそっくりというわけでもない。まず背たけがちがう。みんなやせてはいるが、骨と皮ばかりのもあれば、筋肉らしいものがついているのもある。かたちのはっきりしない、色のほとんど失せた茶色い上衣(ローブ)を着たのが四人で、五人めは、同じような上衣(ローブ)――似たような毛布から切ったものか?――だが、色あせたピンクの模様のついたのを身につけていた。

最初に口をきったのは、いちばんやせた男だった。その片手の甲に、青い色の鳥の刺青がある。

ルイスは返事をした。

刺青の男は、ひとしきりしゃべった。幸運だった。自動機構（オートパイロット）も、データがそろうまでは翻訳にかかれないのだ。

ルイスは答えた。

刺青の男が、また何かいった。あとの四人は、厳然と沈黙をまもっている。信じられぬことだが、聴衆も同じく沈黙していた。

ようやくディスクが必要な語彙をあつめたようだ……。

あとになって彼は、沈黙そのものも、重要な情報となりえたことに気がついた。相手のムードに、彼はすっかり心をうばわれていたのだ。ぎっしりつめかけた群集の輪、上衣（ローブ）をまとって一列に並んだ四人の毛むくじゃらの男。そして、手に刺青をした男が語りかけている。

「……わたしどもはあの山を、〈神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド）〉と呼んでおります」まっすぐ右舷（スターボード）のほうを指さしながら、「なぜそのように呼ぶのか？〈建設者〉よ、もしそれがお気に召すことならば、なぜいけないわけがありましょうか？」どうやら、船をふもとに残してきた、あの大きな山のことをいっているらしい。すでにその姿は、はるかかなたで、すっかりもやに包まれてしまっている。

ルイスは一心に耳をかたむけた。自動機構（オートパイロット）は、すてきな翻訳家だった。徐々に状況がのみこめてくる。かつては強大な都市であったものの廃墟に根をおろした、農村のイメージが……。

「いかにも、ジグナムクリッククリックに、もはやかつての勢威は見られません。しかしそれでも、わたしどもの住まいは、わたしどもみずからつくるものよりも、はるかに優れております。

たとえ屋根は破れていようと、下のほうの階では、短い期間の暴風雨ならば、濡れるおそれもありません。どの建物も、熱を逃がさず、寒さから守ってくれます。戦いの折には、恰好の防壁となり、焼けおちることもありません。

〈建設者〉よ。わたしどもが、朝には畑に出で、夜にはこのジグナムクリッククリッククリックのかたすみの住まいにもどってくるのは、そういうわけでございます。古きものがかくも有用であるのに、どうして新たに家を建てる必要がありましょうか？」

ふたりのおそろしげな異星人に、ふたりの、髭がなく背が高すぎるが、ほとんど人間といっていい相手。その四人ともが、翼のない金属製の鳥にまたがり、口でちんぷんかんぷんなことばをしゃべると、金属のディスクから、ちゃんとしたことばが出てくる……原住民が彼らをリングワールドの〈建設者〉と思いこんだのには、なんのふしぎもあるまい。ルイスも、その思いこみを訂正するようなことは、何もしなかった。自分たちの正体を説明するには何日もかかるだろう。

そもそも、ここへやってきた目的は、学ぶためであって、教え導くためではないのだ。

「〈建設者〉よ。この塔は、わたしどもの統治の座でございます。人民はおよそ一千あまり。わたしどもに、この塔よりもましな宮殿がつくれましょうか？　上の階への通路を仕切りましたのは、住まいの部分を暖かくしておくためでございます。かつては、上の階から石塊を投げおとして、敵をふせいだこともありました。わたしどもの最大の弱点は、高所への恐怖であることも存じております……。

それでもわたしどもは、この都市が一千の一千倍もの人びとをかかえ、建物を空に浮かべていたという、かつての驚異の時代がよみがえることを、待ちのぞんでおります。あなたがたが、そ

の日をもどしてくださることを、願っております。その驚異の時代には、ほかならぬこの世界までもが、いまあるようなかたちに曲げられたときいております。おそれながら、それが本当かどうかを、お教えくださいませんでしょうか？」

「本当だ」と、ルイスは答えた。

「して、その時代は、ふたたびもどってまいるでしょうか？」

ルイスは、つとめてどっちつかずの返事をした。相手の失望が感じとれたような気がしたが、単なる推測だったかもしれない。

毛ぶかい男の表情を読みとるのはむずかしい。身ぶりは、いわば一種の約束ごとだ。話している男のゼスチュアは、地球版図のどこの文化圏のそれともちがっていた。こまかく巻いたプラチナ色の毛が、両眼だけを除いた顔全体をかくしているが、その目は茶色く、視線はやわらかい。しかし、目というのは、世間常識とはうらはらに、それだけではほとんど何も語らないものだ。

男の口調は、ほとんど詠唱に近く、まるで詩の朗読のようにきこえた。自動機構の翻訳するルイスのことばも、同じような詠唱調だが、ルイスに向かっては、会話調で語りかける。ほかの翻訳ディスクが、それぞれパペッティア語のやわらかい口笛と、〈ますらおことば〉の落ちついたうなり声を出しているのが、ルイスの耳にもきこえた。

ルイスは、質問にとりかかった……。

「いいえ、〈建設者〉よ。わたしどもは、けっして血に飢えたものではございません。戦うことなど、めったにありません。あの襲撃でございますか？　ああいうものは、このシグナムタリッ

いうことです。わたしどもは、飾りと、標識のために、それを用いております」そこで男は、おごそかに手をあげ、その甲の鳥の刺青をルイスに示した。
周囲の全員が、一度に叫んだ。「——！」
そのことばは翻訳されなかった。
話しだした男以外のものが口をひらいたのは、それが最初だった。
何か、大事なことを聞き落としたらしい。それはわかったのだが、不幸にして、そのことに気をまわしている時間はなかった。
「奇蹟をお示しください」と、相手は語りかけてきた。「疑うわけではございません。しかし、あなたがたがふたたびここへおいでになる機会はありますまい。子々孫々まで語りつぐための、ご事蹟を求めたいのでございます」
ルイスは考えこんだ。鳥のように飛ぶ姿は、すでに見せてあり、もう一度やってみせても効果はうすいだろう。調理スロットから、神糧を出して与える手はどうか？　しかし、同じ地球に生まれた人間のあいだですら、食物の選択には、大きなちがいがある。食物とその残りかすとの差は、むしろ文化によって定まるものだ。いなごに蜂蜜をつけて食う種族もあれば、かたつむりの照り焼きを食う連中もいる。あるものにとってのチーズも、他のものには腐った乳にすぎない。
ルイスが、サイクルのトランクに手をのばしたとき、ちょうどシャドウ・スクェアの一端が、やめておくにこしたことはなかろう。では、携帯レーザーはどうか？
太陽をかくしはじめた。暗い中なら、レーザーの実演は、さらに印象的だろう。
光束をひろげ、低出力で、彼はまず代表の男の顔に光をあて、ついでその四人の連れに、それ

から群集へとまわしていった。彼らの驚きがどうだったかわからないが、表面的には、なんの反応もなかった。失望をかくして、ルイスはライトを上へ向けた。

狙ったのは、塔の屋根からつきだしている彫像だった。ゴシック建築の樋嘴（ガーゴイル）を、超現実派（シュールレアリズム）ふうに近代化したようなかたちだ。ルイスの親指が動き、たちまち彫像は黄色く輝きはじめた。ついでひとさし指が位置を変えると、ビームは鉛筆くらいの太さの緑光となり、彫像の中心部が白熱して飛び散った。

喝采の起こることを期待しながら、ルイスはライトを消した。

「あなたがたは、光を武器とされる」刺青の男がいう。「しかし、それは禁じられていることでございますぞ」

「――！」群集がひと声叫び、またすぐ沈黙にかえった。

「それは知らなかった。申しわけない」とルイス。

「知らなかった？　そういうことが、ありえましょうか？　あなたは、人間との契約のしるしに、〈虹の橋（アーチ）〉をお懸けになったのではないのですか？」

「アーチだと？　なんのことだ？」

一面の毛に蔽われた顔にも、その驚きぶりははっきりと現れていた。「世界の空にかかる〈アーチ〉です。おお、〈建設者〉よ！」

やっとその意味をさとったルイスは、思わず笑いだした。

毛だらけの男の、不器用なパンチが、ルイスの鼻のあたまを一撃した。

なにしろ弱々しいやせた男の手だから、たいした一発ではないが、とにかく痛かった。
ルイスは、痛みには慣れていない。彼の時代には、爪先を何かにぶつけたとき以上の痛みを経験するものなど、ほとんどいないのだ。麻酔法がゆきわたりすぎ、医療の処置も、即座に手がとどくようになっている。例えば、スキーで脚を折っても、その痛みはものの数秒でとめられ、数分もつづくことはないが、その抑圧が始末にわるい精神的外傷を残したりする。空手、柔道、柔術、ボクシングなどの闘争競技は、ルイス・ウーの生まれるずっと前から禁止されていた。ルイスは、戦士としては最低だ。死に対してはしりごみしないが、痛みには堪えようがない。
ひどく痛い一撃だった。ルイスは悲鳴をあげ、携帯レーザーをとり落とした。
群集が、わっと押しよせてきた。二百人の怒れる髭もじゃの男たちはまさしく鬼千匹という感じで、いましがたまでこっけいに見えたのが、まるで嘘のようだった。
藁のようにやせた代表の男が、両腕をひろげてルイスにしがみつき、狂気じみた力で締めつけてきた。ルイスも負けずおとらず、くるったようになり、ひといきでそれをふりほどいた。サイクルにまたがると、手を上昇レバーにかけたが、このときようやく理性がもどってきた。
ほかのサイクルは、彼の機に追従するように、セットされたままなのだ。いまとびだせば、他の三機も、人が乗っていようといまいと、ついてきてしまう。
ルイスは周囲を見まわした。
ティーラ・ブラウンは、早くも追従機構のスイッチを切って、空中に浮かんでいた。高みから、闘いのもようを、心配げに眉をひそめて見つめている。救助にくることなど考えてもいないらしい。

〈話し手〉は猛烈に暴れまわっていた。すでに五、六人の敵を倒したようだ。ルイスの見ている前で、携帯レーザーをふりあげると、ひとりの男の頭を叩き割った。

毛むくじゃらの男たちが、彼を遠まきにしてもみあう。

長い指の手がいくつも、ルイスを座席から引きずりおろそうとする。両手両足で座席にしがみつくが、もぎはなされそうだ。そこで遅ればせながら、彼は音波シールドを使うことを思いついた。

スイッチをいれると、原住民たちは悲鳴をあげながらふっとんだ。

ひとりがまだ、ルイスの背にしがみついている。ルイスはそいつをひきずりおとすと、一度シールドを切り、もう一度いれて、はねとばした。ついで、ネサスのいるほうをふりかえる。

ネサスは、自分のサイクルへかけもどっていくところだった。原住民たちも、その異様な姿には、おそれをなしているらしい。行く手をさえぎるものはただひとり。だがそいつは、何か古い機械からはずしたらしい金属の棒を握りしめている。

ルイスがそれを目にとめるとほとんど同時に、相手は、パペッティア人の頭へ、その棒をふりおろした。

ネサスはひょいと首をひっこめ、前脚を軸にくるりと半回転して相手に背を向けた。だがこれでは、フライサイクルにも背を向けることになる。

持ちまえの逃走本能が裏目に出た――〈話し手〉かルイスが助けてやらなければ。ルイスは口をひらいて叫ぼうとしたが、すでにパペッティア人の動作は完了していた。

パペッティア人は、サイクルに向きなおった。もう誰も、彼をさえぎろうとするものはない。
うしろ脚の蹄が、ごみの固まった大地の上に、点々と血の足跡をのこした。
〈話し手〉を取り巻く輪は、まだそのままだ。クジン人は、ぺっと足もとにつばを吐いた——まるでクジン族ではなく人間のようなしぐさだ——そして背を向けるとサイクルにのりこんだ。携帯レーザーを握った左手が、肘のあたりまで、まっかに血に染まっていた。
ネサスをとめようとした男は、倒れたまま、ぴくりとも動かない。周囲はおびただしい血の海だった。
〈話し手〉とネサスの機が、空中に浮かぶのを見さだめて、ルイスは上昇をはじめた。ついで、〈話し手〉のやっていることを目にとめ、彼は叫んだ。「やめろ！　そんな必要はないじゃないか」
〈話し手〉は、あの改造された掘削機械をとりだそうとしていたのだ。
「必要でなければ、やってはいかんというのか？」そういいながらも、彼は手をとめた。
「やめてくれ」と、ルイスは懇願した。「そいつは、殺人だ。もう危害を加えられる心配など、ないじゃないか？　石でも投げつけてくると思うのか？」
「やつらは、おまえの携帯レーザーを、こっちに向けるかもしれんぞ」
「絶対にありえない。タブーなんだから」
「と、あの代表の男がいっただけだ。やつのことばを信じるのか？」
「そうだ」
〈話し手〉は、武器をしまいこんだ。〈ルイスは、ほっと安堵の息をついた。クジン人はきっと

都市全体をあとかたもなくしてしまうだろうと思っていたからだ）「しかし、なぜあのようなタブーが生じたのかな？　エネルギービームを使った戦争でもあったのだろうか？」

「それかまたは、リングワールド最後のレーザー砲で武装した一党がいるのかもしれない。それをたずねる相手がいないのは、残念だな」

「鼻から血が出ているぞ」

それに気がつくと、急におそろしく痛みだした。ルイスは、サイクルを〈話し手〉のに追従させ、傷の治療にかかった。下では、ジグナムクリッククリッククリックの外縁で当惑に渦まく暴徒の一群が、みるみる小さくなっていった。

「やつら、はじめからひざまずいてでもいてくれりゃ、よかったのに」ルイスがぼやく。「おかげで、すっかりだまされちまった。おまけに、翻訳機が、〃神〃というべきところを、しつこく〈建設者〉っていうもんだから」

「神だって?」

「やつらには、リングワールドの〈建設者〉が、神々に当たるのさ。あの沈黙の意味に気づくべきだった。カホな話だよ! 静まりかえった中で、司祭ひとりがしゃべっている。たしかに、古くさいお説教をきく場のムードだった。そいつに、ぼくはとんちんかんな反応をしつづけていたんだ」

「宗教なのね。おおいやだ。でも、笑ったのはまずいわ」交信機のうつしだすティーラのきびしい表情。「教会で笑ったりはしないものよ。たとえ、通りすがりの人でも」

欠けつつある正午の太陽の下を、一行は飛んでいた。頭上にかかる〃リングワールド自身〃の青い線が、刻々とはっきりその姿を現してくる。

「聞いたとたんにおかしくなったんだよ」とルイス。「いまでもおかしい。彼らは、自分たちが環(リング)に住んでることを忘れているんだ。あれをアーチだと思ってる」

しゅうという音が、音波シールドをつきぬけた。つかのま、暴風のようなうなりがつづき、そしてぴたりとやんだ。音速をこえたのだ。

ジグナムクリッククリックは、もうはるか後方に小さくなっている。あの都市が悪魔に復讐の刃を加える機会はこないはずだ。悪魔はもう二度と姿を見せないだろうから。

「ほんとうに、アーチみたいに見える」とティーラ。

「そうだな。笑うべきじゃなかった。でも、運のいい話さ。こんな失敗も、あとまでたたる心配はないんだからね」とルイス。「これからはもう、下へはおりないことにしよう。そうすれば、誰も手を出せない」

「失敗の中には忘れてしまえないものもあるぞ」と〈話し手〉がいった。

「あんたにそれをいわれるとはね」ルイスは無意識に、鼻のあたまをかいていた。そこはまるで木片のように感覚がない。たぶん麻酔剤が切れるころまでには治っているだろう。

彼は心をきめてよびかけた。「ネサス」

「はい、ルイス？」

「あそこで、ひとつわかったことがある。あんたは、自分が勇気があるおかげで、気ちがい扱いされてるっていった。そうだね？」

「ルイス、あなたはなんという如才ない人でしょう。あなたの口のうまさは――」

「まじめな話だ。きみも、ほかのパペッティア人も、とんでもないまちがいをおかしている。論理の言葉がちがうんだ。パペッティア人は本能的に、危険に対しうしろを見せるんだったな？」

「そうかな？」

「そうじゃないんだよ。パペッティア人は本能的に、危険があるとうしろを向くだけなんだ。つまり、うしろ脚を使うためにね。あの蹄の威力は、すごい武器だよ、ネサス」

あのときパペッティア人は、一挙動で前脚を軸に半回転しながら、うしろ脚をつきだしたのである。そのとき、彼のふたつの頭がうしろを向き、大きく左右にひらいて、標的との距離を見さだめたのを、ルイスははっきりと見ていた。そのひと蹴りは、相手の心臓を、背骨の向こうまではじきだすほどの、正確な一撃だった。

「逃げるわけにはいきませんでした」とネサス。「逃げれば、フライサイクルから離れてしまいます。そういう危険はおかせませんから」

「しかし、そんなことを考えているひまはなかったはずだ。本能的な動作だったよ。無意識に背を向けるんだ。それと同時に蹴る。〝正気〟のパペッティア人にしても、うしろを向くのは、逃げるためじゃなくて、本来はそれが闘いのかまえなのさ。あんたは、けっして気がふれてるわけじゃない」

「そうではありません、ルイス。たいていのパペッティア人は、危険から逃げだします」

「しかし──」

「多数はつねに正しいのです、ルイス」

群居生物の本性だ！　ルイスは、さじを投げた。目をあげると、銀色の太陽の最後の端が、かくれていくところだった。

失敗の中には忘れてしまえないものもある……。

〈話し手(スピーカー)〉は、しかし、そういったとき、何かべつのことに心を奪われていたようだ。いったい、

何に？

天頂には、黒い四辺形の一群が軌道をめぐっている。いま太陽をかくしているそれは、真珠色のコロナのような光を周囲にまとっている。それらすべての上に、放物線状のアーチがかかり、星をちりばめた空を、くっきりと区切っている。

それはあたかも、おもちゃの都市組立て（ビルダシティ）セットから、幼くてやりかたのわからない子供がつくりあげたもののようにみえた。

ジグナムクリッククリックを離れてからはずっと、ネサスが操縦をうけもっていた。しばらくして、〈話し手（スピーカー）〉があとをひきついだ。一行は、夜のあいだじゅう飛びつづけた。ついに頭上で、中央のシャドウ・スクェアの縁から、夜明けの間近いことを知らせる光輝が洩れはじめた。

この数時間のあいだに、ルイスは、なんとかリングワールド全体のイメージをつかむ方法をひねりだしていた。

地球のメルカトル図法による地図——教室の壁などにかけてある、ありきたりな四角いやつ——の赤道縮尺一対一、つまり原寸大のものを、まず頭におく。そういう巨大な地図に、地球表面と同じような起伏を与えてやれば、赤道付近では地球とそっくり同じものができる。が、そういう原寸大の立体地図も、リングワールドの端から端までとどかせるには、四十枚をつぎつぎにつなぎあわせなければならないのである。

その立体地図の面積は、地球そのものよりもかなり大きい。しかし、その一枚をリングワールド上のどこかにおいて、ちょっと目を離したら、もうそのありかをさがしだすことはむずかしい

だろう。

リングワールドの地形を利用すれば、もっとわかりやすく説明できる。環(リング)の両サイドにあって釣合いをたもっている塩水の海にしても、それぞれが、人類の版図内にあるどんな惑星の表面よりも大きいのだ。大陸といっても、結局は大きな島にすぎない。地球上の海と陸を合わせてこの大洋の表面に移しても、周囲には充分のゆとりがあるだろう。

「笑っちゃいけなかったな」と、ルイスはひとりごちた。――ぼくでさえ、このスケールをつかむのには、長いあいだかかった……この構造物の、だ。原住民に、どうしてそれ以上の複雑な認識を求めることができよう？――

ネサスはもっと早くそれを実感していた。一昨夜、はじめて空のアーチを見た瞬間、彼は悲鳴をあげて身をかくそうとしたのだ。

「そうだったのか。なんてカホな……」まあどうでもいいことだった。なにしろ時速千二百マイルであらゆる失敗を後方へ置き去りにしていけるのだから。

やがて〈話し手(スピーカー)〉が合図してき、ルイスに操縦をゆだねた。〈話し手(スピーカー)〉が眠っているあいだ、ルイスが編隊を率いることになる。

そうして、秒速七百マイルの朝がやってきた。

しかし、このリングワールドの〈アーチ〉に見られる、明暗の縞の境は、ぜんぶそれなのだ。回転方向から、その境界線が、フライサイクルの編隊に向かって迫ってくる。それは地表から空へ、そしてはるか左舷のかなたから右舷のかなたへのびる、ひとつの平面だ。目に見える運命のように、大きすぎて迂回の不可能な壁のように、それは近づいてくる。

ついに到着。頭上ではコロナが輝き、シャドウ・スクェアがしりぞくにつれて、ぎらぎら光る太陽の縁がのぞく。左を見れば夜、右を見れば昼。そして明暗の影は、果てしない平原を去っていく。ルイス・ウー歓迎のために演じられる奇異な朝の眺めである。

はるか後方、あらゆる景観がもやにかすむあたりに、鋭い斜面を持った山の姿が、新たな陽光を浴びて浮かびあがった。

「〈神の拳〉だ」ルイス・ウーは、そのことばのひびきを味わうようにつぶやいた。なんという名前をつけたものだ！　それも選りにえって、この世界でいちばん大きな山に！

ルイスのからだは、すっかりこわばっていた。早くからだが適応しなければ、座席にまたがったままの姿勢で関節が動かなくなってしまうだろう。それに――煉瓦状の食物も、だんだんほんものの煉瓦に味が似てきたみたいに感じられる。おまけに、鼻はまだ一部無感覚だし、まだコーヒーの出てくる取出し孔にもありつけない。

しかし、ルイスの目と心は、まさに王侯の喜びを味わっていた。

例えば、パペッティア人の逃走のための反射運動を考えてみよう。それがじつは闘争のための反射だとは、誰もまだ思いもよらないのだ。ひとりルイス・ウー以外は。

それに、星間種子牽引機のこと。聞きすごしておくには、詩的すぎる話だ。何千年も前に発明

された簡単な装置だと、ネサスはいっていたが、そういうもののあることを口にしたパペッティア人は、きのうにいたるまで、ひとりもいなかった。

だが、パペッティア人というのは、およそ詩情などとは縁のない連中なのだ。

アウトサイダー人の船が、星間種子のあとをついていく理由を、パペッティア人は知ったのだろうか？　その発見に、彼らは喜んだのだろうか？　それとも、その秘密を知りながら、実用にならぬものとして捨ててしまったのだろうか？

ネサスとの交信機は、オフになっていた。たぶん眠りこんでいるのだろう。ルイスは、相手が目をさましたとき、パネルのライトを見て呼びかけてくれるよう、交信機の呼びだしスイッチをいれておいた。

彼は、知っていたのだろうか？

星間種子。銀河の〈核〉に群れている、非知性生物。その新陳代謝は恒星を火とするフェニックスのそれであり、その食物は、星間宇宙にうすくひろがる水素原子である。スカイダイヴァーがパラシュートを扱うように、おそろしく巨大な高反射性の膜をひろげ、光子帆走で移動する。卵を生むため、銀河の軸からそのはずれまで飛行し、産卵を終えると引っかえしていく。卵からかえった星間種子の幼生は、みずからふるさとの方向を知り、光子の風にのって、暖かく水素の多い銀河の〈核〉へともどっていくのである。

その星間種子のいくところ、アウトサイダー人の船もまた相ともなって現れる。

なぜアウトサイダー人は星間種子についていくのだろうか？　いかにも詩的ではあるが、まじめに問題にしてもしようがない。

いや、そうはいっていられないことかもしれない。過ぐる第一次人間－クジン戦争の折、一個の星間種子(スター・シード)が、常とちがうコースをとった。そのあとに続くアウトサイダー人の船が、プロキオンの近くにさしかかった。そこに滞留しているうち、ウイ・メイド・イット星に、ハイパードライヴ装置(シャント)を売ったのである。

アウトサイダー人の船が、人間の版図でなく、クジン人の領域へ迷いこむ可能性も、同じようにあったわけだ。

しかも当時、パペッティア人はクジン人を、真剣に観察していたのではなかったか？

「カホナ！ どうもさっきから気になっていたのは、これだったんだ。やはりぼくは、まだ修業が足りないらしいな」

しかし、本当にそんなことがありうるのか？ いや、まちがいない。ネサスが、そういったのだ。パペッティア人は、クジン人を観察し、安全に絶滅させられるかどうか研究していたのである。

そこへ人間－クジン戦争が起こって、問題は一挙に解決した。一隻のアウトサイダー船が、人間の空域に迷いこみ、ウイ・メイド・イット星にハイパードライヴ装置(シャント)を売ったところ、クジン族の無敵艦隊は、それと反対の方角から、怒濤の進撃をつづけていた。しかしひとたび人間の艦隊がハイパードライヴを装備するや、クジン人はもはやその敵ではなく、パペッティア人に対しても脅威ではなくなったのである。

「でも、まさかそんなことが」ルイスはつぶやいた。慄然たる思いであった。

「もしも〈話し手(スピーカー)〉がこれを――」それは事態をさらに悪化させるだけだろう。

「選抜飼育の実験だ。カホな、品種改良なんだ。われわれを利用して。われわれを！」

「そのとおりだ」と〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉がいった。

一瞬、ルイスは、そら耳かと思った。ついで彼は、〈話し手(スピーカー)〉の透明な小さな映像が、ダッシュボードの上に浮かぶのを見た。交信機が、つけっぱなしになっていたのだ。

「カホナ！　しまった。聞いてたのか？」

「わざとしたのではないぞ、ルイス。うっかりスイッチを切るのを忘れていただけだ」

「うーん」おそまきながら、ルイスは、ネサスが星間種子誘引機(スターシード・ルーア)の話を終えたとき、〈話し手(スピーカー)〉がこっちを向いて笑っていたことを思いだしていた。ちょっと見たところ、聞こえる距離ではなさそうだったが、クジン人が狩猟食肉獣の出であり、その笑い顔が、戦いに臨んで反射的に牙をむきだす表情にほかならないことも、同時に思いだした。

「品種改良といったな」と〈話し手(スピーカー)〉。

「ぼくは、ただ――」ルイスは、しどろもどろになった。

「パペッティア人は、クジン人の発展を抑止するために、われわれ両種族を戦わせたのだ。彼らには星間種子誘引機(スターシード・ルーア)があった。それを用いて、アウトサイダー船を、おまえの領空にひきよせ、人間に勝利を得させた。それをおまえは、品種改良というのだな」

「まあ聞いてくれ。こいつは、単なる臆測のあやふやなつながりにすぎない。とにかく気をしずめてみれば――」

「しかし、おまえもおれも、同じ結論に達しているのだぞ」

「うむ」

「この問題を、いまネサスにつきつけるか、それともこの探険が終わってリングワールドを離れる時期がくるまで待つかということで、迷っていたのだ。いま、おまえにも事情がわかった以上、選択の余地はないな」

「しかし――」いいかけてルイスは口をつぐんだ。どっちにしろ、サイレンのうなりが、彼の声をかき消してしまった。〈話し手（スピーカー）〉が、緊急信号を鳴らしたのだ。

その信号は、低周波振動から超音波までを含む、耳が痛くなるほどの不協和音だった。ネサスの姿がダッシュボードに現れて、叫びたてた。「はい？　はい、なんです？」

〈話し手（スピーカー）〉のうなるような声が答える。「おまえは、戦いに横あいから干渉し、敵側に利を与えた。これは、まさしく、わが族長に対する宣戦布告と同等の行為だ！」

ちょうどそのことばなかばで、ティーラが交信機をいれた。ルイスは彼女の映像に向かって、はげしく首をふってみせた。割りこむんじゃない！

パペッティア人のふたつの首が、驚きにのけぞった。が、その声は、いつものとおり抑揚に欠けていた。「なんのことをいっているのです？」

「第一次人間―クジン戦争だ。星間種子誘引機（スターシード・ルーア）だ。アウトサイダー人のハイパードライヴ装置（シャント）だ」

三角形の頭のひとつが、ふっと沈んで見えなくなった。銀色のフライサイクルが一台、編隊を離れるのが見え、ついでそれがネサスの機だとわかった。

とくに心配することはなさそうだった。あと二台のフライサイクルにしても、ずっと遠く離れていく。小さな銀色の羽虫のようにしか見えない。地上の戦いなら、誰かが重傷を負うおそれも

CamScannerでスキャン

ある。が、この高空で何ができよう？　パペッティア人のフライサイクルは、〈話し手(スピーカー)〉のより速度が出るのにちがいない。ネサスはあらかじめこういう場合も、予測していたのだろう。必要とあれば、いつでもクジン人から逃げられるという確信を持っていたようだ。

しかしパペッティア人は、逃げだしたわけではなかった。彼は、〈話し手(スピーカー)〉のサイクルの周囲を旋回しはじめていたのだ。

「おまえを殺すつもりはない」〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉がいう。「空中で襲うつもりなら、おまえのタスプの到達距離は、スレイヴァーの掘削ビームより短いことをおぼえておけ。うお――う！」

クジン人の、血も凍るような殺戮の雄たけびに、ルイスは破傷風にでもかかったように、筋肉がしびれるのを感じた。銀色の点が、すいと輪を描いて、〈話し手(スピーカー)〉のサイクルから遠ざかるのを、彼はぼんやりと目にとめていた。

ティーラが感嘆の表情で、口を大きくあけている。

「おまえを殺す気はない」〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉の声が、前よりおだやかになった。「しかし、答えてもらうぞ、ネサス。おまえの種族が、星間種子(スター・シード)を誘導できることは、わかっているのだ」

「はい」とネサス。彼のサイクルは、信じられぬほどの速度で、前方へ遠ざかっていく。ふたりの異星人の様子が、ひどくおだやかなのは、そう見えるだけのことにすぎない。単に、ルイス・ウーが、彼らの表情を読みとることができず、また彼らが共通語(インターワールド)で人間的な感情の表現ができないからなのだ。

ネサスは命からがら逃走中だったが、クジン人は編隊から離れようともせず、ただ呼びかける。

「答えてもらうぞ、ネサス」

「あなたの推測のとおりです」とパペッティア人。「凶暴なクジン族の絶滅法を研究しているうちに、あなたたちには大きな潜在能力があり、わたしたちの役に立てられるだろうということがわかってきました。そこでわたしたちは、あなたたちがほかの種族と平和に協調していけるよう進化させる仕事にとりかかったのです。わたしたちのやりかたは、間接的ですが、ごく安全なものでした」

「ネサス。おれは非常に不愉快だ」

「ぼくもだ」と、ルイス・ウー。

彼は、ふたりの異星人が、ずっと共通語(インターワールド)でやりあっていることを、見のがしてはいなかった。なりゆきをかくしたかったら、〈ますらおことば〉を使ったはずだ。両者とも、人間をまきこむ道をえらんでいる——たしかに、それが当然だ。この戦いの一翼には、ルイス・ウー自身も連なっているのだから。

「きさまはわれわれを利用したんだ。クジン人に対してしたのとまったく同じにな」

「だがその結果は、わがほうの敗北となったのだぞ」とクジン人。

「だが、人間―クジン戦争で、どれだけ多くの人間が死んだことか」

「ルイス、あなた、つくほうをまちがえてるわ！」ティーラ・ブラウンが、介入してきた。「カホナ！　もしパペッティア人がいなかったら、わたしたちみんな、クジン人の奴隷になってたのよ。パペッティア人は、クジン人の文明破壊をとめてくれたのよ！」

〈話し手(スピーカー)〉が、にやりと笑っていう。「わが種族にも、文明はあったのだぞ」

パペッティア人は何もいわない。その映像は、いまだにひとつ目玉の大蛇の首が一本。たぶん

もうひとつの口は、サイクルをあやつるのにいそがしいのだろう。投影はすでにはるかかなたにあった。

「パペッティア人は、われわれを利用したんだ。クジン人を進化させるために、単なる道具としてだよ」とルイス。

「でも、うまくいったじゃないの！」ティーラが抗弁する。

いびきのような音。低い、険悪なうなり声だ。一見笑っているような〈話し手〉の表情の意味をとりちがえるものは、いまではもう誰もいない。

「うまくいったんだわ！」ティーラは、はげしい口調でいった。「〈話し手〉、いまのあなたは平和な種族なのよ。あなたはもう、文明を持った種族ならどんな――」

「だまれ、地球人！」

「――相手とでもつきあっていけるのよ」ティーラは上機嫌でしゃべりつづける。「あなたがたが戦争をしなくなってからもう――」

クジン人の映像が、スレイヴァーの掘削機械をとりだし、見せびらかすと、ティーラはぷつりと口をつぐんだ。

「ぼくらも、同じかもしれない」ルイスがいった。

一同の注目があつまる。「ぼくらも、同じかもしれない」と、彼はくりかえした。「もしパペッティア人が、人間にも品種改良を加えようとして……」そこで絶句した。「そうなんだ、ティーラ。まちがいないよ」

パペッティア人は、なんの反応も示さない。

CamScannerでスキャン

ルイスの凝視に、ティーラは動揺を見せた。「何が同じなの、ルイス？　ルイス！」
「すまん。思いついたことがあるんだ。……ネサス、話してくれ。あの、産児制限法のことだ」
「ルイス、気でもくるったの？」
「うーう」と〈獣への話し手〉。「おれも、時間さえあれば、それに気がついていたぞ。ネサス、どうだ？」
「はい」とネサスが答えた。
パペッティア人のサイクルは、銀色の一点と化し、さらに前方すなわち左舷の方角へと小さくなっていく。その姿の消えていく彼方に、それよりは大きな、ぼんやりした光点が見えたが、編隊からそこへの距離は、地球上でもっとも離れた二点間よりも大きいだろう。パペッティア人の交信機の映像は、相変わらずこっけいなひらたい三角形の顔と、手のかわりをするくちびるがこっちを向いているだけで、表情をよみとることは不可能だ。見たところ、とうてい危険な相手とは見えない。
「きさま、地球の産児制限法にも、ちょっかいを出したな」
「はい」
「なぜだ？」
「わたしたちは、人間に好意を持っているからです。人間を信頼しています。だから、ずっとその利益をはかってきました。人間の発展は、わたしたちの利益につながります。たぶん人類は、わたしたちよりも先に、小マゼラン雲に到着するでしょうから」
「驚いたな。好意を持っているとは。それで？」

「あなたたちを遺伝的に進歩させようとしました。しかし、何を進歩させたらよいのでしょう？　知性ではない。知性はあなたたちの強さの源ではありません。自己保存の感覚でもないし、からだの丈夫さでもないし、闘争能力でもない」

「だから運のよさをふやそうとしたってわけか」そういって、ルイスは笑いだした。

ティーラにも、その意味はわかったらしい。恐怖に目を大きく見ひらき、何かいおうとしたようだが、かすれた声がのどから洩れるばかりだ。

「そのとおりです。笑うのは、やめなさい、ルイス。充分に意味のある決定でした。あなたの種族は、これまでも信じられぬほど幸運だったと思いませんか。人間の歴史は、いわば危機一髪の連続でした。同種族内の原子力戦争が回避できたのをはじめ、産業廃棄物による汚染や、生態圏の攪乱や、危険な巨大小惑星や、穏やかな変光星である太陽の気ままなどを切りぬけてきたし、まったくの偶然から、銀河の〈核〉の爆発をみずから発見しさえしたのです。ルイス、どうしてまだ笑いつづけているのですか？」

ルイスの笑いがとまらないのは、ティーラのせいだった。ティーラの顔は、怒りでまっかになっていた。その目は、まるで身をかくす場所を求めるかのように、せわしなく動いている。遺伝子の実験のせいで生まれたのだという自覚が、楽しかろうはずはない。

「そういうわけで、わたしたちは、地球の産児制限法に変更を加えました。驚くほど簡単な仕事でした。わたしたちのノウンスペースからの撤退で、株式市場は崩壊していました。経済操作で、出生管理局メンバーの何人かを破産させ、その人たちを買収し、何人かは借金で首がまわらぬようにしておいて恐喝し、ついでその出生管理局の汚職を、改正が必要だという宣伝に利用したの

です。おそろしいほど費用のかかる仕事でしたが、きわめて安全で、不完全ながらも一応の成功をおさめました。出産権抽籤の制度を導入したのです。これによって、異常に幸運な品種を生みだそうとしたわけです」

「人でなし！」ティーラが叫んだ。「この化けもの（モンスター）！」

〈話し手（スピーカー）〉は、すでにスレイヴァーの掘削機械をしまいこんでいた。「ティーラ、おまえは、パペッティア人が、わが種族の遺伝を操作したと知っても、何も文句をつけなかったな。彼らは、おとなしいクジン人をこしらえようとしたのだ。これは結局のところ、われわれを生物学者の実験動物として繁殖させ、欠陥のあるものを殺して他を残していくということになる。おまえはそれが自分の種族の得になるということで、喜んでいた。それなのに、いまおまえは嘆いている。どういうわけだ？」

怒りのため泣きじゃくっていたティーラは、交信機のスイッチを切ってしまった。

「温順なクジン人、か」〈話し手（スピーカー）〉はくりかえした。「ネサス、おまえは、温順なクジン人をつくりだそうとした。本当にそれに成功して、クジン人が温順になったと思うなら、こっちへもどってきて、いっしょに旅をつづけるがいい」

パペッティア人からの答えはなかった。はるか前方のそのサイクルは、もうまったく見えなくなっていた。

「もどってくる気はないのだな？　しかし、この未知の世界で、どうすれば、どこにいるともわからぬおまえを守ってやれるのだ？　もっとも、気にかけてやる必要はないかもしれん。おまえは充分に用心ぶかいのだからな」そういうクジン人の手には、針のようにとがって三日月形に曲

がった鉤爪が、にゅっとむきだしになっていた。「幸運な人間をつくりだすというおまえのたくらみも、同じように失敗に終わったようだな」

「いいえ」交信機をとおしてネサスが答えた。「幸運な人間は、たしかに生まれています。ただ、この呪われた探険に、彼らをつれてくることができなかっただけです。彼らが幸運すぎたためです」

「おまえは、われわれ両種族に対し、あたかも自分が神であるかのように臨んだ。二度ともどってこようなどと思うなよ」

「しかし、交信機の連絡はつづけます」

〈話し手（スピーカー）〉の映像が消えた。

「ルイス。〈話し手（スピーカー）〉は、通話を切ってしまいました」ネサスがいう。「話があるときには、あなたに中継してもらわなければなりません」

「ああいいとも」と、ルイスは答えて、ぴしりとスイッチを切った。ほとんど間髪をいれず、パペッティア人の映像が浮かんでいたあたりに、小さなライトがついた。パペッティア人が通話を求めているのだった。

カホナ、勝手にそうしているがいい。

その日おそく、彼らは、地中海ほどの大きさの海をわたった。ルイスが、よく観察しようとして高度を下げると、あとの二台もそれについてきた。してみると、誰も話しかけてはこないにせよ、編隊はまだ追従機構（スレイヴ・サーキット）で結ばれたままでいるのだった。

海岸線にひとつの都市があったが、その都市も廃墟と化していた。ドックがある以外は、ジグナムクリッククリックと同じだ。ルイスは着陸しなかった。ここには学ぶべき何ものもない。

そのあと、土地が徐々にのぼり斜面になり、それがどこまでもつづいて、やがて耳がぽんと鳴り、圧力計の表示はいちじるしく下がった。緑色の土地が、やがて褐色の灌木地帯に、ついで高地性のツンドラと変わり、そのあとえんえんと岩面の露出した地形がつづき、ついで――

およそ五百マイルほどにわたる山の稜線にそって、風が、灌木も土壌も岩も、はぎとってしまった地域が現れた。山稜のかたちをした環の構成物質がむきだしになっている以外には何もない、半透明で灰色の、おぞましい眺めであった。

管理不行届きだ！　リングワールドを建設したものが、こんなありさまを放っておくはずはない。してみると、リングワールドの文明は、もうずっと前から死にかけていたのだろう。その過程は、この、誰も訪れぬ土地の表層がはがれて地肌を露出することからはじまる……。

前方はるか、ネサスの飛んでいった方向に、まぶしく光る広い地域がひろがっている。ざっと見たところ、三万から五万マイルくらい向こうだ。とすると、その光る地域の大きさは、オーストラリアくらいだろう。

あれも環の床面の露出だろうか？　かつては肥沃だった土壌も、河川システムが動かなくなると、植物は育たず、乾ききって、やがて風に吹きとばされ、環の構成物質があらわになってくる。ジグナムクリッククリックの没落、すなわち動力系統の停止は、衰亡の最終的な段階だったにちがいない。

それほど長いあいだその衰退はつづいたのだろうか？　一万年くらいか？

ろうとも、もっと話しあうべきだろうか？

わからない。誰かとこのことを話しあえたらなあ。ここが大事なことなのだ。彼は眼下の景観に向かって顔をしかめた。

人間が今いるあの世界では、時間感覚がすっかり変わってくる。午前も午後も、まったく同じなのだ。いかなる存在も永遠には及ばず、自身の幻想も現実の敵ではない。これはまるで、転移ボックスのあいだの一瞬の旅みたいだ、とルイスは思いはじめた。

キューイスオド。ファイヤー号と縁の外壁上に、ひとつずつ転移ボックスがあって、彼らはただ、ソリ出た砂だかの土地のループを、フライサイクルの、何の編隊で飛んでいる夢を見ているだけなのではなかろうか。

時間の停止した中を、ひたすら彩の方向へと飛びつづけた。

会話がとだえてから、いったいどれだけの時間が過ぎたことだろう。先刻ルイスがティーラに、交信したいという信号を送ってからでも、数時間が過ぎたはずだ。そのすぐあと、〈話し手〉にも信号してみた。彼らのダッシュボードにともったライトは、無視されたままだった。ちょうどルイスが、自分のサイクルのダッシュボードにともっているのを無視しつづけているのと同じように。

もうたくさんだ！ ふいにルイスはつぶやいて、送信機のスイッチを入れた。

オーケストラの爆発のような音がひびきわたり、つぎの瞬間、パペッティア人がこっちの姿に気づいて同時に叫んだ。そして——「探険隊を、現出の仕事など組織しなおさなければなりません。ルイス、いい案はありませんか？」

「ああ。まず、話を途中からはじめるというのは、失礼だね」
「すみません、ルイス。信号に応じてくれてありがとう。どうしていますか?」
「さびしくっていらいらしてる。みんな、あんたのせいだぞ。誰も呼びかけに答えてくれないんだ」
「わたしにできることがありますか?」
「あると思う。あんた自身は、産児制限法の改正にたずさわっていたのかい?」
「わたしがその計画の責任者でした」
ルイスはふんと鼻をならした。「そいつは困った。あんたがこの逆行性出生管理の主犯とはね! ティーラはもう二度とぼくには口もきいてくれなくなるな」
「あなたが彼女を笑ったのがいけないのです」
「わかってる。でも、このこと全体のうちで、ぼくがいちばんおそれているのはなんだか知っているか? あんたの、そのカホな尊大さなんかじゃないぜ。あんたが、それほど重大な決定権を握っているという事実、それから、なんでも傍若無人にやってのける、その——」
「ティーラ・ブラウンにきこえていないでしょうね?」
「カホナ! そんなはずがないじゃないか。ネサス、あんたが彼女にどんな思いをさせたか、わかってるのか?」
「彼女の自我が、それほど傷つくと知っていたら、どうしてしゃべったのです?」
ルイスは、思わずうーんとうめいた。問題が頭の中で解けると同時に、彼はその答えを口に出した。その答えを心にしまっておいたほうがいいなどということには、思いも及ばなかったし、

気がつくはずもなかったのだ。そういうふうにものを考えるたちではなかった。
パペッティア人がたずねる。「探険隊を再組織する方法があると思いますか?」
「あるとも」と答えて、ルイスはスイッチを切った。
パペッティア人には、当分そのことで頭を悩まさせておけばいい。

地表は下りにかかり、そしてふたたび緑色になった。
もうひとつ海をこえ、大きな河口の三角形のデルタ地帯の上を飛んだ。しかしその河床に水はなく、三角洲も乾ききっていた。風の流れが変わって、水源を干あがらせてしまったのだろう。
低空へおりてみてわかったのだが、一見でたらめにうねりくねっているデルタ部の水路は、ぜんぶ永久的に地表にきざみこまれたものだった。リングワールドをデザインした芸術家は、河の流れが勝手に水路をつくることには満足できなかったのだ。そして、その考えは正しかった。リングワールドの地層は、それほど厚くはない。どうしても人工的なものにする必要があったのだ。
しかし、水のない水路は、いかにも醜悪だった。ルイスは、口をすぼめて不満の意を表すると、そのまま飛びつづけた。

# 14 ひまわり花（サンフラワー）

前方あまり遠くないところに、山なみが現れた。

ルイスはひと晩じゅう操縦をつづけ、朝になってもかなりのあいだその任に当たっていた。どれだけの時間がたったのか、彼には確信が持てなかった。位置を変えることのない正午の太陽は、一種の心理的な罠だ。それは時間を自在にのばしたり縮めたりし、しかもルイスには、それがのびたのか縮んだのかもわからないのである。

感覚的に、ルイスは、休養（サバティカル）に出ているような気分になっていた。他のフライサイクルのことも忘れている。ひとりあてもなく飛んでいるという点では、果てしなく移りかわる地上の眺めも、ひとり乗りの船でなじみの星の彼方へさまよっていくのと、なんのちがいもない。ルイス・ウーは、宇宙にただひとり。そしてその宇宙は、ルイス・ウーにとって、ひとつのおもちゃだ。したがって、宇宙でいちばん重大な疑問とは――ルイス・ウーは、まだこんな状況に満足しているのだろうか？

いきなりダッシュボードの上に、オレンジ色の毛皮の顔が現れたので、ルイスは夢からさめたようにとびあがった。

「たいくつしているようだな。おれと操縦を交替しようか？」クジン人がいった。

「むしろ着陸したいよ。からだがこわばってきた」
「では降りろ。おまえが操縦しているのだから」
「誰も無理についてきてくれなくていいんだぜ」そういいながらルイスは、自分が本気でそう思っていることに気づいた。休　養の気分というのは、いつでも容易にとりもどせるものであった。
「おまえは、ティーラが、おまえを避けていると思うのか？　たしかにそうだろうが、彼女は、同じ立場にいるおれにも、呼びかけてこないのだ」
「あんたはむずかしく考えすぎるんだ。いや待て、ちょっと切らないでくれ」
「おれはひとりになりたいのだ、ルイス。あの草食いめが、おれの面目玉をふみにじったのだぞ」
「でも、ずいぶん昔の話じゃないか！　いや、切らないでくれったら。この哀れな老人に、さびしい思いをさせないでくれよ。あんたは、ずっと地上の様子を見てたかい？」
「見ていた」
「あのはだかの地域を見たか？」
「見たとも。浸蝕作用が岩までえぐって、環(リング)の床面がむきだしになっているところもあったな。ずっと昔に、何かのせいで、風向きのパターンが変わったのだろう。いくらリングワールドでも、あのような浸蝕が、急に起こるものではない」
「そうだな」
「ルイス。これはどの規模と力をもった文明が、どうして没落したのだろうか？」
「わからんね。はっきりいって、ぼくらには推測するすべがない。パペッティア人ですら、リン

グワールドの技術レベルには及びもつかない。何が彼らを手斧のレベルまで引きもどしたかなんて、どうしてわかる？」

「もっと原住民のことを知らなければならんな」と〈話し手〉。「これまで見たところ、彼らに、難破したライヤー号の船体を運ばせる見こみはなさそうだ。それのできる相手を見つけなければならん」

それははじめからルイスも心にしていたことだった。「その線では、いろいろアイデアもある——原住民に接触する効果的な方法ってやつさ」

「なんだと？」

「話す前に、とにかく着陸したいね」

「では着陸するがいい」

山々はフライサイクルの行く手に立ちはだかるように、ずらりと高峰をつらねていた。その峰峰の頂上から稜線全体が、あの真珠色の光沢を放っている。峰々をこえて吹きすさぶ風が、岩石を摩耗させ、環の床面の構造物質を露出させてしまったのだ。

ルイスは、編隊を、ゆるやかなまるみを見せる麓の丘陵地帯へ降下させていった。その目標は、山あいから流れだして、麓の丘陵一帯をどこまでも緑一色に蔽う森の中へ消えている、ひと筋の流れの水源付近である。

ティーラが呼びかけてきた。「どうなさるおつもり？」切り口上である。

「着陸するのさ。飛ぶのに飽きたんでね。だからちょっと切らないでくれないか。いいわけがした

いんでね」
　彼女はスイッチを切った。
「まあ、こんなとこだろうな」とルイスはつぶやいたが、確信はなかった。とにかく、弁明が待っていると知った以上、彼女も前よりは耳をかす気持になっているはずだ。
「このアイデアは、ネサスの〝神様気どり〟から思いついたんだ」ルイスがいう。残念なことに、きいているのは〈話し手（スピーカー）〉ひとりだ。ティーラは、サイクルからおりると、燃えたつような怒りの目を投げかけ、すたすたと森の中へはいっていってしまったのだった。
〈話し手（スピーカー）〉はそのオレンジ色の毛皮の頭を、しきりにうなずかせていた。両耳が、神経質な手にささえられた小さな中国ふうの扇子のように、ひくひくとふるえる。
「われわれは、この世界では、空中に浮かんでいるかぎり安全なようだ」と、ルイスは話しつづけた。「目的地へいきつけることだけは、まちがいない。やむをえなければ、無着陸のまま縁（リム）の外壁までたどりつくこともできるだろうし、環（リング）の構造物質がむきだしになっているところをえらんで降りることにしてもいい。あの物質の上には、害になる生物など育ちっこないんだから。
　だが、着陸しないかぎり、何も知ることはできない。このでっかいおもちゃなんか捨てて、早く原住民の手助けを求めるべきかもしれない。どうやら、いまのところまだ、誰かにライヤー号を、四十万マイルの地上をひっぱっていかせる以外に道はないみたいだ」
「要点をいえ、ルイス。おれは、運動をしなければならんのだ」
「とにかく外壁にいきつくまでのあいだに、リングワールドに関する知識を、もっとうんとあつ

めなければならないだろう」

「当然のことだな」

「そこでだ。神様のまねをしてみないか？」

〈話し手〉は躊躇をみせた。「文字どおりの意味でか？」

「そうさ。リングワールドの〈建設者〉には、恩も恨みもないし、また彼らが駆使したほどの力は持ちあわせないが、これでも原住民にくらべれば、神として充分通用する。まず、あんたを神様として――」

「光栄だな」

「――ティーラとぼくが侍祭をつとめる。ネサスがいれば、捕われの悪魔の役にぴったりなんだがね」

〈話し手〉の鉤爪が、にゅっとむきだしになった。「しかしネサスは、ここにはおらん。これからも、もどってはこないだろう」

「それが問題なのさ。この――」

「その話はやめろ、ルイス」

「それはひどい。あいつがいないと、芝居にゃならないぜ」

「では、あきらめることだな」

ルイスは、相手の鉤爪のことが、しきりと気になった。あれは意識的にコントロールできるのか、できないのか？　どっちにしろ、それはまだあらわに見えている。これがもし、交信機で話しているのだったら、〈話し手〉はとっくにスイッチを切ってしまっていたことだろう。

だからこそルイスは、着陸することに固執したのだった。

「まじりけなし、天来の妙案だぜ。あんたは神様にうってつけだ。人間の目から見ると、あんたの姿は、じつに印象的なんだ——ぼくのことばを額面どおりにとってほしいね」

「どうしてネサスが必要なのだ？」

「褒賞と罰とに、タスプが要るんだ。神として、あんたは、疑うやつをずたずたに引き裂き、肉切れを食っちまう。それが罰だ。褒賞には、パペッティア人のタスプを使う」

「タスプなしではやれないのか？」

「でも、忠誠を示す相手に対して、あれほど効果的な褒美はないぜ！　純粋な喜悦が、直接に脳へ押しよせるんだ。副作用もなければ、後遺症もない。タスプはセックスよりもずっといいって話だったぜ！」

「不愉快な倫理感だな。原住民はただの人間だが、おれは彼らをタスプ中毒には仕立てたくない。むしろ殺してやるほうが、慈悲というものだろう」と、〈話し手〉。「また、どっちにしろ、パペッティア人の持っているタスプは、クジン人向けのもので、人間には合わないはずだ」

「そうじゃないと思うよ」

「ルイス、あのタスプが、クジン族の頭脳構造に合わせたものだということは、知っているだろう。たしかに、うける感じという点では、おまえのいうとおりだ。あれは宗教的な甘美さにも、悪魔的な体験にもつながるものだったな」

「だがそれが人間に効くかどうかわからないというわけか。ぼくは、効くと思うね。ぼくは、ネサスってやつを知ってる。あいつのタスプが、両方に効くか、あるいはタスプをふたつ持ってい

CamScannerでスキャン

るか、どっちかだよ。彼が人間をあやつるすべを持たなかったら、ぼくもこんなところへはきていないはずだ」

「また乱暴な推測をする」

「彼を呼んで、交渉してみないか？」

「だめだ」

「きいてみるだけなら害はなかろう？」

「それだけではなんの役にも立たん」

「忘れていた。あんたには好奇心がないんだったな」ルイスはつぶやいた。知的種族で、猿なみの好奇心を持っているものは、そう多くはないのだ。

「おれの好奇心をかきたてようとしたのか？　なるほど。そうやっておれにも、ひと役買わせるつもりだったわけか。ルイス、パペッティア人も、なんとか縁(リム)の外壁へはたどりつくだろう。だがそれまでは、ひとり旅をつづけさせておくのだ」

そして、ルイスが答えるより早く、クジン人はくるりと背を向けると、ひじ根植物(エルボー・ルート)の茂みの中へとびこんでいってしまった。まるで交信機のスイッチを切るのと同じような、効果的な議論の終わらせかただった。

全世界が頭上に落ちかかってきたような気持だった。ティーラ・ブラウンは、自己憐憫のどん底にあって、すっかり打ちひしがれ、涙にくれていた。

そこは、悲嘆に沈むには、まさしくおあつらえむきの場所であった。

あたり一帯が濃緑色だ。頭上には幾重にも植物が生い茂り、日光の直射もとどいてこない。しかし地表の近くでは茂みもうすく、容易に歩きまわることができる。自然を愛するものにとっては、またとない楽園である。

ひらたい垂直な岩壁が、滝のしぶきに濡れてそそり立ち、深い澄んだ淵をふところにたたえている。ティーラがいるのは、その淵の中だった。滝の音が、彼女の泣き声もほとんどのみこんでしまうが、しかし、岩の壁が、シャワー室のように音響を増幅してくれる。あたかも大自然が、彼女とともに泣いてくれているかのようだ。

彼女は、ルイス・ウーの姿に気がつかなかった。

未知の世界に難破している身である以上、いかにティーラ・ブラウンといえども、応急医療セットなしで遠出することはありえない。それはベルトについた小さなひらたい箱で、内部には、探知回路がくみこまれている。ルイスは、その信号を追ってきて、池の岸にあるたいらな自然の花崗岩の上に積みかさなっているティーラの衣類にたどりついたのだった。

濃緑の明かり、滝のとどろき、そして、すすり泣きの反響。ティーラは、ほとんど滝の真下にいる。何かの上にすわっているらしく、両腕と肩が水面の上に出ていた。首をうなだれ、黒い髪が前へ垂れ、その顔をかくしている。

もどってくるのを待っていても、らちがあきそうにない。ルイスは衣服を脱ぎ、それをティーラの服のそばにかさねた。空気のつめたさに身ぶるいし、肩をすくめると、そのままとびこんだ。

同時に、しまったと思った。

休養（サバティカル）に出ていて、地球に似た世界にめぐりあうことは、ほとんどない。彼が着陸する惑星と

いえば、通常地球と同じように文明化されたところばかりだった。ルイスは馬鹿ではない。もし、水の温度のことが、ちょっと頭に浮かんでさえいたら……。

が、そこまでは思い及ばなかったのだ。

雪をいただいた山から流れ落ちる水である。ルイスは、つめたさに悲鳴をあげようとしたが、頭はもう水面下にあった。ここで息を吸いこまないだけの分別くらいはある。

ようやく水面に出ると、つめたさと息苦しさに、水をはね散らしながらあえいだ。

ふいに、それが楽しくなった。

水の中でどうからだを動かせばいいかは、よくわかっている。もっとも、こんなつめたい水ははじめてだった！　リズミカルに水を蹴りながら浮かんでいると、滝壺の渦から寄せてくる流れが肌に感じられる。

ティーラも、もう彼に気がついていた。滝の下にすわったまま、待っている。彼は彼女のほうへ泳いでいった。

彼女に向かって何かいったら、それが悲鳴になってしまいそうだ。いいわけも愛のことばも、どこかへいってしまった。しかし、彼女にふれることならできよう。

彼女は、身をひこうとはしなかった。が、また頭を垂れて、髪で顔をかくした。拒否の気持が、ほとんどテレパシーなみの強さで伝わってくる。

ルイスは、その気持を尊重することにした。

あたりを泳ぎまわって、十八時間もフライサイクルの座席にまたがっていたためこわばった筋肉をほぐした。水はすばらしくいい気分だった。しかしそのうち、つめたさによる無感覚が痛み

に変わり、このままでは肺炎にかかりそうに思われた。

　彼は彼女の腕をとり、片手で岸を指さした。今度は彼女もうなずいて、彼のあとにつづいた。

　ふたりは、温度調節式のつなぎを毛布のようにひろげた下で横になり、ふるえながらしっかりと抱きあった。徐々に、こごえきったからだに、暖かみがしみとおってくる。

「笑ってわるかった」ルイスがいった。

　彼女はただうなずいた。釈明は一応きくが、許しはしないぞという態度だ。

「でも、おかしかったんだよ。宇宙きってての臆病もののパペッティア人が、まるで牛の新種でもつくりだすみたいに、図々しくも人間とクジン人の改良に精出していたんだからね！　どんなに危険な賭けかは、承知していたはずなのに」しゃべりすぎていることは彼自身もわかっていたが、自分を正当化するためには、説明が必要だ。「そして、その結果は、ごらんのとおりさ！　まあ、理性的なクジン人をつくりだす計画は一応成功した。ぼくは、人間－クジン戦争についてはほとんど知らないが、かつてのクジン人がどんなに兇暴だったかは、よくわかってる。〈話し手〉は、ジグナムクリッククリックを吹っとばすことを思いとどまってくれたが、彼の先祖だったら、環の床面が出るまで粉砕しつくしただろう。

　しかし、幸運な人間をつくりだすというほうは――」

「それが失敗して、あたしみたいのができちゃったと思ってるんでしょ」

「カホナ。ぼくがきみを侮辱するとでも思うのかい？　その計画のこっけいさをいってるんだよ。おまけに、それをやったのがパペッティア人とはね。それで笑ったのさ」

「あたしも笑うと思ったの？」

「それは飛躍のしすぎだよ」

「いいわ」

彼女はべつに、彼が笑ったのを憎んでいるわけではなかった。彼女は機嫌をなおしたいだけで、報復したいわけではない。そして、つなぎ(カヴァロール)にくるまった中で、からだを押しつけあっているのは、たしかにいい気持だった。

ルイスは、静かにティーラの背をさすってやった。彼女はそれですっかり気分がほぐれたようだ。

「で、これからまたみんないっしょに探険をつづけたいんだが」やがて、彼がいいだすと、彼女はからだをこわばらせた。「気にいらないんだね」

「そうよ」

「ネサスのことかい？」

「あいつ、きらい。大きらいよ！　あたしの先祖をまるで――動物みたいにいじくったんだから！」そこで、ちょっと息をついた。「でも、あいつがもどってきたら、〈話し手(スピーカー)〉が、空の向こうまで吹きとばしてくれるでしょう」

「もしぼくが、ネサスをうけいれるように、〈話し手(スピーカー)〉を説きふせたとしたら？」

「どうしてそんなことができるのよ？」

「できたとしたら？」

「でも、なぜそんなことを？」

「ネサスがまだ、ロングショット号を握っているからさ。人類を百年以内にマゼラン雲まで移住

させるには、ロングショット号による以外に道はない。もしネサスをほっぽりだして、リングワールドから引きあげたら、あの船は手にはいらないんだ」
「ひどい。ひどいわ、ルイス！」
「考えてごらん。きみは、もしパペッティア人がクジン族に手を出さなかったら、ぼくたちはみんなクジン人の奴隷になっていたところだといったね。しかし、もしパペッティア人が産児制限法の改正に手をかさなかったら、きみは生まれてさえいなかったんだぜ！」
そんな考えをうけいれる気が彼女にないことは、顔にはっきりと現れていた。その表情にふさわしく、彼女は目をかたく閉じていた。
彼は説得しようとつとめた。「パペッティア人が何をしたにしろ、それはずっと昔のことだ。水に流してやるわけにはいかないのかい？」
「だめ！」彼女はごろりと彼から離れ、暖かくなった蔽いの下からころがり出ると、またつめたい水の中へとびこんだ。ルイスはちょっと迷ったが、結局そのあとを追った。つめたい、凍りつきそうな感触……彼は顔をあげる……ティーラはもう、滝の下の、もとの場所へもどっていた。
さそいかけるような笑顔だ。どうして彼女は、こんなにすばやく気分を変えることができるのだろうか？
彼は、彼女のほうへ泳いでいった。
「相手をだまらせるのに、そんな手があったとはね！」そういって笑った。彼女にそれがきこえたとは思えない。自分にもきこえないくらいのはげしい水音だった。しかしティーラは、同じように声は聞こえなかったが、笑みを返しながら、彼に手をさしのべた。

「とにかく、くだらん議論だったな!」彼は滝の音に負けない声でどなった。
おそろしいほどつめたい水。唯一のぬくもりはティーラのからだだ。ふたりは、水中に浅くかくれた岩の粗い表面の上に膝をついて、しっかりと抱きあった。
愛は、暖かさとつめたさの微妙なブレンドだ。愛をかわすことには、安らぎがあった。それで当面の問題がかたづくわけではない——しかし、問題を遠くに追いやることだけは、できそうだった。

ふたりは、暖かいつなぎ(カウアロール)にいっしょにくるまったまま、まだ少しふるえながら、サイクルのほうへもどっていった。ルイスはだまっていた。ティーラ・ブラウンについて、ひとつのことだけは、もう彼にもはっきりわかっていたからである。
彼女は、拒否のしかたを学んだことがないのだ。ノウといった以上それを押しとおすやりかたを、彼女は知らない。冗談めかしたり、軽くつきはなしたり、ときにはひどく意地の悪い態度を見せたり、そういう、ほかの女たちがやるような、計算ずくの拒否をつづけることもできない。そんな手管(てくだ)が身につくほど、彼女はこれまで対人関係で傷ついたことがなかったからだ。
たとえルイスが、審判の日がくるまで、がみがみいいつづけたとしても、彼女は、それをやめさせるすべを知らないだろう。ただし、それに対して彼を憎むことはできる。彼がだまっていたのはそのためもあり、またべつの理由もあった。
彼は、彼女を傷つけたくなかったのだ。
ふたりはだまったまま手をとりあい、指先で愛をかわしながら、歩いていった。

「いいわ」ふいに彼女がいいだした。「もしあなたが〈話し手〉を説得できたら、ネサスを呼びもどしてもかまわない」

「そいつはありがたい」ルイスは、驚きをかくそうとはしなかった。

「何もかも、ロングショット号のためよ。ほかに方法はないんでしょう?」

ゆっくり食事をとり、腕立て伏せや上体屈伸などありきたりな運動をし、ついでありきたりでない木のぼり運動などまでやって時間をつぶした。

やがて、〈話し手(スピーカー)〉がもどってきた。こんどは、口のまわりに血のあとはなかった。彼は自分のサイクルで、抗アレルギー錠ではなく、煉瓦形のなまなましい肝臓(レバー)をダイアルした。偉大なる狩人(ハンター)のお帰り、か、とルイスは思いながら、口は固くつぐんでいた。

着陸したとき、空はすでに曇っていた。出発するときもまだ、鉛色の雲が、一様に厚く垂れこめていた。ルイスは、交信機を通じて、さきほどの議論をむしかえした。

「でも、ずっと昔のことだぜ!」

「ルイス、おまえにはわかるまいが、名誉の問題とは、時間に左右されるものではないのだ。そのうえ、やつらのおこなったことの結果は、まだわれわれの上にはっきりと残っている。なぜネサスは、クジン人を、ここへ連れてきたと思うか?」

「彼が説明してくれたじゃないか」

「なぜ、ティーラ・ブラウンを選んだと思うのか? パペッティア人の〈至後者(ハインドモースト)〉は、ネサスに、人間の幸運の能力が遺伝的であるかどうか、たしかめるよう命じたのにちがいない。同じように彼は、クジン族が温順になったかどうかをたしかめようとしているのだ。とくに、戦勝民族

への使節のひとりであるおれを選んだのは、おれが、彼らの求めている温順さを発揮するものと見こんだからだ」
「そのことは、ぼくも考えていたよ」じつのところルイスは、もうひとつ奥を読んでいたのである。もしやネサスは、〈話し手〉の反応ぶりをみるために、わざと星間種子誘引機のことを洩らすよう指示されていたのではなかろうか？
「それはどうでもよい。おれはけっして温順ではないということを、ここに断言するぞ」
「そのことばを使うのはよさないかね？ そいつのせいで、あんたの思考は、ゆがんじまうんだぜ！」
「ルイス、どうしてそのように、パペッティア人を弁護するのだ？ どうしてあいつを仲間にいれたがるのだ？」
いい質問だ、とルイスは思った。パペッティア人にひとり旅のこわさを味わわせてやるのも悪くはない。が、もしルイスの予想が正しければ、ネサスは絶対に危険のない方法をとっているはずだ。
そのことに気づいたのは、ルイス・ウーが異星人好きだという、それだけのためだろうか？ それとも、もっと一般的なことと考えるべきか？ パペッティア人は異質の存在であり、重要なのはその異質さである。ルイス・ウーほどの年齢になると、人生に飽きて、変化がなければやっていけなくなる。ルイスにとって異星人とつきあうことは、必須の条件なのだ。
サイクルの編隊は、山の斜面にそって上昇しつつあった。「視点の問題さ」とルイス。「われわれは今、異常な環境にいる。人間にとってもクジン人にとっても、これほど異質な場所はない

「いいわ」ふいに彼女がいいだした。「もしあなたが〈話し手〉を説得できたら、ネサスを呼びもどしてもかまわない」

「そいつはありがたい」ルイスは、驚きをかくそうとはしなかった。

「何もかも、ロングショット号のためよ。ほかに方法はないんでしょう？」

ゆっくり食事をとり、腕立て伏せや上体屈伸などありきたりな運動をし、ついでありきたりでない木のぼり運動などまでやって時間をつぶした。

やがて、〈話し手〉がもどってきた。こんどは、口のまわりに血のあとはなかった。彼は自分のサイクルで、抗アレルギー錠ではなく、煉瓦形のなまなましい肝臓をダイアルした。偉大なる狩人のお帰り、か、とルイスは思いながら、口は固くつぐんでいた。

着陸したとき、空はすでに曇っていた。出発するときもまだ、鉛色の雲が、一様に厚く垂れこめていた。ルイスは、交信機を通じて、さきほどの議論をむしかえした。

「でも、ずっと昔のことだぜ！」

「ルイス、おまえにはわかるまいが、名誉の問題とは、時間に左右されるものではないのだ。そのうえ、やつらのおこなったことの結果は、まだわれわれの上にはっきりと残っている。なぜネサスは、クジン人を、ここへ連れてきたと思うか？」

「彼が説明してくれたじゃないか」

「なぜ、ティーラ・ブラウンを選んだと思うのか？　パペッティア人の〈至後者〉は、ネサスに、人間の幸運の能力が遺伝的であるかどうか、たしかめるよう命じたのにちがいない。同じように彼は、クジン族が温順になったかどうかをたしかめようとしているのだ。とくに、戦勝民族

山の向こうには、羊毛のような雲が、無限の地平まで、目のとどくかぎりひろがり、そのさきは灰色にかすんでいた。フライサイクルは、白い雲海と青い空のあいだにはさまれてただよっているかのように思われ、その空にかかっている〈アーチ〉は、輪郭が見えるか見えないかすれすれのところだ。

その山も後方へ去った。ルイスはふと、あとにしてきた森の中の滝と淵が、ひどく惜しいような気分になった。もう二度とあの場所を見つけることはできないだろう。

サイクルのひきおこす衝撃波が雲にぶつかるあたりから、渦を巻く波頭のような航跡が、ずっと後方へつづいている。そして前方には何か小さなものが、無限の地平の一様さをやぶっていた。たぶん山の峰か暴風だろうとルイスは思ったが、ひどく遠く、したがってずいぶん大きいようだ。手をのばした距離のピンの頭くらいのものである。

〈話し手〉が沈黙をやぶった。「雲に裂け目が見えるぞ、ルイス。前方やや回転方向よりのところだ」

「ぼくにも見える」

「どうしてあそこだけ光がさしているのかな？　地表からの反射にしては明るすぎる」

たしかに、その雲の切れ目の縁は、まぶしく輝いている。ふむ……「もしかすると、この下はずっと、リングワールドの構成物質がむきだしになっているんじゃないか？　これまでに見た最大の規模でね」

「もっと近くへ寄ってみるか」

「よかろう」とルイス。

銀色のしみのような〈話し手〉のフライサイクルが、いきなりぐいと右へ向きを変えて遠ざかりはじめた。マッハ二のスピードでは、地表もちらりと見えるだけだろうが……。

ひとつ、問題があった。どっちに目を向けているべきだろうか？　銀色の点のような〈話し手〉のフライサイクルか、それとも、ダッシュボードに浮かぶ小さなオレンジ色の猫みたいな顔を見ているほうがいいのか？　前者は実物だし、後者だとこまかいところがわかる。両方とも情報を送ってくるのだが、内容にちがいがあるのだ。

本質的に、満足のいく答えが出るはずもない。現実には、ルイスは漠然と両方を等分に眺めているのだった。

〈話し手〉の機が、雲の裂け目の上へさしかかる……。

交信機に、〈話し手〉の無気味な咆哮が尾をひいた。銀色の点が、突然ぎらりと光り、〈話し手〉の顔に白光がひらめいた。目をしっかりと閉じている。そのまま口を大きくあけて叫んでいるのだ。

その映像がまた暗くなった。〈話し手〉が雲の裂け目を渡りきったのだ。片手で顔をおさえているが、その毛皮はまっ黒こげになり、ぶすぶすといぶっているようにみえた。

かすかな銀色の点のような〈話し手〉のフライサイクルの下に当たる雲の表面を、明るい光の輪が動いていく……まるで下からスポットライトが追っかけているかのようだ。

「〈話し手〉！　どうなの？」ティーラが呼びかけた。

その声を聞いたらしく、〈話し手〉は顔から手を離した。その目にそった帯状の部分だけが、焼けていない。それ以外の全身の毛皮は、すっかり黒こげだ。〈話し手〉は目をひらいて、固く

閉じ、そしてもう一度ひらいた。「目がつぶれた」と叫ぶ。

「ええ。でも、どうなの?」

〈話し手(スピーカー)〉の身を案ずるあまり、ルイスは、そのピントはずれの質問にもほとんど気がつかなかった。しかし彼女の口調はどこか奇妙だった。心配しているかのようだが、その奥には、相手の返事をとがめて、べつの答えを求めているようなところが感じられるのだ。

だが、時間がない。ルイスは叫んだ。「〈話し手(スピーカー)〉! そっちのサイクルを、ぼくのに追従(スレイヴ)させろ。退避するんだ」

〈話し手(スピーカー)〉の手が操縦盤の上をまさぐった。「よし、セットしたぞ、ルイス。だが、どこへ退避する?」痛みのせいで、切れぎれにうめくような声だ。

「山のほうへ引っかえす」

「いかん。時間がかかりすぎる。ルイス、相手の正体はわかっているのだ。おれの判断が正しければ、雲の遮蔽があるかぎり、われわれは安全だ」

「え?」

「場所をさがしてくれ」

「あんたを手当てしなきゃ」

「そうだ。しかし、まず安全に着陸できる場所を見つけろ。雲のできるだけ厚いところに降りるのだ……」

雲の下へ下降しても、あたりはそれほど暗くはなかった。雲をとおしてくる光が、地上からぎ、

らぎらと反射してくるのである。
そこは、ゆるやかに起伏する平原だった。環(リング)の構成物質ではなく、土壌と植物のある地面のようだ。
ぎらぎらする照りかえしから目をそむけながら、ルイスは下降していった。
……あたり一面、はるか地平のかなたまで、ただ一種の植物が地表に散在している。その一本一本が、各一個の花をつけ、その花がいっせいに、下降するルイスの機のほうへ顔を向ける。おそろしく熱心な無言の大観衆といったところだ。
着陸して座席をおりると、すぐそばに植物の一本があった。
ふしくれだった緑色の茎が、一フィートほどの高さに立っている。その上についている花は、大きな男の顔くらいだ。その裏側には、まるでレース編みのように、何かの脈と腱が層になっており、そして内側の表面は、みごとな凹面鏡をなしていた。その中心から短い茎が突きだし、先端は濃緑色のふくらみで終わっている。
そして、見わたすかぎりすべての花が、こっちに顔を向けているのだった。まぶしいほどの光が周囲からあつまってくる。それが彼を殺すためだと知って、ルイスは不安げに空を見あげたが、雲の切れる様子はなかった。
「あんたのいうとおりだ」と交信機に声を吹きこむ。「これは、スレイヴァーのひまわり花(サンフラワー)だ。もし雲がかかっていなかったら、われわれは、あの山の頂上をこえたとたんに焼き殺されていたところだったよ」
「どこかそのひまわり花(サンフラワー)から身をかくす場所はないか？　例えば、洞窟か何か？」

「見つからないな。地面が平坦すぎる。いまのところ、ひまわり花（サンフラワー）は、うまく焦点を合わせられないでいるが、とにかくまわりじゅうがぎらぎら光ってる感じだ」

ティーラが割りこんだ。「ふたりとも、いったいどうしたっていうの？　ルイス、着陸しなきゃいけないわ。〈話し手（スピーカー）〉が苦しんでるのよ」

「いかにも、おれは苦しんでいるのだ、ルイス」

「じゃ、危険を承知でやってみるしかあるまい。ふたりともおりてくるんだ。雲が切れないことを祈ろう」

「いいわ！」交信機のティーラの映像が、活潑に動きだした。

ルイスは、一分かそこらのあいだ、あたりをさがしまわってみたが、結果は予想どおりだった。そのひまわり花（サンフラワー）の領域内には、いかなる異種の生物の姿も見えないのだ。小さな下生えひとつない。飛びまわるものも、灰に似た土壌に埋もれたものもない。植物自身にとりつく虫も、菌類も、病斑のようなものも見あたらない。もし、その植物自身が病気におかされたら、他の花がそれを焼いてしまうのだろう。

鏡面を持った花というのは、おそるべき武器である。その本来の目的は、陽光を、中央の緑色をした光合成結節に集中することにある。しかしそれはまた、植物を食う動物や昆虫に焦点を合わせて殺すこともできる。ひまわり花（サンフラワー）の群落は、あらゆる敵を焼きつくしてしまうのだ。そして、光合成をおこなう植物にとっては、生きとし生けるものすべてが敵であり、その死体は肥料となるのである。

「それにしても、こんなものがどうしてこんなとこにあるんだ？」ルイスは首をかしげた。ひま（サン）

わり花は、通常の植物性生命体と共存することができない。ひまわり花は、あまりに強力なのだ。したがって、これがリングワールド系のもとの惑星上にあったものだとは考えにくい。

リングワールドを建設した人びとは、近くの星系をめぐって、有用な、あるいは装飾になる植物をあつめたにちがいない。彼らはたぶん、人間空域内のシルヴァレイズ星をも訪れたのだろう。そこで、このひまわり花が、装飾用に使えると考えたのにちがいない。

「それでもはじめは、厳重にかこっておいたんだろうな。どんな馬鹿でも、そのくらいの分別はあるはずだ。例えば、一段高くなった環の床むきだしの区域でまわりをかこんでおけば、中にとじこめておくことができる。

だが、それがうまくいかなかったんだ。何かの拍子に、種子が外へとびだした。それが、いまではどこまでひろがってしまったのか、見当もつかない」ルイスはつぶやいて、思わず身ぶるいした。彼とネサスが、前方はるかに認めた〝光り輝く点〟は、これだったのだ。眼路のかぎり、このひまわり花に対抗しようとする生物は見あたらない。

いずれそのうち、時間さえたっぷりあれば、ひまわり花は、リングワールド全土をも支配することだろう。

しかし、それにはたいへんな時間がかかる。リングワールドは広い。どんな存在にとっても、その広さは充分以上だ。

CamScannerでスキャン

# 15 夢の城

呆然と立ちつくすルイスは、二台のフライサイクルがそばへ降りてくるのにも、ほとんど気づかなかった。〈話し手〉(スピーカー)の怒号が、彼をもの思いから手荒く引きもどした。「ルイス！ おれのサイクルにあるスレイヴァーの物質分解機を使って、かくれる穴を掘るのだ。ティーラ、こっちへきて、おれの手当てをしてくれ」
「かくれる穴だって？」
「そうだ。獣のように地中にかくれて、夜を待つのだ」
「よし」ルイスはようやく気をとりなおした。傷を負った〈話し手〉(スピーカー)に、いちいち指図をうけているのでは、あまりになさけない。上空の雲が切れないうちに、なんとかしなければならないのだ。わずかな隙間から陽がさしただけで、ひまわり花(サンフラワー)は確実に三人を焼き殺すだろう。だが、夜になりさえすれば——。
物質分解機をさがしながら、ルイスは、なるべく〈話し手〉(スピーカー)から目をそむけていた。ひと目見ただけで充分だった。クジン人は、全身ほとんどまっ黒にこげ、かつて毛皮だったべっとりした灰のあいだから、体液がしたたっていた。あちこちにぱっくりと、赤い肉を見せた傷口がひらいている。毛のこげたにおいのひどさは、すさまじいばかりだ。

ようやく分解機を見つけた。液体が流れたようなかたちの握りのある二連装ショットガンだ。それと並んで置かれている武器を見て、彼は苦笑した。もし〈話し手〉が、携帯レーザーでひまわり花を焼き払おうと提案していても、動顛したルイスは、たぶんいいなりになっていたことだろう。

分解機をとりだすと、吐き気がしそうになって、あわててあとじさりしながら、彼は自分の弱さを恥じた。〈話し手〉のひどい姿を見ているだけで、全身に苦痛を感じる。苦しみを知らぬティーラのほうが、ルイスよりもずっと役に立ちそうだ。

ルイスは、武器を三十度下方に向けた。宇宙服のヘルメットだけを頭にかぶって、慎重に、ふたつある引き金のひとつをしぼった。

あっというまに大地に穴があいた。どれほどの早さで掘り進んでいるのか、一瞬のうちにあたりは塵でいっぱいになってしまったので、ルイスには見当もつかなかった。ビームのあたる場所からちょっとしたハリケーンが吹きだしてくる。その風に対抗するために、ルイスはぐっと前のめりに身をかがめた。

円錐形のビームに照射されたところでは、物質内の電子が中性の粒子となり、土壌も岩も、原子核相互の反撥で原子の段階まで引き裂かれ、単一原子の塵となって吹きつけてくるのだ。ヘルメットをつけていてよかった。

……彼は、引き金をはなした。穴はもう、三人とフライサイクルをいれるのに充分な大きさ……

……ろうかと、彼は

思った。だが、そうすれば電流が生じると、〈話し手（スピーカー）〉は、こともなげにいっていた。あのときには、これほどの威力があろうとは、思いもよらなかったのである。

　すでにティーラと〈話し手（スピーカー）〉も、座席を離れていた。〈話し手（スピーカー）〉は、全身ほとんどあかはだかだ。座席についていた尻のところと、両眼をかこむ幅ひろい部分だけに、オレンジ色の毛皮が残っている。それ以外の、むきだしの皮膚は、赤紫色の血管があらわになり、深紅のひびわれでいっぱいだ。その彼に、ティーラが、ふれると白い泡（フォーム）になるものをスプレイしている。毛と肉のこげた悪臭で、ルイスはとても近づけなかった。「できたよ」と告げる。

　クジン人が目をあげた。「目が見えるようになったぞ、ルイス」

「よかった！」実際それが何より気がかりだったのだ。

「パペッティア人は、わが軍隊用の医療セットを用意していた。民間のものより、はるかに優秀だ。あやつが、軍用品に近づけたはずはないのにな」クジン人の声は、怒りを含んでいた。贈賄のあったことを予想したのだろう。事実そのとおりだったかもしれない。

「ネサスに話してくる」といって、ルイスはふたりをよけてサイクルに向かった。クジン人は、いまや頭から足の先まで、白い泡（フォーム）にくるまれている。もうにおいは全然しなかった。

「あんたの居場所はわかってるんだぜ」と彼はパペッティア人によびかけた。

「それはすばらしい。ルイス、どこだというのです？」

「ぼくらのうしろについてるのさ。視界を去ると同時に、あんたは大きく迂回して、うしろへま

CamScannerでスキャン

わったんだ。ティーラと〈話し手(スピーカー)〉は、まだ気づいていない。彼らには、パペッティア人のようなものの考えかたはできないんでね」

「ふたりは、パペッティア人のわたしが先に立って進んでいると思っているのですか？　まあ、そう思ってくれるほうがいいでしょう。それにしても、またわたしを仲間にいれてもらうチャンスは、ありそうですか？」

「いまはだめだね。それはもっとあとだ。ところで、用件にかかろう……」彼はパペッティア人に、ひまわり花(サンフラワー)の大群落のことを話した。〈話し手(スピーカー)〉の怪我について詳しく話しはじめると、ネサスの頭は、交信機のカメラの視界の下方へ沈んでしまった。

ルイスは、パペッティア人がもう一度顔を出すまで待ち、それからスイッチを切った。そう長くひっこんでいないことは、よくわかっていた。なにしろ、自分の命を守ることにかけては、用心深さのかたまりのような手合いなのだ。

日没まではあと十時間ほどある。一行は、分解機で掘った塹壕の中で、日暮れを待った。〈話し手(スピーカー)〉は、そのあいだずっと眠りつづけていた。ルイスとティーラは、彼を壕へ連れこんだあと、またクジン人の医療セットのスプレイを使って、眠れる姿勢にしてやったのだ。白い泡(フォーム)はフォームラバーの枕のように、彼をしっかりと包みこんでいた。

「世界でたったひとりの、ふわふわしたクジン人ね」ティーラがいった。

ルイスも眠ろうとつとめた。ちょっとのあいだうとうとし、途中で目をさましかけたとき、明るい陽ざしをさえぎって、壕の縁が、くっきりと影を落としているのが見えた。彼は寝がえりを

うって、また眠りこんだ……。
それから、本当に目がさめたとき、彼は思わずぞっとして、全身に冷汗をかいた。影が見えたのだ！　もしあのときうっかり身を起こして見まわしたりしたら、たちまちこんがりと焼かれていたところだ！
しかしまた、雲がもどってき、ひまわり花の攻撃を防いでくれた。
ついに、一方の地平から闇がせまってきた。空が暗くなったのを見て、ルイスは他のふたりを起こしにかかった。

一行は雲の下を飛んだ。ひまわり花の見える場所にいることが大切だった。まだその群落がつづいているあいだに夜が明けだしたら、また昼のあいだ、身をかくしていなければならない。
ときどきルイスは、低空におりて、様子をうかがった。およそ一時間も飛びつづけたろうか……やがて、ひまわり花の生えかたが、まばらになってきた。最近焼きはらわれたらしい森の、黒い根株が残っているあいだに、ぽつぽつとひまわり花が芽を出しはじめている地域もあった。そういう場所では、ふつうの雑草も、一見ひまわり花と競いあっているかのように見えた。
そしてやがて、ひまわり花の姿は、まったく見えなくなった。
やっとルイスも、眠れそうだった。

ルイスは、催眠薬でも打たれたように、眠りに引きこまれた。目がさめたとき、あたりはまだ夜だった。周囲を見まわすと、前方やや回転方向よりに、明かりのちらつくのが見えた。

ぼんやりした頭で、彼は、音波シールドの中に蛍でもはいりこんだのか、何かそういうつまらぬものだろうと思った。が、目をこすってもう一度見なおしても、明かりは依然としてそこにあった。

彼は、〈話し手（スピーカー）〉の交信機への呼びだしボタン（コール）をおした。

その光は、近づくにつれて、はっきりと見えてきた。リングワールドの暗い夜景を背景に、それはまるで、太陽の光を一点で反射しているかのような光りかただった。

ひまわり花（サンフラワー）ではない。いまは夜なのだから。

家かもしれない、とルイスは思った。しかし、あのような照明を、原住民がどこから手にいれられるだろうか？　だがまた、前にもああいった家を見のがしてしまった可能性もある。フライサイクルの巡航速度では、北アメリカ大陸を横断するのにも、二時間半しかかからないのだ。

明かりはもう、一行の右側を通りすぎようとしている。だのにまだ〈話し手（スピーカー）〉は応答してこない。

ルイスは、自分のサイクルを編隊から切りはなした。闇の中で、彼は苦笑いしていた。あとの二台は後方にあり、〈話し手（スピーカー）〉が操縦に当たっている（自分がやるといってきかなかったのだ）。〈話し手（スピーカー）〉のサイクルのいる方向へ、記憶にたよって、彼は近づいていった。

雲に散らされた空のアーチからの光でも、音波シールドは、そこから出る衝撃波の、いくつかの直線があつまる一点として見わけられる。あたかもフライサイクルと、〈話し手（スピーカー）〉の灰色のシルエットが、ユークリッド幾何学的な蜘蛛の巣にかかっているかのような眺めだ。

ルイスは、ほとんど危険なほどにまで接近し、スポットライトを点けてすぐに消した。闇の中

で、白っぽい幽霊のような相手の姿が、急にしゃきっとするのがわかった。ルイスは自分のサイクルを、注意ぶかく、クジン人と謎の光点のあいだに割りこませた。

そして、もう一度スポットを当てる。

〈話し手〉が交信機に答えてきた。「わかったぞ、ルイス。おれも見た。何か光が通りすぎていくな」

「しらべてみようじゃないか」

「よろしい」〈話し手〉は、機首を光のほうへ向けた。

一行は闇の中で、まるで沈んでいくビール瓶にむらがる物見高いうぐいのように、ぐるぐると旋回をつづけた。光の正体は、およそ一千フィートの高さに浮かぶ十階建ての城で、それが、古代のロケット船の計器盤さながらに、全館が煌々と明かりをともしているのだった。

ただひとつ、天井から壁へかけての曲面にそって、巨大な展望窓があった。大劇場を一館そっくりのみこんでしまえそうな大きさだ。その中のホールでは、床が円形に一段高くなった周囲を、食卓が迷路のようにとりかこんでいる。天井の高さは優に五十フィートはあり、そのがらんとした空間に、針金細工らしい抽象的な造形作品がひとつ、ぽつりと浮かんでいた。

いつもながら、リングワールドにおけるゆとりの大きさには、驚くほかはない。地球では、自動操縦なしに乗り物を飛ばすことは重罪に値する。墜落したが最後、どこへ落ちようと、誰かを殺すことになるからだ。それがここでは、数千マイルもの荒野がつづき、各都市の上には大きな建物が浮かび、その建物の上階の部屋は、天井の高さが五十フィートもあるというぐあいなので

ある。

　この城の下にも都市があった。そこには明かりは見えない。〈話し手(スピーカー)〉は、獲物を狙う鷹のようにその上空を低くかすめ、空のアーチからそそぐ青い光をたよりに、すばやく偵察を終えた。もどってきた彼の報告によると、この都市もジグナムクリッククリックそっくりだということだった。

「夜が明けてから調査しよう。おれには、この浮かぶ要塞のほうが、重要なように思える。もしかすると、文明の没落以後、誰も手をふれていないかもしれんぞ」

「独立の動力源を持っているんだろう」ルイスが推測する。「だが、どういうわけで？　ジグナムクリッククリックには、そういう建物はなかったね」

　ティーラのサイクルが、城の下面すれすれに、もぐりこんでいった。とたんに、交信機の彼女の映像が、驚きの目を大きく見ひらき、そして叫び声。「ルイス！　〈話し手(スピーカー)〉！　ちょっと、きてみてよ！」

　ふたりは何を考えるひまもなく、彼女のあとを追った。ルイスが彼女と並んだとき、彼は突然、頭上にかかっているものの巨大さに気づいて、ふるえあがった。

　その下部はほとんど全面が窓で占められている。しかもその底面には、平坦なところがない。この城を地上におろすことはできないのだ。いったい何ものが、どうやって、こんな基礎のない建物をこしらえたのか？　コンクリートと金属材の、しかも対称性を欠いた構築物を、いったいどんなカホな仕掛けで宙に支えているのだろうか？　肝っ玉がひっくりかえりそうになるのをおさえながら、ルイスは、この、中くらいの客船の質量にも匹敵しそうな空中楼閣の真下で、ティ

ーラのかたわらへサイクルをよせていった。

ティーラが発見したものは、ひとつの驚異であった。それは、底面からもう一段低く突き出たプールなのだ。明るく照らされたその透明な浴槽形の、底面と三つの側面は外界の闇にさらされているが、いっぽうの壁に接しているのはバーか、それとも居間なのか……透明だが分厚い二枚の仕切りを隔てているので、はっきりとはわからない。

そのプールは干あがっており、底にひとつ、バンダースナッチのものとおぼしい骸骨がころがっていた。

「でっかいペットを飼ってたようだな」ルイスがいった。

「あれ、ジンクスのバンダースナッチじゃない？　あたしの叔父は、狩猟家だったけど、バンダースナッチの骨格の中にトロフィー・ルームをこしらえてたわ」

「バンダースナッチは、多くの惑星に棲んでいる。スレイヴァーの食用動物だったんだ。全銀河系にひろがっていても、おかしくはない。問題は、なんのためにリングワールド人が、そいつをここへ運んできたかだ」

「装飾用でしょ」ティーラはそくざにいった。

「冗談じゃない」バンダースナッチは、まるで白鯨(モービィ・ディック)とキャタピラ・トラクターの混血みたいなしろものである。

だが、そう考えてもおかしくはあるまい、とルイスは思いなおした。この人工世界の〈建設者〉が、そこに住まわせるのに、何十何百の恒星系を襲って生物を連れ帰ったとして、どうしていけないわけがあろう？　彼らには、ラムスクープ式核融合動力があった。そして、リングワー

んドー上のあらゆる生物は、当然どこかから運んでこられたものなのだ。ひまわり花、バンダースナッチ。ほかには何があるのだろう？

まあ、それはどうでもいい。このまま縁の外壁へ直行すること。なまじ探険しようなどとしないほうがいい。すでに一行が踏破した距離は、地球五、六周はどにも当たる。フィネイグルにかけて、このさきいったい何に出くわすことか！

原住民の異様な生態（今までのところは無害だった）。

ひまわり花（交信機の〈話し手〉の映像が白い炎につつまれ、悲鳴をあげた）。

空中に浮かぶ都市（墜落し、廃墟と化していた）。

バンダースナッチ（知的生物だが危険。その点はここでも同じだろう。バンダースナッチは突然変異を起こすことがないのだ）。

そして、死は？　死はたしかに、どこへいこうとつねに同じである。

三人は、城のまわりをもうひとめぐりし、入口をさがした。あらゆるかたちの窓があった。四角いの、八角形の、泡形をしたの、それに、下面にひらいた厚い素通しの床など。だが、どれも閉まっている。飛行する乗り物を収容するドックがあり、その大きなとびらは、跳ね橋のように開いて着陸台になるらしかったが、その跳ね橋ドアも、ぴったりと閉ざされていた。城の下端からは二百フィートほど下まで、らせん形のエスカレーターが二本さがっていた。下端が空中で切れているのは、何かの力でねじ切られたものらしく、支柱はひきちぎられ、踏み板もこわれている。上端の入口のドアは閉まっていた。

「なんてことでしょう！　あたし、窓を突き破ってはいるわ」とティーラ。

「やめろ!」ルイスは制止した。ほうっておいたら、彼女はそのとおりやりかねない。「〈話し手〉、分解機をだしてくれ。中へはいるんだ」

大きな展望窓からの光をたよりに、〈話し手〉は、スレイヴァーの掘削機械を座席の横からとりだした。

この分解機については、ルイスもよく知っている。拡散も収束も自在のビームが当たったところでは、あらゆる物体が、自己の持つ陽電荷のせいで、粉々にくだけてしまうのである。パペッティア人の設計では、さらに第二の、陽電荷を中和するビームが出るようになっている。ルイスがひまわり花の平原で穴を掘ったときには、このほうは使わなかったし、またそんなものが必要だとも彼には思えなかったのである。

が、〈話し手〉がいずれそれを使うだろうことは、当然予想すべきところだった。

八角形をした大きな窓の上の、数インチ離れた二点が、正と負の電荷を帯び、そのあいだに電位差が生じた。

目もくらむ閃光。両眼を蔽った手の下で、痛みと涙が走った。同時に生じた百雷のとどろきは、音波シールドをとおしてすら耳を聾するばかりだった。それにつづく突然の静寂の中で、ルイスは、首すじや肩や、目を蔽った手の甲に、砂粒のようなものがずっしりと積みかさなるのを感じた。目をとじたまま、彼は口をひらいた。

「テストしてからにすればよかったのに」

「すばらしい性能だ。これは役に立つぞ」

「すごい誕生日のプレゼントだね。おめでとう。でもそれをパパに向けるんじゃないよ。パパは、

おっかないんだからね」

「浮かれるのはよせ、ルイス」

ようやく視力がもどったようだ。目をあけると、銀粉のようにこまかいガラスが、彼とサイクルをすっかり包みこんでいる。そのガラスが飛び散っていく！　音波シールドが粒子をうけとめ、ついでそれを四方へ吹きとばしているのだった。

ティーラはすでに、大宴会場ほどもある窓の奥の一室へと向かっている。ふたりもそれにつづいた……。

ゆっくりと、すばらしい気分で、ルイスは目をさました。何かやわらかい表面に、片腕を下にして寝ていたため、その腕がしびれている。

ごろりと仰向けになると、目をあけた。

ベッドの中から見あげると、高い白い天井が見えた。胸の下に何か当たると思ったら、それはティーラの足だった。

そう、昨夜はベッドを見つけて眠ったのだ。ふつうの城なら地階にあたる場所に、巨大な寝室があり、そこにあったこのベッドも、ミニチュアのゴルフコースくらいの大きさだった。

が、それを見つけるまでに一同は、かずかずの驚異を味わいつくしていた。

城は、まさしく城であり、ただの豪華なホテルといったものではなかった。高さ五十フィートの、展望窓のついた会食ホールが、すでに驚くべきものであった。椅子がなく、数多くのテーブルだけが、中央の一段高くなった輪形のテーブルを囲んでいる。その輪の中央に、玉座のような

高い背もたれのついた椅子らしきものがあった。ティーラがその座について、あちこちさわってみると、その椅子を天井までのなかば近くまでせりあがらせ、そこからしゃべる声を、雷のようにとどろかせる仕掛けが見つかった。椅子をぐるりと回転させることもでき、そして、椅子がまわるとともに、その頭上に浮かんでいる造形作品も回転するのだった。

その造形は、おそろしく細い針金細工で、ほとんど何もない空間にひとしい。最初それは、単なる抽象のように見えた。が、ティーラが回転すると——それは、ふいに、人間の顔であることが、はっきりわかった。

まったく無毛の、人間の頭のかたちなのだ。

あの原住民の中に、顔も頭もきれいに毛を剃りあげる部族があるのだろうか。それとも、この環(リング)にそってずっと遠く旅したところに住む、別の種族なのだろうか？　ここにいる三人には、知るよしもない。しかしその頭部が人間のものであることはまちがいなかった。美しく、けわしく、命令することに慣れた顔だちのようだ。

いま天井を見あげると同時に、ルイスはその顔を思いだしていた。あの顔の線には、目にも口にも、何か有無をいわせぬ支配的な印象がこもっている。制作者が、腕をふるって、ひとつひとつの線に、そういう意味をもたせたのだ。

この建物は支配者の居城だったにちがいない。あらゆるものが、そのことを物語っていた。玉座、会食ホール、独特ないくつもの窓、独立した動力源で浮かんでいることなど。しかし、ルイス・ウーには、あの顔だけで証拠は充分なように思われた。

一同はそのあと、城の中をあちこちとうろついた。いたるところに、ぜいたくな飾りのついた

みごとなデザインの階段があった。が、どれも動かなかった。エスカレーターも、エレベーターも、走路も降下シャフトもない。おそらくこの階段自身が、かつては動いたのではなかろうか。

そういうわけで、一行の足は、だんだん下のほうへ向かった。なんといっても、のぼりより下りのほうが楽である。そして、最下層にいたってこの寝室に出くわしたのだった。

くる日もくる日もフライサイクルの座席の上で眠り、たまたま着陸するたびに愛をかわしあってきた、そんなあとだけに、ティーラとルイスはこのベッドの魅力に抗しきれなかった。ふたりをそこに残して、〈話し手（スピーカー）〉はただひとり、さらに探索をつづけていたようだ。が、これまでのところ、彼からはなんの発見の知らせもない。

ルイスは片肘で身を起こした。しびれていた腕に感覚がもどってくる。そうっとさわらぬように気をつけながら、彼は考える。——就寝プレートなら、絶対にこんなことはないんだが……何をカホな！　とにもかくにも、ベッドにありつけたんだ……。

寝室のいっぽうの壁はガラス張りで、その向こうには、例の干あがったプールがみえた。壁も床もガラス張りの中に、おどろしきバンダースナッチの白骨が一体。スプーンのような頭蓋のうつろな眼窩が、じっとこっちを見つめている。

反対側の壁も透明で、そこから一千フィート下方の市街が見てとれた。

からだを三回転させると、ベッドの端から床に落ちた。床にはやわらかい毛皮が敷きつめられていたが、その手ざわりや色あいなどは、あの原住民の顔を蔽っていた髭と、まぎらわしいほどそっくりだった。ルイスは窓のところまで歩みよって、外を眺めた。

〈視界を何か、三次元テレビに現れる画像のノイズのようなものが、ちらちらとさえぎっていた。

はっきりと目にとまるほどではない。そのくせ、ひどく気にさわる現象だ）

白い、かたちのない雲に蔽われた空の下で、都市は全体灰色一色だった。建物の多くはかなり高層だが、その中でもいくつかは大きく他からぬきんでている。この城の最下層より高くのびているものも、二、三あった。空に浮かぶ建物は、他にもあったらしい。それが落下した場所とおぼしい、数千トンの建物が崩壊したあとのギャップが、いくつか目にとまった。

だがこの夢の城だけは、独自の動力源を持っていたのだ。寝室ひとつとってみても、ちょっとした規模の狂宴（オージィ）には充分な広さだ。この大きな窓から、自分の領地を見おろす支配者の目には、住民の姿が、うごめく蟻か何かのようにうつったことであろう。

「こんなところにいると、ひとりでに傲慢さが身につくだろうな」ルイスはつぶやいた。

何かが目にとまった。窓の外で、ゆらゆらとゆれている。

糸だ。長いやつがただ一本、城の中腹からさがっているようにみえるが、じつはもっと上空から落ちてくるらしい。粗い感じの糸だ。そのうちどこか上のほうでひっかかった部分が二条に分かれて、はるか下方の市街に向かって垂れているのも見わけられた。彼が窓から外を見ているあいだ、ずっと落ちつづけていたらしい。さっきから、ちらちらと視界をさえぎるように思われたのは、これであった。

どこから降ってきたのか見当もつかないが、ルイスはそれをあるがままにうけいれることができた。なかなか美しい。彼ははだかのまま、床全体に敷きつめられた毛皮の上に、仰向けに寝ころんで、それが窓の外をただよい流れていくのを眺めた。心底からゆったりと落ちついた気分だった。こんな気持になれたのは、ライヤー号がX線レーザーに撃たれてからこのかた、はじめて

のことだったかもしれない。

糸はあとからあとから果てしもなく、灰白色の空を背景に、うねりくねった黒い輪となって落ちてくる。見えるか見えないかの太さだ。長さはどれくらいあるのだろうか？　いや、吹雪の中で、雪片の数を、どうやってかぞえられるというのだ？

とつぜん、ルイスは思いあたった。

「やあ、ひさしぶりだな」そうつぶやきながら、彼は内心愕然としていた。

シャドウ・スクェアをつないでいた糸の一本だ。それが、一行のあとを追うように、ここへ落下してきたのである。

朝食のために、彼は、階段を五階、上へあがった。

もちろん、調理機構がまだ動いているとは思っていなかった。あの会食ホールへいくつもりだった。ところが、その途中たまたま炊事場にぶつかったのである。

ずっと昔、夢見たことのあるイメージと、そっくりだった。大きな調理場だ。独裁者には、召使いがつきものであり、ここでも大ぜいが働いていたにちがいない。シェフだけで何十人もいたことだろう。そのひとりひとりに何人もの下働きがついて、できあがった料理を宴席へはこび、汚れた皿を持ちかえり、それを洗い、片づけ……。

新鮮な果物や野菜の貯蔵庫だったらしいものもいくつかあったが、棚も床も埃にまみれ、干からびた残骸と青かびがあるばかりだった。獣肉をぶらさげてあったらしい冷蔵室も見つけたが、そこもからっぽで、なま暖かかった。まだ動いている冷凍機もあり、そこの棚には、食べられそ

らな食物が見つかったが、食べてみる気にはならなかった。

罐詰らしいものはまったくない。

蛇口をひねっても、水は出なかった。

冷凍機を別にすれば、ドアの開閉機構以上に複雑な機械は見つからなかった。レンジには、温度指示装置もタイマーもついていない。トースターに当たるものも見えない。レンジの上に張りわたされた紐に、何かのくずらしいものが、点々とかたまってこびりついている。なまの香辛料だろうか？　調味料入りの瓶も見あたらないようだ。

そこを出る前に、ルイスはもう一度あたりを見まわした。そうしなかったら、真相を見落としていたところだった。

この部屋は、もともと調理場として設計されたものではなかったのだ。

では、なんだろう？　貯蔵室か？　娯楽室だったのか？　たぶん後者だろう。いっぽうの壁が、立体テレビの映写スクリーンのように、まったく何もない平面で、そこを一面にぬりつぶした塗料の表面は、明らかに他の部分よりも新しかった。そして床の上には、椅子席をとりはずしたらしい傷あとが残っていたのである。

それでわかった。ここは娯楽室だったのだ。たぶん壁の映写機構がこわれたとき、もう誰も修理できるものがいなかった。つづいて同じように、自動調理機構がだめになった。

そこで、立体テレビ室が、手動式の調理場に転用されたというわけだ。自動調理機を修理できるものがひとりもいなくなっていたとしたら、そのときにはもう、こういう調理場が、ありふれたものとなっていたのだろう。なまの食糧が、飛行輸送車で、ここまではこびあげられていた

ことだろう。

そうして、その飛行輸送車も、一台、また一台と動かなくなっていったとしたら……？

ルイスは、その部屋をあとにした。

ようやく会食ホールを見つけ、城内唯一の信頼できる食事にありついた。サイクルの調理スロットから出てくる、煉瓦のかたちをした朝食だった。

食べおわったところへ、〈話し手(スピーカー)〉がはいってきた。

クジン人も、腹をすかしていたにちがいない。まっすぐ自分のサイクルのところへいって、ダイアルをまわし、赤黒いぬれた煉瓦形のものを三個出すと、ひとつにつき三口ずつで、たいらげてしまった。それからようやく、ルイスのほうへ向きなおった。

その姿はもう、幽霊みたいに白くはない。全身を蔽っていた泡(フォーム)は、すでに治療の役割を果たして、昨夜のうちに剝げ落ちたようだ。彼の皮膚は、つやつやとしたピンク色で、健康そうだった。ただし、そのピンク色の表面が、正常なクジン人の皮膚の色だとしたらだが——表面のあちこちには灰色の傷あとが残り、紫色の血管が浮いて見える。

「おれといっしょにこい」命令口調でいった。「地図のある部屋を見つけたぞ」

# 16　地図の部屋

地図室は、その重要さにふさわしく、城の最上階にあった。階段をのぼっていくのに、ルイスはすっかり息を切らし、クジン人からだいぶ遅れてしまった。クジン人も、べつに走ってはいなかったが、人間よりはずっと足が速い。

ルイスがやっと上の踊り場に着いたとき、〈話し手(スピーカー)〉は、正面の二重ドアを押しあけていた。ドアの奥の、床から三フィートほどの高さに、幅八インチほどの漆黒の帯が水平に走っているのが見えた。その向こうに、同じような帯で、空色の表面が夜の濃紺の縞に区切られているのが目にとまり、ルイスはただちにその正体をさとった。

大当たりだ。

入口のところに立ちどまって、細部を見きわめる。このリングワールドの模型は、直径およそ百二十フィートほどもある円形のこの部屋と、ほぼ等しい大きさである。円形の地図にとりかこまれたその中央の、どっしりした台座の上に、長方形のスクリーンが一枚立っており、いまそれはドアに背を向けていたが、自由に回転できるようになっているらしい。

正面の壁の上方に、十個の球体(グローブ)が並んで回転しているのが見えた。それぞれ大きさも回転の速さもちがう。が、そのいずれもが、青の中に白い縞のはいった、地球型惑星独特の色彩を持って

[illegible]たち、おのおのの下に、[illegible]投影法による光景がかかっている。
「わしはひと晩じゅうここで働いたのだぞ」と〈話し手〉。中央のスクリーンの向こうへまわると、「見せてやるものがたくさんあるのだ。こっちへこい」

ルイスは身をかがめて、こちら側のリングの下をくぐりぬけようとした。が、ふと思いついて、足をとめた。あの会食ホールを睥睨していた、鷹のような顔つきの人物が、たとえ至聖の一室へはいるにしても、そんなふうに身をかがめたとは思えない。そのままリングへ向かって歩みよると、ルイスのからだはすうっとそれをとおりぬけた。このリングワールドの模型は、立体投影像だったのだ。

彼は、クジン人のうしろに立った。

中央のスクリーンを制御パネルがとりまいている。ダイアルの握りはどれも大きくずっしりとした銀製で、それぞれが何か動物の頭らしいものをかたどっていた。パネルの表面には、渦巻きや曲線がいっぱいに描かれている。安っぽい飾りだ、とルイスは思った。退廃期の産物なのだろうか？

スクリーンには景色がうつっている。が、拡大はされていない。じっと見つめると、ちょうどシャドウ・スクェアのあたりから、リングワールドを見おろしているような感じで。ルイスは一瞬、既視感(デジャ・ヴュ)を味わった。

「さっき焦点を合わせてみたのだ」とクジン人がいう。「やりかたが、これで正しければだが……」彼の手がダイアルの握りにふれると、景色はみるみる拡大し、その早さに、ルイスの手は思わず知らず、スロットルをまさぐった。「これから外壁を見せてやる。ううう、もう少しさきの

ほうだ……」彼がべつの、獰猛な動物の頭のかたちをした握りにふれると、景色が横にすべりだし、そしてふたりは、リングワールドの縁を、見おろしているのだった。

どこかに望遠鏡が仕掛けてあるのだろう。だが、どこに？　シャドウ・スクェアにでもついているのだろうか？

一千マイルの高さの山々を、真上から見おろす位置である。〈話し手〉がべつのダイアルにふれると、映像はさらに拡大した。サイズを無視して考えると、まったく自然そのものの山々が、宇宙へのへりでまっすぐ断ち切られている眺めに、ルイスはただ呆れるばかりだった。

ついで、その山々の峰づたいにつづいているものがあるのを、彼はみとめた。

見たところ、銀色の点線としか見えないが、彼はそれが何かを知っていた。「直線加速機だな」

「そうだ」と〈話し手〉。「転移ボックスがない以上、リングワールドほどの世界では、ほかに方法がなかろう。あれが主要な運輸システムにちがいない」

「しかし、千マイルもの高さだぜ。エレベーターがあるのか？」

「外壁にそって、いたるところにあるのを見つけた。例えば、あそこだ」すでに銀色の点線は、まばらに距離をおいて山の峰の裏側に巧妙にかくされた小さな輪の列にまで拡大されて見えていた。その輪のひとつから、やっと見えるか見えないほどの細いチューブが、山の斜面にそってのび、リングワールドの大気の底に横たう雲の層の中へと消えているのだった。

〈話し手〉が、「エレベーターの近くでは、電磁輪が密になっている。ほかの場所では、たがいに百万マイルも離れている。どうやら、出発と到着と誘導の役を果たすだけのようだ。乗り物を、

縁(リム)にそって、相対的に秒速七百七十マイルまで加速してやれば、自由落下と同じ状態になる。それを、つぎの輪(ループ)のグループで、エレベーターの近くにとめてやればいいのだ」

「それじゃ、いきたいところへいくのに、十日もかかっちまうぜ。それも、加速度を計算に入れないでだ」

「たいしたことはない。おまえたちも、地球版図内でいちばん遠いシルヴァレイズ星までいくには、六十日かかるぞ。ノウンスペースの端から端まで横断するには、その四倍かかる」

まさしくそのとおりだった。しかも、リングワールドのほうが、居住面積では、ノウンスペース全体を合わせたよりも大きいのだ。とにかく、ひたすら余裕を求めて建設されたものなのだから。ルイスはたずねた。「動いている様子はないのかい？ その直線加速機(リニア・アクセレーター)が、使われているような気配は？」

「無意味な質問だな。見せてやろう」スクリーンの景観が、ぐいと収縮し、横にすべり、ついで徐々に拡大した。そこは夜だった。暗色の雲が暗色の地表をうっすらと蔽い、そして……。

「都市の明かりだ。そうか」ルイスはごくりとのどをならした。あまりに突然現れたからだ。

「それじゃ、文明は死にたえたわけじゃなかったんだな。助けが得られるぞ」

「そうではないのだ。これを見つけるのはむずかしいのだが……そら」

「な、なあんてこった！」

城だった。まちがいなく、この城が、都市の光の海の上に、静かに浮かんでいたのである。輝く窓、ネオンの輝き、輸送機関らしいゆきから光の流れ……奇妙なかたちの、浮かぶ建物の群れ……まことに優雅で美しい。

「ただの記録なのか。カホナ！　ここにうつってるのは、ずっと昔のテープなんだな。ぼくは、生中継だとばかり思っていた」この記録が残されたのは、かつての華やかな時代のことだったのだ。煌々と輝く活気にあふれた都市が、地図の上にははっきりと残されている……が、その映像はすべて、はるか昔の文明の姿なのだ。

「おれも昨夜はずっとそう思っていた。やっと真相に気づいたのは、どこをどうさがしても、ライヤー号の着陸が残した数千マイルの傷あとが見つからなかったからだ」

ルイスは、ことばもなく、クジン人の毛のないうす紫色の肩をたたいた。彼の手がやっととどくほどの高さだ。

クジン人は、容赦ない口調で、「この城を見つけて、ようやくはっきり納得できた。見ろ」彼は画像を急速に左舷（ポート）へと動かした。暗い地面がぼやけ、何も見えなくなる。つぎの瞬間、うつっているのは、黒々とした海面だった。

視点がずらっと引いていくらしい……。

「見たか？　大きな塩水の大洋のひとつから、縁（リム）へ向かうわれわれの正面に、入江がのびてきているのだ。大洋そのものは、クジン星や地球のそれより何倍も大きいし、この湾だけでも、わが世界で最大の海ほどの大きさがある」

「ますます遅れちまうな！　そもそも、それを越えることができるだろうかね？」

「越えることはできるだろう。だが、それよりもっとひどい遅れの原因になるものがあるのだ」

クジン人は、ダイアルの握りに手をのばした。

「ちょっと待った。あそこにある島のあつまりを、もっと近づけて見せてくれ」

「なぜだ、ルイス？　あそこで食糧の補給でもするつもりか？」
「いや……問題は、どうしてあんな深い海の中へ、あんなに遠く離して島々を並べたかだ。わかるかい？　ほら、ここんとこにある島のグループ」ルイスの指が、スクリーンの上に、ぐるりと輪をえがく。「さて、あそこの上の地図を見てみろ」
「なんのことかわからんぞ」
「この島々と、あの地図だ。円錐図法だからちょっとゆがんでいるが……わかったろう？　惑星が十個、そして、群島の数も十グループある。原寸大じゃないだろうが、この島のひとつだって、まちがいなくオーストラリアくらいの大きさはあるし、もとの惑星の大陸も、ユーラシアより大きいのがありそうには見えない」
「なんという悪ふざけだ。ルイス、そういうのが、典型的な人間のユーモア感覚なのか？」
「とんでもない！　感傷ってやつだよ。しかし――」
「なんだ？」
「いや、気がつかなかったな。最初の世代――彼らは自分の世界を放棄したが、何か形見を残しておきたかったんだ。しかし三代もたてば、なんの意味もなくなる。いつだってそんなものなのさ」
ルイスのことばが終わったのを見さだめて、クジン人は、遠慮がちに口をひらいた。「おまえたち人間は、自分がクジン人のものの考えかたを理解できるつもりなのか？」
ルイスは微笑して首をふった。
「よろしい」とクジン人。そこで話題を転じて、「昨夜、少々時間をかけて、ここからいちばん

近い宇宙港をしらべてみた」

　模型のリングワールドの中心に立って、ふたりは正面の四角いスクリーン上に再現される過去のもように目をこらした。

　絢爛たる見ものであった。〈話し手(スピーカー)〉は、スクリーンを、宇宙港のある、側壁の外側の張り出しの上に合わせたのである。先端が丸くなった円筒形の、数千の窓をきらめかせた宇宙船が、電磁減速フィールドに身をまかせて到着するのを、ふたりは目(ま)のあたりにした。フィールドが淡い色あいの光を放つのは、たぶんオペレーターが目で見て操作する便宜のためであろう。

「このテープはエンドレスになっている」と〈話し手(スピーカー)〉。「昨夜は何度かくりかえして見た。船からおりた旅客は、まるで浸透プロセスでも用いられているように、外壁の中へ、直接歩いてはいっていったな」

「ああ」ルイスはすっかり気落ちしていた。宇宙港の張り出しが、ここからずっと回転方向(スピンワード)よりにあることがわかったからだ——それも、一行がこれまで進んできた道のりなど、問題にもならぬほどの遠さである。

「船の出航も見たぞ。そのときには、直線加速機(リニア・アクセレーター)は使わない。あれは到着のとき、船の速度を宇宙港に合わせるために使われるだけだ。出航のときには、船はただ空間へほうり出される。

　あの草食いが予想していたとおりだな、ルイス。落とし戸の仕掛けをおぼえているだろう？リングワールドの回転速度は、ラムスクープ場(フィールド)が作動するのに充分なのだ。ルイス、聞いているのか？」

　ルイスは、ぶるっと身ぶるいした。「すまん。ぼくはもう、これからいかなきゃならない距離

か七十万マイルもふえたってことだけで、頭がいっぱいなんだ」
「運輸システムが使えるかもしれんぞ。側壁の上にある、あの小さな直線加速機（リニアアクセレーター）だ」
「無理だろうな。おそらくもうこわれてるよ。輸送の手段が残っているかぎり、文明は拡散しつづけるはずだからね。それに、もし動いていたとしても、ぼくらの進路は、エレベーター・シャフトのある場所に向かっているわけじゃないだろう」
「そのとおりだ。おれも、そのある場所はさがしてみたのだから」と、クジン人は答えた。
長方形のスクリーンの上では、今しも一隻の船が到着したところだ。飛行輸送車が、連絡チューブを船の主（メイン）ロックまで引いていってつなぐと、そのチューブの中へ、乗客がどっと流れだしてくる。
「縁（リム）へ向かうことは、あきらめるとするか？」
「そりゃいけない。やはり宇宙港が唯一のチャンスだよ」
「そうかな？」
「そうとも、カホナ！　いくらでかくたって、リングワールドも植民地だ。植民地である以上、文明は、宇宙港が中心のはずだ」
「それは、母星から船がやってきて、新しい技術をもたらしている場合のことだ。われわれの推測によると、リングワールド人は、母星を捨ててやってきたのだぞ」
「でも、まだ船はきているかもしれない」ルイスは完全に受け太刀だった。「その、見捨てられた母星からね！　数百年も前に出発したのがね！　ラムシップは、相対論による時間の遅れから逃がれるわけにはいかないんだよ」

「なるほど。古代の文明人が、古代の科学を、それを忘れてしまった野蛮人に教えているかもしれないというのだな。たしかに、その可能性はあるだろう」と〈話し手(スピーカー)〉。「しかしおれは、この構造物にはもうあきあきしているのだ。おまけに、宇宙港は遠い。あとは何を見せてやろうか？」

ふと思いついて、ルイスはたずねた。「ライヤー号からここまで、われわれがやってきた距離は？」

「だから、われわれの衝突のあとが見つからないといったではないか。おまえの見つもりも、おれのと大差ないはずだ。しかし、あとどれだけ進めばいいかはわかっている。この城から縁(リム)までは、およそ二十万マイルだ」

「ずいぶんあるな……しかし、あの山は見つかるはずだぜ」

「見つからんのだ」

「あのでっかい山、〈神(フィスト・オヴ・ゴッド)の拳〉ってやつさ。あいつのふもとに不時着したはずだ」

「見つからんのだ」

「気にくわんな。おい、〈話し手(スピーカー)〉。われわれが、完全に方角を誤っていたという可能性はあるのか？ そうでないかぎり、〈神(フィスト・オヴ・ゴッド)の拳〉は、城からほとんどまっすぐ右舷(スターボード)の方角にあるはずだ」

「しかし、見つからなかったのだ」〈話し手(スピーカー)〉は、きっぱりといった。「ほかに、何が見たい？ 例えば、空白の地域もある。たぶんテープがだめになっているだけのことだと思うが、もしかすると、リングワールドにも秘密の地域があって、そこの記録は残していないのかもしれん」

「でもどうせ、そこに何があるか知るためには、自分でいってみなきゃならないわけだろうが」

ふいに〈話し手〉が、入口の二重ドアのほうをふり向き、両耳を扇のようにひろげた。そのまま身を沈めて四つ足立ちになると、さっとひと跳び。

ルイスは目をぱちくりさせた。いったい何が起こったのだ？ が、そのとき彼の耳にも、音がきこえてきた……。

時代の古さを考えると、この城の機械装置のたてる音は、おどろくほど静かだった。いま、その低いハム音が、二重ドアの外からひびいてくる。

〈話し手〉の姿はどこにも見えない。ルイスは携帯レーザーをひっつかむと、用心ぶかくそのあとを追った。

とたんに、階段の降り口のところに立っているクジン人の姿が目にはいった。武器をおろして、ルイスは歩みより、いっしょに階段の下を見おろした。ティーラがあがってくるところだった。

「みんな、昇りばかりなのね。下りはひとつもなし。六階と七階のあいだのは、ぜんぜん動かなかったわ」

ルイスは、わかりきったことを質問した。「いったいどうやって動かしたんだ？」

「あら、手すりを持って、前へ押せばいいのよ。そのままつかんでいないととまっちゃう。本当に安全にできてるのね。偶然見つけたんだけど」

「だろうな。ぼくは、けさ、十階ずっと歩いてのぼったんだぜ。きみは、何階までできて、そいつを見つけた？」

「一階も。お食事にあがろうと思って、一段めに足をかけて、手すりにつかまったの」

「なるほど。みごとなもんだ」
ティーラは気をわるくしたようだった。「だって、あたしのせいじゃないわ。いくらあなたが
――」
「いや、すまん。で、朝食はすませた?」
「まだよ。地上で歩きまわってる人たちを見てたの。このお城の下が、広場になってるのは知ってた?」
「ええ。その広場へ、朝からずうっと、四方からひっきりなしに人がやってくるの。いまじゃもう何百人もあつまってるわ」彼女は、輝くばかりの笑顔を見せた。「そして、みんな何か歌ってるのよ」
〈話し手〉の耳が大きくひらいた。「本当か? すると、無人ではないのだな?」

城の中のどの階段にも、途中に広い踊り場があった。その壁の凹んだ部分には、敷物が敷かれ、椅子とテーブルがおかれている。明らかに、歩きまわる途中で気の向くまま、どこでも食事をとれるようになっているのだ。そのひとつ、城の〝地階〟の近くにある食事コーナーには、なかば壁、なかば床にかかって直角に折れまがった長い窓があった。
十階の階段をくだったルイスは、息をきらせていた。いきついたコーナーに備えてあるテーブルに、彼は目をすいよせられた。その表面に彫刻があるように見えたのだ――が、よく見るとそれは、スープ、サラダ、バター、肉などをいれる深浅いろいろの皿や、カップ受けのかたちに、凹みがつけられているのだった。その表面の白く硬い材質にも、何十年何百年と使われつづけた

ためか、黒っぽく腐蝕したあとが見うけられた。

「お皿不要ってわけか」ルイスはつぶやいた。「食物は、あの凹んだところに盛って、終わったらテーブルごと洗い流せばいいんだ」

いかにも不潔なように思える。が──「彼らが、蝿や蚊や狼をこの世界へ連れてこなかったとすれば、バクテリアだって──？

しかし、必要なバクテリアもあるはずだ」彼は自問自答をつづけた。「例えば、消化のための。そして、もしそのバクテリアが、突然変異をおこして、毒性を持ったら──」そうなったら、それに対する免疫は、どこにもない。リングワールドの文明が滅亡した原因は、それなのではないか？　どんな文明も、存続のための最少個体数というものがあるはずだ。

だが、ティーラも〈話し手〉も、彼のつぶやきにはなんの関心もはらわず、窓べりに膝をついて、夢中で下を見おろしている。

「まだいるわ」とティーラ。なるほど大ぜいあつまっている。千人もの目がこっちを見あげているように、ルイスは感じた。その群集が、いまは歌をやめ、静まりかえっている。

「ぼくらがここにいることは、わからないはずだ」とルイス。

〈話し手〉が、「この城に対して、祈りをささげているのかもしれんぞ」

「そうだとしても、毎日こんなにあつまるとは思えない。ここは、都市の端からは、ずいぶん離れている。この近くに住んでいたら、畑に出られないだろう」

「たぶん、特別な日に出会ったのだろう。祝祭日のような」

ティーラがいった。「昨夜何か特別なことがあったのかもしれない。例えば、誰かがあたしした

ちを見つけたとか。それとも、あれかしら？」彼女は指し示した。

「あれは、おれも気にしていた。いつから降っているのだ？」

「あたしが目をさましたときには、もう降ってたわ。まるで雨か、新種の雪みたいに見えるけど、シャドウ・スクェアのあいだをつないでいた糸ね。何マイルも何マイルも。でも、どうして、こんなところへ落ちてきたのかしら？」

ルイスは、シャドウ・スクェアをつなぐ六百万マイルの距離を頭にえがいた……ライヤー号の衝突でちぎれた六百万マイルの糸……それがライヤー号といっしょに、リングワールドへ向けて墜落したのだから、コースは似たりよったりだろう。その一部がここまでとどいていたとしても、べつにふしぎはない。

いつまでもじっとそれに見いっている気分にもなれず、「偶然さ」と彼はつぶやいた。

「とにかくこんなに降ってくるんだし、それもたぶんゆうべから落ちてたんだと思うわ。それにもともと原住民が、この城をおがんでいたかもしれない。浮かんでいるというだけで」

「ひとつ考えがある」クジン人が、ゆっくりとした口調でいいだした。「ここでもし、リングワールドの〈建設者〉が、この浮かぶ城から地上へ降り立つとしたら、いまこそそれにふさわしい状況ではないか。ルイス、おまえのいった神様のまねごとをはじめてみたらどうだ？」

それに答えるつもりでルイスはふり向き——答えにつまった。まじめな顔をしているのがせいいっぱいだった。なんとかがまんできそうだった。が、〈話し手（スピーカー）〉が、ティーラに説明をはじめたのだ。

「ルイスの提案だが、われわれがリングワールドの〈建設者〉のふりをしたら、うまくいくだろ

うというのだ。おまえとルイスが侍祭をつとめる。ネサスはとらわれの悪魔の役割だが、あいつがいなくてもやっていけると思う。おれは、〈建設者〉ではなく、その軍の神ということで——

——」

とたんにティーラがけたたましく笑いだし、ルイスも吹きだしてしまった。

八フィートの身長と、肩から腰まで人間とは比較にならぬ幅をもったクジン人は、毛を焼かれてあかはだかの姿でも、巨大さと荒々しさだけで、おそれを感じずにはいられない相手だ。だがその中で、いちばんおそろしさと無縁なのが、鼠のようなしっぽである。そしていま、彼の全身がそれと同じ色になり、うす紫色の血管網が、縦横に走っているのがすけて見える。頭部を厚く蔽ってより大きく見せていた毛皮がないと、その両耳も、不恰好なピンク色のパラソルにしかすぎない。オレンジ色の毛皮は、両目にまたがる舞踏会の仮面のようなかたちと、尻のあたりに自前の座蒲団のような恰好に残っているだけだ。

クジン人を笑うという危険さえ、おかしさに輪をかける効果しかなかった。両手で腹をかかえ、からだをふたつ折りにして、ルイスはどうしようもなく、声を殺して笑いつづけ、椅子があったと思われるあたりへ、よろめきながら腰をおろした。

巨大な手がのびてきて、ルイスの肩をとらえ、ぐいと持ちあげた。クジン人とまともに顔をつきあわせながら、ルイスはまだ笑いに身をよじっていた。その耳に、「ルイス、その態度の理由を、説明してもらうぞ」

ルイスは必死の努力で答えた。「い、い、い、軍の神だって」それだけいうと、また声が出なくなった。ティーラは、たえいりそうな息づかいで笑いつづけている。

クジン人は、彼を下におろすと、ともかく笑いの発作がひくのを待った。

「つまり、あんたは神様らしく見えないってことさ」数分たって、やっとルイスは説明にかかった。「毛が生えそろうまではね」

「しかし、おれが、この手で二、三人引き裂いてやったら、たぶん敬意を払うだろう」

「ふるえあがってかくれるだけさ。なんの役にも立ちゃしない。やっぱり、毛の生えるのを待たなきゃだめだ。そうなっても、やっぱり、ネサスのタスプが要る」

「パペッティア人は、ここにはおらん」

「しかし――」

「おらんというのだ。では、どうやって原住民と接触する？」

「あんたはここに残ってくれ。あの地図の部屋で、わかるかぎりのことを見つけだすんだ。ティーラとぼくは」そこまでいって、ルイスは思いだした。「ティーラ、きみはまだ、地図の部屋を見てなかったっけ」

「どんな部屋？」

「きみも残って、〈話し手（スピーカー）〉に説明してもらえ。ぼくがひとりで降りる。あんたたちふたりは、通話ディスクでぼくの話をきいて、何かあったら加勢してくれ。〈話し手（スピーカー）〉、あんたの携帯レーザーを貸せ」

クジン人は、口の中でぶつぶつとつぶやいたが、それでも携帯レーザーをわたしてよこした。それでも彼には、改良型のスレイヴァー式の分解機があるのだ。

CamScannerでスキャン

一千フィート上空にあっても、沈黙を守っていた原住民のあいだに驚きのつぶやきがわきおこるのがききとれた。城の窓から光る点のように飛びだした彼のサイクルが見えたのだろうと、ルイスは思った。その群集へ向かって、彼は下降していった。

つぶやきはやまないが、ぐっと押しころしたように低くなった。そのちがいは、彼にもはっきりとききとれた。

そして、歌声が起こった。

ティーラのいったところによると、「とても間延びのした歌よ」そして、「調子がそろわないみたい」また、「抑揚もないわ」ということだった。そのことばで、ルイスはだいたい想像をつけていたのだが、その結果、彼は大きな驚きを味わった。その歌声は、予想していたものよりはるかによかったのである。

十二音階の歌のように思われた。人間の世界でも、多くは一オクターヴを十二の音階に分けているが、それとはちがう。ティーラの耳に、抑揚を欠いたようにきこえたとしても、異とするにはあたらない。

たしかに、ゆったりした歌ではある。教会音楽のように、ゆっくりと、生まじめで、くりかえしが多く、ハーモニイもない。だが、いかにも荘厳なしらべだ。

広場はおそろしく広いものだった。ここ数週間さびしい思いをしたあとなので、およそ一千人にものぼる群集は、たいへんな人の波に見えたが、この広場自体は、その十倍の人数をも容れられるだろう。拡声器でもあれば、その歌声も拍子がそろったのだろうが、そういうものはないようだった。ひとりの男が、広場の中央の壇上で、腕をふっている。しかし、それに目を向けてい

るものはない。みな一様に、ルイス・ウーを見あげている。

にもかかわらず、歌声は美しかった。

ティーラには、この美しさがわからないのだ。彼女の知っている音楽は、すべてレコーディングされたものか、三次元テレビで、どっちにしろ一度マイクロフォン・システムをとおしたものである。その種の音楽は、いずれも増幅され、修正をうけ、音声をかさねて、余分なところはいっさい取り去られている。ティーラ・ブラウンは、なまの音楽というものをきいたことがないのだった。

ルイス・ウーはそうではない。彼はサイクルの下降速度をゆるめ、からだの神経の末端をその旋律になじませようとした。彼は思いだしていた。クラッシュランディング・シティの上にそびえる断崖の上で歌われた大合唱のことを。彼は思いだしていた。人数もこの二倍をこえていたし、そのためと、またルイス自身がその中に身をおいていたせいで、歌のきこえかたはまったくちがっていた。が今、眼下の歌声がからだにしみとおってくるにしたがって、いくらか不正確な音程や、声のにじみ、リフレイン、そしてゆったりとした讃美歌調の威厳に、彼の耳は同調していくのだった。

思わずいっしょに歌いだしそうになって、彼はわれにかえった。それじゃまずいんだ、と彼は自分にいいきかせながら、サイクルを広場に着陸させた。

広場の中央にある台の上には、かつては立像が建てられていたらしい。そのあととおぼしい、ひとつの長さが四フィートもありそうな、人間そっくりの足形が見えた。いまはその台座の上に、三角形をした一種の祭壇が設けられ、それに背を向けて立ったひとりの男が、両腕をふって歌の指揮をとっている。

灰色の上衣の上に、ピンク色の丸いもの……ルイスは、男が、ピンク色の絹か何かの帽子でもかぶっているものと思っていた。

台座の上に直接、彼はサイクルを着陸させた。接地した瞬間、指揮者がくるりとこっちをふりむいた。その顔を見たショックで、ルイスは危うくサイクルをひっくりかえすところだった。

ピンク色の、つるりとした頭と顔。頭部全体を蔽うブロンドのあいだから目だけをのぞかせた顔が黄金の波のように並んでいる中にあって、この人物の顔だけは、ルイスと同じように毛が生えていなかった。

腕をまっすぐのばし、手のひらを下に向ける動作で、男は歌の最後の音をひきだし……数秒かそこらのあいだ……そして、ふっつりと声はやんだ。一秒の何分の一かのあいだ、広場の周囲から余韻がひびいてきた。この――僧侶だろうか？――は、そのままだまりこんで、ルイス・ウーを見つめた。

ルイスと同じくらいの背たけがあり、原住民の中ではかなり大きいほうだ。その顔も頭も、ウイ・メイド・イット星の白子に似た、すきとおるような白さだ。どうやら何日も前に、それも、あまり切れのよくないかみそりで毛を剃ったらしく、目のまわりだけをのぞいた顔と頭の全面に、うっすらと灰色のかげをさして、毛がのびはじめている。

彼は、まるでとがめるような、ないしは、ルイスにそう感じられるような口調で、何かしゃべった。同時に翻訳ディスクがいった。「では、ついにもどっておいでになったか」

「待っていたとは知らなかったな」ルイスは正直に答えた。自分ひとりで神様のまねをやってのける自信はなかった。長い人生の経験から、完全な嘘の体系をつくりあげて押しとおすことがい

かにややこしいかを、彼はよく知っていたのである。
「あなたは頭に毛を生やしておられる」僧侶がつづける。「すなわち、あなたは純血でないものとお見うけします。おお〈建設者〉よ」
そういうわけか！　〈建設者〉の種族は、完全な無毛の人種だったにちがいない。だからこの僧侶は、それに似せるため、やわらかい皮膚に、粗末なかみそりを当てていなければならないのだ。それとも……〈建設者〉の一族は、単なるファッションの意味から、脱毛クリームかそういったものを使用していただけなのだろうか？　僧侶の顔は、あの会食ホールにあった針金の彫像とそっくりに見えた。
「純血だろうとどうだろうと、そっちの知ったことではない」ルイスはその問題を棚上げした。「われわれは、世界の縁（リム）へ向かうところなのだ。途中の道について、何か知っていることがあるかね？」
僧侶は、はっきりととまどいをみせた。「あなたが、わたしにものをおたずねになる？　〈建設者〉のあなたが？」
「わたしは〈建設者〉じゃない」ルイスは片手を、音波シールド用のスイッチにかけながら答えた。
だがその答えは、単に僧侶の当惑を深めただけだった。「では、なぜ、半分毛がないのです？　どうして空が飛べるのですか？　〈天国〉の秘密を盗まれたか？　この地で、何を求めようとなさるのか？　あるいは、わが信者を奪いにこられたか？」
この最後の質問が、いちばん重大問題のように思われた。「われわれは、世界の縁（リム）をめざして

いる。ただ、ものをききたいと思っただけだよ」
「もとよりその答えは〈天国〉にあるはず」
「しかしあなたは、〈天国〉からこられたではないか！　すっかり見てまわったが、たいしたことはわからなかったよ。例えばだが、〈建設者〉というのは、本当に毛がなかったのか？」
「ああ、あの城のことか！　あそこはすっかり見てまわったが、たいしたことはわからなかったよ。例えばだが、〈建設者〉というのは、本当に毛がなかったのか？」
「わたしも、ときたま、〈建設者〉もわたし同様、毛を剃っておられるのではないかと疑ったことがある。しかし、あなたのあごは、剃ったのではなく、もともと無毛のようですが」
「脱毛したのさ」ルイスは、まわりを埋めつくす黄金の花園のような、敬虔な人びとの顔を、ぐるりと見まわした。「この連中は、何を信仰しているのだ？　おまえのように、わたしの正体を疑う様子は見えないぞ」
「彼らは、わたしとあなたが対等に、〈天国〉のことばで語りあっていると思っています。よろしければ、そのままつづけていただきたい」早くも僧侶の態度は、敵対者から共謀者のそれへと変わっていた。
「それをつづけると、彼らに対しておまえの地位があがるわけか？　そうだろうと思った」とルイス。僧侶が本心からおそれているのは、信者の団体を失うことだったのだ——僧侶なら誰でも、もし神が生きかえってとってかわろうとしたら、同じように感じるにちがいない。「彼らは、このことばを知らないのか？」
「たぶん、十語に一語くらいでしょう」

その点では、翻訳ディスクのすばらしい効率を、ルイスは恨んでいいはずだった。僧侶の話していることばが、ジグナムクリッククリックと同じなのかどうか、彼には知ることができないのである。その差がわかれば、この世界の通信網が崩壊したのち、両者にどれほどのちがいが生じたかがわかり、文明の没落の年代が推定できたかもしれない。

「なんであの城を〈天国〉というんだ？」と彼はたずねた。「あんたは知ってるのか？」

「ズリラーが、〈天国〉のもとにあるこの世界全土を統べたという伝説が残っています」僧侶が答える。「この台座の上には、ズリラーの像が立っていました。それが現す大であったといわれています。地上からは〈天国〉へ、季節ごとの収穫をささげました。おのぞみなら、その品目を、わたしが教えられたままに並べあげてもよろしいが、いまではそれも実らなくなりました。その品々は――」

「いや、結構。そして、どうなった？」

僧侶の語調にはいつのまにか、歌を歌うような感じがしのびこんでいた。彼はその物語を、何度となくきかされ、そして何度となく語ったのにちがいない……。

「〈建設者〉が、この世界と〈アーチ〉をつくられたとき、〈天国〉もつくられました。〈天国〉をおさめるかたは、また地上をも、果てから果てまでおさめるのです。このようにズリラーは、幾世代にもわたり世をおさめ、お気に召さぬことがあると、〈天国〉から太陽の火を投げおとされるのでした。やがてそのうちズリラーが、太陽の火を投げおとすことも、絶えてない世となりました。

そこで地上の人びとは、〈天国〉に背を向け、収穫を貢がぬようになりました。そしてついに

はズリラーの像を引き倒したのです。ズリラーの御使いたちが高みから岩を落としたときにさえ、人びとはただ身をよけて、あざけり笑うのみでした。

とうとうある日、人びとは自動階段をつたわって、〈天国〉にはいろうとしましたが、ズリラーは階段を切りおとされました。ほどなくズリラーの御使いたちも、飛ぶ車に乗って、〈天国〉を去っていきました。

このときはじめて、人びとはズリラーの寵愛を失ったことに気がつきました。毎日毎日、空が曇って陽は照らず、穀物も育たぬようになりました。そこでみんなは、ズリラーのお帰りを願って——」

「その話が、どのくらい真実だと、あんたは思っているのかね？」

「今朝までは、ほとんど本気にしていませんでした。あなたが〈天国〉からくだってこられるまでは。わたしはふるえあがりました。おお〈建設者〉よ。おそらくズリラーは、本当にもどってこられようとして、まずその先ぶれをつかわし、道を誤った僧侶を一掃しようとされるのでしょうか」

「頭を剃ってくりゃよかったかな。そのほうがお役に立ったかい？」

「いいえ、かまいません。ご質問があればなんなりと」

「リングワールドの文明の崩壊について、何か知ってるかね？」

僧侶は、いっそう不安げな表情になった。「文明が崩壊するのですと？」

ルイスはためいきをつき——そして、このときはじめて、祭壇のほうに目をやった。

祭壇は、ふたりが立っている台の中央を占めていた。黒っぽい色の木製だ。その四角い平坦な

表面には、浮き彫りの地図がきざみこまれている。丘が連なり、川が流れ、湖がひとつ。この地図の両端は、上へ向かってめくれあがっていた。そのひと組の、短いほうの両端をふまえて、抛物線形の金色の〈アーチ〉が空にかかっていた。

このくアーチ〉の金色は、にぶくくすんでいる。が、その天頂にあたるところから、小さな金色の球が、糸でつるされており、このほうの金色は、あざやかに磨きあげられていた。

「文明が危険にさらされているのですか？　いかにも、いろいろなことが起こっています。太陽弦と、それにあなたのこられたこと——あれは、太陽弦でしょうか？　太陽が、わたしたちの頭上に落ちてくるのですか？」

「そんなことはないはずだよ。あの、朝からずっと落ちてきている糸のことを、いっているのかね？」

「はい。わたしどもの学んだ教えによると、太陽は〈アーチ〉からきわめて丈夫な弦で吊るされているのです。その弦の強さときたら」僧侶はつづけて、「さきほどひとりの女が、あれをひろいあげて、もつれをほどこうとしたら、指が落ちてしまいました」

ルイスはうなずいた。「落ちてくることはないよ」そういいながら、彼は心中ひそかに考えていた。——シャドウ・スクェアの落ちてくる心配もないだろう。たとえ、つないである糸が全部切れたとしても、リングワールドにぶつかってくることはあるまい——。〈建設者〉は、その軌道の遠日点を、環の内側においたはずだ。

あまり期待はかけず、彼はたずねてみた。「世界の縁を走っている交通機関について、何か知らないか？」そうたずねたとたんに、彼は何かまずいことが起こったことを直感した。明らかに、

何もかも台なしにしてしまうような何かが生じている。しかし、何が?
僧侶がいった。「もう一度おっしゃってくださいませんか?」
ルイスは同じことをくりかえした。
僧侶が答える。「その、話すものが、急に何かほかのことをいいましたぞ。何か——禁止されているというようなことを」
「馬鹿な」とルイス。だが、つづいて彼も、それを聞いた。翻訳機が、それまでとはがらりと変わった口調で、かなり長いことばをくりかえしたのである。
「『あなたの周波数は禁止された帯域である。その使用は——』あとはよく覚えておりません」と僧侶。「この会見は、これで終わりにするのがよさそうですな。あなたはどうやら、古代の、邪悪なるものを——」そこでことばを切ると、また翻訳機が、僧侶のことばでしゃべりだしたのへ耳を傾けた。「『——使用は、本世界の保守に関する法規第十二条違反である』これは、あなたのお力のことを——」
それにつづく僧侶のことばは、翻訳されなかった。
ルイスの手の中で、ディスクが、とつぜん赤熱の塊りと化したからだ。彼は、とっさにそれを、できるかぎり遠くへ投げ捨てた。地上へ落ちたとき、それはすでに白光を放って輝いていた——が、どうやら誰も傷つけずにすんだようだ。ついで、やけどの痛みがじいんと走り、あふれだす涙で目がかすんだ。
僧侶がひどく形式ばって、うやうやしく、こちらへ頭を下げるのがみえた。
彼は、同じように感情をおしかくした顔で、うなずきかえした。サイクルからおりてはいなか

ったので、そのまま操縦盤に手をやり、〈天国〉めざして上昇をはじめた。
そして、下から顔の見えない高さにまでのぼったとき、彼は、こらえていた痛みに顔をしかめ、ずっと昔、ウンダーランドで、千年も古代から伝わった貴重なステューベン・グラスを、落として割った男が口にした、最上級ののろいのことばを、吐きだしたのであった。

CamScannerでスキャン

# 17 嵐の〈目〉

〈天国〉をあとにした三台のサイクルは、相変わらず左舷(ポート)へ向けて、この地域一帯を蔽う暗い鋼鉄色の雲のすぐ下を縫うように飛びつづけた。ひまわり花(サンフラワー)の平原では、この雲のおかげで救われたものだ。が、いまやそれはただ、重苦しさを加えるばかりだった。

ルイスは、操縦盤の上の三点に指を走らせて、機を現在の高度に固定した。いちいち目でたしかめながら、注意ぶかく操作しなければならない。なにしろ彼の右手は、薬品とスプレイ皮膚で蔽われ、指先は火ぶくれになっているというありさまで、触感はまったくあてにならなかったからだ。それでも、この程度ですんでよかったと思わなければなるまい。ひとつまちがったら、どんなことになっていたか……。

〈話し手(スピーカー)〉の映像が、ダッシュボードの上に現れた。「ルイス、雲の上へ出たら、どうだろうかな?」

「何か見落とすかもしれない。上へ出たら、地上が見えなくなる」

「地図があるぞ」

「そいつに、ひまわり花(サンフラワー)のある場所が出てるかい?」

「なるほど、そのとおりだ」〈話し手(スピーカー)〉は、そくざに答えて、通信を切った。

〈話し手〉（スピーカー）とティーラは、ルイスがはるか地上で毛を剃った僧侶とやりあっているあいだ、〈天国〉の地図部屋で、待ち時間を有効に利用していた。ふたりで、縁（リム）への進路の地形図をうつしとり、また拡大スクリーン上で黄色く光ってみえる都市の位置をも、それに描きこんでいたのである。

ついで何ものかが、翻訳機の使っている周波数に対して文句をつけてきた。その独占権とは、いったい誰が、なんのために、どれほど昔から保有していたものなのか？　また、いままで何もいってこなかったのはどういうわけだろう？　ライヤー号を撃ち落とした隕石防衛装置のような、無人のまま作動している機械のようなものを、ルイスは頭にえがいていた。おそらくそれが、ときどき発作的に動きだすのにぶつかったのだろう。

〈話し手〉（スピーカー）の翻訳ディスクも、同時に灼熱して、このほうは彼の手のひらにくっついてしまった。クジン人の奇蹟的ともいうべき〝軍用〟医療品をもってしても、その手が使えるようになるまでには何日もかかるだろう。なにしろ筋肉そのものから再生してかからなければならないのだ。

地図は、かなり役に立った。文明の復活は、ほとんど大都市の周辺からはじまっている。そういう市街の上を飛ぶと、明かりや、煙のあがるのが見えた。

ネサスからの呼びだしライトが点いている。もう二十時間も前からついていたようだ。ルイスは、応答のスイッチをいれた。

見えたのは、パペッティア人の茶色いもじゃもじゃのたてがみと、呼吸に合わせて起伏している背中だけだった。瞬間、彼は、パペッティア人がまた硬直性の鬱状態にはいってしまったのか[illegible]声がとどいてきた。「よく答えてくれま

した、ルイス！　何かありましたか？」

「浮かぶ城を見つけた」とルイス。「そこに地図があったよ」その〈天国〉とよばれる城のこと、地図の部屋のこと、スクリーンや、惑星儀とその地図のこと、僧侶との出会い、その話してくれた物語と彼らの宇宙モデルのことなど、彼はあらいざらいパペッティア人に話してやり、また自分で思いついた疑問にもみずから答えを出した。

「おい。ところで、あんたの翻訳ディスクは、まだ無事かい？」

「いいえ、ルイス。ついさきほど、わたしの目の前で、白い光をだして焼けてしまいました。あまりびっくりしたので、もう少しで硬直に陥るところでした。どういうことなのかわけがわかりません」

「いいんだ。ほかのも焼けちまったのさ。ティーラは、座席のケースをこがして、サイクルに傷あとをのこした。〈話し手〉とぼくは、手にやけどしちまった。わかるかい？　これからぼくらは、リングワールド人のことばを覚えなきゃならないんだぜ」

「はい、そうですね」

「あの老人が、昔のリングワールド社会の没落について、少しでも知っていてくれたらよかったのに。思いついたこともあるし……」彼はパペッティア人に、有用なバクテリアの突然変異という理論を話してきかせた。

「ありうることです」とネサス。「物質変換技術を失ったが最後、彼らの文明は二度と恢復できないのです」

「え？　どういうことなんだい？」

「まわりを見まわしてみなさい。何が見えますか？」
ルイスはぐるりと首をめぐらせた。前方はるかに、雷雲がふくらみかけている。そのほかに見えるものといえば、いくつもの丘や谷間、遠くに都市がひとつ、半透明の環の構成物質をあらわにした双生児の山の峰など……。
「リングワールドのどこにでも、着陸して掘ったら、何があるでしょうね？」
「土さ」とルイス。「それで？」
「その下は？」
「ずっと土だな。それから岩床。ついで環の床面の物質だ」ルイスが答えているうちにも、地上の景観は刻々と変わっていた。ひろがってくる雷雲と山の峰、右手に都市、後方にも小さくなっていく都市、はるか無限の地平に光ってみえるのは、海か、それともひまわり花に侵された地域だろうか……見ているうちに、そのすべてが、表面だけのものであることがのみこめてきた。ちゃんとした惑星と、ここのちがいは、いわば人間の顔と、からっぽのゴムの仮面とのちがいなのだ。
パペッティア人は話しつづけている。「どんな惑星でも、掘っていけば、どこかに何か金属の鉱床が見つかります。この世界では、四十フィートも土を掘ると、環の構成物質にゆきあたります。この物質は、どう使うこともできません。もし穴をあけることができたとしても、そのさきは真空の宇宙です……まったくの骨折り損というわけです。
リングワールドを建設した文明が、安あがりの物質変換技術を持っていたことは、まちがいありません。そこで、その技術が失われたとしたら——どんな失われかたをしたにせよ——あとに

何が残るでしょうか？　もちろん、原材料物質の備蓄はありません。鉱物もありません。この世界にある金属といえば、機械装置と道具と、そして錆だけです。惑星間航行技術があっても、なんの助けにもなりません。この恒星系には、鉱物資源が皆無なのですから。一度崩壊した文明は、それきり二度と立ちなおれなくなるのです」
ゆっくりと、ルイスはたずねた。「いつ、そのことに気がついた？」
「少し前のことです。しかし、わたしたちが生きて帰るのに、重大な関係があるとは思えませんん」
「だから話さなかったってわけか。なるほどね」とルイス。この問題で、彼はいったいどれだけ頭を悩ませたことだろうか！　しかしその謎は、いまやあまりにもあっさりと解けてしまった。知性ある種族の前途に、これはまたなんというおそるべき陥穽が、待ちかまえていたことか。
ルイスは行く手に目をすえた（ネサスの映像が消えるのにも、ほとんど気がつかなかった）。前方の暴風はもうかなり近くなり、大きくひろがっている。音波シールドで乗りきれることはたしかだが、しかし……。
上を飛びこえるにこしたことはない。ハンドルを引くと、フライサイクルは、〈天国〉以来ずっと頭上を蔽いつづけている暗い雲の層に向かって上昇をはじめた。
ルイスは、ぼんやりと想像をめぐらせる……。
新しいことばを覚えるのは、時間のかかる仕事だろう。それに、あちこちで着陸するたびにことばを習っていくということは、まず不可能である。どうしたらいいのか、これは重大な問題だ。
環の原住民が野蛮化してから、もうどれだけになるのか？　全住民が同じことばを使わなくなっ

てから、どれくらいたったのか？　もとの言語から、現在のそれは、どれほどかけはなれてしまっているのだろうか？

視界がぼやけ、全体が灰色にかすんだ。雲の中に突っこんだのだ。霧の流れが触手のように、ルイスの音波シールドのまわりで渦巻く。そして突然、サイクルの編隊は、陽光のもとへと躍り出た。

リングワールドのはっきりしない地平の果て、無際限につづく雲海のかなたから、巨大な青い〝目玉〟がひとつ、ルイス・ウーをにらんでいた。

もし、神の頭のサイズが地球の月ほどもあったとしたら、その〝目〟は、ちょうどこのくらいの大きさになるだろう。

ルイスがそのかたちを見てとるのに、一瞬かかった。つぎの瞬間、彼の脳はその見たものを拒否しようとした。ついで、周囲のあらゆる光景が、光を当てそこねた立体映像(ホロ)のようにぼやけていくのが感じられた。

がんがんする耳の中で、誰かの悲鳴がきこえる。

おれは死んだのだろうか？　ふと、彼は思った。

悲鳴をあげているのは、ネサスだろうか？　いや、彼との通話は、さっき切ったはずだ。

声の主は、ティーラだった。これまで何も恐れたことのないティーラなのだ。両手で顔をおおって、巨大な青い目玉の凝視からかくれようとしている。

目玉は、まっ正面、まっすぐ左舷(ポート)の方向に浮かんでいた。一行をそっくり吸いこんでしまいそ

うだ。
おれは死んだのか？　創造主の裁きの庭にひきだされたところなのか？　だが、どっちの創造主の？
造物主の存在を信じるとすれば、ついにルイス・ウーも、どっちのほうを信じるかを最終的にきめなければならぬときがきたようだ。
青と白の目であった。白い眉毛があり、瞳は暗い。白いのは雲で、青いのはその向こうの空だろうか。あたかも全体が、大空の一部のように見える。
「ルイス！」ティーラの悲鳴。「なんとかして！」
こんなことがありうるものか、とルイスは必死で自分にいいきかせた。首すじが、固いつららに変わったみたいだ。頭の中を、同じ考えが、どうどうめぐりしている。いくら宇宙が広いからといって、存在しえないものもあるはずだ。
「ルイス！」
ルイスは、やっと声が出た。「〈話し手〉。おい、〈話し手〉。何か見えるか？」
ちょっと時間をおいて、クジン人が答えてきた。奇妙に平板な口調だ。「正面に、大きな人間の目が見えるぞ」
「人間の？」
「そうだ。おまえにも見えるのか？」
事態は、がらりと一転した。人間の目。ルイスがひとこともいわないのに、クジン人は人間のといったのだ。もしあの目が、超自然的な啓示か何かだったら、クジン人のほうはクジン人の目

を見るか、あるいはまったく何も見ていないはずだ。
「じゃ、あれは自然現象だ。そうにちがいない」とルイス。
ティーラが救いを求めるように、こっちを見つめた。
だが、どうしてあの目は、一行をここまで引きよせたのだろう？
「ああ、そうか」ルイス・ウーは、そうつぶやくと、ハンドルをぐいと右に切った。サイクルが右へ向きを変える。
「向きがちがうぞ」そくざに〈話し手(スピーカー)〉がいった。「ルイス、舵をもどせ。でなければ、おれに操縦をかわれ」
「あいつの中を通りぬけるつもりじゃないだろうね？」
「迂回するには大きすぎるぞ」
「おい〈話し手(スピーカー)〉、あいつはプラトー環状山(クレーター)より大きくはないはずだ。一時間もあれば迂回できる。どうしてわざわざ危険をおかそうとするんだ？」
「こわいなら、編隊から離脱しろ、ルイス。目玉をまわって、向こう側で落ちあおう。ティーラ、おまえもそうしていいぞ。おれは、このまま直進する」
「なぜだ？」ルイスの声は、われながら情けなかった。「あんたは、あの——偶然できた雲のかたちに立ち向かうことで、自分の男らしさを示そうとでもいうのか？」
「おれの、なんだと？　ルイス、おれの男性機能をかれこれいっている場合ではないぞ。問題はおれの勇気だ」
「なんだって？」

三台のサイクルは、毎時一千二百マイルの巡航速度で、青空を突進している。
「どうして勇気が問題なんだ？　答えてくれなきゃいけないぜ。三人の生命をかけようっていうならな」
「そんなつもりはない。おまえたちは、迂回すればいいのだ」
「そのあと、どうやって落ちあう気だ？」
クジン人は考えこんだ。「ひとつだけ話してやる。おまえは、異端のクダプト伝道師について、何かきいたことがあるか？」
「いいや」
「対人間第四次休戦後の暗黒時代に、クダプト伝道師と名のる狂人が新しい宗教を起こした。彼はクダプト某という半名前（ハーフ・ネーム）をもつ身分だったので、族長ご自身と一対一の決闘によって処刑された。が、その狂信は地下に潜んで、いまだにつづいている。クダプト教の説くところによると、造物主たる神は、みずからの姿に似せて人間をつくりたもうたというのだ」
「人間を？　しかし――その、クダプト伝道師ってのは、クジン人なんだろう？」
「そうだ。あのとき、人間は、連戦連勝だったな、ルイス。三世紀間に四度の大戦、それを、おまえたちは勝ちぬいていた。クグプト某の弟子どもは、祈りをささげるとき、人間の顔の面をかぶった。なんとかして造物主を戸惑わせ、そのあいだに勝利をおさめようと願ったのだ」
「だから、あんたは、あの〈目〉が地平線の向こうに見えたとき――」
「そうだ」
「驚きいったたな」

「ルイス、これだけはいっておくが、おれの理論のほうが、おまえのよりは、ずっとましだぞ。偶然できた雲のかたちだと！　よくもそんなことがいえたものだ！」

ルイスの頭も、ようやくまわりはじめていた。「よし、〝偶然〟はひっこめよう。おそらく環(リング)の建設者が、自分らの好みか、それとも何かの目じるしに、あんなものをつくったんだよ」

「なんの目じるしだ？」

「そこまでわかるもんか。何か、大がかりなものだろうよ。遊園地とか、聖地の教会堂とか。眼科医の組合の本部かもしれない。彼らの持っていた技術と、その広さをもってすれば、なんでもできたはずだ！」

「のぞき屋をいれる牢屋のしるしかもね」ふいにティーラが、話の核心に割りこんだ。「私立探偵の大学かもしれない！　大きな三次元テレビのテストパターンかも！　〈話し手(スピーカー)〉、あたし、あなたと同じくらいこわかった」ティーラの口調は平常にもどっていた。「てっきり、あれ――なんだと思ったんだか、もうわからない。でも、あたし、あなたの味方よ。いっしょにあの中をつきぬけましょう」

「よろしい、ティーラ」

「もしあれが目をつぶったら、いっしょに死ぬのよ」

「〝多数はつねに正気〟か」ルイスは引用句を持ちだした。「ネサスを呼びだそう」

「どうぞご勝手に！　どうせもう通りぬけるか、まわるかして、さきにいってるわ」

ルイスは、ことさらに高笑いした。彼もすっかりおびえあがっていたのだ。「ネサスが、ぼくらのあとをつけてきているとは、誰も思いついていないようだな？」

「なんですって?」
「あいつはパペッティア人だ。ぼくらのうしろへ大まわりして、それから、たぶん〈話し手(スピーカー)〉のサイクルに追従(スレイヴ)してるのさ。そうすれば、〈話し手(スピーカー)〉につかまる心配もないし、危険があれば、まずわれわれがそれに出くわすというわけだ」
〈話し手(スピーカー)〉がいった。「ルイス。おまえの、卑怯者の考えかたに合わせる能力は、驚くべきものだな」
「いいっこなし。みんな異世界にやってきてるんだ。異星人の考えがわかるようでなきゃね」
「よかろう。おまえとやつが、それほど似たような思考を持っているからには、やつを呼びだして意見を聞くがいい。おれはあの〈目〉と対面して、そのうしろか、それとも内部に何があるか、見さだめるつもりだ」
ルイスは、ただちにネサスをよびだした。
交信機の映像にうつったパペッティア人は、また背中だけを見せていた。呼吸につれ、たてがみがゆったりと波うっている。
「ネサス」ルイスは声をかけた。ついで、もっと大きな声で、「ネサス!」
パペッティア人の背中が、ぴくんと動いた。頭がひとつ、そうっと相手をうかがうように持ちあがった。
「サイレンでも鳴らさなきゃ出てこないかと思ったぜ」
「緊急の用件なのですか?」両方の頭が、緊張にふるえながら現れた。

正面の、巨大な青い〈目〉を、まともに見かえすことは、ルイスにはとうてい不可能だった。視線をそむけながら、彼はことばをつづけた。「一種の緊急事態といえる。仲間が、気がくるって、遭難しそうなんだ。このままいかせるわけにはいかない」

「説明してください」

「前方を見てくれ。人間の目のかたちをした雲が見えるかい？」

「見えます」とパペッティア人。

「あんなもののできる原因を、何か思いつかないか？」

「明らかに、一種の暴風ですね。リングワールドでは、渦巻き台風ができないことは、すでに理解しているでしょう」

「ん？」ルイスはそんなことを考えてみたこともなかった。

「台風の渦巻きは、緯度に差のあるふたつの気団が持つ速度のちがいのため、コリオリーの力によって生じます。惑星は自転する擬似球体です。いまもしふたつの気団が、南と北から、部分的真空を埋めるためにぶつかってくると、もとの速度差が残っているため、たがいにすれちがう方向に向かいます。こうして、空気の渦巻きが生ずるのです」

「台風の原理なら知ってるよ」

「では、リングワールドに舞台を移して考えてごらんなさい。隣りあったどの気団も、実際上、速度は等しいといっていいでしょう。したがって、渦巻きは生じません」

ルイスは、前方の目のかたちをした嵐のほうを、ちらりと見やった。「しかし、それじゃ、どんな風ができるというんだ？　何もできないじゃないか。ぜんぜん空気の回転がないんならね」

「ちがいます、ルイス。暖かい空気は上昇し、つめたい空気は下降します。しかしそれだけでは、前方に見えるような嵐は生じません」

「あたりまえさ」

「〈話し手（スピーカー）〉は、何をするというのです？」

「あのでっかいしろものの中心を通りぬけるっていうのさ。うしろに誠実なティーラをしたがえてね」

「それは危険です。ふつうの嵐なら、音波シールドが防いでくれますが、あれはどうみても、ふつうの嵐ではありません……」

パペッティア人は、まるでルビー・レーザーのように、美しく澄みわたった叫び声をあげた。

「人工的なものなんじゃないかと思うんだがね」

「はい……リングワールドは、全周に、大気循環システムを備えていたと思われます。しかしその機構も、この世界の動力供給がとだえると同時に、作動しなくなったでしょう。でもその結果は……ああ、ルイス、わかりました」

「なんだい？」

「まず、あの嵐の中心の近くに、大気を吸いこむ空気溜め（エア・シンク）があると考えましょう。それであとはすっかり解釈できます。

考えてみなさい。空気溜め（エア・シンク）が大気をとりこむと、部分的な真空ができます。すると、回転方向（スピンワード）と反回転方向（アンチスピンワード）から、大気が流れこみます——」

「それに、左舷（ポート）側と右舷（スターボード）側からもね」

CamScannerでスキャン

「それは問題になりません」パペッティア人は、はねつけるような語調で、「ただし、回転方向（スピンワード）からやってくる空気は、わずかに周囲より軽くなります。それで、上へあがります。反回転方向（アンチスピンワード）からやってくる空気は、わずかに周囲より重く――」

ルイスは、そこでもうついていけなくなってしまった。「なぜ？」

「反回転方向（アンチスピンワード）からくる場合を考えましょう。その気団の回転速度は、環（リング）そのものよりも、わずかに速くなります。したがって、遠心力によって、かすかに下降するのです。

それが、あの〈目〉の下まぶたをかたちづくります。回転方向（スピンワード）からくる空気は上昇し、上のまぶたになります。当然、渦巻き効果が生じますが、ただし、この場合の回転軸は、ふつうの惑星なら垂直になるところを、水平になるのです」

「だって、そんなわずかな作用で！」

「しかし、ルイス、ほかに同じような作用は何もないのですよ。この動きに干渉するものも、ストップをかける要素もありません。長いあいだには、いま見えるようなものができあがるのです」

「だろうな、なるほど」巨大な〈目〉も、これまでほどおそろしくは感じられなくなった。パペッティア人のいうとおり、あれは嵐の一種なのにちがいない。黒い雲から、上空の陽光に照らされた白い雲の峰、それに〝台風の目〟にあたる虹彩の部分にいたるまで、暴風のあらゆる色合いをそなえている。

「いうまでもなく、ここで問題なのは空気溜め（エア・シンク）です。なぜ、あの中心の近くで、空気がうすくなるのでしょう？」

「たぶんあそこじゃ、吸いこみポンプがまだ動いてるんだろう」
「そうは思えませんね、ルイス。もしそうだとしたら、この地域での大気の擾乱も、計画されていたことになります」
「なんだって？」
「土壌や岩盤まではがれて、環の構成物質がむきだしになっている場所がありましたね？　あのような浸蝕は、明らかに計画外のものです。そして、ここへ近づくにつれて、そういう地域がふえてきているのに、気がつきましたか？　目のかたちをしたあの暴風が、周囲数万マイル、あなたやわたしの惑星表面よりも大きな面積の、予定されていた気象を、すっかり変えてしまったのです」
ルイスは、今度こそ納得して、ひゅうと口笛をならした。「カホなことになったもんだな！　しかし——いや、わかったぞ。あの〈目〉の中心には、隕石の突きぬけた孔があるんじゃないかな？」
「はい。ことの重大さがわかりましたね。環の構成物質さえ貫通したものがあるのです」
「しかし、ぼくらの持っている武器のたぐいじゃない」
「そのとおり。それでも、あそこに孔があることはまちがいありません」
さきほどのルイスの迷信的な恐怖は、すでに一場の悪夢の記憶でしかなかった。パペッティア人の平静な分析ぶりに影響されて、すっかり気がおちついていたのだ。ルイスはもうなんの恐怖もなく、まっすぐ前方の〈目〉を見つめた。「あの中へはいってみよう。虹彩の部分なら、通っても危険はないはずだな？」

「中には何もないでしょう。空気は、いくらかうすくなっているはずですが」

「いいとも。みんなにこのことを教えてやろう。こっちはみんないっしょに、あの中を通りぬけることにするよ」

中心の虹彩の部分に近づくにつれて、空は徐々に暗くなってきた。頭上に夜が迫っているのだろうか？　それはわからない。いやがうえにも厚く重畳してくる黒雲の層だけでも、これくらいの暗さになって当然だろう。

〈目〉の大きさは、端から端まで少なくとも百マイル、上下も四十マイルをくだるまい。周囲の色が、近づくにつれて青みがかってくる。虹彩をとりまく気流の層とその動きが見えはじめた。そして、〈目〉の真の形状が、やがて明らかになった。それは、比較的定常状態で回転しているつむじ風のトンネルで、その断面のかたちが、人間の目そっくりに見えるのだった。

だが、すでにその虹彩に突入しかけているいまも、それはなお、目玉のように見える。まさしく、神の目の中へ落ちこんでいく感じだ。周囲の眺めは、身の毛もよだつようなものだったが、度がすぎて、いっそ漫画的に思われるくらいだ。きっかけひとつで、笑いとばすか、悲鳴をあげるか、どっちへもころびそうだった。あるいは、すぐ引っかえすかだ。リングワールドの床面に孔があいているかどうか、それをたしかめるには、ひとりいれば充分である。ルイスがいま逃げだしたところで、どうということはない……。

そのまま進入した。

ほとんどたえまなしの稲妻だ。周囲の、ある範囲だけは、大気は澄みわたっている。その向こう、虹彩を一歩出はずれたところでは、煤のような色の雲が周囲全体にわたって渦をまき、台風をはるかにしのぐ速さで動いている。

「草食いのいったとおりだな」〈話し手〉がうなった。「ただの嵐にすぎん」

「おかしな話だな。四人のうちで、あいつだけが、この〈目〉を見ても、あわてなかったぜ。ぜんぜん、迷信っけがないのかな」ルイス・ウーがどなりかえした。

ティーラが叫んだ。「前のほうに、何かあるわ！」

トンネルの下面に、じょうご形の凹みができているのだ。ルイスは緊張にくちびるをひきつらせて、両手を操縦盤にかけた。あの凹みの上は、猛烈な下降気流だろう。

が、この〈目〉に突っこんだときとくらべると、いまの彼は、ずっと気楽になり、緊張を解いていた。パペッティア人すら安全と考えた場所で、何が起こるというのか？

凹みの上へ近づくにつれ、雲と稲妻が、こもごも渦巻きながら、押しつつむように迫ってくるのが感じられた。

減速して、凹みの上に停止すると、フライサイクルのモーターが、下降気流と闘っているのがわかった。音波シールドをとおして、暴風のうなりが耳にとどいてくる。

まるでじょうごを上からのぞきこむような眺めだ。たしかにあの下方では、空気が吸いこまれている。しかしそれは、高速ポンプの働きか、それとも、リングワールドの黒い底をぬけて、宇宙へ放出されているのだろうか？　ここからでは、そこまでのことはわからない……。

ティーラのサイクルが下降をはじめていたことを、ルイスは知らなかった。おたがいずっと離

れていたし、下のほうで異様な光がきらめくのに、気をとられていたのである。何かちらちらしたものが渦巻きの奥へ遠ざかっていくのが見えたが、それが何かということまでは気がつかなかった。

ついで、嵐の音に吹き消されそうなティーラの叫び声がきこえた。

交信機の映像は、はっきりと見えている。彼女は、下方に目を向けて、おびえているようだ。

「どうしたんだ？」ルイスがどなった。

かすかな答えがもどってきた。「……つかまっちゃった！」

彼は下を見おろした。

渦巻く円錐形をした空洞の内部の空気は、くっきりと澄んでいる。奇妙なことに、そこは明るかった。稲妻そのものの光に照らされてではなく、極度に真空に近い場所における電位差によって生じる、これは陰極線効果なのだ。そのはるか下のほうできらめく一点……何かだ。フライサイクルかもしれない。外宇宙へひらいた孔を見たいだけのために、この大渦巻きの中へフライサイクルを乗りいれる馬鹿が、いたとしたらだが。

ルイスは、胸がわるくなった。打つ手はない。まったく、どうすることもできないのだ。彼は必死でその眺めから、目をもぎはなして——。

ダッシュボードの上に浮かぶティーラの目を見つめた。彼女は、何か下のほうの、おそるべきものを見おろしているらしい——。

彼女の顔からは血の気がひいている。

その恐怖の表情が、みるみるうちに、白い屍体のようなおだやかな顔つきに変わっていく。彼

女は失神しかけていた。酸素欠乏のせいか？　音波シールドは、真空中でも、空気を保持してくれるが、それには、あらかじめそのようにセットしておかなければならないのだ。

なかば失神した彼女が、ルイスを見あげていた。なんとかしてくれ、という表情。なんとかして！

その頭が、がくりとダッシュボードの上に突っ伏した。

ルイスの歯は、下くちびるにくいこんだ。血の味がする。ネオンの色を発して輝く雲のじょうごを見おろすと、それは、バスタブの水を流すときの渦巻きに、無気味なほどよく似ていた。その中に、ティーラのサイクルらしい、小さな一片が、ちらりと見え――

――それが、不意に、まっすぐ、渦巻く雲のじょうごの壁に向かって突進し、その中に消えた。そして数秒後、はるか前方の、この縦型台風の〈目〉をずっと進んだ先のほうに、白く尾をひく飛行機雲が現れた。先端の鋭くとがった、一条の白線。どういうわけか、それがティーラのサイクルだということを、彼はなんの疑念もなく確信していた。

「どうなったのだ？」〈話し手(スピーカー)〉が声をかけてきた。

ルイスは、はげしく首をふった。答える気にもなれない。全身の力がぬけていた。理性のどこかが短絡(ショート)をおこしたようだ。思考が、同じ道をたどって、どうどうめぐりをつづけている。

交信機のうつしだすティーラの姿は、がっくりと頭を落として、見えるのはほとんど髪ばかりだ。気を失った彼女をのせて、操縦するものもいないフライサイクルが、音速の二倍よりもはるかに速い速度で突進している。誰かが、なんとか手をうたなければならない……。

「だが、彼女は死にかけていたのだぞ、ルイス。ネサスが、われわれの知らぬ制御装置を使った

のかな?」
「いや。むしろそう思いたいくらいだ……しかし、ちがう」
「それ以外に、あれは考えようがない」と〈話し手〉。
「その目で見たとおりさ! 彼女は失神し、頭を操縦盤にぶつけた。とたんに彼女のサイクルは、地獄も顔負けのいきおいで、渦からとびだしちまったんだ! ひたいがちょうど、正しいボタンを押したんだよ!」
「馬鹿なことを」
「ああ」ルイスは、もう考えるのをやめて、眠りこんでしまいたい気分だった……。
「確率ということを考えてみろ、ルイス!」そういうと同時に、クジン人も気づいたらしく、口をぽかんとあけたまま考えこんだ。が、結局その口から出たのは、「いや、ありえないことだ」
「ああ」
「そういう人間が、この探険に加わったはずがない。もし彼女の幸運が、本当にたよりになるものならば、ネサスは彼女を見つけだすことができなかったはずだ。彼女は地球にいたはずなのだ」
稲妻がきらめき、黒雲にとりまかれた長い長いトンネルを、さきのほうまで照らしだした。そのまっ正面に残っている、まっすぐな細い線。ティーラのフライサイクルが残した、水蒸気の凝縮の痕跡だ。しかし、サイクルそのものは、もうどこにも見えなかった。
「ルイス。われわれがリングワールドに墜落することも、ありえなかったはずだぞ!」
「それがどういうわけなのか、いま考えてるところさ」

「彼女を救う方法でも考えたほうがいいようだな」

ルイスはうなずいた。とくにさしせまった気分もなく、彼はネサスへの呼びだしボタンを押した――これは、〈話し手（スピーカー）〉にやらせるわけにはいかない。

パペッティア人は、まるで合図を待っていたかのように、そくざに答えてきた。〈話し手（スピーカー）〉が、通話を切らずにいるのが、ルイスには意外だった。いそいで彼は、前後のあらましを説明した。

「ふたりとも、ティーラを見そこなっていたようです」ネサスがいった。

「ああ」

「たしかに彼女のフライサイクルは、緊急パワーで動いたのです。でも、ひたいでボタンを押すだけでは足りません。その前に、まず、オーバートップ・スロットを操作しなければならないのです。偶然のせいで、それができたと考えるのは、むずかしいようです」

「そのスロットはどこにあるんだ？」パペッティア人にそれを教えてもらうと、ルイスはいった。

「彼女は、たぶん面白半分に、それをいじったんだと思うよ」

「ほんとうですか？」

〈話し手（スピーカー）〉が割りこんだ。「だが、われわれはどうすればいい？」

「彼女が目をさましたら、わたしのほうへ通話をまわしなさい」ネサスは、ぴしりといった。

「そうすれば、もとの通常駆動にもどす方法を教え、それから、こちらを見つける方法を教えます」

「それまでは、何もできないのか？」

「そのとおりです。推進装置のユニットが焼け切れるおそれはあります。しかし、フライサイク

ルが、障害物にぶつかったり、墜落したりすることはないでしょう。彼女はおよそマッハ四で遠ざかっています。いま彼女にいちばん危険なのは、酸素の欠乏で、脳をやられることです。しかし、たぶんその心配もないでしょう」
「なぜだ？　酸素欠乏は危険だぞ」
「そんな危険に遭うほど、彼女は不運ではないでしょう」と、ネサスは答えた。

## 18 ティーラ・ブラウンの危機

嵐の〈目〉からぬけだしたときは、もう夜だった。星はひとつも見えない。が、ときたま頭上を蔽う雲がとぎれるたびに、〈アーチ〉のかすかな青い光がさしこんでくる。

「おれは考えなおすことにした」〈話し手（スピーカー）〉がいった。「ネサス、よかったら、隊へもどるがいい」

「そうしましょう」と、パペッティア人が答えた。

「異星人としてのおまえの洞察力が必要なのだ。おまえの知恵は、りっぱなものだった。だが、わが種族に対してなした策略の罪を、おれが忘れていないことは、心にとめておくがいい」

「その記憶をどうこうしようとは思いませんよ、〈話し手（スピーカー）〉」

現実の要請が面子をしりぞけ、異星人への嫌悪に知性が打ち克ったわけだが、ルイス・ウーは、そんなことに気づいてもいなかった。雲の海が無限の地平と出会うあたりに、彼は目をさまよわせ、ティーラの残した航跡をさがしもとめた。が、すべては完全に消えうせたあとだった。

ティーラはまだ昏睡からさめていない。交信機のその映像は、せわしなく身動きするように見え、そのたびにルイスは、「ティーラ！」と声をはりあげるのだが、彼女は答えてこようとしないのだ。

「彼女のことは、見こみちがいでした」とネサス。「しかし、なぜだかわかりません。あれほどの幸運の持ち主をのせていながら、なぜわたしたちは墜落したのでしょう？」

「おれがルイスにいっていたことと同じだぞ！」

「しかし」パペッティア人はつづける。「もしその幸運が無力だとしたら、どうして彼女は緊急スラスターを起動できたのでしょう？　わたしは、前の設定のほうが正しいと信じます。ティーラ・ブラウンは、幸運という精神能力の持ち主なのです」

「では、なぜ、すすんで参加してきたのだ？　なぜライヤー号は墜落したのだ？　答えてみるがいい！」

「もうやめろよ」ルイスがいった。

が、ふたりは気にもとめない。ネサスがつづける。「彼女の幸運は、明らかに、偶発的な性質を持ったものなのです」

「もしその幸運に一度でも裏切られたら、彼女は死んでいたはずだ」

「もし死んだり、傷を負ったりしていたら、わたしは彼女をえらんでいません。ただ、偶然の一致は認めなければなりません。〈話し手〉、確率の法則は、偶然を前提としたものです」

「しかし、魔法は含まれていないぞ。幸運の血統など、あるわけがない」

「それが、あるんだな」と、ルイス。

こんどはふたりともふり向いた。彼は語をついで、「もっとずっと前に気づいていてしかるべきだったよ。災難をかわしつづけてきたから必ずしも幸運だとはいえない。それは問題じゃない。彼女の個性の形成に影響しただけのことさ。彼女はとにかく幸運なんだよ、〈話し手〉。信じな

きゃだめだ」

「ルイス、そういうたわごとが、どうして信じられるのだ？」

「彼女は、いままでに一度も怪我をしたことがないのさ。一度も」

「どうしてわかる？」

「わかるとも。彼女は、楽しいことはなんでも知りつくしているが、苦痛についてはまったく無知なんだ。あんたがひまわり花（サンフラワー）に焼かれたときのことをおぼえてるかい？　彼女にどうかときかれて、あんたは、「目がつぶれた」と答えた。なのに彼女は、「でも、どうなの」ってききかえした。あんたのことばの意味を納得していなかったからだ。

それに、うん、墜落のすぐあとのことだ。彼女は、やっとかたまったばかりの熔岩の上に、素足でのぼろうとした」

「知性が不充分だっただけだ」

「カホナ！　知性は充分さ。ただ、怪我をしたことがないだけなんだよ！　足の裏が熱くなると、氷より十倍もつるつるしたあの表面へ、まっすぐかけおりた——それなのに、ころびもしなかったんだ！

でも、そんなこまかいことをとりあげる必要もない」ルイスはつづけた。「彼女の歩きかたを見てりゃ、それで充分さ。ちっともスムーズじゃない。しゅっちゅうころびそうにしてる。それなのに、けっしてころばない。肘をどこかにぶつけるようなこともない。ものをこぼしたり、落としたりすることもない。いっさいないんだ。そういうことをしないよう気をつける必要もなかった。わかるかい？　だから、優雅じゃないのさ」

「人間以外のものには、わからぬことらしいな」〈話し手(スピーカー)〉が、疑わしげにいった。「おまえのことばは、一応そのまま受けとっておかなければならぬようだ、ルイス。それでも――幸運の能力などということが、どうして信じられるのだ？」

「ぼくは信じる。信じるよりほかはない」

「もしその幸運が、完璧にたよりになるものだったら、彼女はそもそも熔岩の上を歩こうなどと思わなかったことでしょう」とネサス。「それでも、〈ティーラ・ブラウンの幸運〉は、ある程度わたしたちを守ってくれています。心強いではありませんか。ひまわり花(サンフラワー)の平原を横切ったとき、もし雲がかかっていなかったら、三人とも死んでいたはずです」

「ああ」とルイス。しかし彼は、その雲が、〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉の皮膚を焼く程度には切れていたことを、忘れてはいない。〈天国〉の城の階段で、ティーラ・ブラウンは九階ぶんも上へはこんでもらったのに、ルイス・ウーはずっと歩いてのぼったことも、忘れられない。自分の手の繃帯に気づくと、〈話し手(スピーカー)〉の手が骨にとどくほどのやけどを負ったのに、ティーラの翻訳機は座席のケースを焼いただけですんだことも、あらためて思いだされた。「彼女の〈幸運〉ってのは、なんていうか、ぼくらを守るよりも、自分のほうを守るようなものらしいな」と彼はつぶやいた。

「いいではありませんか。でも、あなたは、何か腹を立てているようですね、ルイス」

「そうかもしれない……」彼女の友だちは、もう長いあいだ彼女に悩みごとを打ちあけるのをやめているだろう。ティーラには、悩みというものがわからないのだ。ティーラ・ブラウンに苦しみを説明するのは、盲人に色を説明するようなものだろう。

ハートの鞭打ち症の一件は？　ティーラは、一度も、恋を裏切られたことがなかったのだ。好

みの男が彼女のもとへやってきて、彼女が飽きるころまでいて、すすんで身をひいていくのだから。
偶発的にしろそうでないにしろ、ティーラの奇妙な能力は、彼女自身を……そう、たぶん何か、人間とは少々異質なものに変えてしまったようだ。むろんひとりの女性ではあるが、一種独特の強さと、才能と、そして盲点をもった何かに……。そしてこれが、ルイスの愛した女なのだ。思えば奇妙なことであった。
「彼女も、ぼくを愛した。それも、おかしな話だな」彼は考えこんだ。「おかしい。ぼくは、彼女の好みじゃないはずなのに。だが、もし彼女がぼくを愛さなかったら、そうだったら——」
「なんですか？　ルイス、わたしに話しているのですか？」
「いや、自分に話しているのさ……」その愛が、ルイス・ウーとその奇妙な探険隊についてきた、真の理由なのだろうか？　そうなると、謎はますますややこしくなる。ほかならぬ〈幸運〉が、彼女を、好みでない男との愛に陥らせ、その結果、彼女は不快かつ不吉なこの探険に加わって、何度か死の瀬戸ぎわに立たされる羽目になったのだ。どうも理屈に合わない。
交信機の、ティーラの映像が、顔をあげた。うつろな目と無表情な顔……混乱している……そして、突然、恐怖がよみがえった。大きく白眼をむいて、下を見おろす。きれいな卵形の顔が、錯乱でみにくくゆがんでいる。
ルイスが声をかけた。「落ちついて。気を楽に持って。リラックスするんだ。もう、大丈夫なんだよ」
「でも——」すっかりうわずっているが、たしかにティーラの声だ。

「もうぬけだしたんだ。嵐はずっとうしろのほうだよ。ふりかえってごらん。カホナ、ふりかえってみろというのに！」

彼女はふりかえった。ずいぶん長いあいだ、映像には、やわらかい黒髪だけがうつっていた。やっと向きなおったとき、彼女は前よりずっと平静になっていた。

「ネサス、話してやってくれ」とルイス。

パペッティア人がしゃべりだした。「あなたは、マッハ四で、もう三十分以上も飛んでいます。そのフライサイクルを正常な速度にもどすには、人さし指を、緑の縁のついた凹みのところにいれて――」

まだおびえていたが、ティーラはその指示に従う余裕をとりもどしていた。

「それでは、もどってくる番です。わたしのところの探知機によると、あなたのコースは、一定の曲線をえがいています。位置は、ここから左舷回転方向（ポート・アンド・スピンワード）よりです。あなたには探知機がないので、わたしのいうとおりに操縦しなさい。まずはじめに、まっすぐ反回転方向（アンチスピンワード）へ向きを変えるのです」

「それ、どっちのほうなの？」

「左へ舵をとって、〈アーチ〉の根もとが正面に見えるようにするのです」

「〈アーチ〉が見えないのよ。雲の上に出ないとだめだわ」彼女は、もうほとんどいつもの自分にもどったようだった。

だが、まったくカホナなおびえようだった！　あれほどおびえた人間を、ルイスは見たおぼえがない。当然、あんなにおびえたティーラを見るのははじめてだった。

いや、そもそもティーラがおびえるのを見たことが、これまであっただろうか？

ルイスは、肩ごしにふりかえった。雲の下で、大地は暗い。しかし、目のかたちをした嵐だけは、はるかな後方にありながら、〈アーチ〉からの光に青く光っていた。それは、完璧な凝視でこっちを見送っており、その凝視に、名残り惜しげな色はまったくなかった。

深くもの思いに沈んでいるルイスの名を、誰かがよんだ。「ああ」と彼は答えた。

「ぜんぜん怒ってないの？」

「怒ってないって？」彼は首をかしげた。ざっと思いかえしてみたが、あんなふうに渦の中へ降下していくという、通常の基準からすればおよそ信じられぬほど馬鹿げたことを、彼女はしでかしたのである。たしかに腹を立ててしかるべきだろう。彼は、古い虫歯の穴をつつくように、そうっと自分の心の中をさぐってみた。が、何も見あたらない。

通常の基準は、ティーラ・ブラウンには、あてはまらないのだ。

この虫歯の穴には、神経がなかった。

「怒ってないらしいね。それにしても、あの下のほうで、何が見えた？」

「あたしは死ぬとこだったのよ」ティーラは、いきり立ちはじめた。「そんなふうにこっちを見て首をふるのはよして、ルイス！　あたし、死ぬとこだったのよ。気にならないの？」

「何が？」

彼女は、まるで平手打ちでもくらったみたいにとびあがった。そして——彼女の手が動くのが見え、映像が消えた。

すぐにまた、彼女はもどってきた。「大きな孔があったわ」いきり立った口調で、「その奥に白い霧がかかってた。どう?」

「大きさはどのくらい?」

「知るわけないわ!」そしてまた、消えてしまった。

それはそうだ。あの、ちかちかするネオンのような光で、どうして大きさを見さだめることができよう?

ルイスは考える。——彼女は、みずから命を危険にさらし、それに対して腹を立てていないといって、相手を責めている。ひとを警報機あつかいにしてる。いつから、あんなふうだったんだろう?

ああいう調子で、長生きできるものなど、いるわけがない——。

「しかし、彼女は例外なんだ」ルイス・ウーはつぶやく。「それとも……」

おれは、ティーラ・ブラウンをおそれているのだろうか?

「あるいは、とうとうおれも、ぼけはじめたかな?」彼と同年輩のものには往々にして見られることだ。ルイス・ウーほどの年齢になるまでに、人は幾度となく信じられぬようなことが起こるのを見せつけられる。その結果として、架空と現実の境界があいまいになってくることがある。

そうなった人間は、こちこちの保守派になって、ありえそうにないことは、それが事実とわかったあとでも信じようとしない……運動の第二法則に抵触するという理由でスラスター駆動をうけいれようとしなかったクラーゲン・ベレルのように。か、またあるいは、なんでも信じるように

なってしまう……スレイヴァーの[illegible]

のように。
どっちにしても、いきつくさきは、破滅と狂気である。
「そんなはずはない！」当然死ぬはずだったティーラ・ブラウンが、フライサイクルのダッシュボードに頭をぶつけることによって助かったなどというのは、どうみても偶然の域をこえた出来ごととしか思えない！
が、それならなぜ、ライヤー号は墜落したのか？
ルイスと、回転方向（スピンワード）はるかに浮かぶ銀色の点のあいだに、もうひとつ、銀色の点がわりこんできた。「やあ、久しぶりだな」ルイスがいった。
「どうも」とネサス。こんなに早く追いついてきたのは、緊急駆動を使ったのにちがいない。
〈話し手（スピーカー）〉が合流を許したのは、わずか十分ほど前のことである。
小さい透明な三角形の頭がふたつダッシュボードの上に浮かんで、ルイスを見つめた。「これでひと安心です。三十分くらいのうちに、ティーラがもどってくれれば、もっと安心なのですが」
「なぜ？」
「〈ティーラ・ブラウンの幸運〉に守ってもらえるからですよ、ルイス」
「そうは思えないね」と、ルイス・ウー。
〈話し手（スピーカー）〉の映像は、だまったままこっちを見つめている。通話にはいっていないのは、ティーラだけだ。
「あんたの傲慢さには辟易してる」ルイスはつづけた。「幸運な人間の品種を育てるなんて、悪魔も顔負けさ。悪魔のことは、知ってるのか？」

「いろいろな本で読みました」

「気取り屋め。でも、傲慢さより悪いのは、あんたの間抜けさかげんだ。フィーラ・ブラウンにとっていいことは、われわれにもいいことだと、のんきにきめこんでいる。どうしてそんなことがいえるんだ？」

ネサスは奇妙なつぶやきをもらした。それから、「当然のことです。同じ宇宙船の中に閉じこめられていれば、その難破は、みんなにとって不運ですから」

「かもな。だがもし、あんたが、フィーラのいきたいところを通りすぎながら、着陸を拒否したと考えてみろよ。機関の故障は、フィーラにとって幸運だが、あんたにはそうじゃないってことになる」

「馬鹿なことを。ルイス！　どうしてフィーラ・ブラウンが、リングワールドにきたがっていたなんていえるのです？　わたしが話してやるまで、彼女は、その存在さえ知らなかったのですよ！」

「でも、彼女は幸運なんだ。たとえ何も知らなくても。ここへくることが彼女にとってよければ、とにかくきたことだろう。そうすると、彼女の〈幸運〉には、偶然的な要素など、まったくないことになる。どうだい、ネサス？　その〈幸運〉は、ずっと作用しつづけていたんだ。あんたが彼女を見つけたのも、ほかに有資格者が見つからなかったのも、ぜんぶ彼女の〈幸運〉で説明ができるのさ。通話がどうしても通じないっていってたっけ。おぼえてるかい？」

「しかし――」

「躊躇したのも、彼女の〈幸運〉のせいだった。あんたと〈話し手〉が、どうしても合意に

とるかでもめたのを、おぼえてるかい？　さあもうあんたにもわかったろう」
「しかし、彼女がなんのために？」
「それは、ぼくもわからない」ルイスは、いらいらして、指の爪で頭をかきむしった。弁髪の部分をべつにすると、黒い直毛が、兵隊刈り（クルー・カット）ぐらいの長さに生えそろっている。
「その疑問で悩んでいるのですか？　わたしも同じです。いったい、リングワールドのどこが、ティーラ・ブラウンをひきつけるのですか？　この世界は、危険です。奇妙な暴風や、プログラムのくるった機械や、ひまわり花（サンフラワー）の大平原や、何をするかわからない原住民など、生命をおびやかすものばかりです」
「そいつだ！」ルイスは思わず叫んだ。「それだ。たしかにそいつが、解答の少なくとも一部になる。ティーラ・ブラウンには、それが危険じゃないんだってことが、わからないのか？　そのことを考えにいれずに、リングワールドを評価するわけにはいかないんだよ」
パペッティア人は、つづけざまに両方の口を、ぱくぱくと動かした。
「ややこしいことになったな、え？」ルイスは哄笑した。ルイス・ウーにとって、問題を解くことは、それ自体がひとつの喜びであった。「しかしそれは、解答の半分にすぎない。さて、もしあんたがいま——」
パペッティア人が悲鳴をあげた。
ルイスには、ショックだった。パペッティア人が、ことをそれほど深刻にうけとめるとは、思ってもいなかったからだ。ふたつの音程で、遠吠えのような声をあげたパペッティア人は、ついで、いやにのろのろしたしぐさで、二本の頸をからだの下にたくしこんでしまった。交信機の映

像にうつるのは、いまや彼の頭蓋を蔽うもじゃもじゃのたてがみばかりだった。

ティーラが話しかけてきた。

「あたしのことをしゃべってたのね」もう、怒りの気配もない口調だ。（恨みを抱くということが、彼女にはないのだ。と、ルイスはさとった。とすると、恨みを持つ能力も、生存競争に勝ち残る要素のひとつなのだろうか？）「話についていこうと思ったんだけど、無理だったみたい。ネサスは、いったいどうしちゃったの？」

「おどかしすぎてね。すっかりおびえさせちまった。さて、どうやって、きみをさがしあてようかね？」

「あたしのいる場所がわからないの？」

「探知機を持っているのはネサスだけだ。たぶん、ぼくらに緊急駆動の操作を教えてくれなかったのと、同じ理由からだろう」

「そんなことじゃないかと思った」とティーラ。

「彼にとっては、クジン人が怒ったときにそこから逃げだせることが、何より大事だったのさ。気にすることはない。で、話はどのくらいわかった？」

「あんまりわかんない。おたがいに、あたしがなぜここへきたがったのかって、いいあってたわね。ルイス、あたし、ここへくるつもりなんかなかったのよ。あなたについてきただけ。愛してるから」

ルイスはうなずいた。たしかに、ティーラがリングワールドへやってくるには、ルイス・ウーと行をともにするという動機づけが、必要だっただけだ。さしてうぬぼれるにはあたらない。

彼女は、その〈幸運〉ゆえに彼を愛した。かつて彼は、それを彼自身ゆえのものと思っていた。それだけのことだ。

「都市の上だわ」ティーラが唐突にいった。「明かりがいくつも見える。たくさんじゃないけど。大きくって保ちのいい動力源があったのね。〈話し手〉なら、たぶん地図で見つけられるんじゃないかしら」

「そいつがたよりになるかな？」

「明かりが見えるっていったでしょ。きっと——」そこで、ふっつりと声はとだえた。スイッチの音も、なんの前ぶれもなしに、消えてしまったのだ。

空白になったダッシュボードの上の空間を、ルイスはまじまじと見つめ、それから、呼びかけた。「ネサス」

返事はない。

ルイスは、サイレンを鳴らした。

まるで、動物園が火事になったときの蛇の夫妻といった感じで、ネサスが現れた。これがべつのときだったら、まことにこっけいな図だったろう。二本の頭が、くるったようにのたくり、二個の疑問符のようなかたちで、ダッシュボードの上に静止したのだ。ネサスの声が、「ルイス！何ごとです？」

〈話し手〉もただちに応じてきた。緊張した様子で、情報と指示を待ちうけている。

「ティーラに何か起こったんだ」

「そうですか」と、ネサスは答え、ふたつの頭がひっこんだ。

にがい思いで、ルイスは一度サイレンを切り、数秒後にもう一度スイッチをいれた。ネサスの反応は、前と同じだった。こんどは、ルイスのほうが、さきに口をひらいた。

「ティーラがどうなったのかわからなかったら、きさまを殺す」

「わたしにはタスプがあります」とネサス。「クジン人にも人間にも、同じように効く設計です。〈話し手〉への効果は、見たはずです」

「それで、防げると思ってるのか？」

「はい。そのとおりです」

「一丁、賭けてみるかい？」ルイスは、気を落ちつけながらたずねた。

パペッティア人は考えこんだ。「その賭けよりは、ティーラを救うほうが、ずっと安全でしょう。彼女があなたの配偶者であることを忘れていました」彼は下へ視線を向けた。「彼女の位置が、探知機に出ていません。これでは、どこにいるかわかりませんよ」

「とすると、彼女のサイクルがこわれたということか？」

「はい。それも、大破でしょう。発信機は、彼女のフライサイクルの場合、スラスター駆動ユニットの近くについていました。おそらく彼女は、あの通話ディスクを焼いたのと同じような、べつの機械装置にぶつかったのでしょう」

「ふむ。しかし、彼女の声がとぎれた位置は、わかるはずだ」

「左舷から回転方向へ十度です。とぎれた瞬間のことはわかりませんが、彼女のフライサイクルの最高スピードから推測できます」

〈話し手〉の手書きの地図上で、その方向に引いた斜めの線にそって、一行は飛びつづけた。二

時間のあいだは、明かりらしいものもみえず、ルイスは、もしや道を誤ったのではないかと気にしはじめた。

目のかたちをした嵐から、三千五百マイルのところで、〈話し手（スピーカー）〉の地図上の線は、海岸都市に達していた。それからさきは、大西洋ほどもある湾だ。ティーラが、その向こうまでいったとは思えない。この港湾都市が、彼女を見つける唯一のチャンスだ……。

とつぜん、ちょっと目にはわからぬほどゆるやかな斜面になった丘の稜線のかなたに、点々と光が現れた。

「とまれ」ルイスは小声で、叩きつけるようにいった。声をひそめても意味のないことはわかっている。が、〈話し手（スピーカー）〉はすでに、三台のサイクルをぴたりと宙にとめていた。

そうして浮かんだまま、明かりと、地上のもようを見つめた。

都市であった。眼路（めじ）のかぎりが都市なのだ。眼下にも、〈アーチ〉の青い光の中で、まるい窓のついた家屋が、街路と呼ぶにはあまりにも狭く曲がりくねった路地に区切られ、蜂の巣のように蝟集している。前方も——だいたい同じようだ。が、さきへいくにつれて建物の高さは増し、ついには摩天楼と浮かぶ城とで埋めつくされた区域へとつながっている。

「建てかたがちがうな」ルイスがささやいた。「建築様式が——ジグナムクリッククリックみたいじゃないんだ。かたちがぜんぜんちがう……」

「高層建築とはな」と〈話し手（スピーカー）〉。「リングワールドには土地がいくらでもあるのに、なぜあのように高くしたのだろう?」

「建築の腕を見せびらかすためさ。いや、この考えは馬鹿げてるな」とルイス。「なんの意味も

ない。なにしろ、このリングワールドをつくったほどの連中なんだから」

「おそらく、高層建築は、もっと後期の、文明が下り坂になった時期のものだろう」

おびただしい明かりだ——光り輝く何段もの窓の列、上から下まで光に包まれてそそり立ついくつもの塔。それらが一団にかたまっており、また、六つある浮き城がぜんぶそこにあつまっているところから、ルイスはすでに、そこがこの都市の中心部だろうと見当をつけていた。

そしてもう一カ所、その中心部から回転方向（スピンワード）よりの郊外部に、淡く白っぽいオレンジ色に輝いている区域があった。

建てこんだ家並の一軒の二階で、三人は〈話し手（スピーカー）〉の地図をかこんで、腰をおろしていた。〈話し手（スピーカー）〉は、一同がフライサイクルを屋内へ持ちこむことを主張した。「油断は禁物だ」というのだった。〈話し手（スピーカー）〉のサイクルのヘッドライトが、湾曲した壁に反射して、あたりをやわらかく照明している。奇妙な皿や盆のかたちに上面をくぼませたテーブルがひとつあったが、ルイスが埃をはらったとたんに、くずれおちてこなごなになってしまった。床には一インチも埃がたまっている。湾曲した壁の塗料もぼろぼろに剝げおち、裾板にそって空色の埃の山脈のようにつもっていた。

この埃からだけでも、都市の古さは、はっきりと感じとれた。

「地図部屋の記録がつくられたとき、ここは、リングワールド最大の都市だった」と〈話し手（スピーカー）〉。彼の三日月の鉤爪が、地図の上へのびる。「もともとは、海に面して半円形をなすよう計画された都市だ。〈天国〉という名の城は、もっとずっとあとになって、この都市が海岸ぞいに大きく

両翼を張りだしたところにできたものだ」

「その地図を写してこなかったのは、残念だな」とルイス。なにしろ〈話し手〉の地図では、この都市は黒い半円形として示されているだけだった。

〈話し手〉が、地図をつまみあげ、たたみながらいう。「このような巨大な廃墟には、多くの秘密が残されているにちがいない。こういう場所では、細心の注意をはらって行動しなければならんぞ。もしそもそも文明と名のつくものが、この土地——ここの構築物の上——で興隆できるとしたら、失われた技術への鍵はそこに求められるはずだ」

「金属のないことをどうします？」ネサスが反対した。「リングワールドでは、いちど崩壊した文明は、再建不能なのです。金属鉱物も、化石燃料もないのですから。道具をつくるにも、木と骨しかないのですよ」

「明かりが点いているではないか」

「秩序だった点きかたではありません——多くの自家用の動力源が、つぎつぎにこわれていった、その名残りです。しかし、あなたのいうとおりかもしれません」ネサスはつづける。「もし、この地で、大きな工作所が復活していたら、機械製作者に連絡をつけることもできます。いいえ、なんとしてでもそうしなければ」

「交信機の放射で、すでにわれわれのほうが探知されているかもしれんぞ」

「いいえ、〈話し手〉。交信機のビームは閉鎖回路になっています」

そのやりとりに、半分耳をかたむけながら、ルイスは考えていた。——彼女は傷ついているかもしれない。どこかで、倒れたまま動くこともできず、待っているかもしれない——。

が、その考えが、まったく実感をともなってこないのも事実だった。

おそらくティーラは、何かリングワールドの古い機械装置に出くわしたのだろう。そういうものがあったとしてだが。例えば、臨機応変に作動する自動兵器のたぐいだ。そいつが彼女のサイクルの交信機と探知用の発信装置だけを破壊し、動力系統には手をふれなかったとも考えられる。しかし、これはとうていありえそうにもない想像だ。

ではなぜ、一刻を争う気分になれないのだろうか？　いま、ルイス・ウーは自分の女が未知の危難に遭っているというのに、コンピュータのような冷静さをたもっている。

自分の女……そうだ。しかし、彼女はそれ以上の、そして何か異質の存在だ。

ネサスのおろかな誤算は、幸運の血統をもった改良人種が、自分の扱いなれたふつうの人間と同様なものの考えかたをすると思いこんでいたところにあったのだ！　幸運なパペッティア人は、果たして、そう、あのキロンのような正気のパペッティア人と同じようなものの考えかたをするのだろうか？

しかり、パペッティア人の場合、恐怖の概念は、その遺伝子にくみこまれている。

しかし、人間にとってそれは、後天的に学ばなければならぬものなのだ。

ネサスがいっている。「ティーラの偶発的な幸運が、一時消えたと仮定してみましょうか。しかし、この場合も、彼女が傷ついて救いを待っているということは、ありえないのです」

「なんだって？」ルイスは動揺した。どうやらパペッティア人も、ルイスと似たような思考過程を追っていたらしい。

「フライサイクルが破壊されたら、彼女はその場で死ぬでしょう。もし、即死しなかったら、彼

女は、幸運の能力がもどりしだい、救助されるはずです」
「その理屈はおかしいぜ。精神能力が、そんな〝法則〟に従うと思ったら大まちがいだ」
「論理はくるいようがありません、ルイス。わたしがいいたいのは、ティーラが緊急の助けを必要としていないということです。生きているなら時間はあるのです。朝まで待ってから、様子を見に出ましょう」
「そしてどうする？　どうやって彼女を見つけるつもりだ？」
「幸運がつづいていれば、彼女は何か安全な保護のもとにあるでしょう。そういう保護の手となりうるものをさがすのです。そういうものがあるかどうかは、明日になればわかるでしょうし、あるいは、彼女のほうからの信号を待ってもいいでしょう。合図する方法は、いくらもあるはずですから」
〈話し手（スピーカー）〉が割りこんだ。「しかし、ここのやつらは、みんな光を使っているな」
「だからどうだというのです？」
「そうなのだ。そこから思いついたのだが、彼女のサイクルのヘッドライトは、まだ使えるかもしれん。もしそうだったら、彼女はそれを、ともしつづけておくだろう。ルイス、おまえは、彼女に知性があるといったな」
「あるとも」
「そして、警戒心のほうは、まったくない。われわれに発見されることだけを考えて、ほかの何ものかに見とがめられることなど気にしていないのだ。もしヘッドライトがつかなければ、携帯レーザーで、動くものを見つけしだい合図するだろう——あるいは、火を焚くかもしれん」

「ということは、つまり、昼間になったら見つからないってことだ。たしかにそのとおりだ」ルイスはうなずいた。

ネサスがいう。「昼間、市街を調査するほうがさきです。住民が見つかれば、万事それでよし。見つからなかったら、つぎの夜にティーラをさがすこともできます」

「三十時間も、ほったらかしておこうってのかい？　この冷血漢の——。カホナ、さっき見た光は、彼女の信号だったかもしれないぞ。街路の光じゃなく、ビル全体が、もえるように光ってたやつのほうだ！」

〈話し手（スピーカー）〉が立ちあがった。「そうだな。われわれは捜索に出なければならぬ」

「わたしはこの探険隊の指揮官です。ティーラには、夜間この異星の都市の上を飛ぶ危険をおかすほどの価値はありません」

が、〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉は、すでに自分のフライサイクルにまたがっていた。「われわれはいま敵地にいる。だから、おれが指揮をとる。われわれは、隊員のひとり、ティーラ・ブラウンを捜索に出るのだ」

クジン人は、フライサイクルをふわりと浮きあがらせると、大きな卵形の窓をくぐりぬけた。その外には、ポーチの残骸があり、名も知れぬ都市の郊外がそのさきにひろがっている。

あとのフライサイクルは、一階においてあった。ルイスは、吹きぬけになった階段を、足をふみはずさないよう気をつけながら、かけおりた。階段の一部はこわれていたし、エスカレーター装置は、錆びついてから久しいようだった。

吹きぬけの上から、ネサスが見おろした。「わたしはここに残ります。でも、ルイス、これは

反乱罪です」

ルイスは返事もしなかった。彼のフライサイクルは浮上し、やはり卵形をした入口を通りぬけ、夜空へ向かって上昇した。

夜の空気はつめたかった。アーチからの反射光が、市街を青一色に染めている。ルイスは〈話し手（スピーカー）〉のサイクルのきらめきを見つけ、そのあとについて、まぶしく光り輝いている都市中心部からずっと回転方向（スピンワード）よりにある、郊外地区の光っている区域に向かっていった。

見わたすかぎり市街地だ。数百平方マイルもありそうな都市だ。公園のようなものすら見あたらない。これほどの広さをもったリングワールドで、なぜこんなに密集しなければならなかったのだろう？　地球でさえ、人間はいくらかでも、ゆとりを尊ぶのに。

もっとも、地球には転移ボックスがあった。それなのだ。リングワールドでは、生活のゆとりよりも、往き来の時間のほうが貴重だったのだろう。

「低空を飛ぶのだ」交信機で、〈話し手（スピーカー）〉がいった。「もしあの郊外の光が、ただの街灯のあつまりだったら、一度ネサスのところへもどる。ティーラが撃ち落とされたのと同じ危険をおかすわけにはいかん」

「よろしい」とルイス。答えながら、彼はふと思った——まったくの仮定にすぎない敵を前にして、これほどの用心ぶかさを示すとは。正真正銘、無鉄砲のかたまりであるはずのクジン人が、ティーラ・ブラウンよりはむしろパペッティア人のほうに近いような警戒ぶりである。

彼女はどこにいるのだろう？　いや、負傷しているのか、それとも死んでしまったのか？

ライヤー号が墜落するよりも前から、彼らはずっと、文明を保持したリングワールド人をさがし求めてきた。とうとう、それに出会ったのだろうか？　その可能性があればこそ、ネサスは、ティーラを完全に見かぎるわけにはいかなかった。ルイスの脅迫などなんの意味もなかったのだ。ネサスにとっては、自明のことだったろう。

だが、もしその文明を持ったリングワールド人が敵対的だったら？　そう、けっしてありえないこととはいえない……。

サイクルが、左のほうへ流されている。彼は進路を修正した。

「ルイス」〈獣への話し手〉の、何かと必死に闘っているような口調。「妨害があるようだ――」そして突然、決然たる命令口調で、「ルイス、引っかえせ。すぐにだ」

その命令は、ルイスの運動中枢に、直接働きかけたように感じられた。ルイスはただちに向きを変えようとした。

が、彼のサイクルは、まっすぐに飛びつづける。

ルイスは、渾身の力を、操縦桿にかけた。しかし、だめだ。サイクルは一直線に、都市中心部の光のあるほうへ向かっていく。

「何かにつかまった！」ルイスは叫び、その声とともに、恐怖が襲ってきた。まるであやつり人形だ！　巨大な、正体不明の知性をもった人形師が、彼の手足をとらえて、目に見えない筋書きのとおりに動かしている。その人形師の名を、ルイス・ウーは知っていた。

〈ティーラ・ブラウンの幸運〉である。

# 19　罠の中

〈話し手〉は、もっと実際的だった。緊急サイレンのスイッチをいれたのである。
いくつもの振動数をかさねた絶叫が、えんえんと鳴りつづける。パペッティア人は応じてこないのだろうかとルイスは思った。〝狼がきた〟の少年……？　しかし、やっとネサスの声が答えた。「はい？　なんですか？」ひどく高いヴォリュームだ。いうまでもなく、彼はまず階段をおりてこなければならなかったわけである。
「襲われた」と〈話し手〉。「何ものかが、われわれのフライサイクルを、リモートコントロールで飛ばせている。何か方法はないか？」
ネサスの胸中を知ることは不可能だった。指の役目を果たすために枝分かれした、ふたつのくちびるが、やたらに動いているが、そこからは何も読みとれない。この危急を救う方策はあるのか？　それとも、彼もまた、恐慌に陥ってしまったのか？
「交信機をまわして、下の様子を見せなさい。怪我をしてはいませんね？」
「いや。しかし、手の出しようがない」とルイス。「とびおりるわけにもいかない。高すぎるし、速すぎるんだ。まっすぐ都市の中央へ向かってる」
「何に向かって？」

「ああ、光ったビルの集団さ。おぼえてるだろう?」

「はい」パペッティア人は、何か考えこんでいるようだった。「どこからか、無法なシグナルが、サイクルの装置をのっとって動かしているのです。〈話し手〉、ダッシュボードのメーターの読みを知らせなさい」

〈話し手〉が読んでいる間にも、彼とルイスは、ますます都市中心部の灯に近づいていく。途中でルイスがさえぎった。「街灯のついた住宅地が見えるぞ」

「本当に街灯ですか?」

「どっちともいえる。家々の卵形のドアが、みんなオレンジ色に光ってるんだ。奇妙だ。たしかに街路用の照明だと思うが、そんな動力は、もうとっくに失われているはずなのに」

「そのとおりだ」と〈敵への話し手〉。

「うるさくいいたかないけど、もうすぐ終点だ。中央の大きなビルに向かってるらしい」

「見えます。円錐をふたつ重ねたようなかたちで、上のほうだけに灯がともっている建物ですね」

「そいつだ」

「ルイス、なんとかして、不法な干渉を排除しなければなりません。あなたのサイクルを、わたしのに追従させなさい」

ルイスは、追従機構を作動させた。

とたんに、巨大な足で蹴上げられたように、彼の尻の下で、サイクルが猛烈に跳ねあがった。

つぎの瞬間、あらゆる動力が一度に切れた。

緩衝バルーンが、前後で同時にはじけた。まん丸くふくらんで、びしゃりと両手を打ちあわせたように、彼をとじこめてしまったのだ。手を動かすことも、首をまわすことさえできない圧力である。

　彼は墜落していた。

「墜落してる」と彼は報告した。バルーンのために、両手はダッシュボードの上へ、まだ追従機構（スレイヴ・サーキット）にふれたまま、圧しつけられている。それが効きだすかもしれないと、彼はあとひと呼吸だけ待った。しかし、もう家々の密集した地面は、まぢかに迫っているだろう。ルイスは、スイッチを手動にもどした。

　何も起こらない。墜落は、つづいている。

　しいて平静をよそおいながら、ルイスは叫んだ。「〈話し手（スピーカー）〉、追従機構（スレイヴ・サーキット）にさわるな。役に立たない」それから、ふたりに見られていることを意識して、彼は表情をくずさず、両眼をあけたまま、リングワールドに叩きつけられるのを待ちうけた。

　減速は、いきなりやってきて、しかも手荒くサイクルをひっくりかえした。頭を下にしたルイス・ウーに、五Gの重力がかかった。

　彼は気が遠くなった。

　失神からさめたとき、彼はまだ頭を下に、緩衝バルーンの圧力だけで支えられていた。頭ががんがんする。舞台の上でさかさに吊りさがってしまった人形のルイスに悪態をつきながら、もつれた糸をほどこうとしている奇怪な人形つかいの姿が、ぼんやりと見えるような気がした。

空中に浮かんでいるその建物は、たけが短く幅がひろく、そして華麗だった。その下半分は、さかさにした円錐形だ。二台のフライサイクルが接近すると、水平な割れ目が口をひらいて、それをのみこんだ。

暗い屋内へすべりこんでいくうちに、〈話し手（スピーカー）〉のフライサイクルが、ルイスのすぐそばに並び、そして静かにひっくりかえった。緩衝バルーンがその周囲ではじけ、落ちかかる〈話し手（スピーカー）〉をささえた。にがい満足感をルイスはかみしめた。あまりにもみじめな思いがつづいたため、再会できたことを喜ぶ気にもなれなかった。

ネサスがしゃべっている。「あなたたちがさかさまになったところから見て、あなたたちを宙にささえている力場は、電磁気的な性質を持ったものです。その種の力は、金属には作用しますが、生物体には作用しないので……」

ルイスは、緩衝バルーンの圧力にさからって身をもがいた。が、本気でもがき出るわけにはいかない。自由になったら、たちまち墜落だ。どこかうしろのほうで、とびらが閉じたとき、ルイスの目はまだ闇になれていなかった。内部の様子は、まったくわからない。床からどのくらいの高さに宙づりになっているのかさえ、見当もつかないのだ。

ネサスがいう。「手でふれてみられますか？」

そして〈話し手（スピーカー）〉が、「うむ、ここへ手がはいれば……ひょう！　おまえのいうとおりだ。サイクルの外被が熱くなっているぞ」

「では、モーターも焼けてしまいました。フライサイクルは、動力を失ったのです」

「座席が熱から絶縁されていたのは、幸いだったな」

「リングワールド人が、電磁力の利用に長けていたところで、べつに驚くにはあたりません。彼らには、それ以外に、何もなかったのですから。ハイパードライヴも、スラスター駆動も、人工重力も……」

ルイスは、周囲に何か見えないものかと、目をこらしていた。ゆっくりなら、頭をまわすことができる。頬がバルーンの表面をこする。しかし、どこにも光は見えない。

バルーンの圧力に抗して、彼はダッシュボードの上でわずかに手を動かし、どうやら、ヘッドライトのスイッチと思われるものをさぐりあてた。なぜそれが点くと思ったのか、自分でもわからない。

白い、収束した一条の光芒が、はるか向こうの曲面をなした壁に当たり、そこからの反射が、あたりをぼんやりと照らしだした。

十数個の乗り物が、周囲の、同じ高さの平面上に浮かんでいた。背負い式のレース用ジェット・パックくらいの大きさしかないものから、ふつうの飛行車(フライング・カー)くらいのにいたるまで、種類はいろいろで、なかには、透明な船殻を持った飛行輸送車(フライング・トラック)の一種と思われるものもあった。

宙に浮かぶがらくたにかこまれて、〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉のフライサイクルが、さかさまに浮かんでいた。その毛のぬけた頭とオレンジ色の顔の毛皮が、ふくらんだ緩衝バルーンの下に突きだしている。それから、さっき、サイクルの外被に触れるために無理やり押しだした、爪のはえた手が一本。

「ライトが点くのですね」とネサス。「いま、それをきこうと思ったところでした。この意味が、ふたりともわかりますか？　サイクル内の電気ないし電磁気的装置のうち、攻撃をうけたとき作

動中だったものだけが焼け切れたのです。〈話し手（スピーカー）〉のは、ルイス、あなたのもそうだと思いますが、その建物にはいったとき、ふたたび攻撃をうけたわけです。その建物は――」

「ああ、みごとな牢屋だよ」ルイスは、声をしぼりだした。頭が大きな水ぶくろになったような気分で、話すのは難儀だったが、仕事を他人まかせにする気にはなれなかった。たとえその仕事が、さかさにぶらさがったままで、異星の科学技術について臆測をめぐらすだけのことにしてもだ。

「で、牢屋だとしたらだが」とつづける。「どうして三度めの正直で銃殺もされずに、ここにこうしていられるんだ？　もしこっちが有力な武器を持っていたらどうなる？　げんに持っているわけだが」

「当然、第三撃の備えはあったはずです」とネサス。「しかし、ヘッドライトが点いているところをみると、作動はしなかったのでしょう。完全に自動的な仕掛けなのか、あるいは何ものかが、あなたたちを救ってくれたのかもしれません。〈話し手（スピーカー）〉が、スレイヴァー式の掘削機械を使用しても、安全だろうと思います」

「そいつはありがたい」とルイス。「もっとも、このまわりの眺めは、あんまりぞっとしないがね」

彼と〈話し手（スピーカー）〉は、いわば宙に浮いたサルガッソー海の中を、さかさになってただよっているのだった。古典的なジェット・パックのようなのが三つ。そのうちのひとつには、小さいが人間タイプの骸骨が、いまだに座を占めていた。まっ白な骨格には、皮膚のかけらも残っていない。立派な衣裳をつけていたとみえ、その切れ端が、まだ残っている。あざやかな色あいの布が、そ

の一部のずたずたになった黄色いマントのようなものが、骸骨のあごから、だらりと垂れさがっていた。

あとふたつのいれものは、からっぽだった。しかし、どこかに骨があるはずだ。……ルイスは、頭を仰向けようと、力をこめた。もっと、ぐうっとうしろへ……。

この留置所の底は、大きなうす暗い円錐形の穴であることがわかった。その側面の壁に、同心円をなして、監房のような小部屋がつらなっている。そのドアは、いずれも落とし戸のように、上面についていた。穴の底から、いくつかの階段が、放射状に出ている。そのあたり一帯に、予期していたとおり、白い骨とおぼしいものが散らばり、はるか下方から、にぶい反射をかえしてきた。

あのこわれた座席にはいっていた骸骨の主は、とびだす勇気がなかったのにちがいない。ほかのものはみんな、それぞれの乗り物でここへとじこめられたとき、渇き死にするよりも、墜死のほうを選んだのだろう。

ルイスがいった。「〈話し手〉が物質分解機を使うとしても、どこへ向けたらいいか見当がつかないぜ」

「わたしもその点を、真剣に考えているところです」

「壁に穴をあけてみたってはじまらない。天井だって、どのみち手がとどかないんだ。うっかりして、われわれを支えている装置にでも当たったら、床まで九十フィート墜落する羽目になる。しかし、やらなければ、このままここで餓死するか、それとも手をあげて出ていくかだ。もっともその結果は、九十フィートの墜落になるだけだがね」

CamScannerでスキャン

「はい」

「それだけ？　はいですますつもりか？」

「もう少しデータが必要です。誰かひとり、周囲のもようを知らせてください。ここからは、曲面になった壁しか見えません」

そこで、ふたりは、かわるがわる、小部屋が円錐形をなしてとりまいていることを説明した。点光源から出る光の反射は、うす暗かったが、〈話し手(スピーカー)〉もヘッドライトをつけたので、いくらかましになった。

しかし、話が尽きてしまっても、ルイスが、いまだにとらわれの身で、さかさになったまま食物も水もなく、墜落死の危険に面と向かいあっているという状況に変わりはなかった。

ルイスは、どこかからだの奥のほうから、いままでじっとおさえていた悲鳴が、水面に向かう泡のように浮かびあがってくるのを感じていた。もうすぐ、のどにとどきそうだ……。

そし、ふと、ネサスがもうふたりを見捨てていったのではないかと思った。

最悪の予想だ。が、その疑問に対する答えは、明白だった。パペッティア人が、逃げていってしまう理由はいくらでもあるし、そうしないという理由はまったくない。

もし彼が、この地で文明をもった原住民を見つけることに、もはや執着していないとしたらだ。

「浮かんでいる乗り物や、骸骨の古さから見て、ここの機械装置を手入れするものは、誰もいないようだ」〈話し手(スピーカー)〉がしゃべっている。「われわれをとらえたこの場(フィールド)は、都市が無人となってから、何台かの乗り物をここへ引きずりこんだが、それきりで、リングワールドには、一台の乗り物もなくなってしまった。そこで、余分の動力が消費されないため、いままで働きつづけて

いたのだろう」
「そうかもしれません」とネサス。「しかし、誰か、この通話を、盗み聞きしているものがいるようです」
ルイスは思わずきき耳をたてた。〈話し手(スピーカー)〉の頭の両側の扇がぱっとひらいた。
「閉鎖回路ビームを盗みぎきするには、たいへんな技術を必要とします。ここでひとつ問題なのは、その盗聴者が、翻訳機を持っているかどうかということです」
「その盗聴者とはどんなやつだ？」
「わかるのは、方向だけです。干渉源の位置は、あなたの位置によります。どうやら、あなたの真上の方向にあたるようです」
反射的にルイスは、上を見ようとした。が、どうせかなわぬ願いだった。彼は頭を下に宙づりになっており、彼と天井のあいだは、二個の緩衝バルーンとフライサイクルにさえぎられているのである。
「リングワールドの文明が見つかったというんだな」彼は思わず大声をだした。
「たぶん。でも、そうすると、その文明人が、あなたのいう〝銃殺〟用の機械を補修していたはずです。とにかく大事なのは……ちょっと考えさせてください」
そういうと同時に、パペッティア人は、ベートーベンかビートルズか、ともかくそういったクラシックの音楽家に変身した。ルイスにわかるのは、時間がたつにつれて、それがますますそれらしくきこえてくるということだけだった。
つまり、彼が〝考える〟というのは、そうすることだったわけだ。妙なる楽の音は、えんえん

とつづいた。ルイスは、もうすっかりのどが渇き、また腹もすいていた。おまけに、頭はいまにも割れそうに、がんがんしている。
もうだめか、と、何度も観念の目を閉じかけた。が、そのときパペッティア人の声が話しかけた。「スレイヴァーの物質分解機を使うべきかもしれませんが、やはりまずいようです。ルイス、あなたがやらなければなりません。あなたは、霊長類の子孫ですから、〈話し手(スピーカー)〉よりも木のぼりは上手です。まず、携帯レーザーを――」
「木のぼりだって?」
「質問は、わたしが話を終えるまで待ちなさい。ルイス、携帯レーザーを、適当な場所にかまえて、そのビームで、前方のバルーンを破るのです。そして、落ちないように、その残骸につかまって、そこからフライサイクルによじのぼり、その上でバランスをたもつのです。それから――」
「気でもくるったのか」
「終わりまできなさい、ルイス。この行動の目的は、あなたのいう〝銃殺〟用の機械を破壊することです。たぶん、それはふたつあるでしょう。ひとつは、あなたたちがはいってきたドアの、上か下にあります。もうひとつは、どこかわかりません。唯一の手がかりは、もうひとつのと同じかたちのものがそれだということです」
「わかった。そうじゃないかもしれんが、このさいしかたがない。それより、どうしてぼくが、破裂するバルーンにしがみついて、落ちないでいられると思うんだ?――だめだよ、とてもできない」

「ルイス。わたしが、機械をこわす装置の待ちかまえているところへ、助けにいけると思うのですか？」
「わからん」
「それとも、〈話し手〉が、のぼってくれると思うのですか？」
「猫は木のぼりできるだろ？」
〈話し手〉がいった。「おれの種族の先祖は、平地性の猫属だったのだぞ、ルイス。それに、やけどを負った手も、まだなおっておらん。とても、よじのぼることはできん。どっちにしろ、あの草食いのいうことは、気ちがいじみている。あいつは、われわれを見捨てていくための口実をつくっているだけだ」
ルイスは事態の意味をつかんだ。どうやら、あぶないサーカスをやらなければならないらしい。
「まだ見捨てません」ネサスがいった。「このまま待ちます。あなたたちに、もっといい考えが出るかもしれません。あるいは、盗聴者が姿を見せるかもしれません。待ってみることにします」
頭を下に、ふたつのバルーンに身動きもならずはさまれているルイスには、当然ながら、時間の経過をはかることはむずかしかった。なんの変化もなく、なんの動きもみられない。どこか遠くで、ネサスのさえずっているのが聞こえる。が、それ以外には、まったくなんの気配も感じられない。
とうとうルイスは、自分の心臓の鼓動をかぞえはじめた。七十二回で一分間にあたるはずだ。

そしてちょうど十分後、彼は自分のつぶやきを耳にした。「……七十二。一。……いったい、何をやってるんだ？」

「おれに話しかけたのか、ルイス？」

「カホナ！　〈話し手（スピーカー）〉、もうとてもたまらない。気がくるうよりも死ぬほうがましだ」彼は両腕をひきよせようと、力をこめはじめた。

「ルイス、戦闘状態下では、おれが指揮をとる。じっとして待つよう命令するぞ」

「そいつは、すまんこった」ルイスは腕をひっぱる。一度ゆるめる。ぐいと下へ押しつけ、またゆるめる。目あては、ベルトだ。両手はずっと前のほうにのびている。肘をぐいと引き、ゆるめ、また引く……。

「パペッティア人のいうことをきくのは、自殺行為だぞ、ルイス」

「だろうな」ついに手がとどいた。携帯レーザーだ。あと二回力をこめて、それをベルトからぬきだし、前へ向けた。これで、もしかするとダッシュボードを撃ちぬくかもしれないが、自分にあたる心配だけはない。

撃った。

バルーンは、ゆっくりとしぼみはじめた。それにつれて、うしろの一個が、彼をダッシュボードに押しつけるかたちになった。前より楽に動くようになった手で、レーザーをベルトへもどすと、前方の、しぼんでしわになったやつを両手でつかむ。

同時に彼のからだは、座席からはなれた。かたくもっとかたく——彼は狂気のようにしがみつき、そして、ついに一回転して落ちかかったときも、彼の手はすべらなかった。両手でフライ

サイクルの下にぶらさがった。その足もとには、九十フィートの奈落が——。
「〈話し手(スピーカー)〉！」
「ここにいるぞ、ルイス。いま、おれの武器をぬいたところだ。もうひとつのバルーンを、撃ちぬいてやろうか？」
「たのむ！」いまやその一個が、頭上にあって、よじのぼる道をふさいでいたのだ。
そのバルーンの破裂のしかたは、尋常ではなかった。二秒ほどで、いっぽうの側がふっとび、ぐわっと空気がふきだした。〈話し手(スピーカー)〉は、物質分解機の片方のビームを使ったのである。
「いったいどうやって狙いをつけたんだい」ルイスは吐息まじりにつぶやくと、登攀を開始した。
バルーンの物質をよじのぼっていくのは、わりと容易だった。いいかえると、長いあいだ脳に血があつまっていたあとでも、彼はとにかく、しゃんとした気分でいられたということだ。ところが、このバルーンのつけ根は、スロットル・ペダルのすぐそばにあり、彼の体重のため、サイクルは依然裏がえしのままで、彼はやはり、ちょうどその真下にぶらさがっている恰好なのだった。
彼は、サイクルのすぐ下までよじのぼると、両脚でからだを安定させ、それから、はずみをつけて、サイクルをゆらしはじめた。
〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉が、奇妙な声をあげた。
サイクルは左右にゆれ、その振幅は一回ごとに大きくなっていった。当然ながら、サイクルの金属部分は、その底部にあつまっているものと、ルイスは考えていた。もしそうでなければ、サイクルは自由に回転でき、どこだろうとルイスのつかまる場所が下向きになるはずだ。だとした

ら、ネサスがあのような提案をするはずがない。

サイクルのゆれはだんだん大きくなった。ルイスは目まいがし、こみあげてくる吐き気を懸命におさえつけた。もしいま気管をつまらせたりしたら、何もかもおしまいだ。

大きくゆれるサイクルが、ちょうどさかさまになったとき、ルイスはその下面にはりつき、破裂したバルーンの反対の端をひっつかんだ。そのまましっかりにぎりしめる。

サイクルは、ぐるりと一回転した。ルイスは、その底面へ、胸を下にぴったりとからだを押しつけていた。そうしてしがみついたまま、彼は待った。

サイクルの図体がちょっと静止し、それからまたゆれもどした。内耳の平衡器官がぐるりとまわり、ルイスは吐いた――何を？　きのうの昼食だろうか？　爆発的ないきおいで吐きだされたものが、サイクルの底や衣服の袖にとび散った。おそろしく苦しかったが、彼は自分のからだの位置を一インチとは動かさずに、もちこたえた。

フライサイクルは、なおも大波のようにゆれつづけたが、ルイスは根を生やしたようにつかまったまま、やがて顔を上に向けた。

ひとりの女が、こっちを見つめているのが目にはいった。

彼女の頭はすっかり禿げているようにみえた。その顔は、〈天国〉の会食ホールにあった針金細工を、ルイスに思いださせた。目鼻立ちも、表情もだ。女神か、さもなければ死人のようなつめたい視線を前にして、彼は思わず顔をあからめ、穴があったらはいりたいような気分になった。

それをおさえて彼は呼びかけた。「〈話し手(スピーカー)〉、われわれを見てるやつがいる。ネサスにそう伝えてくれ」

「ちょっと待て、ルイス。おれはまだ目まいがするのだ。おまえののぼるのを見なければよかったと思うぞ」

「まあいい。彼女は――禿頭かと思ったが、そうじゃなかったようだ。耳の上からうしろにかけて、頭のまわりに毛がある。それも、肩より下に垂れるくらいの長い髪だ」その髪は黒くふさふさとしており、ルイスのほうへ彼女が身をのりだすと、はらりといっぽうの肩から前に流れた。そこに現れた頭のかたちは優美で上品だったし、彼女の視線は彼を、まるでマーティニのオリーヴのようにさしつらぬくかと思われる鋭さだった。が、そんなことまでいちいち話しているひまはない。「彼女は環の〈建設者〉らしい。あるいは、それと同じ種族なのか、それとも同じ生活様式を持ってるだけなのか。ここまではわかったかい？」

「わかった。しかし、どうしてそんなふうにのぼれるのだ？　まるで、重力を無視したように見えたぞ。ルイス。おまえは何ものなのだ？」

ようやく静かになったフライサイクルにまたがったまま、ルイスは笑いだした。笑うのがせいいっぱいだった。「あんた、クダプト教の信者だね。おい、白状しろよ」

「すすめられたが、その教えにはついていけなかったな」

「あたりまえさ。ところで、ネサスは出たかい？」

「いま出た。サイレンで呼びだしたのだ」

「つぎのように伝えてくれ。彼女は、ここから二十フィートくらい向こうにいる。蛇のようにこっちをうかがってる。ひどくこっちに興味をひかれてるって意味じゃない。ほかのものには目もくれないでいるってことだ。いま、まばたきした。しかし、目をそらそうとはしない。

彼女がいるのは、何か桟敷みたいなものの上だ。三つの面はガラスか何かでかこまれてたらしいが、いまは何もなくて、うしろの階段から床だけが突きだしている。その縁に脚を出して腰かけてるんだ。いつもそうやって囚人を監視するんだろう。

着てるものは……いや、スタイルは、おせじにもいただけないな。膝までと肘までの上っぱりで、妙にふくれて——」しかし、異星人たちにそんなことは興味ないだろう。「明らかに人工の繊維だ。新品なのか、それとも自動洗浄で、しかもおそろしく保ちのいいしろものなのか。そして——」そこで口をつぐんだ。女が、何かいったからである。

そのまま待っていると、彼女は同じことをくりかえした。なんのことかわからないが、ほんのひとことである。

そして、優雅な身のこなしで立ちあがると、階段をのぼっていった。

「いっちまった」とルイス。「たぶん、興味をなくしたんだろう」

「盗聴機のあるところへもどっていったのかもしれんぞ」

「かもね」いささか仮説過剰の気味もあるが、この建物の中に盗聴者がいるとしたら、それは彼女自身以外に考えられない。

「ネサスが、おまえの携帯レーザーを低出力の拡散にして、このつぎ女が現れたら、それで照らしてみろといってきた。おれのスレイヴァー式の武器は、かくしておく。あの女は、スイッチを切るだけで、われわれを殺すことができる。武器を持っていることは、さとられないほうがいいだろう」

「それじゃ、どうやって、銃殺用の装置をこわせるんだい？」

その返事は、そくざにもどってきた。「その件は、やめにする。ネサスが、何か方法を講じるといっている。いま、ここへやってくるところだ」
ルイスは、がっくりと、金属の表面の上に頭をおとした。大きな安堵の思いで、理由をたずねる気にもなれないうちに、〈話し手〉がまたいいだした。「ここへやってきたら、やつも同じ罠にはまるばかりだ。ルイス、思いとどまらせるほうがいいかな？」
「そういってやればいい。いや、その必要もないだろう。安全と見きわめがつくまでは、やってくるようなやつじゃないよ」
「どうして安全だと考えたのかな？」
「わかるもんか。ひと休みさせてくれ」パペッティア人は、何もかもわかってやっているのだろう。ネサスの臆病さだけは、絶対に信用できる。ルイスは、なめらかでつめたい金属の表面に、ぐったりと頬をおしつけた。

うとうとしたらしい。
それでも、自分のいる場所がどこかということは、心のかたすみにこびりついていた。もし、サイクルが小ゆるぎでもしたら、彼はたちまち目を大きくあけて、バルーンの残骸をつかんだ両手と、金属の胴体にまわした両脚に、渾身の力をこめたことだろう。彼の眠りは、まるで走馬燈のような悪夢の連続だった。
まぶたのあいだに、ちらりと光を感じて、彼はただちに眠りからさめた。
ふたりのひきこまれてきた水平な隙間をとおして、昼の光がさしこんでいる。その逆光のなか

に、ネサスのフライサイクルの黒いシルエットが浮かんでいる。彼のフライサイクルもさかさまで、同じくさかさまのパペッティア人は、緩衝バルーンではなく座席ネットでぶらさがっているのだった。

その向こうで、水平な入口が、静かに閉じた。

「よく来たな」〈話し手〉が、もごもごという。「まっすぐに起きなおらせてくれんかね？」

「まだだめです。女は、そのあと現れませんか？」

「いや」

「そのうちきっと現れるでしょう。人間は好奇心の動物です、〈話し手〉。彼女は、わたしの種族を、まだ見たことがないはずですから」

「それがどうした？　おれは、早く起きなおりたいのだ」〈話し手〉がうめいた。

パペッティア人が、ダッシュボードに向かって何かすると、奇蹟が起きた。そのフライサイクルが、ぐるりと起きあがったのである。

ルイスが、ただひとこと、「どうやったんだ？」

「操縦がきかなくなると同時に、ぜんぶのスイッチを切ったのです。もし、浮揚力場が働きかけてこなければ、地上に激突する前にモーターをいれるつもりでした。さて、このあとは簡単です」パペッティア人は、ぶっきらぼうな口調で、「女が現われたら、親愛を示すのです。ルイス、もしうまくいくと思ったら、彼女を性交渉へさそうように。〈話し手〉、ここでは、ルイスが主人で、わたしたちは従者です。その女は、異星人ぎらいかもしれません。人間が異星人をしたがえていると思わせて、心をやわらげるのです」

こんどはルイスも、本当に笑いだした。悪夢の連続のようなまどろみでも、いくらか元気をとりもどせたようだ。「彼女が友好的だとは思えないね。誘惑なんて、できるもんか。あんたは、彼女を見てもいない。ぼくに対するかぎり、彼女は冥王星の暗黒洞窟みたいにつめたいだろう。それも、彼女の責任じゃないがね」彼が昼食を袖の中へ吐きちらすのを、彼女はじっと見ていたのだ——どう考えても、ロマンチックな光景だったとはいえそうにない。

パペッティア人がいった。「彼女は、ここへくるやいなや、幸福になります。ここから離れようとすると、幸福感は去ります。わたしたちのひとりをひきよせれば、その幸福感は、さらに強まり——」

「カホナ！　そうか！」ルイスが叫んだ。

「わかりましたか？　よろしい。それに、わたしは、リングワールド語の勉強もしています。発音も文法も正しいはずです。あとは、もう少し単語の意味がわかれば……」

かなり前から、〈話し手（スピーカー）〉のぼやきがとだえている。それまで、全身にやけどを負い、片手を骨までこがして、落ちたら命のない空間にさかさにぶらさがっている自分を助けてくれようともしないといって、ルイスとネサスにさんざん毒づいていたのが、ここ数時間、何もいわないのだ。

ほの暗い静けさの中で、ルイスはまどろんだ。

夢の中で、鈴の音がきこえたように感じて、彼は目をさました。

階段をくだってくる彼女の足音だった。そのはいているモカシン靴に、鈴がついているのだ。着ているものも、前とはちがって、大きなポケットのいっぱいついた、みごとなハイネックのド

レスだった。長い黒髪を、いっぽうの肩から前へ垂らしている。

が、顔の無表情ないかめしさは、変わっていない。

張りだした床の上に、膝をおってすわると、じっとルイス・ウーを見つめる。そのまま身動きもせず、またルイスも動かなかった。数分間のあいだ、ふたりはまともに目を見あわせていた。

やがて彼女は、大きくふくらんだポケットのひとつから、こぶしほどの大きさの、オレンジ色のものをとりだした。それを、ルイスのほうへ、ひょいと投げる。

わざと狙ったのかどうか、手のとどくかとどかないくらいの距離を、それは通りすぎた。二日前に木に生っているのを見た、こぶの多いやわらかい果実である。そのときは味を見ようとも思わず、サイクルの調理機の取入れ孔へ五、六個ほうりこんだものだった。

眼下の小部屋の屋根で、つぶれた果実が、まっかな果汁をまきちらした。とつぜん、ルイスの口の唾腺が刺戟をうけ、彼はおそろしい渇きを感じた。

彼女がもうひとつ投げてよこした。こんどはもっと近い。うけとめようとすればできたろうが、それは同時に、サイクルをひっくりかえすことにもなる。彼女にもわかっているはずだ。

三つめは、彼の肩にぶつかった。彼は、バルーンの端をつかんだ両手に力をこめ、暗澹たる気分にかられた。

と、ネサスのフライサイクルが、視野の一隅に現れた。

同時に、彼女がほほえんだ。

パペッティア人のサイクルは、輸送車ほどの大きさの残骸のうしろにただよっていた。いまはまた、さかさまの姿勢で、偶然吹きよせられたかのように、彼女のいる張り出しの方向へ、なな

めに進んでいる。ルイスのそばを通りかかりながら、声をかけた。「彼女を誘惑できませんか？」

ルイスは、うなり声をあげた。が、パペッティア人が彼を嘲笑したわけではないことに気づいて、答えた。「彼女は、ぼくを、獣みたいに思ってる。見こみはないよ」

「それでは、べつの技巧が必要です」

ルイスは、つめたい金属の表面に、ひたいをこすりつけた。こんなにみじめな思いになったのは、ほとんどはじめてだった。「あんたの仕事だな。彼女がぼくを、対等に見てくれるとは思えないが、あんたなら別かもしれない。敵意も持たないだろう。あんまり異質すぎるからね」

パペッティア人が、彼のかたわらを通りすぎた。そして、何かしゃべっている。〈天国〉の下で会った、あの毛を剃った僧侶が使っていたのと同じことばらしい。〈建設者〉の聖なる言語だ。

女は答えない。だが……彼女は実際に微笑しているわけではないようだが、くちびるの端がかすかに上へまがり、その目は、以前よりずっと活気をおびているように見える。

ネサスは、ぐっと出力をおさえて使っているらしい。きわめて低い出力でだ。

彼がもういちど呼びかけると、今度は彼女も答えた。冷ややかで音楽的な声だ。ルイスには、いかにも傲岸な口調のようにきこえたが、その声の質だけは、予想していたとおりだった。

パペッティア人も、すぐにそれとそっくりの声で答えた。

そこではじまっているのは、言語の学習なのだった。

ひとつ誤れば墜落という瀬戸ぎわで、危うくバランスをとっているルイスに、そのなりゆきは、はっきりしなかったが、ときどきわかる単語がまじっていた。そして、ふいに、彼女はネサスへ、

「おい、これだけはよくその脳みそのない頭の中へ叩きこんどいてくれよ。おれは、永遠にこうしてバランスをとってるわけにはいかないんだ！」

「そうしてもらうよりほかありません。わたしに何ができます？」

「水だ」とルイス。舌が、フランネルでも巻いたように干あがっている。

「のどが渇いたのですか？　しかし、水を持ってきても、飲めませんよ。首を仰向けたら、バランスを失うかもしれません」

「わかったよ。もういい」ルイスは、ぞっと身ぶるいした。宇宙士（スペーサー）として鳴らしたルイス・ウーが、こんなに高所をおそれなければならないとは、奇妙な話だ。

「それが心配です、ルイス。ずいぶん前から、彼は気絶しているのです」「〈話し手〉（スピーカー）はどうしてる？」

「カホナ！　そんなカホな――」

足音が近づく。

彼女は、着替えマニアなのだろうか、とルイスは思った。こんど彼女が着てきたのは、全体にオレンジと緑のひだのついた衣裳で、前のと似てはいるが、からだの線はまったく表面に現れていない。

見張り台の縁に身をかがめると、冷ややかな目でこっちを見ている。ルイスは、ひたすらサイクルの上にへばりついたまま、事態の進展を待った。

彼女の表情のゆるむのがわかった。夢見るような目つきになり、小さな口の両端が上へ、ひきつるように動く。

カホナが話しかけた。

彼女は考えこんでいるふうだったが、やがて何か、答えらしいことを口にだした。そして、いってしまった。
「どうしたんだ?」
「いまわかります」
「もう待つのはたくさんだ」
ふいに、パペッティア人のフライサイクルが、ふわりと浮かびあがった。そして前へ。そのまま見張り台の側面へ、手漕ぎの船が岸壁につくように、どしんとぶつかった。
同時にネサスは、いとも優雅に、サイクルからおり立っていた。
女が迎えに出てきた。左手にたずさえているのは、何かの武器にちがいない。しかし、もういっぽうの手で、彼女はパペッティア人の頭に触れ、ちょっとためらってから、指先をその首すじのうしろへ這わせた。
ネサスが、うれしそうな声をだした。
彼女はくるりと向きをかえると、階段をのぼりだした。一度として、ふりかえろうとはしない。ネサスが犬のようについてくるものと、きめこんでいるようだ。そして、彼はそのとおりにした。
うまいぞ、とルイスは思った。下手(したて)に出て信用させるんだ。
が、妙に歩調の合ったふたりの足音が遠ざかっていってしまうと、あたりはまた、巨大な墓地のような静寂につつまれた。
〈話し手(スピーカー)〉は、この金属のサルガッソー海の中、ルイスからおよそ三十フィート離れたところに

浮かんでいる。緑色の緩衝バルーンから、黒いむっくりした四本の指と、そこだけ花が咲いたような毛皮のオレンジ色の顔がのぞいている。そこへ近づく手だてはない。もしかすると、クジン人は、もう死んでいるのかもしれない。

下方に散らばる白骨の中には、少なく見ても十個以上の頭蓋骨がまじっていた。骨と、年代と、錆びた金属と、そして静寂と。ルイス・ウーは、自分のサイクルにつかまったまま、力の尽きるのをじっと待ちうけるばかりだった。

また、うとうとしはじめてから間もなく、まわりの様子に変化が起こった。バランスがくずれそうだ――。

ルイスの一命は、ひとえにそのバランスにかかっている。ちょっとしたずれを感じて、彼はおびえあがり、全身を硬直させた。目だけを動かして、くるおしく周囲を見まわす。

まわりをかこむ金属の乗り物は、依然としてそのまま、なんの動きもみえない。が、何ものかが動きだしている気配だ……。

遠くのほうの一台が、何かにぶつかったらしく、がしゃんという金属音をたてて、すうっと浮きあがりはじめた。

なんだ？

いや、浮きあがったのではない。輪になって並ぶ小部屋のひとつの上に、乗っているのだ。このサルガッソー全体が、一定の速さで空間を下降しているのだった。

ひとつ、またひとつと、飛行車や飛行パックが、まわりから順に接地し、上へとり残されて

いく。

ルイスのサイクルが、コンクリートの面に手荒くぶつかり、電磁力の渦にまきこまれて半回転し、ひっくりかえった。ルイスは、ごろりところがって、そこから身を離した。

すぐに立ちあがろうとした。が、まったくバランスがとれない。まっすぐに立っていられないのだ。両手は、鉤形にまがったまま、しびれきって、使いものにならなかった。横たわってあえぎながら、おそろしい手遅れに気づいた。〈話し手（スピーカー）〉のフライサイクルは、〈話し手（スピーカー）〉を押しつぶしてしまったにちがいない。

そのフライサイクルは、小部屋の輪で二段ほど上のところにころがっているのが、すぐに見つかった。〈話し手（スピーカー）〉の姿が見える――少なくとも、サイクルの下敷きになってはいない。サイクルが横へころがるまでは、下になっていたはずだが、そのときには、バルーンが、ある程度保護の役に立ったのだろう。

ルイスは這うようにして、そこへたどりついた。

クジン人は、生きて呼吸していたが、意識がなかった。フライサイクルの重みで首根っこを折らずにすんだのは、おそらく、もともと首根っこといえる部分がなかったからだろう。ルイスは、腰から携帯レーザーをぬくと、焦点をしぼった緑のビームで、〈話し手（スピーカー）〉をおさえつけているふたつのバルーンを撃ち破った。

さて、それから？

死にそうにのどが渇いている。

ようやく目まいはおさまったようだ。彼は立ちあがり、ふらつく足をふみしめて、考えられる

唯一の水の出る場所をもとめた。

　小部屋はぜんぶ円形にそって並んでおり、その上面がひとつづきの張り出しになっている。〈話し手〉が着地したのは、中心からかぞえて四段めの輪の上だった。

　見おろすと、破れしぼんだ緩衝バルーンをひきずった自分のサイクルが見つかった。その一段下にもう一台が、中央の底へ一端をつきだしている。それには、人間向きの座席がついていた。三台めだ――。

　ネサスのサイクルは、〈話し手〉のよりも一段下に着地していた。

　それに向かってルイスはおりていった。階段をふみしめるたびに脚から全身へ衝撃がつきぬけた。筋肉が疲れすぎていて、ショックを吸収することができないのだ。

　ダッシュボードを見て、ぶるっと首をふった。ネサスのフライサイクルを盗もうとするやつは、おそらく誰もいまい！　その操縦盤は、神秘的にみえるほど複雑怪奇だった。しかしそれでも、水の飲み口を見わけることはできた。

　水はなまぬるく、蒸溜水のように味けなかったが、それでもひどくおいしかった。

　渇きがおさまると、調理スロットから煉瓦をひとつ出して、味をみた。まったくおかしな味だった。ルイスは、ひとまず食べるのはひかえておいた。人間の代謝系には命とりになるような添加物がはいっているかもしれない。ネサスにしか、そのことはわからない。

　彼は自分の靴に水をいれて、〈話し手〉のところへもどった。ほかに手ごろないれものを思いつかなかったからだ。その水をクジン人の口の中へしたたらせると、相手は眠りこけたままのみこんで、笑顔を見せた。ルイスはもう一度汲みにもどったが、パペッティア人のフライサイクル

へたどりつく前に、精根を使い果たしてしまった。

近くの平らな面の上へ、ぐったりとくずおれて身をちぢめると、両眼を閉じた。

安全だった。もう安全なのだ。

すぐに眠りこんでしまえそうに思えた。しかし、何かがしつこく彼をこづいていた。酷使された筋肉、手足のしびれ、いまだにつきまとって離れない落下への恐怖……だが、まだそのほかに、何かがある……。

身をおこした。「カホナ」ぼんやりとつぶやく。

《話し手》のことが気になるのか？

クジン人は、からだをまるめて眠りこけている。両耳はぴったりと頭にはりつき、スレイヴァー式の武器をしっかりとかかえこんで、二連の銃口だけをわずかに外へのぞかせている。息づかいは正常で、しかしひどく早かった。これはいい徴候だろうか？

ネサスならわかるだろう。それまでは眠らせておこう。

「カホナ」もう一度口のなかでつぶやいた。

すすんで休養に出たわけでもないのに、孤独をかこっている立場。それでいて、仲間への責任もある。しかも彼自身の生命は、ネサスが、かれらをとらえたあの半分頭の禿げた気ちがい女をうまく馴らすかどうかにかかっている。眠れないことに、なんのふしぎもない。

が、それでも……。

目がそれにとまると同時に、釘づけになった。彼のフライサイクルだ。

破れた機動バルーンをひきずっている彼のフライサイクル、かたわらにあるネサスのサイクル、

〈話し手（スピーカー）〉のそばにころがっているそのサイクル、そしてもうひとつ、人間の座席のついた、緩衝バルーンの出ていないフライサイクル。ぜんぶで四台。

水のことに夢中になっていて、最初見たときは、その意味が頭に浮かばなかった。いまは……これはティーラのフライサイクルなのだ。空中では、どれか大きな乗り物のかげにかくれて見えなかったのだろう。しかも、緩衝バルーンが見えない。緩衝バルーンをふくらませていないのだ。サイクルがひっくりかえったときに落ちたのだろうか。それとも、マッハ二で飛んでいて、音波シールドが消失したため、吹きとばされてしまったのだろうか？

ネサスはなんといった？――彼女の幸運は、明らかに、偶発的な種類のものです。そして〈話し手（スピーカー）〉の返事は？――もしその幸運に一度でも裏切られたら、彼女は死んでいたはずだ――

彼女は死んだのだ。そうにちがいない。

――あたしはあなたについてきただけ。愛してるから――

「不運だ」ルイスはつぶやいた。「ぼくに会ったことが不運だったんだ」

コンクリートの上にまるくなって、彼は眠りこんだ。

だいぶ時間がたったらしい。目をひらくと、〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉が上からのぞきこんでいるのと目を見あわせて、ぎょっとした。あざやかなオレンジ色の毛皮のせいで、その目は二倍も光って見え、その視線には、値ぶみするような色が……。口をひらくと、「あの草食いの食物は、食えるのか？」

「こわいから食べてみなかったよ」とルイス。がらんどうになったように思われる空腹のせいで、彼は、たったひとつのこと以外は、何も気にならなくなっていた。

「三人のうち、おれだけ、食いものがない」とメジンし。

その他ぶるするような視線……サイスは首すじが総毛立つのを感じた。ふるえる声をおさえて、彼は答えた。「食いものは、あるさ。問題は、あんたが食うかどうかだね？」

「安心しろ、サイス。目の前に肉があっても、食うことが不名誉となるなら、おれは餓死するほうを選ぶぞ」

「わかった」サイスは寝がえりをうち、またすぐ寝こんでしまった。

数時間たって目がさめたとき、彼は本当にぐっすり眠ったという気がした。〈話し手〉のことばを、彼の潜在意識は、全面的に信用していたにちがいない。メジン人が食わないといったら食わないのだ。

胃袋がいっぱいになっており、悪臭が鼻をつき、からだのふしぶしが、いまさらのように痛んだ。深い縦穴を見つけて、ひとつの用は足りたし、ベッテイナ人のフライサイクルからだした水で、顔や首についた汚物は洗い流した。それから、足をひきずりながら階段をおりて、自分のフライサイクルにたどりつき、応急医療セットに手をのばした。

だが、応急医療セットは単なる救急箱ではない。必要に応じていろんな使いかたがあり、かつ、みずから診断をくだす機能までも有する複雑な装置である。サイスがやられたとき、それはいっしょに焼けきれていた。

朝からお腹がへっている。

頭上に小部屋の列が、暗いかぶさるようにつらなっていた。その上部の落とし口のまわりに、透明なのぞき窓があった。サイスはその上へ腹這いになって、内部をのぞきこんだ。ベッドがあ

り、奇妙なかたちのトイレがあり、そして窓がひとつ——そこから陽の光がさしこんでいる。

「〈話し手〉（スピーカー）！」ルイスは呼びたてた。

ふたりは、物質分解機を使って、小部屋の中へ押しいった。窓は四角く大きく、監房のものとしてはいささかぜいたくな感じだった。はまっていたガラスはこわれ、周縁の部分がぎざぎざに残っているだけだ。

囚人に自由な世界を見せて苦しめるための窓だろうか？

窓は左舷（ポート）に面している。夕暮れどきだった。明暗境界面が、回転方向（スピンワード）から、黒いカーテンのように迫っている。前方は港だ。四角い倉庫らしいものや、朽ち果てた船渠（ドック）や、優美な単純さをそなえたクレーンなどがみえ、水のないドックのひとつには、巨大なホバー船がおさまっていた。そのどれもが、まっかに錆びた骨組みばかりだ。

左へも右へも、曲がりくねった海岸線が、どこまでもつづいている。浜辺がひろがり、つづいてドックの列、そしてまた浜辺……。これははじめから、自然の海岸を模してつくられたのだろう。ワイキキのような遠浅の砂浜がつづいたあと、港湾向き一辺倒の深い海があり、また浅い浜辺がとってかわる。

前方は果てしない大洋だ。どこまでもたいらに、無限の地平へかすんでいる。大西洋がずっとさきまで見とおせたとしたら、こんなぐあいだろうか？

カーテンのような夕闇が、右から左へとよせてきた。都市中心部の残った灯がともりはじめ、それとともにドックも海も、暗闇の中へ沈んでいった。はるか反回転方向（アンチスピンワード）には、まだ真昼の陽光が降りそそいでいる。

そして、ひとつしかない卵形のベッドは、すでに〈話し手(スピーカー)〉が占領していた。

ルイスは微笑した。クジン人の戦士、それが、いとも平和な寝顔をみせている。眠って傷を癒やそうというのだろうか？　たび重なるやけどで、からだが弱っていることは事実だろう。それとも、つのってくる空腹を忘れるために眠っているのか？

彼をそこに残して、ルイスは小部屋を出た。

ほとんど暗闇の中で、彼はネサスのサイクルにたどりついた。空腹に堪えられず、パペッティア人向けの食用煉瓦をひとつ、味も何もおかまいなしにつめこんだ。暗さが気になりだしたので、彼はそのフライサイクルのヘッドライトをつけ、あと三台のフライサイクルをさがして、そのライトもつけた。それで、あたりはすっかり明るくなり、周囲の壁面には、ごたごたした奇妙な影が浮かびあがった。

ネサスは、いったい何を手間どってるんだろう？

古めかしい浮かぶ牢獄の中では、時間のつぶしようがない。眠っているのが唯一の方法だが、それはいますませたばかりだ。パペッティア人は、上で何をしているのだろうと、そればかり思いうかべているうちに、どうしても、自分たちは裏切られたのではないかという疑惑が、頭をもたげてくるのだった。

畢竟、ネサスは、ただの異星人ではない。はるか昔から、いいように人間をあやつってきた、〃ピアスンの人形師(パペッティア)〃なのだ。リングワールドの〈建設者〉（とおぼしい相手）と話しあいがついたら、さっさとためらいもなく、ルイスと〈話し手(スピーカー)〉を見捨てるかもしれない。そうしていけない理由など、ネサスの側には何もないのだ。

いや、そうすべき立派な理由なら、ふたつもある。〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉が、量子第二段階（クワンタムⅡ）ハイパードライヴをクジン族でひとり占めするため、ロングショット号をルイスの手からとりあげようと、最後のあがきを試みることは、おそらくまちがいない。その争いで、パペッティア人にも危害がおよぶおそれがある。このまま〈話し手（スピーカー）〉を切り捨てるに如くはない——そうなれば、当然、そのような裏切りに加担するはずのないルイスも、ということになるだろう。

おまけにふたりは、少々多くを知りすぎた。ティーラが死んだとすれば、あと、パペッティア人のやった品種改良の実験のことを知るものは〈話し手（スピーカー）〉とルイスだけだ。星間種子誘引機（スターシード・ルアー）のこと、産児制限法のことなど——もしネサスが、そういう情報を洩らして、隊員の反応ぶりをたしかめるよう命じられていたとすれば、旅の途中どこかで仲間を置き去りにするよう命令されていたとして、なんのふしぎもない。

いまはじめて気づいたことでもなかった。アウトサイダー人の船を、星間種子（スターシード）を媒介にしてプロキオンに誘導したことを、ネサスがみとめてからずっと、ルイスは、そういうそぶりが現れないかと気をくばっていたのである。ある意味では、いくら疑っても疑いきれないのだが、それに対して打てる有効な手は、何ひとつなかった。

なかば気持をほぐすため、彼はべつの監房へはいってみることにした。携帯レーザーを高出力にし、細くしぼったビームで、ドアの錠（ロック）とおぼしい場所をさぐっていくと、四回めで、ドアがぱんと持ちあがった。

同時にあがってきたのは、ひどい悪臭だった。ルイスは息をとめ、レーザーで中を照らしなが

ら首をのばした。ひと目でわかった。換気システムがとまったとき、中にいたものが死んだのだ。屍体は、展望窓によりかかるようにして、からだをまるめ、片手には、重い水差しをつかんでいた。その水差しはこわれていたが、窓はそのまま残っていた。

つぎの房はからっぽだった。ルイスは、その中にはいりこんだ。

そこは、さっきまでいたのとは反対側の、右舷（スターボード）に面した部屋だった。ちょうど真正面に、あの縦型台風がのぞまれた。そこから二千五百マイルも離れていることを思うと、その巨大さは想像を絶する。意味ありげにこっちを見つめている、大きな青い〈目〉だ。

そこから回転方向（スピンワード）に、客船のような細長いかたちの建物が浮かんでいた。ちょっとのあいだルイスは、この都市に、何かの手違いから宇宙船がかくされているのではないかと考え、それをのっとりさえすれば、リングワールドから離れられると思った……。

つかのまの気やすめだった。

ルイスは、つとめて、この都市のパターンを頭にいれようとした。これは大事なことだ。なにしろ、まだ文明の徴候が残っているのに出会った最初の場所なのである。

ひと休みしてそこを出ることにしたのは、たぶん一時間くらいたったころだろう。よごれた卵形の寝台に腰をかけたまま嵐の〈目〉をふりかえり、そのとき……その〈目〉の彼方、すぐそばによりそうように、小さいがあざやかな灰褐色の三角形があるのが目にとまった。

「ふむ」ルイスは、かすかに息をついた。三角形はひどく小さく、かろうじてその形に見えるくらいだった。無限の地平の、白っぽい灰色にかすむ中に、ちょこなんとすわっている。つまりそこは、まだ昼間なのだ……方向は、ほとんどまっすぐ右舷（スターボード）だというのに。

ルイスは、双眼鏡をとってきた。

双眼鏡でみると、細部がちょうど月の環状山（クレーター）を見たときのように、はっきりと鮮明にみえた。不規則な三角形だ。赤茶けたふもとに、山頂の近くの汚れた雪……〈神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド）〉だ。いままで思っていたよりもずっと大きなものだったらしい。これだけ遠くから見えるとなると、山の大部分は、大気圏から外へ出ていることになる。

一行はフライサイクルで、あの墜落の場所から、およそ十五万マイルを翔破していた。とすると、〈神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド）〉は、少なくとも高さ一千マイルはあろう。

ルイスは、ひゅうと口笛をならして、もう一度、双眼鏡をとりなおした。

ほとんどまっくらな中にすわっていたルイスは、頭上の物音に、ようやく気づいた。

監房のドアから上へ、首をつきだす。

〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉がうなった。「ルイス、こっちへこい！」彼は食いかけの、山羊の胴体ほどの大きさの赤い生肉を振ってみせた。それから、シャトーブリアン・ステーキほどもあるひと口をかじりとり、つづいてもうひと口、さらにひと口。彼の歯は、引き裂くためのもので、咀嚼するようにはできていないのである。

手をのばすと、まだ蹄と皮のついたままの、血のしたたるうしろ脚をとりあげた。「ルイス、おまえにもとっておいたぞ！　死んでから数時間たっているが、まあ、かまわん。急がなければならんのだ。草食いは、食っているところを見たくないという。やつは、あの部屋から外を眺めているところだ」

「こっちの食糧がいるはずだからな」とルイス。〈話し手〉、〈神〉の〈夢〉の大きさを、われわれは見そこなっていたらしい。あの高さは、少なくとも一千マイルはある。山頂を覆っているのは、雪じゃなくって……」

「ルイス！　まあ食え！」

ルイスの口のなかに、唾があふれてきた。「そいつ。なんとか料理する方法があるはずだがね……」

たしかにあった。〈話し手〉に皮をむいてもらい、脚の部分を階段のひびわれにさしこむと、光されたら、焼串にした携帯レーザーのビームをひろげて焼いたのである。

「肉が新鮮でないといって、燃やしてしまうとはな」〈話し手〉がふしぎそうにつぶやいた。

「ネサスはどうしてるんだ？　囚われの身なのか。それとも、のっとりに成功したのか？」

「ある程度はな。上を見てみろ」

見張り台の縁に腰かけたあの女は、まるで小さな人形だった。足を宙にぶらぶらさせながら、小首をかしげて下をのぞきこんでいるその白い顔と頭だけが、くっきりと見えている。

「わかったか？　彼女は、あやつから目を離したがらないのだ」

肉が焼きあがった。それにかぶりつきながら、彼は〈話し手〉のいらいらした視線を感じていた。ルイスの食べかただが、まどろこしく感じられるのだろう。ルイスにしてみれば、飢えた野獣のように食べているつもりだった。なにしろ飢えきっていた。

パペッティア人に不快な思いをさせないため、ふたりは、残った骨を、こわれた窓のひとつか

ら、市街の上空へほうりだした。それから一同は、パペッティア人のフライサイクルのところへあつまった。

「ある程度馴らしました」ネサスがいった。何か息苦しそうだ……たぶん、生肉と焼肉のにおいに辟易していたのだろう。「彼女は、たくさんのことを話してくれました」

「なぜわれわれをつかまえたのか、ききだしたかい？」

「はい、それ以上ですよ。わたしたちは幸運でした。彼女は宇宙飛行士、つまり、あのラムシップの乗員だったのです」

「大当たりだ！」と、ルイス・ウー。

CamScannerでスキャン

## 21　壁の向こうからきた女

彼女の名は、ハールロプリララー・ホトルーファンといった。彼女は、ラムシップの乗員だった……船名は〝パイオニア〟。その名を、ネサスは、ちょっと考えながら口にしたが……その船に彼女は、二百年のあいだ乗り組んでいたのだという。

パイオニア号は、二十四年周期で、四個の太陽とその星系を一巡するコース――酸素大気を持つ五つの惑星と、このリングワールドをつなぐ――に就航していた。ここで〝年〟というのは、まったく慣例的な呼称で、リングワールド自体とはなんの関係もない。それは、すでに放棄された惑星のどれかの公転軌道によってきめられた単位のように思われた。

リングワールドができる以前、五つの惑星のうちふたつは、すでに人間でぎっしり埋まっていた。いまでは、五つとも完全に放棄され、気ままに繁茂した植物と、崩壊した都市の遺跡しか残っていない。

ハールロプリララーは、その航路を八回めぐった。それらの惑星には、夏冬の区別のないリングワールドに適応できない動植物が繁殖している。植物のあるものは香料になり、動物のあるものは食用になった。それ以上のことは――ハールロプリララーにはわからないし、気にもならなかった。

彼女の職種は、積荷とは関係のないものだった。

「同じように、推進機関にも、生活システムにも関係していません。彼女がどういう役目なのかは、わかりませんでした」と、ネサスはつづけた。「パイオニア号の乗員は、三十六人でした。何人か余剰人員がいたことは、まちがいありません。彼女の仕事は、そう複雑でもなく、また船や乗員にとって必須のものでもなかったようです。彼女の知性は、とくに優れているとも思えません」

「乗員の男女比をきいてみたかい？　三十六人のうち、女は何人だった？」

「それはききました。三人です」

「じゃあ、彼女の仕事のことは、気にしないほうがいいね」

二百年の航行、幸福と冒険と。そして、彼女にとって八回めの航行が終わってもどってきたとき、リングワールドは、パイオニア号の信号に答えてこなかった。

着陸用の電磁砲も作動しなかった。

望遠鏡で見るかぎり、どの宇宙港にも、活動の気配はなかった。

パイオニア号が立ちよる五つの惑星には、電磁砲の備えはなく、したがってパイオニア号は、航行の途中で恒星間水素を凝縮した減速用の燃料を積んでいた。だから着陸することはできる。

……しかし、どこへ？

リングワールドの表面へおりることはできない。隕石防禦装置が、船をふっとばしてしまうだろう。

宇宙港へ着陸の許可も得られない。それに、そこでは何かまずいことが起こっているらしいの

見捨てられた母艦の惑星のどれかへもどるべきか？ それはつまり、三十三人の男と三人の女で、新たな〈なみのスター〉を求めるということになるのだが。

「彼らは、日常の業務から逸脱することのできない人びとで、そういう決心をするのはとうてい無理でした。パニックに陥り、反乱が起こりました。操縦士が、操縦室をロックしてとじこもり、ようやくパイオニア号を宇宙港の張り出しの内側へおろしました。パールロブリララーの話によると、彼はそうして船と人びとの命を危険にさらしたため、みんなに殺されたということです。本当に、出発の許可なく、ロケットで着陸して規則を破ったから罰せられたのかどうか、その点は疑問のように思えますが」

誰かの視線を感じて、ルイスはふり仰いだ。

女は、まだ見おろしている。ネサスも、片方の頭をそっちに向けて答えていた。左側の頭だ。とすると、タスプはその頭に埋めこまれているのだ。そしてそれが、さっきからネサスがずっと下を向いている理由でもあった。彼女は、ネサスを、目のとどくところから離したがらないし、ネサスもまた、タスプの甘美な働きかけから、彼女を放してやるわけにはいかないというわけだ。

「操縦士を殺したあと、彼らは船を捨てました」ネサスはつづける。「そのときになってはじめて、彼らは、操縦士が最悪の事態をひきおこしていたことを知りました。ツィルタン・ブローンが作動しない。こわれていたのです。彼らは一千マイルの高さをもつ壁の向こうで、立ち往生してしまったのです。

ツィルタン・ブローンに相当する共通語（インターワールド）や〈ますらおことば〉を、わたしは知りません。し

かし、その作用は説明できます。これは、わたしたちにとっても、重大な意味を持つことになるでしょう」

「というと？」とルイス・ウー。

リングワールドの〈建設者〉は、万一の場合をも考慮していた。いろんな形跡からみて、どうやら彼らは文明の凋落を見こし、その保障措置を講じていたようだ。文明と野蛮とのくりかえしを、人間の天性と見たのかもしれない。おそろしくこみいった構造をもつリングワールドだが、保守がゆきとどかないために崩壊するようなことがあってはならない。建設者の子孫が、エアロックや電磁砲(カノン)の調整法や、惑星の動かしかた、飛行車(フライング・カー)の製造法などを忘れることも、ありうるだろう。そうなれば文明は終焉を迎えるかもしれないが、リングワールドそのものは無事でなければならぬ。

例えば、あの隕石防禦装置の完璧さである。ハールロプリララーは――

「プリルと呼ぼうや」とルイスは提案した。

――プリルやその仲間は、万が一にもそれが故障している可能性など、考えもしなかったのだ。しかし、宇宙港をどう装備すればいいのだろうか？　いかに万全の備えをしておいたとしても、どこかの間抜けが、内外のドアをあけはなしてしまったらどうなるのか？

そもそもエアロックなどはなかったのだ！　その代案が、ツィルタン・ブローンだった。それは、リングワールドの床面や側壁をなしている構成物質に作用し、それがふつうの物質に対して透過性をもつようにする装置だった。通りぬけるのに、いくらかの抵抗はある。ツィルタン・ブローンが働いていると――

「一種の浸透性発生機だな」とホイス。
「そうですね。ブローンというのは、一種の変換器という意味のようでしたが、まったくいかがわしいものです」
——その浸透性発生機が働いているあいだ、空気は洩れていくが、量は微々たるものだ。宇宙服を着て、ゆっくりと一様に吹きつける風にさからって進めば内側へはいることができる。機械類なども大きなものは、トラクターでひっぱりこめばよい。
「呼吸用の圧縮空気はどうやってとるのだ？」と〈話します〉。
だが、彼らはそれを、壁の外側で、物質変換機によってつくっていたのである。
そう、リンスメイヤーには、完全な物質変換技術があったのだ。多くの量を一度に扱うことはできなかったが、他の点ではひどく性能の限られたものだった。装置自体おそろしく大きい。しかも、一種類の元素からべつの一種類をつくることしかできない。宇宙港には二台の変換機があり、それぞれ、鉛を窒素と酸素に変えるのだった。鉛は、貯蔵しておくにも、側壁にそって運搬するにも、便利な物質である。
浸透性発生機は、まさしくただ一つの継合を貫流しての設備であった。エアロックがこわれれば、それこそ台風のような勢いで、空気が失われていくことになる。しかし、ツィルタン・ブローンがこわれた場合、起こりうる最悪の事態は、エアロックが外界を——それによって、帰投する宇宙船の乗員をも——締めだしてしまうだけである。


「われわれのほうは閉じこめられているわけだな」と〈話します〉。

ルイスがいう。「そう結論を急ぐなよ。とりようによっては、その浸透性発生機さえあれば、ぬけだせることになるぜ。ライヤー号を動かす必要なんかぜんぜんない。ツィルタン・ブローンってやつを――」まるで、するするぶーんと音を立てて動きだしそうな名前だ――「ライヤー号の下の環（リング）の面へ向けてやればいい。船は、流砂に落ちこんだみたいに、床面へ沈んでいくだろう。そして、向こう側へぬけてしまう」

「そこで、隕石緩衝用のプラスティック層につかまってしまうぞ」とクジン人が反駁した。が、すぐに、「いや、もとえだ。スレイヴァー式の武器で撃ちぬけばいい」

「そのとおりです」とネサス。「しかし、不幸にして、ツィルタン・ブローンは、手にはいらないのです」

「でも、彼女はここにいるじゃないか。どうやってはいってきたというんだ？」

「はい……」

電磁流体力学の専門家が、装置の原理を学びなおして、彼らはツィルタン・ブローンの復元にとりかかった。数年がかりの仕事だった。機械は動かないばかりでなく、部分的にねじまがったり融けたりしていたのだ。部品から製造してかからなければならなかった。調整しなおすと、いずれはいかれてしまうにちがいない部分もあったが、それでも必要な時間だけは保（も）ちそうに思われた……。

そのとき、事故が起こった。調整を誤って性質の変わった浸透ビームが、パイオニア号をつらぬいたのである。乗員がふたり、腰まで金属の床に沈んで死に、十七人が、体内の浸透膜組織が透過性をもちすぎたために、永久的な脳障害などを起こして廃人となった。

しかし、残る十六人は、外壁を通りぬけた。廃疾となった人びとも、いっしょに連れてはいった。ツィルタン・ブローンそのものも、リングワールドが居住不能となっていた場合に備えて、中へ持ちこんだ。

そして彼らは、この退化した世界に直面したのだった。そこは未開の地以外の何ものでもなかった。

数年後、何人かが船にもどろうとした。

ツィルタン・ブローンは、作動中に停止し、四人が外壁の中に閉じこめられた。それで何もかも終わりだった。このときにはもう、リングワールド上のどこへいっても、新たな部品など手にはいらないことが明白になっていたのだ。

「わからんな。どうしてそんな早く、野蛮への逆行が起こったのか」とルイス。「パイオニア号は、二十四年周期でまわっていたんだろう？」

「船内時間で二十四年です、ルイス」

「ああそうか。じゃ、差が出るわけだ」

「はい。リングワールドの重力と同じ推力で飛ぶとすると、どの星へいくにも三年から六年で足ります。実際の距離は、たいへん大きいのです。プリルは、平均銀河平面の方向へ二百光年ほどいったところに、放棄したもとの居住星系のひとつがあるといっていました。十光年ほどたがいに離れた、三つの太陽だそうです」

「二百光年ね……人間の空域に近いな。そうじゃないか？」

「たぶんそうでしょう。一般に、酸素大気の惑星が、あの付近ほど多くあつまっているところは、ほかにありません。ハールロプリララーの話によると、そのあたりの惑星に対して、長期にわたる改造計画が実施されたそうです。リングワールドが建設されるよりも、ずっと前のことです。その方法は、しかし、あまりに時間がかかりすぎました。とうとうがまんしきれなくなった人びとは、それを中途で投げだしてしまったのです」

「それでいろんなことが説明できるな。ただわからないのは……いや、まあいいだろう」

「霊長類の由来ですか、ルイス？　あなたの種族が、地球で進化したことは、疑う余地がありませんよ。ただし地球が、その近くの星系に対する改造計画の基地に使われた可能性はありますね。〈建設者〉がそこへ、ペットや奴隷を連れていったかもしれません」

「そいつが猿やチンパンジーや、ネアンデルタール人だっていうのか……？」ルイスは、あわてて手をふった。「そいつは、ただの推量だ。それに、いまこんなことを知ってもしようがない」

「そのとおりです」パペッティア人は、自分のサイクルから出した煉瓦を、むしゃむしゃやりながらしゃべりつづける。「パイオニア号の周回航路は、三百光年以上の距離にわたっていました。ひと航行のうちに、大きな変化が起こる時間は、あったでしょう。めったにありえないことですが。プリルの社会制度は、ごく安定性の高いものでしたから」

「リングワールド全体が未開に逆行しちまったということが、どうして彼女にわかる？　彼女の仲間は、どのくらいの範囲を調査したんだ？」

「ほんのわずかです。が、それで充分なのです。プリルのいうとおりです。ウィルタン・ブローンを修理する方法もありません。いまでは、全リングワールドが、未開にもどっているでしょ

う」

「でも、どうして？」

「プリルは、ことの真相について、仲間のひとりがいったことを伝えてくれました。もちろん、ずっと簡略化した説明です。崩壊のプロセスはパイオニア号が最後の航行に出発する数年前にはじまっていたのです……」

住民のいる十個の惑星があった。リングワールドが完成したとき、それらはすべて放棄され、人間の手がいっさい加えられないままに、それぞれわが道を歩むこととなった。

そういう世界を想像してみるがいい。

地上は、さまざまな発展段階の都市に蔽いつくされていた。たぶんスラム街などという感覚は時代遅れだろうが、あるいは歴史の標本として残されていたかもしれない。そういった土地全体に、あらゆる種類にわたる人間生活の副産物が遺棄された。使用ずみのコンテナや、こわれた機械や、汚損した本やフィルムやテープなど。その他、再生利用のできないものはなんでも。加えて、利用できるものもいろいろ。海洋は十万年にわたって、ごみ捨て場に使われてきた。その中のある時期には、核分裂による最終段階の放射性物質も捨てられたはずである。

ここでもし、そういう新しい環境の海に適応する生物が生じたとしても、ふしぎといえるだろうか？

「地球でもその例はあったよ」ルイスが口をはさんだ。「ポリエチレンを食う酵母菌の一種が現れたんだ。スーパーマーケットの棚にある、プラスティック包装を食うやつだ。もう死滅したが、おかげでポリエチレンは使えなくなっちまった」

そういう惑星が十個あったのだ。

亜鉛化合物や、プラスティックや、塗料や絶縁体など、新しいものから何千年も前のものにいたる廃棄物を食う細菌が、進化によって出現した。しかし、ラムシップさえこなければ、それもどうということはなかったろう。

忘れられた生命形態や、リングワールドに適応できなかった生物の種を求めて、ラムシップは、規則ただしくこれらの古い世界を訪れた。そして、それ以外のものをも持ち帰った。おみやげ、つまり、運び忘れたりあとまわしにされていた芸術品などだ。博物館の内容などは、まだ、ごく貴重なものから順に、運搬されている最中であった。

ラムシップの一隻が、高度な機械類に多く使われていた、常温で超伝導を示す物質を食い荒らす性質を持ったかびを、その世界のいずれかから持ち帰った。

そのかびが、徐々に作用した。まだ発生したばかりの単純なもので、はじめのうちは、容易に駆除することができた。が、さまざまな変種が、何隻ものラムシップで、幾度にもわたって運びこまれたのかもしれない。ついにその変種のひとつが、事態を決定的なものにした。

作用がゆっくりしているため、ラムシップの被害がわかったのは、到着したずっとあとのことだった。宇宙港のツィルタン・ブローンがやられる以前に、多くの乗員や作業員たちが、それを中へ持ちこんだ。動力ビーム受容装置にはいりこんだのも、外壁の上に装置された電磁砲による輸送シャトルが、それをリングワールド全域にばらまいたあとのことであった。

「動力ビーム受容装置って?」

「ここでの動力は、シャドウ・スクェアで熱電装置によってつくられ、リングワールドの表面へ、

無線ビームで送られます。おそらくそのビームも、安全保障システムになっていたのでしょう。わたしたちが、その放射を探知できなかったのは、受容装置がこわれると同時に、自動的にスイッチが切られていたからでした」

「たしか、ほかにも超伝導を得る方法はあるはずだ」〈話し手〉がいいだした。「ちがった温度帯で働く、基本的な分子構造が、二種類知られている」

「少なくとも四種類あります」キサスが訂正した。「あなたがいったとおり、リングワールドは、都市の崩壊のあとも無事に残るようになっていました。もっと若く活気のある社会なら、この事態にも適応できたでしょう。しかし、それには多くの困難がありました。

動力が切れて建物が墜落したとき、指導者層の大部分が死んでしまったのです。

動力がなければ、超伝導を得る他の方法を見つけだすための実験もできません。貯えられていたエネルギーも、権力を持ったものに徴発されたり、もしやどこかにこの危機を切りぬけたものがいるのではないかと、他の都市区域をさがしまわることで消費されてしまいました。ツィルゥン・ブローンも超伝導を使っているので、ラムシップの核融合エンジンにも手がとどきません。誰かが大きな成果をあげても、ほかの地域へ伝えることができません。電磁砲を動かしていたコンピューターも動かず、電磁砲自体もエネルギーを失っていたからです」

ルイスがいった。「釘の不足で王国が崩れるってやつだな」

「その話は知っています。しかし、厳密にいうと、いまの場合にはあてはまりません」とキサス。「なんとかできたはずなのです。液体ヘリウムをつくる動力は、あったのです。動力ビームがとだえはし、その受容装置を修理してみてもなんにもなりません。が、ツィルゥン・ブローンは、

液体ヘリウムで冷却した超伝導金属でも使えます。ツィルタン・ブローンを使って宇宙港へはいり、船をシャドウ・スクェアへ飛ばせて動力ビームのスイッチを入れ、べつの液体ヘリウム冷却超伝導体で受容装置を動かせばいいわけです。
しかしそれも、動力の貯蔵がないとできません。その動力は、街灯や、まだ残っている建物の浮揚や、また食糧の調理や冷凍に使われてしまいました！ こうして、リングワールドは没落したのです」
「で、こっちも、手も足も出ないというわけか」と、ルイス・ウー。
「はい。わたしたちはハールロプリララーに出会えて幸運でした。これ以上、無益な旅をつづける手間が省けたわけですから。外壁にたどりついたとしても、なんにもならないのです」
がーんと頭をなぐられたような思いだった。ルイスは、頭痛をさえ感じた。
「幸運か」と〈獣への話し手〉。「なるほど。だが、幸運だというのに、どうして心がはずまないのかな？ われわれは、その目標とともに、脱出のわずかな望みさえ失ったのだぞ。われわれのサイクルも破壊された。隊員のひとりは、この都市の中で迷子になっているしな」
「死んだよ」とルイス。けげんな様子でふり向くふたりに、彼はうす暗がりの中を指さしてみせた。四つのヘッドライトのひとつにとらえられて、ティーラのフライサイクルは、見誤りようもなかった。
彼は語をついだ。「さあ、これからは、自分で幸運を切りひらかなきゃならないぜ」
「はい。でもルイス、これで、ティーラの幸運が、偶発的なものだったことは、認めるでしょうね。もしそうでなければ、彼女がライヤー号に乗ったはずがないし、船が墜落したはずもないの

ですから」パペッティア人は、そこでふいにことばを切って、つけ加えた。「お気の毒です、ルイス」

「かわいそうなことをした」〈話し手（スピーカー）〉がうなった。

ルイスは、うなずいた。もう少し悲しみが湧いてきていいはずだった。が、あの嵐の〈目〉の中での出来ごとが、彼のティーラに対する気持を、奇妙に変えてしまったらしい。彼女は、ときによって、〈話し手（スピーカー）〉やネサス以上に非人間的なように感じられる。彼女は神秘だ。異星人のほうが、むしろ実在的だった。

「新たに目標をさがさなければならんな」〈話し手（スピーカー）〉がいいだした。「ライヤー号を宇宙へもどさなければならぬ。だが、おれにはまったく方法が思いつかん」

「ぼくは思いついた」ルイスがいった。

〈話し手（スピーカー）〉は仰天したようだ。「もう代案を考えたというのか？」

「もう少し、練らせてほしい。できるかどうかはさておき、自分が正気なのかどうかも自信がないんだ。とにかく、乗っていくものが要る。それをさきに考えよう」

「橇のようなものだな。残ったフライサイクルで、それを曳いていけばよい。大きな橇だ。建物の外壁が使えるだろう」

「それよりいいことがあります。ハールロプリララーを口説いて、この建物を浮かばせている機構でこれを動かしていくことができると思います。この建物自体が、乗り物になるというわけです」

「やってみてくれ」とルイス。

「で、あなたの案というのは？」
「もうちょっと時間をくれないか」

建物の中心部は、機械でぎっしりと占められていた。その一部が浮揚装置で、他に、空調や、水分の凝縮と給水装置、そして厳重に隔離された一画に、あの電磁捕獲装置があった。ネサスが作業をしているあいだ、ルイスとプリルは、ぎごちなくたがいを無視したまま、それを見まもって立ちつくしていた。

〈話し手（スピーカー）〉はまだあの大きな牢獄の中だった。プリルが彼をうけいれないのだ。

「彼女はこわがっているのです」とネサスは説明していた。「押しきることはできます。あなたをフライサイクルのひとつに乗せ、あなたが台の上にあがらないうちはわたしがいっしょにいかないといえば、彼女はあなたを持ちあげてくれるでしょう」

「途中まで持ちあげて、落とすかもしれんぞ。やめておこう」

だがルイスのほうは、いれてもらえた。

彼女を無視するふうを装いながら、彼は観察をつづけていた。彼女のくちびるは細く、事実上ないにひとしい。鼻は小さくて細くまっすぐだ。眉毛もない。

表情がないようにみえたのも無理はなかった。要するに、かつら屋の使う頭型（ダミイ）と大差のない顔だちなのである。

二時間ほど何かやっていたあげく、ネサスは、パネルの修理孔から首をひきぬいた。「移動性を与えることはできそうにありません。浮揚力場（フィールド）には、浮揚の働きしかないのです。しかし、位

置固定用の修正機構ははずしました。これで、この建物は、風のまにまにというわけです」
ルイスは、にやりとした。「じゃ、曳航すればいい。あんたのフライサイクルに綱をつけて、この建物をひっぱるんだ」
「その必要はありません。フライサイクルの動力は、無反動のスラスター駆動です。建物の中に固定しておけば働かせられます」
「まずそっちのほうに頭が働くんだな、え？　しかし、スラスターはおそろしく強力だ。もしサイクルが、この中で、固定した材料を引きちぎったが最後――」
「はい――」パペッティア人は、プリルをふりかえると、ゆっくりと、リングワールドの神のことばで、かなり長いあいだ話しあった。それからルイスに向かい、「電流硬化性のプラスティックがあるそうです。そのプラスティックで、操縦席だけを残して、フライサイクルを埋めこんでしまえばよいのです」
「ちょっとオーバーすぎないかい？」
「ルイス、もしフライサイクルが固定からはずれたら、怪我をするのはわたしなのですよ」
「うん……まあな。でも、この建物を、好きなところへ降ろすことはできるのかい？」
「はい。高度制御装置があります」
「じゃ、偵察用のサイクルも要らないわけだ。よし、やろうぜ」
ルイスは休息していたが、眠ってはいなかった。大きな卵形のベッドの上に、仰向けに寝ころんで、両眼を見ひらいたまま、天井にふくらんだ窓ごしに、上空を見あげているのだった。

シャドウ・スクェアの縁に、太陽のコロナの端がのぞいている。もう夜明けが近い。だが、黒い空の中の〈アーチ〉は、まだ青くあざやかに輝いていた。
「おれは気がくるったにちがいない」
そしてまた、「しかし、ほかにどんな案があるというんだ？」ふと、つぶやく。
この寝室は、支配者の居住区域の一部だったらしい。いまはそれが操縦室になっている。彼とネサスが、フライサイクルを、付属の衣裳部屋にはこびこみ、その上にもまわりにもプラスティックを流し、それから——プリルの助けもかりて——そのプラスティックに電流を流し、固めたのである。小部屋は、ちょうど手ごろな大きさだった。
ベッドには時代のにおいがしみついていた。彼が身動きするたびに、かさかさという音をたてる。
「〈神の拳〉か」闇に向かって、ルイス・ウーはつぶやいた。「この目で見た。高さ一千マイル。いくらなんでも、はじめからあんな高い山をつくったとは……」あとは口の中。
ついで、いきなりベッドの上に、まっすぐ上体を起こしながら、声をあげた。「シャドウ・スクェアの糸がある！」
人影がひとつ、寝室にすべりこんできた。
ルイスは凍りついた。入口のあたりは暗い。それでも、流れるような動きと、かすかな陰影をなす曲線でそれとわかる、はだかの女がひとり、歩みよってくる。
幻覚だろうか？　ティーラ・ブラウンの幽霊だろうか？　心をきめかねているうちに、彼女は

と、彼の顔にふれ、指先をすうっと頬にそって下へ這わせた。

彼女の頭は、ほとんど禿げていた。歩いてくるとき、丈なす黒髪を波うたせていたが、それはぜんぶ、うなじから頭の周囲一インチほどの幅に生えているだけなのだ。暗い中なので、表情はまったくわからない。しかしそのからだは美しかった。そのからだの線を見たのは、はじめてだった。やせ型で、本職のバレリーナのような細く強い筋肉に包まれ、胸は高くゆたかにつきでている。

その姿に見合う顔さえあったら……。

「きちゃいけない」ルイスは、穏やかにいった。手首をつかんで、顔にふれている指先の動きをとめた。まるで理髪師の顔面マッサージのように、どこまでもやわらかい動きだった。彼は立ちあがると、彼女をひっぱって立たせ、その肩に手をかけた。もしここで、彼女の向きを変えて、入口のほうへ押してやったとしたら——?

彼女はなおも、彼の首の両側に手をのばしてきた。こんどは両手だ。彼の胸にふれ、そこかしことふれる。ふいにルイスは、目のくらむような欲情を感じた。両手が、彼女の両肩を、強くにぎりしめる。

彼女は両手をだらりとさげた。そのまま、彼がジャンパーを脱ぐのを、何もせずにじっと待っている。が、やがて彼の皮膚があらわになると、またあちこちとふれはじめた。べつに神経の敏感な場所をえらんでいるわけでもないのに、ふれられるたびに、脳の快感中枢を刺戟が走りぬける。

彼は炎のように燃えた。もし彼女が拒んだら、暴力に訴えただろう。彼女を自分のものにしな

ければ——。

——だが、脳の中のどこか醒めた部分では、彼女が彼の肉体を燃えたたせたのと同じくらいの早さで静めてしまえることを、彼は知っていた。若いサテュロスのようにいきり立ちながら、彼はまた、自分があやつり人形にしかすぎないことをも、ぼんやりと意識していた。

しばしのあいだ、彼はこれ以上ないほど無我夢中だった。

そのときも、彼女の顔は、まったくなんの表情も示さなかった。

彼女は彼を、オルガスムのきわまでいざなって、そこでさしひかえ、そこでさしひかえ……で、その瞬間がきたときは、まるで稲妻につらぬかれたかのようだった。しかも、その稲妻は、いつまでも、炎のようなエクスタシイの放出となって輝きつづけた。

それが終わったとき、彼はもう、彼女が身を離したことにも、ほとんど気がつかなかった。彼をぼろ布のように絞りつくしたことが、彼女にはよくわかったにちがいない。彼女がドアへいきつかないうちに、彼はもう眠りに落ちていたのだ。

目がさめたとき、まずそのことが頭に浮かんだ。——彼女はなぜ、あんなことをしたんだ？

わかりきった話さ、と、彼は自答した。——彼女は、さびしかったんだ。ここにずいぶん長いこといたにちがいない。あれだけの伎倆を持ちながら、それを発揮するチャンスが一度もないままに……。

伎倆というべきだろう。そんじょそこらの教授などより、解剖学には詳しいにちがいない。売春学博士とでもいったところだろうか？ 文明史上最初の職業だという、それより以上に、そこ

には何かがあった。ルイス・ウーは、どんな分野だろうと、その道の権威は認める主義だ。彼女は、たしかにそれであった。

正しく順を追って神経を刺戟していけば、対象は理論どおりに反応する。正しい知識があれば、人間をあやつり人形にすることも可能なのだ……。

……あやつり人形。〈ティーラ・ブラウンの幸運〉にあやつられる……。

すでに彼はほとんど解答を手にしていた。最後の問題点が解けたときには、もうたいした驚きはなかった。

ネサスとハールロプリララーが、冷蔵室からあとじさりに出てきた。人間よりちょっと大きめの、羽のない鳥の屍体を、布でくるんで引きずっている。つつんだのは、ネサスが直接その屍体に触れたくなかったかららしい。

ルイスもパペッティア人に力を合わせた。彼とプリルが同じ側に前後に並んでひっぱる。彼女と同じように彼も両手を使わなければならないほどの重さだ。彼女がうなずいて歓迎の意を示すのに答えてから、彼はたずねた。

「彼女は何歳くらいなんだ？」

ネサスは、意外そうな様子も見せずに答えた。「知りません」

「ゆうべ、彼女がぼくの寝室へやってきたんだ」反応なし。異星人にはなんのことかわかるはずがない。「ぼくらが子供をつくるためにやることを、レクリエーションのためにやることがあるのは知ってるね？」

「そのことは知っています」

「それをやったのさ」とルイス・ウー。「彼女は、その達人だった。あまり手なれてるんで、千年もかけて訓練をうけたんじゃないかと思ってね」

「ありえないことではありません。プリルの属する文明は、生命をのばすのに、細胞賦活剤(ブースタースパイス)よりはるかに進んだ合成薬品を用いていました。現在では、それは何ものにも代えがたい価値をもっています。一回の服用で、およそ五十年の若さが保証されるのです」

「それを彼女がもう何回服(の)んだかは、聞かなかったのかい?」

「いいえ、ルイス。しかし、彼女はここまで、徒歩でたどりついたということです」

一同は階段を、独房の並んだ円錐形の牢獄へおりていった。引きずっている鳥の屍体が階段ではずむ。

「ここまで、どこから歩いて?」

「外壁からです」

「二十万マイルをかい?」

「それくらいはあるでしょう」

「ぜんぶ話してくれ。彼女の仲間が、壁のこっち側へはいってからあとのことを」

「きいてみましょう。そのことは、まだよく知らないのです」そうしてパペッティア人は、プリルに質問をはじめた。少しずつ、ほんのわずかずつ、その物語は展開していった——。

彼らは、最初に出会った未開人の一群により、神として迎えられた。その後も、ある特定の場

[illegible]

[illegible]生ける神として、[illegible]

[illegible]神としては機能の少ないほうである

[illegible]

[illegible]反回転方向[illegible]

[illegible]外界[illegible]

[illegible]相手[illegible]

[illegible]

[illegible]神[illegible]都市の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]自分[illegible]

[illegible]反回転方向[illegible]生存者[illegible]

[illegible]ある。

[illegible]

置が開発されたのだった。
それらの建物のうち、まだいくつかは浮かんでいるものもあった。が、大部分は、都市の中心部に墜落し、粉々になっていた。動力ビーム受容装置の最後の一基が焼け切れたときに、ぜんぶいっせいに墜ちたのだ。
たまたまこの流浪の神の一行は、一部分復興して周辺部に住民のいる都市を見つけた。そこでは、神様のふりは通用しなかった。ここで一同は、長命薬と引きかえに、ちゃんと動く自己動力の大型自動車を手にいれるという幸運にめぐりあった。
そのようなことは、そのあと長いあいだ起こらなかった。もう彼らはあまりにも遠くまできていた。当初の気力も萎え、車もこわれてしまった。なかば壊滅した都市で、没落を生きのびた人びとと出会ったのを機に、一行の大部分はそれきり動く気をなくし、その場に落ちついた。
しかし、プリルには地図があった。生まれ故郷の町は、そこからまっすぐ右舷の方向にある。彼女は、ひとりの男を説きつけて、いっしょに歩きだした。

途中ずっと神様のふりをして通してきた。が、ついにおたがいに相手に飽きてしまい、プリルはそのあとひとりで進んだ。神様のふりが通用しにくいところでは、長命薬を少量ずつ交易に使った。あるいはまた——。
「彼女には、人びとを手なずける別の力がありました。それについても説明してくれましたが、わたしにはよくわかりません」
「ぼくならわかる」とルイス。「それでやっていくこともできるんだ。彼女は、タスプと同じよ

うな能力を持っているんだよ」
　やっと故郷の町へ帰りついたときには、興奮でいささか気が変になっていたようだ。彼女は、地上におりていた警察署に居をさだめた。何百時間もかけて、その機構の動かしかたを調べた。そして、まずやったのは、その建物を宙に浮かべることだった。自家動力をもったその建物は、都市の没落のあと、用心のために地上へおろしてあったのだ。それからも、間一髪のところで塔を地上に墜落させて自分も死んでしまうような局面には、何度か出くわしたらしい。
「交通違反者をとらえる装置があったので、彼女はそのスイッチをいれました」と、ネサスはしめくくった。「自分と同じような、都市の没落を生きのびた人間をつかまえようと思ったからです。つまり、車で飛んでいるものは文明人だろうと考えたのです」
「じゃ、どうして、つかまえた相手を、あのくず鉄の海の中におきっぱなしにしたんだろう？」
「万一の用心でしょう、ルイス。彼女が正気にもどっていた証拠ですよ」
　ルイスは眼下の独房の列を見て、顔をしかめた。こわれた金属の残骸の上に鳥の屍体をおろすと、〈話し手（スピーカー）〉がその前に席を占める。ルイスが口をひらいた。「この建物は、もっと軽くできるな。半分くらいに重さを切りつめられる」
「どうするのです？」
「この地階を切り離すのさ。しかしそれには、〈話し手（スピーカー）〉を上へあげなきゃならない。なんとかプリルを説得できないかい？」
「やってみましょう」

# 22　探す人（シーカー）

ハールロプリララーは〈話し手（スピーカー）〉をこわがっていたが、そのいっぽう、ネサスは巧妙に彼女をタスプの影響下にとどめていた。〈話し手（スピーカー）〉の姿を彼女が見るたびに、タスプを効かせることで、やがてはその姿を喜んでうけいれるようにしようというわけだ。それまでは、ふたりともなるべくクジン人と会わないほうがいい。

というわけで、プリルとネサスがどこかへひっこんでいるあいだに、ルイスと〈話し手（スピーカー）〉は、あの見張り台の上に寝そべって、監房の並ぶ下の暗闇を見おろした。

「やれよ」と、ルイス。

クジン人の武器から、二本のビームがほとばしった。

百雷の一時に落ちるようなとどろきが、屋内に反響した。下方の壁の、天井のすぐ下あたりが、稲妻のような色に輝きだした。その光輝がゆっくり時計まわりに動き、あとに赤みを帯びたあとが、尾を引いて残る。

「少しずつ切りとるんだ」と、ルイスが指図した。「もしぜんぶ一度に切りはなしたら、身ぶるいする犬の背中の蚤みたいに、ふり落とされちまうぞ」

それに従って、〈話し手（スピーカー）〉は、切断の向きを変えた。

それでも、梁材と構造プラスティックの最初の一塊が落ちたときには、建物は大きく傾いた。ルイスは床にしがみついた。穴のあいたところから、ようやく真下の様子が目にはいった。

五、六個のかたまりを切り落とすと、日光と、都市と、そして人影が見えた。

見えたのは、木の祭壇と、真四角な台の上に抛物線形のアーチをのせた銀色の金属模型だった。が、見えたと思ったとたんに、切り離された一塊が、そのすぐ近くに激突し、こまかい破片となって四方へとび散った。あとには、おがくずと、くしゃくしゃになった金属片が残っているだけ。

しかし、そこにいた人間は、もうとっくにどこかへ逃げてしまっていた。

「人がいたんだ！」彼はネサスに訴えた。「からっぽの市街のどまんなか、まわりの畑からは何マイルも離れたところにだ！　一日がかりでやってきたにちがいない。あんなところで、何をしてたんだろう？」

「ハールロプリララーは、彼らの女神なのです。彼らがプリルの食糧源です」

「ああ、お供物をあげにきてたわけか」

「もちろんですとも。何か変わったことでもあったのですか、ルイス？」

「彼らにあたったかもしれない」

「たぶん、下敷きになったものもあるでしょう」

「あの中に、ティーラがいたような気がするんだ。ちらりと見えただけだったが」

「馬鹿馬鹿しい。さあ、ルイス。動力をためしてみましょうか？」

パペッティア人のフライサイクルは、ゼラチンのように半透明なプラスティックの中に埋まっ

ていた。わずかに表面に現れた操縦盤のかたわらに、ネサスが立つ。正面の張り出し窓から見る都市の眺めは、印象的だった。海岸に並ぶいくつものドック、中心街ののっぺりした塔の群れ、かつては公園だったにちがいないこんもりとした密林。すべてが、数千フィート下方にひろがっている。

ルイスは覚えず胸を張っていた。出陣のポーズだ。——部下の注目を一身にあつめて、さっそうとブリッジに立つ司令長官。ロケット機関に故障でもあれば、ひと吹きしたとたんに爆発するかもしれないが、やってみなければならぬ。クジン族の戦艦を、地球へ近づく前に阻止しなければならぬ！——

「うまくいくはずがない」ルイス・ウーは、つぶやいた。

「なぜです、ルイス？　推力が強度をこえなければ——」

「飛ぶ城だって！　お笑いぐさだよ。いまやっと、何もかも気ちがいじみてるってことがわかったんだ。みんな頭がどうかしてるんだ！　摩天楼の上半分におさまって——」そのとき建物がぐいとゆれ、ルイスはたたらをふんだ。ネサスがスラスター駆動をいれたのである。

張り出し窓から見える都市の眺めが動きはじめ、しだいに速くなっていった。やがて、その加速もゆるんだ。一度も毎秒毎秒一フィートをこえていない。最高速度は、毎時百マイルくらいだろうが、城の安定は実によく、小ゆるぎもしなかった。

「フライサイクルの位置を、ちょうど中心においたのです」とネサス。「見てのとおり、床は水平やすし、回転もしません」

「風凪げでいないから動くのです。さて、それではどこへいきましょう?」

ルイスは黙りこくった。

「どこへいけばいいのですか、ルイス? 〈話し手〉にもわたしにも、このさきの計画は立っていません。どっちへ向かいますか、ルイス?」

「石舟だ!」

「よろしい。まっすぐ石舟へ?」

「そう。まずあの日の格好をした嵐の横を通ってから、反回転方向〈四十五度、向きを変える〉」

「〈天国〉という塔のあった都市をさがすのですね?」

「うん。見つけられるかな?」

「それは問題ありません。あそこからここへは三十時間の行程でした。この建物で、三十時間もあれば到着します。それからは?」

「状況しだいさ」

映像が鮮明すぎる。単なる推理と想像の産物だというのに――あまりにも迫真的だ。ルイス・ウーは、色つきの白昼夢を見る傾向があるらしい。

あまりにも鮮明なのだ。しかし、こんなことが事実でありえようか?

空飛ぶ塔に乗っているのだという自覚が、あっというまにどこかへ吹っとんでいってしまったのは、どういうわけだろう? それでも塔は飛んでいる。ルイス・ウーがどう感じていようと、おかまいなしに。

「草食いは、おまえのいいなりについていく気のようだな」〈話し手（スピーカー）〉がいった。

数フィート向こうでは、フライサイクルがひとりで、かすかなハム音をたてている。窓の外を、景色が流れる。目のかたちの嵐は、ななめ前方にあった。灰色の凝視の、威圧的な大きさ。

「あいつもくるったのさ」とルイス。「あんたはもっとしっかりしていたはずだが」

「いやいや。おまえに目当てがあるなら、おれも喜んでついていくぞ。だが、いくさきに戦いがひかえているようなら、それについて少しきかせておいてもらいたいな」

「さあてね」

「どんなことでもよい。戦いが起こるかどうか、その判断の資料にするだけだ」

「うまいことというね」

〈話し手（スピーカー）〉は、じっと待っている。

「まず、シャドウ・スクェアの糸をさがすんだ」ルイスは話しはじめた。「隕石防禦装置でやられたあと、船がぶつかった糸のことは覚えているだろう？　そのあと、あの浮き城のあった都市の上へ、そいつがくるりくるりと果てしなく降ってきた。少なくとも数万マイル。ぼくの考えている目的には、どう使ってもありあまる長さだ」

「考えていることというのはなんだ、ルイス？」

「シャドウ・スクェアの糸を、どうやって手にいれるか。問題は原住民が、すんなりとよこすかどうかだが、プリルが丁重に頼むなり、ネサスがタスプを使うなりすれば――」

「それをどうするのだ？」

「これで、ぼくのくるいっぷりを、お目にかけることができた」

塔はあたかも空に浮かぶ汽船のように進んでいった。宇宙船には、これほど内部の広いものはない。空を飛ぶ船としては、ノウンスペースのどこをさがそうと、これに比肩しうるものはなかった。なにしろ六階建てなのだ！　なんという豪華さだ！

が、贅沢にも、穴はあった。この飛行塔に積んでいる食糧は、冷凍肉と、くさりやすい果物と、ネサスのフライサイクルの調理機から出てくる煉瓦だけである。ネサスのことばによると、パペッティア人の食物は、人間向きの栄養分に不足があるという。それで、ルイスは、この日の朝も昼も、携帯レーザーで焼いた肉と、こぶの多いまっかな果物だけですませた。

水もなかった。

そしてもちろんコーヒーも。

プリルを説きふせて、アルコール飲料の壜を、何本か持ちださせた。そこでおそまきながら、この船の命名式をやるために、一同ブリッジ用の部屋にあつまったが、〈話し手〉がつつましく一隅にひかえていても、プリルはドアのそばでそわそわと逃げ腰だった。ルイスの〝ありえざる〟号という命名には、誰も承認しなかった。結局、それぞれの四つの言語で、四つの名前がつくことになった。

飲料は……そう、酸っぱかった。〈話し手〉の口には合わなかったし、ネサスは味を見ようともしなかった。しかしプリルは、壜一本をあけてしまうと、あとのには栓をしたまま、どこかへそっとしまいこんだ。

命名式のあとは会話の講習会みたいになった。ルイスは、リングワールド建設者のことばの基本を、いくつか覚えた。〈話し手〉の習得ぶりは、彼よりずっと早いようだった。さもあろう。〈話し手〉にしろ、ネサスにしろ、人間の言語や、思考様式や、発音と聞きとりの限界などについて、訓練をうけてきた連中である。これはいわばその延長のようなものにすぎない。

夕食のために散会した。ネサスはまた、自分のフライサイクルの調理機でひとり食事をとり、ルイスとプリルは焼肉を、そして〈話し手〉は離れたところでなまの肉を食べた。

またことばの学習がはじまり、ルイスはうんざりした。あとのふたりの進歩ぶりをみると、自分が白痴みたいに思えてくるのだ。

「でも、ルイス、ことばだけはしっかり覚えるように。旅の進みかたがおそいので、食糧を徴発しなければなりません。しょっちゅう原住民と交渉する必要があるのです」

「わかってるさ。ただ、元来が語学は苦手だったんでね」

夜のとばりがおりた。嵐の〈目〉からこれだけ離れていても、雲は空を蔽いつくし、まるで怪獣の口の中へでもはいったような闇夜だ。ルイスは勉強を中途で切りあげた。疲れで気分がいらだち、すっかり自己不信に陥っていた。ほかのものも、彼を休ませてやることにした。

十時間かそこらのうちに、嵐の〈目〉の近くへさしかかる予定であった。

不安なまどろみの縁をさまよっているところへ、プリルがもどってきた。挑発的な愛撫の手を感じて、彼はそちらへ手をのばした。

彼女はすっと、とどかぬところへ身をひいた。口をひらくと、自分のことばで、しかしルイス

にもわかるように単純化したかたことでたずねた。

「あなたがリーダーなの？」

寝ぼけまなこで、ルイスは考えた。「うん」と答えたのは、実際の状況が、あまりにこみいりすぎていたからだ。

「頭のふたつあるひとの機械をください」

「なんだって？」よく聞きとれなかった。「彼の何を？」

「機械。わたしを幸福な気持にする、それをください。あのひとからとりあげて」

ルイスは笑いだした。やっと彼女の意図がわかったからだ。

「わたしがほしいの？　それなら、あげる」プリルは怒ったようにいった。

彼女のほしいものを、パペッティア人が持っている。が、人間でない相手には、手管が通じない。人間同士といえるのは、ルイス・ウーだけだ。彼なら、彼女の力で意に従わせることができる。それは、いつでも効力を現してきた。とすると、彼女も女神ではなかったのだろうか？

おそらくルイスの髪が、誤解のもとだったのだ。毛ぶかい下層民のひとりだが、顔に毛がないだけ〈建設者〉の種族に近い、ただそれだけのことだと彼女は考えた。したがって、都市の没落以後に生まれたものに相違ない。長命薬もない。とすると、この男は、はじめての若さの盛りということになる。

「なるほど、わかったよ」ルイスは、自分のことばでしゃべった。プリルがこぶしをにぎりしめた。彼の嘲笑を感じて腹を立てたのだ。「ぼくが本当に三十前の男だったら、きみの手の中でとろけちまったろうが、あいにくぼくは、もっと年寄りなんでね」そしてまた笑った。

「機械。どこにあるの?」闇の中で、彼女がよりそってきた。美しい挑発的なシルエットの、頭頂がかすかに光り、黒い髪が肩に流れる。ルイスののどに、熱い息づかいがからみついた。

やっとことばを思いだして、彼は答えた。「皮の下の、骨にくっついている。片方の頭の」

プリルはうめくような声を洩らした。理解したのにちがいない。手術によって埋めこまれているのだと。くるりと背を向けて、彼女は去っていった。

あとを追おうか、と、ふと思った。自分でわかっている以上に、彼女への欲求は強かった。が、そんなことでは彼女の思う壺にはまってしまう。彼女の意図は、ルイス・ウーのそれと一致しないのだ。

風のうなりが、徐々に強まってきた。ルイスの眠りは浅く……ともすると、エロティックな夢にとけこもうとする。

目をあけた。

プリルが、彼に向かってひざまずき、さながら女怪のようにのしかかっていた。その指が、胸から腹へかけて、皮膚をかるくまさぐっている。腰がリズミカルに動き、ルイスのからだが、それに応えてふるえる。彼女は楽器のように彼を弾いているのだった。

「これで、あなたは、わたしのものになる」さえずるような声。その声には、歓びがあったが、それは女が男によって与えられる喜びとは異質だった。支配の快感であった。

彼女の指の感触は、蜜のようにねっとりとしていた。太古以来のおそるべき秘密を彼女は熟知している。どんな女にも生得のタスプがあり、その力は、使いかたを学べば学ぶほど、底の知れぬ

ものなのだ。彼女はそれを使ってはひかえ、使ってはまたひかえて、ついにはルイスが彼女に奉仕することを必死で願うように……。

彼女の内部で、何か変化が起こった。表情には現れない。が、さえずるような歓びの声と、からだの動きが変わるのが、彼にも感じられた。彼女が位置を変え、ふたり一体になったとき、どこからか、ずしん！　というひびきが伝わってきたような気がしたが、それも単なる気のせいのように思われた。

彼女はその夜ずっと、彼によりそって眠った。ときおり目をさまして、愛をかわし、また夢の世界へもどった。そのときもしプリルが不満を感じていたにしても、彼女はそれをおもてには出さず、ルイスも気づかなかった。ただ彼女がもう、彼を楽器を弾くように扱っていないということだけは確実だった。いまのそれは、ふたりの二重奏であった。

プリルに、何かが起こったのだ。それが何かは、彼にもうすうすわかっていた。

夜は灰色の嵐とともに明けた。古めかしい建物のまわりに、風が渦をまく。ブリッジの張り出し窓を雨が叩きつけ、どこか上のほうでは、窓をやぶって吹きこんだらしい。インプロバブル号は、嵐の〈目〉の間近にいる。

ルイスは服を着ると、ブリッジを離れた。

途中でネサスを見つけた。「おい！」と彼はどなった。

パペッティア人はとびあがった。「はい、ルイス？」

「ゆうべ、プリルに何をした？」

「感謝していいはずです、ルイス。彼女はあなたを思いのままに、奴隷化しようとしていたのですよ。その声が聞こえたのです」
「彼女にタスプを使ったな！」
「あなたたちが、生殖行動にはいっているとき、半分の出力で三秒だけ使いました。いまでは、思いのままになるのは彼女のほうです」
「きさまは怪物だ！　この、ひとりよがりの化けものめが！」
「つめよらないでください、ルイス」
「プリルは、自由意志を持った、人間の女性なんだぞ！」
「あなたの自由意志はどうなのです？」
「危険なんてなかったんだ！　彼女には、ぼくをどうかすることなんてできっこないんだ！」
「もっとほかのことが気になっているのですね？　ルイス、わたしが人間の生殖行動を見るのは、あなたがはじめてではありません。わたしたちは、あなたの種族について、あらゆる情報がほしいのです。ルイス、それ以上近づかないように」
「そんな権利はないぞ！」むろんルイスは、本気でパペッティア人に害を加える気などなかった。怒りでこぶしを握りしめていたが、それを使うつもりはない。ただ怒りにまかせて、一歩前に出る——。

と、ルイスは忘我の境にいた。

これまで感じたことのない、純粋な喜悦のただなかで、しかしルイスは、ネサスが彼にタスプを使っていることを意識していた。結果がどうなるか考える余裕もないまま、彼は脚を高く蹴り

あげた。

タスプの与える恍惚から引きだせるかぎりの力をこめた一撃だった。強烈とはいえないが、とにかく彼はやってのけ、その足先は、パペッティア人の左あごの下の、のどもとにぶつかった。

結果は世にも忌わしいものだった。ネサスは、「ぐえッ」とさけんでよろめき、タスプのスイッチを切った。

タスプのスイッチを切ったのだ！

ひとりの男が背負わねばならぬ悲哀のすべてが、ルイス・ウーの両肩に、千鈞の重みをもって、一度に落ちかかってきた。ルイスはくるりとパペッティア人に背を向けると、歩き去った。大声をあげて泣きたかった。が、それ以上に、その顔をパペッティア人に見られたくなかった。

心のうちの暗黒に目をすえたまま、彼はでたらめに歩きまわった。吹きぬけの階段へ出たのは、まったくの偶然だった。

自分がプリルに対してした仕打ちが、いまさらのように思い出された。九十フィートの奈落の上で釣合いをとっているときには、ネサスがプリルにタスプを使うことを、夢中で願っていたのだ。以前、彼も、頭に電極をさしこむ実験を見たことがある。その効果についても彼は知っていた。

条件づけだ！　まるで実験動物だ！　しかも彼女はそれを知っていたのだ！　昨夜のは、タスプの力から逃がれるための、最後のいたましい試みではなかったろうか。

いまにして、ルイスは、彼女が何と闘っていたかを、感じとることができた。

「あんなことをすべきじゃなかった」と、ルイスはつぶやいた。「ぜんぶ取り消したい」暗い絶望の底でも、そのことばは、ひどくこっけいに感じられた。むろん、これまでのなりゆきから考えても、取り消しがきくものではない。

吹きぬけの階段を、のぼらずにおりていったのも、単なる偶然だった。それとも、意識にはほとんどのぼることもなかった昨夜の、ずしん！ というひびきが、どこか頭の奥に残っていたせいかもしれない。

見張り台の上へ出ると、周囲で風が吼えたけり、あらゆる方向から雨を叩きつけてきた。さすがに外部へも注意を向けなければならなくなった。タスプが消えるのと同時に襲ってきた憂鬱も、いくらかまぎれたようだ。

かつて、ルイスは、永遠に生きようと誓った。

それからずっとのちの、いまになって、彼はそういう決心にともなう重荷を、ひしひしと感じたのだった。

「彼女をなおしてやらなければ」と彼はつぶやいた。「しかし、どうやって？ 肉体的な病変の徴候は何もない……といって、もし彼女が、こわれた窓から外へとびおりようとでもしたら、それでおしまいだ。おまけに、おれ自身をどうやってなおせばいいんだ？」彼のからだのどこか一隅は、いまだにタスプを求めつづけており、それをとめることはできそうにない。

習慣性とは、識閾下の記憶以外の何ものでもない。長命薬を持たせてどこかへおろしてしまえば、その記憶も、いつかは消えるだろうが……。

「カホナ！ ぼくらには、彼女が必要なんだ」インプロバブル号のエンジンルームについて、動

女は知悉している。かわりが得られるはずもない。
とにかく、ネサスに、タスプを使うのをやめさせることだ。そしてしばらく観察をつづけよう。彼女も、はじめはがっくり気落ちするかもしれないが……。
とつぜんルイスは、自分の目がいままで見つめていたものの正体に気がついた。
この見張り台から二十フィートほど下方に、一台の車が浮かんでいるのだ。スマートな設計の、栗色をした細長い車体に、せまいスリットのような窓のならんだその乗り物は、切り忘れていた電磁捕獲装置にとらえられて、動力の切れたまま、はげしい風の中に浮かんでいたのである。
もう一度、目をこらしてみて、ルイスは、その風防の奥に顔がのぞいているのをたしかめた。それから階段をかけあがると、プリルを呼びたてた。
ことばはわからない。しかし、彼女の腕をつかんで階段をくだり、指さしてみせた。彼女はうなずいて、捕獲装置の調整にもどっていった。
栗色の車は、見張り台の縁に、ぴたりと停まった。乗っていたひとりがもがき出てきて、悪魔のように咆哮する風にあおられながら、両手ですがりついた。
ティーラ・ブラウンだった。ルイスには、それが当然のことのように感じられた。
つづいて出てきたもうひとりが、あまりにもその役柄にぴったりだったので、彼は思わず笑いだしてしまった。ティーラはびっくりし、傷つけられたような顔をした。

船は嵐の〈目〉を通過しつつあった。見張り台へつづく吹きぬけから、風の音がここまでひびいてくる。烈風が下の階の廊下を荒れくるい、また上のほうのこわれた窓からふきこんで渦をま

いている。あちこちの部屋の床に雨水が流れこんでくる。

ティーラとその同伴者(エスコート)と、インプロバブル号の四人の乗員は、ブリッジとなっているルイスの寝室にあつまっていた。筋骨隆々としたティーラの連れの男は、片隅でブリルと重々しい口ぶりで話していた。もっともブリルは、〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉と張り出し窓のほうへ、しょっちゅう不安げに目を走らせていた。が、あとのものはティーラをとりかこみ、その話に耳をかたむけた。

警察の検束装置が、ティーラのフライサイクルの機構のほとんどを破壊してしまった。探知機、受信機、音波シールド、それに調理機までが、ぜんぶ一度に焼け切れたのである。

ティーラが生きのびられたのは、音波シールドが、もともと定常波的な性質を持っていたおかげだった。風の吹きこむ気配を感じるとすぐ、制動フィールドのスイッチをいれたが、さもなければマッハ二の風圧で、頭を吹きとばされていたことだろう。数秒のうちにサイクルのスピードは、市内制限速度以下まで落ちた。捕獲装置は、駆動機構もほとんどだめにしていたが、そこで攻撃はやんだ。音波シールドの安定効果がくずれたときには、吹きこむ風の勢いも、ずっと弱くなっていた。

だがティーラはもうふらふらだった。あの嵐の〈目〉の中で、間一髪、死の手をすりぬけたばかりなのに、そこを早くもまた襲われたわけである。彼女はフライサイクルを下降させ、闇の中で、着陸できそうな場所をさがした。

店舗にかこまれ、タイルで舗装された遊歩道があった。そこには明かりがあった。卵形のドアが、明るいオレンジ色に輝いていたのである。サイクルは手荒く着地したが、彼女は気にもとめ

なかった。ともかく大地に着いたのである。

おり立とうとしたとたんに、サイクルはまた動きだした。はずみで、彼女はさかさまに地上へほうりだされた。手と膝をついて身をおこすと、ぶるっと頭をふった。見上げると、フライサイクルの亜鈴形が、みるみる遠ざかっていくところだった。

彼女は泣きだした。

「たぶん駐車違反だったんだ」とルイス。

「なぜかなんてこと、考えもしなかったわ。ただ――」ことばにつまったが、なんとか話しつづけた。「道に迷ったってことを話す相手がほしかったの。でも誰もいなかった。それで、石のベンチのひとつにすわって、泣いてたの。

何時間もそうしてたと思う。こわくてどこへもいけなかった。だって、あなたがたが探しにくると思ったから。そこへ――彼が現れたの」連れのほうを目で指し、「あたしを見て、びっくりしたみたいだったわ。何か話しかけてきた――何をいってるのかはわかんない。でも、なぐさめてくれてたのね。そこにいてくれるだけで、何もできなくても、あたし嬉しかった」

ルイスはうなずいた。ティーラは誰でも信用してしまう。最初に出会った見知らぬ相手に、救いなり慰めなり、求めずにはいられない。しかもそれで、絶対に危険なことはないのだ。

連れの姿は、異様だった。

一種の英雄(ヒーロー)だ、と、ひと目でわかる。べつに悪龍を退治してみせてくれなくてもいい。もりあがった筋肉と、背の高さと、手にした黒い金属の剣を見るだけで、充分すぎるほどだ。強い顔だちは、〈天国〉とよばれるあの城にあった針金細工の顔と、気味がわるいほどよく似ている。プ

リルに話しかけている丁重な口ぶりは、相手が異性であることをまったく意識していないかのようだ。彼女がべつの男のものだからだろうか？

　きれいに髭をあたっている。いや、そんなことはありえない。たぶん、〈建設者〉種族との混血なのだろう。長い髪は灰色がかった金髪で、うす汚れており、生えぎわが秀でたひたいをきわだたせていた。腰のまわりに、何か動物の皮とおぼしいものをまきつけている。

「食べるものをくれたの」とティーラ。「そして、守ってくれたわ。きのう、四人の男がとびかかってきたら、あの剣一本で追っぱらっちゃったのよ！　それから二日のあいだに、共通語（インターワールド）をずいぶん覚えたわ」

「彼が？」

「語学の天才なのよ」

「こいつはなんとも最大のショックだね」

「なあに？」

「まあいいよ。それで？」

「彼、相当の齢なのよ、ルイス。ずっと昔、細胞賦活剤（ブースタースパイス）みたいなものを、大量に手にいれたんですって。悪い魔術師からとりあげたって、いってたわ。おじいさんが、都市の没落のことを覚えてたんだって。そのくらい齢とってるのよ。

　彼がなにをしようとしてるか、わかる？」ふいに、いたずらっぽい笑顔をみせた。「一種の求道者（クエスト）なの。ずっと昔、〈アーチ〉の根もとまで歩いていくという誓いを立てたんですって。それを実行してるわけ。もう何百年も、歩きつづけてるの」

「〈アーチ〉の話もそうだったの？」

ティーラはうなずいた。世にも美しい笑顔を見せ、その笑顔が大いに気にいっているふうだった。が、その目の中には、何かそれ以上のものがあった。

ティーラの瞳の奥に、ルイスは愛の光を見た。が、そこに、優しさの影はみじんもなかった。

「そのことで、彼を誇りにしてるのか！　このおばかさん。〈アーチ〉なんてないことを、きみは知らないのかい？」

「知ってるわ、ルイス」

「じゃ、どうして話してやらないの？」

「もしあなたが話したら許さないわ。彼はそのために、一生の長いあいだを賭けてきたのよ。りっぱだと思うわ。簡単な技術をいくつか身につけて、回転方向に旅をしながら、それをひろめているの」

「どれだけの情報が伝えられる？　充分な知性の持ち主とは思えないが」

「もちろんそうね」そんなことは問題にならないという口調だった。「でも、あたしがいっしょなら、大ぜいの人に、いろんなことを教えることができる」

「そういうことになると思ってたんだ」ルイスは答えた。が、やはり胸が痛んだ。

彼女は、その痛みに気づいたのだろうか？　あえてルイスを見ようとはしなかった。「まる一日、その最歩進でいっしょに待ってみて、それからやっと、あなたがたが、あたしでなくフライサイクルのほうを追っかけてるだろうということに気がついたの。彼の話で、ハル――ハルなんとかいう女神が、浮かぶお城に住んでいて、車をつかまえてるってことがわかった。それで、い

っしょにそっちへ向かったわけ。
　下の祭壇の近くで一泊して、あなたがたのフライサイクルがくるのを見張ってたんだけど、そのうち、お城の下半分が、ばらばらになって落っこちはじめた。それで、〈探す人(シーカー)〉が――」
「〈探す人(シーカー)〉？」
「彼、そう名のってるの。なぜかってきかれると、〈アーチ〉の根もとへ向かっているんだと答えて、それから、途中で出会った冒険のかずかずを話してきかせる……これでわかった？」
「ああ」
「彼、そのあたりの古い車のモーターをかたっぱしからかけてみた。交通警察の検束場(フィールド)にひっかかると、みんなスイッチを切るんですって。そうすれば、モーターが焼けないですむから」
　ルイスと〈話し手(スピーカー)〉とネサスは、思わず顔を見あわせた。あの牢獄にただよっていた乗り物の中には、動くのが半分くらいあったかもしれない！
「動く車を見つけて、お城を追っかけようとしたんだけど、闇の中で見失っちゃったの。でも幸いなことに、警察のほうから、スピード違反でつかまえてくれたってわけ」
「運がよかったよ。ゆうべぼくは、何か衝撃波みたいな音を聞いたような気がしたが、はっきりしなかったんだ」ルイスがいった。
　〈探す人(シーカー)〉はもう、しゃべるのをやめていた。彼はこの寝室の壁に、気持よさそうによりかかって、微笑をふくんだ目で〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉を見つめていた。〈話し手(スピーカー)〉も目をあげた。ルイスには、まるでおたがいが、この相手と闘ったらどうだろうかと値ぶみしあっているようにみえた。
　ブリルは窓の外を眺め、顔に恐怖の色を浮かべていた。風のうなりが、引き裂くようなはげし

さに高まると、彼女はぶるっと身をふるわせた。

　たぶん彼女は、このような嵐の発生現場を見たことがあるのだろう。小さな星くずがぶつかって穴をあけ、それがすばやく修復される、そんなことが、リングワールド全体では、よく起こり、そしてそのたびに、この世界の報道テープにあたるもので、伝えられていたにちがいない。嵐の〈目〉は、つねに脅威である。呼吸のための大気が、宇宙空間へ噴きだしていくのだ。そのこちら側で生ずる台風の真下は、バスタブの栓のようなもので、その吸引力につかまったら何もかも一巻の終わりとなるのである。

　風の怒号がひときわ高くなった。ティーラが眉根にしわをよせた。「この建物の重みが充分あればいいんだけど」とつぶやく。

　ルイスは愕然とした。彼女の、なんという変わりかただろう？　もっとも、あの嵐の〈目〉が、最終的に彼女を直接の脅威にさらしたということもあるが……。

「お願いがあるの」ルイスに向かって、「あたしは〈探す人（シーカー）〉を自分のものにしたい」

「ああ」

「彼もあたしを。でも彼には、おかしな誇りがあるのよ。このお城へこなきゃならないことを説明するために、ルイス、あなたのことを話したら、すっかり不機嫌になって、いっしょに寝てくれないの。あたしは、あなたのものだってわけ」

「奴隷制度かい？」

「女は奴隷なんだと思うわ。だから、あたしがあなたのものじゃないってこと、彼に話してくれない？」

ルイスは、のどが痛くなった。「きみを彼に売ってやることにしたら、説明の手間がはぶけるんじゃないかな。きみさえよければだが？」

「そうね。そのとおりだわ。あたし、彼と、リングワールドの中を旅して歩きたいの。ルイス、あたし、彼を愛してるのよ」

「そうだろうとも。まったく、おたがいあつらえたようにお似合いだ」と、ルイス・ウー。「きみたちは、めぐりあうべく運命づけられていたんだ。一千億ものカップルが、たがいにまったく同じようなことを考えただろうが――」

彼女は疑わしげな表情になった。「あなた、まさか……その、皮肉をいってるんじゃないでしょうね、ルイス？」

「ついひと月前のきみは、皮肉のヒの字も知らなかったね。いいや、まことに奇怪な話だが、これは皮肉じゃないんだよ。一千億ものカップルがどう感じようと、それは問題じゃない。彼らは、パペッティア人のカホな品種改良実験にははいってなかったんだから」

ふいに、周囲の関心が、彼のほうに集中した。〈探す人〉さえも、みんなの視線を追って、彼を見つめていた。

しかし、いまルイスの眼中にあるのは、ティーラ・ブラウンただひとりだった。

「ぼくらがリングワールドに墜落したのは、リングワールドが、きみにとって理想の環境だったからだ」もの静かな口調で、「地球にいるかぎりは、いや、ノウンスペースのどこへいっても学べないことを、きみは学ぶ必要があった。もっとほかにも理由はある――例えば、より優れた脳胞賦活剤や、ゆとりのある空間など――しかし、いちばん大きな理由は、ここで学ぶことだ。

た」
「学ぶって、何を？」
「痛みさ、もちろん。それに恐怖。敗北。ここへきて、きみは生まれかわった。以前のきみは、一種の……抽象存在みたいなものだった。きみは、どこかに爪先をぶつけたことがあったかい？」
「へんなことをきくのね。ないと思うわ」
「足をやけどしたことは？」
彼女は彼をにらんだ。あのことは、まだ頭にあったようだ。
「ライヤー号が墜落したのは、きみを〈探す人(シーカー)〉に会わせるためだった。ぼくらが二十万マイルも旅をしてきたのは、きみをここへおろすためだった。きみのフライサイクルが、正確に、きみを彼のいるところへおろしてから、交通警察に捕獲されていったのは、〈探す人(シーカー)〉こそが、きみが生まれながらにして愛すべく運命づけられていた相手だったからだ」
ここでティーラはほほえんだが、ルイスは、ほほえみを返さなかった。「きみの幸運は、彼に会う時間をきみに与えてくれた。おかげで〈話し手(スピーカー)〉とぼくは、そのあいだ、九十フィートの奈落の上に、さかさにぶらさがって――」
「ルイス！」
「――二十時間かそこらも待たされる羽目になった。しかし、もっとひどいことがある」
クジン人がうなった。「それは、見かたにもよるぞ」
ルイスはそれを無視して話しつづけた。「ティーラ、きみがぼくと恋に落ちたのも、リングワ

ールド探険に参加する動機をきみに与えるためだったんだ。きみがもうぼくを愛していないのは、その必要がなくなったからだ。きみはいまここにいる。ぼくがきみを愛したのも同じこと。〈ティーラ・ブラウンの幸運〉というやつが、ぼくを、あやつり人形に仕立てたのさ——。

しかし、本当にあやつられていたのは、きみ自身だ。これからも一生のあいだ、きみは自分の幸運の糸にあやつられて踊りつづけるだろう。きみに自由意志ってものがあるのかどうか、あやしいもんだ。そいつを使いこなすのは、おそろしくむずかしいだろうな」

ティーラは蒼白になり、硬直したように肩をいからしていた。わっと泣きださなかったのは、自制のたまものだ。前にこれほどの自制力を見せたことは一度もなかったろう。

〈探す人〉はというと、膝をついた姿勢で、ふたりを見まもりながら、黒い鋼の剣の背に親指を這わせていた。ティーラが苦しんでいることに気づかぬはずはない。彼はただ、彼女がまだルイス・ウーのものだと考えているのにちがいなかった。

ここでルイスは、パペッティア人に向きなおった。が、思ったとおり、ネサスはもう、からだをボールのようにまるめて首を中に たくしこみ、全宇宙を拒否していた。

ルイスは、パペッティア人のうしろ脚のかかとをつかんだ。ぐいと持ちあげると、わりと簡単に、そのからだは仰向けにころがった。ルイスとくらべても、さほど体重が大きいわけではなかった。

その姿勢が気にいらないらしく、ルイスにつかまれた脚の先が、小きざみにふるえていた。

「何もかも、きさまがひきおこしたことなんだぞ」と、ルイスはいった。「きさまの、とてつもないうぬぼれのおかげだ。その犯した過失が、そっくりこっちへかぶさってきたんだ。どうして

そんなに権力があって、そんなに決断力があって、しかもそんなに愚劣でいられるのか、ぼくには想像もつかない。もうわかってるんだろうな？　ここで起こったことは、何もかも、〈ティーラの幸運〉の副作用にすぎなかったってことが？」

ネサスの、ボールのようになったからだは、ますますぎゅっと固くなった。〈探す人〉が、夢中でそれを見つめている。

「さあ、それじゃ、パペッティア惑星にもどったら、人間の生殖形態によけいな手を加えると、どんな奇怪なことになるか、忘れずに報告するんだぞ。ティーラ・ブラウンの遺伝子がふえたら、確率の法則がめちゃめちゃになってしまうってことをな。物理学の基礎にしたところで、原子レベルにおける確率の発現にすぎないんだ。宇宙は複雑すぎて、一応の用心ぶかさをもったものだったら、こわくておもちゃになどできっこないんだってことを、よくわからせてやるんだぞ。

しかしそれは、おまえが故郷へ帰りついたあとのことだ」と、ルイス・ウーはつづけた。「さあ、いますぐそこから出てこい。シャドウ・スクェアの糸が必要なんだ。それを見つけなきゃならん。もう嵐の〈目〉はほとんど通りすぎた。さあ出てこい、ネサス——」

パペッティア人が、からだをほどいて立ちあがると、しゃべりだした。「ルイス、あなたは、わたしを侮辱——」

「いまさら、そんなことのいえた義理か？」

パペッティア人は、だまりこんだ。やがて、窓のほうへ向きなおると、嵐のもように見いった。

## 23 神様ごっこ

〈天国〉という名の城を礼拝している原住民の上に、それと並んでもうひとつの城が出現した。「まえのときと同様、四角い祭壇のまわりには、金色のたんぽぽのような顔が蝟集していた。「また礼拝日にぶつかったらしいな」ルイスは、そういいながら、あの顔を刈りあげた僧侶の姿を求めたが、見当たらなかった。

ネサスは、〈天国〉のほうへ向かって、ものほしげな視線を投げていた。インプロバブル号のブリッジが、ちょうど城の地図の部屋と同じ高さになっている。「この前のとき、わたしは、あの中を調査する時間がなかった。こんどは、中へはいれない」パペッティア人がうめいた。

〈話し手〉が提案した。「物質分解機で穴をあけて、ロープか梯子でおろしてやってもいいぞ」

「またしても、チャンスを逃がすとは」

「おまえがここでずっとやってきた数多くのことにくらべれば、たいした危険ではないと思うが」

「しかし、わたしが危険をおかしたのは、すべて知識の収集のためでした。いまのわたしは、リングワールドについて、必要なだけの知識を持っています。いま自分の生命を危険にさらすとしたら、それはその知識を無事に故郷へ持ち帰るためでなければなりません。ルイス、さあ、あそ

こにシャドウ・スクェアの糸がありますよ」

ルイスはきまじめな顔でうなずいた。

都市の、回転方向区域(スピンワード)一帯に、黒い雲のようなものが横たわっているのが見えた。街区の上にどっしりとのしかかっていることから考えると、かなり密度が高く重い物質らしい。窓のひとつある塔が、その中央部をつらぬいて突っ立っている。それ以外は、ずっと平坦だ。

シャドウ・スクェアの糸にちがいなかった。しかし、なんという量だろう！

「しかし、あれをどうやって運びます？」

ルイスには答えようがなかった。「見当もつかないね。まあ、もっと近くへおりてみようや」

彼らは、こわれた警察署の建物を、祭壇のある広場の回転方向(スピンワード)よりの端におろした。

ネサスは、浮揚動力モーターを切らなかった。地上すれすれに接地させただけだ。かつてはその下の牢獄の見張り台だった部分が、このインプロバブル号の、昇降タラップの役割を果たしている。動力をとめたら、建物の重みでへし折れてしまうだろう。

「あの物質の扱いかたを見つけるんだ」とルイス。「同じ物質でつくった手袋でもはめれば、持てるだろう。あるいは、リングワールドの構成物質でできた糸巻きにまくという方法もあるが」

「どちらの物質も、持ちあわせはないぞ。原住民にきいてみなければな」と〈話し手(スピーカー)〉。「何か古い言い伝えとか、古代の器具、聖なる遺物とかいったものがあるかもしれん。さらに、この三日間にわたって、扱いかたを考える時間もあったはずだ」

「では、わたしもいっしょにいかなければなりませんね」ふいに、ぶるっと身ぶるいしたところ

からみても、パペッティア人が乗り気でないことは明らかだった。「〈話し手〉、あなたの語学力は、まだ充分ではありません。ハールロプリララーは、いざというとき建物を上昇させるために、ここへ残していかなければなりません。それとも——ルイス、ティーラの恋人の原住民に、われわれの取り引きの代表をつとめさせることができるでしょうか？」

〈探す人〉のことをそういうことばで呼ぶのをきくと、ルイスは背中がむずがゆくなるのを感じた。「さあね。ティーラでさえ、彼にその才能があるとはいわなかったからな。まかせるわけにはいくまい」

「わたしもそう思います。ルイス、本当に、シャドウ・スクェアの糸が必要なのですか？」

「はっきりそうとわかってるわけじゃないさ。ただ、ぼくが麻薬中毒の夢でも見てるのでなければ、それは必要だ。それがないと——」

「よろしい、ルイス。わたしもいきます」

「べつに、ぼくの判断を信用してくれなくても——」

「いきますよ」パペッティア人は、また身ぶるいした。ネサスの声で、いちばん奇妙なのは、こんなにはっきり正確な発音をしていながら、感情のかけらもそこには現れないことだ。「糸が必要だということは、わたしにもわかります。ぴったりわたしたちの進路の上に、あの糸が降ってきたのは、はたして偶然の一致でしょうか？　あらゆる原因は、〈ティーラ・ブラウンの幸運〉に帰するのです。糸が必要でなかったら、ここに降ってきたわけがありません」

　ルイスは、何がなしほっとした。そのことばが納得できたからではない。無意味なことはわかっている。が、それはルイス自身のあやふやな結論を、裏づけてくれるものでもあった。そこで

CamScannerでスキャン

ルイスは、安堵の気持を胸の中にのみこみ、パペッティア人にそのことばの無意味さを説明してやることはやめておいた。

一同は一列に並んでタラップをおり、インプロバブル号の下から外へ歩をすすめた。ルイスは携帯レーザーを手にしていた。〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉はスレイヴァー式の武器をかかえている。その歩みにともなって、筋肉が液体のようになめらかに動くのが、半インチほどの長さに生えそろったオレンジ色の毛をとおして、はっきりと見えた。ネサスは、見たところ、なんの武器もたずさえていない。タスプを持って、しんがりをつとめる気のようだ。

それと並んで〈探す人（シーカー）〉が、黒い鉄の剣をかまえながら歩く。その、見るからに固そうな、大きな素足。黄色い腰布のほかは、全身が鋼鉄のような裸体だ。筋肉が、まるでクジン人のそれのように、隆々と波うっているのがみえる。

ティーラは、武器を持ってきていない。

このふたりは、その朝おこなわれた売買契約がなかったら、インプロバブル号に残って待っていたはずだった。責任は、ネサスにある。ルイスは、剣士の〈探す人（シーカー）〉にティーラ・ブラウンを売りわたすとき、パペッティア人に通訳をやらせたのだ。

〈探す人（シーカー）〉は重々しくうなずき、代償として、リングワールドの長命薬の、五十年分にあたるカプセル一個を支払った。

「喜んで頂戴するよ」と、ルイスは答えた。りっぱな贈りものだったが、口にいれるつもりはなかった。当然ながら、ルイス・ウーのように百七十年間も細胞賦活剤（ブースタースパイス）を服用しているものに対しては、なんの実験もおこなわれていない薬品なのだから。

そのあと、ネサスが共通語(インターワールド)で説明してくれたところによると、「ルイス、わたしは、彼を侮辱したくなかったし、ティーラを安売りしたと思われたくなかったのです。それで、値段をせりあげました。彼はティーラを手にいれ、あなたはいずれもし地球へ帰れたら分析できるカプセルを手にしています。それで、あと、わたしたちがシャドウ・スクェアの糸を手にいれるまで、敵となりうるあらゆるものからあなたを守るという条件をつけ加えました」

「あの四フィートの肉切り包丁で、ぼくを守るんだと？」

「彼を喜ばせたかっただけです、ルイス」

そしてむろんティーラは、彼といっしょにきたがった。ほかならぬ彼女の男が、危地におもむくのだから。いまルイスは、パペッティア人はそれも計算にいれていたのではないかと疑いはじめていた。なにしろティーラは、ネサス自身が手塩にかけた、幸運の血統の持ち主なのだ……。

嵐の〈目〉が近いので、このあたりの空はいつもずっしりと曇っている。灰色をした正午の陽ざしの中を、一同は十階建てほどの高さに立ちはだかる黒い雲の障壁に向かって、規則ただしい足どりで街路上を進んでいった。

「さわるなよ」とルイス。この前きたとき、僧侶のいっていたことを思いだしたからだ。そのシャドウ・スクェアの糸をひろいあげようとして、指を落とした娘がいるという。

すぐそばまで近づいてみても、それは依然として黒い雲のようにしか見えなかった。それをとおして、廃墟の中の、窓のある密集した家屋や、もしここが人間の住む土地だったら百貨店に相当するような、低めのガラス張りの建物などが見えた。それらが、まるで、どこかで火事が起こってでもいるかのように、煙のような雲にすっかりつつまれているのである。

黒い繊維を見分けるには、目を一インチくらいまで近づけなければならない。しかし、そうするとたちまち涙が出てきて、何も見えなくなってしまう。糸は、じっさい目に見えないほど細いのだった。見れば見るほど、シンクレア単原子繊維によく似ている。そして、シンクレア単原子繊維は、危険なのだ。

「スレイヴァー式の武器を使ってみろ」とルイス。「それで切れるかどうかためすんだ、〈話し手〉」

黒雲の中に、一条の光芒が走った。

おそらくは、それが冒瀆を意味したのだろう。あなたがたは光を武器とされるのか？ しかし原住民側は、もうずっと前から、この異端者どもを撲滅せんものと手ぐすねひいていたのにちがいない。うず高い糸の雲の中で光がひらめくと同時に、四方からくるったような怒号がまき起こった。近くの建物からあふれだしてくる、色とりどりの毛布をまとった人びと……叫び声をあげ、手に手にふりかざしているのは、剣か、棍棒か？

飛んで火に入る夏の虫だ、とルイスは思った。携帯レーザーをつけ、高出力にしたビームを細くしぼる。

レーザーによる光の刃は、あらゆる世界で使われてきた武器だ。ルイスがその訓練をうけたのは百年も前のことで、それを生かすはずの戦いは、結局起こらずじまいだった。が、その使いかたは、簡単すぎて、忘れようとしても忘れられるものではなかった。

スウィングをおそくするほど、切りこみは深くなる。

が、ルイスはそのビームで、すばやく大きく横に薙ぎはらった。押しよせた群集が、いっせい

に両手で腹をおさえてよろめいた。が、その金色の毛に被われた顔の表情からは、何も読みとれない。大ぜいの敵に対しては、すばやくスウィングせよ。多くの敵に、深さ半インチほどの傷を負わせ、まず、ひるませることだ！

ルイスはこの敵に哀れみを感じた。剣と棍棒を持った狂信者たち。彼らに、勝利の見こみはまったくない。

が、このとき敵のひとりが、〈話し手〉の武器を持った腕に切りつけ、傷を負わせた。〈話し手〉は、スレイヴァー式の武器をとり落とした。べつのひとりがそれをひったくって、うしろへ投げたが、同時に〈話し手〉が、無傷なほうの手で一撃し、そいつは背骨を引き裂かれて死んだ。三人めが、投げられた武器をうけとめると、身をひるがえして逃げだした。それを使おうとはせず、単に持って逃げたのだ。ルイスも、そいつをレーザーで倒すことができなかった。大ぜいが、彼を殺そうと押しよせてきていたからだ。

つねに胴体をねらってスウィングせよ。

ルイスはまだ、ひとりも殺していなかった。が、いまや敵にひるみが見え、余裕ができたのを知って、いちばん近くにいたふたりの相手を殺した。とにかく敵を近づけないことだ。

ほかのものはどうしているだろう？

〈獣への話し手〉は、素手で戦っていた。いいほうの手の、むきだしした爪で相手を引き裂き、繃帯したほうの手は、そのまま錘りをつめた棍棒と同じだ。うしろからの剣先を危うくかわすと、そいつにつかみかかる。周囲をかこまれていたが、原住民はそれ以上近づけなかった。八フィートの背たけと、とがった歯をもった彼は、異星の死神さながらだ。

〈探す人〉は窮地に立ちながらも、よく黒色の剣をふるっていた。その前には三人の敵が倒れ、血のしたたる剣を見ては、他のものも容易に近づけない。〈探す人〉はすばらしい剣の遣い手だった。原住民も、剣のことは知っている。うしろに立ったティーラは、一応闘いの輪の中で安全だったが、憂わしげな表情は、みごとなヒロインといったところだ。

ネサスは、インプロバブル号へ向けて、いっさんに走っていた。片方の頭を低く前へつきだし、もういっぽうの頭を高くあげている。低いほうの頭で足もとを見まわし、高いほうの頭は遠くを見わたしているのだ。

ルイスはまだ無傷で、目につく敵をひとりひとり撃ち倒し、できるだけ他のものを援護しようとつとめていた。手のうちの携帯レーザーは、思うがままに、死の杖のような緑色のビームをふりまわす。

鏡面に向けてはならない。反射性の甲冑は、レーザーの使い手にとって、始末のわるい相手である。ここの連中は、どうやらその戦法を知らないらしい。

緑の毛布を身にまとったひとりの男が、ルイス・ウーにいどんできた。おめきたてながら、重いハンマーを、せいいっぱいおそろしげにふりまわしている。ふたつ目玉の金色のたんぽぽだ……

……ルイスはレーザーで、かるく薙いだ。が、相手はなおも突進してくる。

ルイスは脅えあがり、棒立ちになったまま、ビームをまっすぐこの相手に当てつづけた。あわやルイスの頭も砕け散るかとみえたとき、相手の腹の一点がこげて黒ずみ、緑の炎がひらめいた。

胸を射ちぬかれて、男は横ざまに倒れた。

レーザー光と同色の着衣には反射性の甲冑と似た効果があるので注意せよ。こんなことは、こ

れ以上もうたくさんだ！　ルイスは緑のビームを、男のうなじに当てて、とどめをさした……。
ひとりの原住民が、ネサスの退路をはばんでいる。こういうおそろしげな怪物に立ち向かうとは、よほど勇敢なやつにちがいない。ルイスの一発はきまらなかったが、どのみちそいつは死ぬ運命だった。ネサスがくるりと背を向けざまに蹴りあげ、一回転して、また走りつづける。そのとき——。
ルイスはその瞬間を、はっきりと見とどけた。パペッティア人が、二本の頸を上下二段にかまえて、十字路にさしかかる。その、上にのばしたほうの頸が、とつぜんすぱりと切れてころがったのだ。ネサスは足をとめてふりかえり、それきり立ったまま動かない。
木の切り株のようにたいらな、その頸の切断面から、ルイスのと同じまっかな血が、奔流のように噴きあがった。
ネサスが高い苦しげなうなり声を、あたりにひびかせた。
原住民が、シャドウ・スクェアの糸を使って、彼を罠にかけたのである。
ルイスは二百歳。友人を失うのは、これがはじめてではない。彼は戦いをつづけ、その光の刃は、ほとんど反射的に、目にとまる相手をつぎつぎに切りさいていった。かわいそうなネサス。だがこのつぎは、彼自身の番かもしれないのだ……。
原住民が潮のように退いていった。彼らの目から見て、損害が大きすぎると判断したのだろう。
ティーラは目を大きく見ひらき、こぶしを歯に押しあてて、瀕死のパペッティア人を見つめている。
ちょっと待て。〈話し手〉と〈探す人〉が、インプロバブル号のほうへ、じりじりと後退をはじめた——。
まだあきらめるのは早い！

ルイスは、パペッティア人に向かってかけよった。〈話し手(スピーカー)〉が、横をかけぬける彼の手から、携帯レーザーをひったくった。ルイスは、糸の罠をさけるため身をかがめながら、いきなり肩をぶつけるようにしてネサスを押し倒した。パペッティア人が、パニックにかられて、いまにもかけだそうとしているかのように見えたからである。

押さえつけて、片手でベルトをさぐった。

ベルトがない。

腰にまいていたはずなのに！

そのときティーラが、自分のスカーフを手わたしてくれた！

ルイスはそれをひったくると、輪にして、パペッティア人の切り株のようになった頸にはめた。もうひとつの頭が、恐怖にかられたように、切り口の頸動脈から噴き出す血を見つめている。それから目をあげて、ルイスの顔を見つめ、目を閉じると、ぐったりとなった。

ルイスは結び目をぐいと引いた。ティーラのスカーフは、ぎゅっと締めつけ、一本しかない頸動脈、二本の大静脈、気管、食道、その他ぜんぶいっしょに塞ぎとめてしまった。

止血帯で首を締めてしまっていいんですか、先生？　それでもとにかく、出血だけは止まったわけだ。

ルイスは身をかがめて、パペッティア人を肩にひっかつぐと、こわれた警察署の建物が落とす影に向かってかけだした。その前を、〈探す人(シーカー)〉が守って走る。かまえた黒い剣の先端が、敵の姿をもとめて、ぴりぴりと小さな円を描く。武器を持った原住民は、それを見ていたが、あえて挑戦しようとはしなかった。

ティーラが、ルイスのあとにつづいた。〈獣への話し手（スピーカー・トゥ・アニマルズ）〉が、最後に、誰かかくれていそうなところへ携帯レーザーの緑の光芒をばらまきながら到着した。タラップのところで、クジン人は足をとめ、ティーラが安全に上へあがるまで待って、それから——さっとどこかへかけ去ったのを、ルイスはちらりと目にとめた。

なんのために、そんなことを？

たしかめているひまはなかった。ルイスは階段をかけあがった。ブリッジへたどりついたときには、パペッティア人の体重が、信じられぬほどの重さに感じられた。床に埋めこまれたフライサイクルのそばに、ネサスをおろすと、彼は応急医療セットに手をのばし、診断プレートをひっぱりだして、パペッティア人の頸の、止血帯のすぐ下に押しあてた。医療セットは、サイクルと臍の緒のようなものでつながっており、それはルイスが推測したとおり、彼のよりもはるかに複雑な仕掛けになっていた。

すぐに調理機のダイアルが、自動的にセッティングを変えた。数秒後、ダッシュボードから、一本の細い管が蛇のようにのびて、パペッティア人の頸に達すると、その皮膚の上をまさぐり、正確に位置をさだめて、中へもぐりこんでいった。

ルイスは思わず胴ぶるいした。しかし——これは静脈を通した栄養補給なのだ。ネサスはまだ生きているのにちがいない。

彼がそれと気づかぬうちに、インプロバブル号は、空中に浮かんでいた。〈話し手（スピーカー）〉は、タラップのすぐ上の階段に腰をおろし、〈天国〉という名の城を見おろしていた。両手で何かを大事

そうにしっかりと掴んでいる。
　彼がたずねた。「パペッティア人は死んだのか？」
「いや。しかしひどい出血だよ」ルイスは、クジン人のそばにすわりこんだ。骨の髄まで疲れはて、がっくり気落ちしていた。「パペッティア人は、ショック死することがあるだろうか？」
「どうしてそのようなことが、おれにわかる？　ショックというのが、だいたい奇妙な反応だ。おまえたち人間を拷問にかけると、すぐ死んでしまうのはどういうわけか、それを知るのに、何百年もかかったぞ」クジン人はどうやらべつのことに心をうばわれているようだ。が、またたずねた。「これも、〈ティーラ・ブラウンの幸運〉のひとつかね？」
「だろうな」とルイス。
「なぜだ？　なぜ、パペッティア人の負傷が、ティーラの役に立つ？」
「ぼくの目をとおしてみなけりゃ、わからないことだろうな」ルイスは答えた。「はじめて会ったとき、彼女はひどくかたよった性格の持ち主だった。そう、なんといえばいいか……」
　ことばとともに記憶がもどってきて、彼はつづけた。「女の子がひとりいた。ただの話だと思ってくれ。相手の男は中年で、とてもすねたやつで、彼女にまつわる神秘の陰影ゆえに彼女を求めた。
　彼女を手に入れたあとになっても、その神秘さがほんものなのかどうか、確信がなかった。が、そのうち彼女が、うしろを見せて去るときがきた。このときはじめて男は、彼女のうしろ側がからっぽだったことを知った。彼女は、少女のかたちをしたマスクだった。顔だけじゃなく、からだ全体の前面をかたどった、ゴムのマスクだったんだな。〈話し手〉、この娘は、傷つくことが

ない。それがこの男を惹きつけたのだ。彼の人生において、女というのは、いつも傷つき、彼はそれを自分のことのように感じ、ついにはもうそれに堪えられなくなっていたからだ」

「なんのことかわからんぞ、ルイス」

「ティーラは、ここへやってきたとき、ちょうどそのマスクみたいなものだった。これまで傷ついたことが一度もなかったんだ。その性格は、人間とはいえなかった」

「それが、なぜいかんのだ?」

「なぜって、彼女が、ほかでもない、人間だからさ。ネサスが彼女を、何かべつのものにつくりかえてしまうまではね。カホなやつめ! あいつのやったことがわかるか? やつは、自分のかたち、自分を理想化したイメージに、神を創造し、そして、あのティーラ・ブラウンを手にいれたんだ。

彼女こそ、パペッティア人がそうありたいと願う理想像だった。彼女は傷つくということがない。不愉快な目にあうことすらない。それが彼女にとって、プラスになるものでないかぎりは。それが、彼女がここへやってきた理由なのさ。リングワールドこそは、彼女にとって、理想の地だった。それは彼女に、一人前の人格を付与するための、一連の経験をさせる場所だったんだ。出産権抽籤のせいで、彼女みたいのがかなり生まれているんじゃないかという気がするよ。同じような幸運の持ち主だ。みんな、ライヤー号に乗ってくる資格はあったが、ただ、ティーラは、その誰よりも幸運だったというわけだ。

で……いま地球には、何十人も、ティーラ・ブラウンみたいなのが残ってるんだ! 彼らが自分の能力に目ざめたとき、未来はなんとも奇妙なものになってくるだろうな。ぼくら、残りのも

のは、早くそれから逃げだす算段をしなくちゃなるまい」
〈話し手〉がたずねる。「草食いの頭の件は、どうなったのだ？」
「彼女には、他人の苦しみがわからない」と、ルイス。「たぶん彼女は、親しい友が傷をうけるのを、目のあたりにする必要があったんだ。それがネサスにどうひびこうと、〈ティーラの幸運〉てやつは、おかまいなしなのさ。
あの止血帯をどう思う？　ティーラが、ぼくのほしいものを察して、その役に立つものを見つけてくれたんだ。おそらく彼女が、危急にさいして正しく対処したのは、あれが生まれてはじめてのことだったろうよ」
「どうして彼女に、そういうことを学ぶ必要があるのだ？　自分の幸運で、どんな危急の場合からも守られているというのに」
「彼女は、危急の場合に自分が役に立つなどとは、思ってもいなかった。そういう自信を身につけるきっかけがなかったんだ。ともかく、あのときまではそうだった」
「正直なところ、おれにはまったくわからんぞ」
「自己の限界を知るということは、進歩の一部だ。ティーラは、何か現実の危急に直面しないかぎり、成長して、おとなになることができなかったんだよ」
「じつに人間的な問題のようだな」と、〈話し手〉はいった。
それはつまり、完全にわけがわからないという意味だろうと、ルイスは解釈した。無理に答える必要もなさそうだった。
クジン人は、つけ加えた。「このインプロバブル号を、原住民が〈天国〉とよぶあの城より高

く駐めたのがまずかったかな？　彼らはそれを、冒瀆ととったかもしれん。しかし、〈ティーラ・ブラウンの幸運〉というやつが、すべてをあやつっていたとすると、そう思わせたことも役に立ったということになるな」

　クジン人がしっかりかかえこんでいるものを、ルイスはまだ見ていなかった。「ネサスの頭をとりにいったのかい？　だとしたら、時間の無駄だったな。そいつを冷凍するのは、もう間に合わないぜ」

「ちがうな、ルイス」〈話し手〉が出してみせたのは、こぶしくらいの大きさの、子供の独楽のようなかたちのものだった。「手を出すな。指が切れるぞ」

「指が？　ほう、これは」その涙滴形をした先端は、徐々に細く、針のようにとがっている。その針の先が、シャドウ・スクェアをつなぐ黒い糸につながっているのだ。

〈話し手〉は語をついだ。「原住民が、この糸を使いこなしたことは、さっき見たとおりだ。そうして、ネサスを罠にかけたのだ。そこでおれは、いったいどうやったのかと、それを見にもどった。

　彼らは要するに、糸の端をひとつ見つけだしたのだ。この糸の反対側の端は、たぶん糸のままだろう。つまり、ライヤー号がぶつかったとき、糸はそこで切れたが、こっちの端は、シャドウ・スクェアのソケットからはずれたのだ。こういう端がひとつ手にはいっただけでも、幸運というものだ」

「まったくそのとおりだ。そいつを持って、あとは引きずっていけばいい。ぼくらがいけないようなところでも、そいつはからまる心配がないからね」

「これからどこへいくのだ、ルイス？」
「右舷だ。ライヤー号へもどるのさ」
「当然だな、ルイス。まずネサスを、ライヤー号の医療施設にいれなければならん。で、それからどうするのだ？」
「いってみなきゃね」

涙滴形の握りを〈話し手〉にしっかり持たせておいて、彼は、例の電流硬化性プラスティックの残りをとりにいった。ふた摑みほどの材料で、握りを壁にくっつけた――が、電流を流す方法がない。スレイヴァー式の武器でも役に立ったはずだが、それはなくなってしまった。考えあぐねたすえ、ようやくルイスは、自分の持っているライターのバッテリーが、そのくらいのプラスティックを硬化させるには充分な電流を流せることに気づいた。

涙滴形の糸のついた端だけが壁から突きだし、左舷の方を向くようにとりつけた。

「ブリッジは、今、右舷に向いていたはずだ」と〈話し手〉。「もしちがっていたら、つけなおさなければならんぞ。糸はうしろに引きずっていかなければならんのだから」

「これでいいはずだよ」とルイス。自信はまったくない……が、糸をそっくり引きこんで運ぶわけにはいかないのだ。このまま引きずっていくはかはない。まさか、この糸で切れないものにひっかかるなどという心配はないだろう。

ふたりはティーラと〈探す人〉をエンジンルームで見つけだした。そこではブリルが浮揚モー

ターを作動させているところだった。

「あたしたち、お別れするわ」ティーラが、ぶっきらぼうな口調でいった。「このひとが、あのお城にぴったりつけてくれるって。そうすれば、窓からまっすぐあっちの会食ホールへはいれるでしょ」

「それからどうする？　城の浮揚モーターが動かせなかったら、そのまま漂流しだぜ」

「〈探す人〉にはいささか魔法の心得があるのよ。きっと彼が動かしてくれるわ」

ルイスはもう、彼女を説得してやめさせようとは思わなかった。ティーラにさからうのは、まるで怒れるバンダースナッチを素手でくいとめようとするようなものだ。あきらめて、彼はいった。「操縦がうまくいかなかったら、でたらめに押したり引いたりしてみることだね」

「わかってる」彼女は微笑を見せた。ついで、ひどくまじめな顔になると、「ネサスの面倒を見てやってね」

二十分後、〈探す人〉とティーラが、インプロバブル号を離れたときも、それ以上何も別れのことばはなかった。ルイスも、いろいろといいたいことはあったが、結局口にはださなかった。彼女の能力について、これ以上何かいえるだろう？　彼女は幸運が生命を保証してくれるあいだに、試行錯誤をかさねながらそれを学んでいかなければならないのだ。

つづく数時間のあいだに、パペッティア人のからだは、まるで死んだようにつめたくなった。応急医療セットの各ライトだけが、意味はわからないが、いそがしく明滅をつづけている。おそらくパペッティア人の生命活動は、ある種の一時休止状態にはいったものと思われた。

インプロバブル号が右舷方向へ向かって進みだすと、シャドウ・スクエアの糸も、ぴんと張ったりゆるんだりをくりかえしながら、引きずられてきた。あとにした都市の中では、その糸のせいで、いくつもの建物が切りきざまれ、崩壊をつづけていることだろう。が、プラスティックで埋めこまれた握りは、無事にその場におさまっていた。

どこまで遠ざかっても、浮き城のある都市の姿が、地平線の向こうにかくれるということはない。数日にわたって、それはどこまでも小さくなっていき、かたちがぼやけ、そしてついに見えなくなった。

プリルはネサスのそばにすわりこんでいた。どうすることもできないのだが、そこを離れたがらないのだ。心の中の苦しみが、はっきりとおもてに出ている。

「彼女をなんとかしてやらなきゃ」とルイス。「タスプ中毒になりかけていたところへ、それがなくなっちまったんで、禁断症状に陥ってるんだ。自殺するか、さもなければ、ネサスやぼくを殺そうとするかもしれない！」

「ルイス、そういうことを、おれに相談しても、意味はないぞ」

「そうだな。なんにもならない」

人間の心の悩みを救うには、きき上手を演じてやらなければならない。なんとかやってみようとしたものの、ルイスの会話力はまだ不充分だし、プリルも黙りこくって口をひらこうとはしなかった。ひとりでいるときは歯ぎしりしながらも、プリルの前に出ると、彼は必死で演技をつづけた。

彼女はいつも、彼の目の前にいた。ずっと彼女をさけていられたら、良心のうずきも癒えたか

もしれないが、彼女はブリッジから立ち去ろうとしないのだ。

徐々に彼は、ことばを覚え、それにつれて徐々に、ブリルの口もほぐれはじめた。彼は彼女に、ティーラのこと、ネサスのこと、そして、神様ごっこのことを話してやろうとつとめた――。

「わたし、自分が神様だと思っていた」と彼女はいった。「本当なの。どうしてそう思っていたのでしょう？　わたしがリングワールドをつくったわけでもないのに。それは、わたしよりもずっと古いのに」

ブリルもまた学びつつあった。彼女の話すことばは、はるかに古代に滅びた言語から単語だけをとって簡略化したものだった。時制がふたつしかなく、事実上の修飾語句もなく、発音による強勢もない。

「まわりのものがそう思わせたんだ」とルイス。

「でも、わかっていたのに」

「誰でも、神様にはなりたい」責任をとる必要のない権力の座につきたいということだ。が、ルイスにはそれだけの語彙がなかった。

「そこへ、彼が現れた。ふたつの頭の。彼は機械を持っていたの？」

「タスプという機械だ」

「タスプ」彼女は、慎重な口調でいった。「それでわかったの。タスプを持っていれば神様。タスプをなくしたら、神様じゃない。あの、ふたつ頭は、死んだの？」

いわくいいがたしというところだ。「死なんて小馬鹿にしてたのに」とルイス。

「頸を切られるなんて、間抜けね」ブリルがいった。ジョークだ。彼女は冗談をいおうとしたの

だ。

ようやく、ほかのことに興味を示しはじめていた。セックスや、会話の練習や、それに、窓の外のリングワールドの眺めなどにも。そこはもう、ぽつぽつとひまわり花の現れはじめる地域だった。プリルはまだそれを見たことがない。その植物がやっきになって光をあびせてくるのを避けるために、一フィートほどのを一本掘りおこして、建物の屋根に移し植えた。やがてもっとずっと濃い群落の現れる前に、針路を大きく曲げて回転方向へ向かった。

食糧が尽きるころ、プリルはもうパペッティア人には目もくれなくなっていた。ルイスは彼女の全快を、〈話し手〉に告げた。

〈話し手〉とプリルが組んで、つぎの原住民集落で、神様ごっこを演じることになった。上に残ったルイスは、〈話し手〉がうまくやりおおせてくれることを念じながら待っていた。頭を剃りあげて仲間に加われたらと思うと、いらだたしい気分だった。しかし、いまの彼は、侍祭になる資格がまったくない。何日も練習したのだが、まだことばがほとんどだめなのだ。

捧げものをうけて、ふたりはもどってきた。食糧である。

数日が数週となるあいだに、彼らはそれを何度かくりかえした。みごとな手なみだった。〈話し手〉の毛皮も前よりはのび、ふたたびオレンジ色の豹、〝一種の軍神〟にふさわしい外見がもどってきつつあった。ルイスの忠告に従って、彼は両耳をいつもぴったりと頭に貼りつけているようにした。

神の役をつとめることが、〈話し手〉に奇妙な影響を及ぼしているようだった。ある夜、彼はルイスにいった。

「神のふりをすることはなんでもないが、立派な神を演じようとすると、いささか重荷だな」
「どういうことだい？」
「彼らはやたらに質問をするのだ、ルイス。女どもはプリルに質問し、彼女はそれに答えている。だいたいが、おれには、質問の内容もその答えもわからんようなしろものだ。男どももプリルに質問すればいい。プリルは人間で、おれはそうではないのだからな。ところが、やつらはおれに質問してくる。このおれにだ！　なぜやつらは、自分たちの問題を、異星人のところへ持ちこむのだ？」
「あんたが男だからさ。神というのは、一種のシンボルなんだよ。たとえ実在する神でもね」とルイス。「あんたは、男性を象徴する存在なのさ」
「こっけいな話だ。おれには、おまえが持っているような、むきだしの生殖器もないのだぞ」
「あんたの図体がでかくて、印象的で、いかにもおそろしく見えるからさ。それだけで、自動的に、男性のシンボルってことになっちまうんだ。それが消えたら、あんたの神性も消え失せると思うね」
「集音機があって、おれに答えられないおかしな質問には、おまえが答えてくれるといいのだがな」
ここでプリルが、ふたりを驚かせた。インプロバブル号は、元来が警察署である。その倉庫の一室から、プリルは警察用の交信機をひっぱりだしてきたのだ。この建物の電源につないで使うようになっている。整備してみると、六個あったうちの二個が、また動くようになった。
「きみは思ったよりしっかりしてるんだな」ルイスはその夜、プリルにいった。それから、ちょ

っと迷ったが、うまいいいまわしを考えるには、まだ会話力不足だ。「宇宙船のセックスメイトにしておくのは惜しい」

プリルは笑った。「馬鹿な人！　あなたの船も、わたしたちのに負けないくらい早いって、自分でいっていたわね」

「そうだ。光よりも速い」

彼女はまた笑った。「それはつくり話ね。理論上、ありえないことだわ」

「たぶん、きみたちのとはべつの理論で動くんだよ」

彼女はちょっとたじろいだようだ。無表情な顔よりも、からだの筋肉の無意識な動きから、その気持を読みとることを、彼はすでに覚えていた。が、彼女は答えた。「往き来に何年もかかる船では、たいくつが最大の敵。だからそれをまぎらす方法にも、いろいろあるの。船のセックスメイトには、心とからだと両方の薬の知識のほかにも、大ぜいの男に愛される人柄と、それに、高度の会話能力が必要なのよ。事故の原因をつくらないように、船の機能のことも、ある程度知っていなければいけない。健康でなければいけない。資格規定によって、楽器の演奏ができなければいけない」

ルイスは、思わずぽかんと口をあけた。プリルは音楽的な笑い声をたてて、彼のからだに、あちこちと触れはじめた……。

交信システムは、イア・ピースが人間用で、クジン人の耳に合わないのが難だったが、それでも充分役に立った。ルイスは、軍神（いくさがみ）の後見役をつとめているうち、アドリブの能力を身につけた。

もっとも、何か失敗をやっても、インプロバブル号の速度は、リングワールド上でそのニュースの伝わる速さの最大値よりも速いのだからと、自分にいいきかせればすんだ。一回ごとが最初の接触に当たるのだった。

一ヵ月が過ぎた。

土地が徐々にのぼりになり、少しずつ荒地が目立つようになった。陽光の中に〈神の拳〉が浮かびあがり、日ごとにそれが大きさを増してくる。ルイスの思考の中に、それはもう当然のことのように根をおろしていた。が、これから起こることについて確信が得られるまでには、なお時日がかかるのだ。

ある日なか、彼はプリルをつかまえた。「きみに教えておきたいことがある。きみは、誘導電流について、知ってるかい？」それについて、彼は説明した。

それから、「脳の中にわずかな電流を流すだけで、喜びも苦しみも直接つくりだしてやれるんだ」彼は、そのしくみを説明した。

そして最後に、「これが、タスプの作用の原理だ」

ぜんぶ説明するのに、二十分ほどかかった。プリルがたずねた。「彼がその機械を持ってたことはわたしも知ってる。なぜ、いまそんなことを話すの？」

「ぼくらは文明を離れようとしている。このあとは、宇宙船へいきつくまで、もう村もあまりないだろうし、食糧源も少ないだろう。それで、きみの決心がきまる前に、タスプのことを知っておいてほしかったんだ」

「決心って？」

「つぎの村で、きみを降ろそうか？　それとも、いっしょにライヤー号まできて、それからインプロバブル号で引っかえすかい？　そこでなら、食糧も持たせてあげられるが」

「ライヤー号に、わたしの乗る余裕はあるはずね」たしかめるように、彼女はいった。

「もちろんだよ。しかし――」

「もう野蛮人はたくさん。文明のあるところへいきたいわ」

「ぼくらの風習を覚えるのもたいへんだぜ。一例をあげると、彼らはぼくのように、髪を生やしてるんだ」ルイスの髪は、頭全体に長く濃くのびている。弁髪はもう切りおとしていた。「きみはかつらをつけなきゃならないだろう」

プリルは顔をしかめた。「なんとか慣れるわ」それから、はじかれたように笑いだした。「わたしをおいて、ひとりで帰れるつもりなの？　あの大きなオレンジ色のに、女のかわりはつとまらないわ」

「いつでもその論法でしてやられるんだ」

「あなたの世界でも、わたしは役に立つはずよ、ルイス。あなたの仲間は、セックスについて、まったく無知なようだから」

そのことばの当否は一応棚上げにしておこうと、ルイスは慎重に心をきめた。

## 24　神の拳

進むにつれて土地は乾燥し、空気はうすくなっていった。近づくにつれて、〈神の拳〉は、遠くへ逃げていくかのように思われた。果実はもうなくなり、肉の供給も底をつきかけていた。ここはもう、〈神の拳〉自身の裾野をなす荒地の一部、かつてルイスが地球の表面より大きいだろうと見つもった砂漠のただなかだった。

インプロバブル号の周囲を、風が音をたてて吹きすぎていく。すでに船は、この巨大な山のほとんどまっすぐ回転方向側に達していた。〈アーチ〉は青く、くっきりと空に浮かび、星々はかたく空にはりついたように輝いている。

正面の大きな張り出し窓から、〈話し手〉が上を見あげた。「ルイス、ここから銀河の〈核〉をさがしあてられるか？」

「なんのために？　この星系の位置は、はっきりわかってるんだぜ」

「まあ、やってみろ」

ルイスは、この空のもとで過ごした数カ月のあいだに、いくつかの輝星を手がかりに、かなりゆがんではいるが、星座のかたちを見さだめていた。「あの方向だと思う。ちょうど〈アーチ〉のまうしろだ」

「そのとおりだ。銀河の〈核〉は、リングワールドの回転平面上に位置している」
「そういうことさ。だが――」
「リングワールドの構成物質が、中性微子（ニュートリノ）をさえぎることを忘れるなよ、ルイス。おそらくこの物質は、他の素粒子もさえぎるだろう」クジン人は明らかに、何かを示唆しているのだった。
「……そうか。リングワールドは、銀河の〈核〉の爆発にも安全なようにできてるんだな！　いつ、そのことに気づいた？」
「ついさっきだ。〈核〉の位置は、少し前からわかっていたが」
「散乱ってこともある。縁の外壁あたりは、かなりの放射能にさらされるだろう」
「しかし、放射波の前線が押しよせるときには、〈ティーラ・ブラウンの幸運〉が、彼女を外壁付近から遠ざけておくだろう」
「二万年さきのことだぜ……」ルイスは凝然となった。「おっそろしい話だ！　どうしてそんなことを心配するんだ？」
「病気や死は、すべて不運の一種だ。現在の仮定から推すかぎり、ティーラ・ブラウンは永遠に生きつづけるだろう」
「しかし……いや、なるほど。彼女は自分でそんな心配をする必要もないんだったな。とにかくわれわれみんなを、人形みたいにあやつっているのが、彼女の〈幸運〉というしろものなんだから……」
ネサスが室温をたもつ屍体となって、もう二カ月が過ぎている。腐る気配はなかった。応急医

療セットのランプは点いたままで、ときおりその光の調子には変化すらみとめられた。それが、彼が生きていることの、唯一のしるしであった。

　そのパペッティア人を、ルイスはじっと見つめていた。やがて、かねて気になっていたふたつの考えの接点が、見つかったような気がした。「〃人形師(パペッティア)〃か」と、彼は静かにつぶやいた。

「なんだ、ルイス？」

「パペッティア人って名前は、周囲の種族を人形みたいにあやつるところから、ついたものじゃないかという気がするんだ。彼らは、人間とクジン人を、まるであやつり人形みたいに扱った。そのことは否定しようのない事実だ」

「しかし、〈ティーラの幸運〉にとっては、ネサスのほうが人形だったな」

「結局、われわれみんな、いろんなレベルで、神様ごっこをやっているということさ」このやりとりは、ブリルにも三分の一くらいはわかるはずだ。そのほうへルイスはうなずいてみせた。「ブリルもぼくもきみもだ。どんな気分だい、〈話し手(スピーカー)〉？　きみは神様として、いいほうだったか、悪いほうだったか？」

「おれには知りようがない。人間のことは、ずいぶん研究したつもりだが、なにぶん自分の種族のようなわけにはいかん。一度、原住民同士の戦争をやめさせたことは、おまえもおぼえているだろう。両方の側に、戦えば負けると思わせたのだ。三週間ほど前のことだったな」

「ああ。それはぼくの発案だった」

「そのとおりだ」

「ところで、あんたはこれからまた、神様の役をつとめなきゃならないだろう。それも、クジン

人に対してだぜ」とルイス。

「どういうことかわからんな」

「ネサスをはじめとするパペッティア人は、人間とクジン人の品種改良計画をすすめてきた。自然淘汰の効果が、おとなしいクジン人に有利に働くような環境を、わざとこしらえたわけだ。そうだね？」

「そうだ」

「もし、あんたたちの長老がそのことを知ったら、どうなるだろう？」

「戦争だな」とクジン人。「重装備の艦隊が、二年間の航程を踏破して、パペッティア人の惑星に襲いかかるだろう。たぶん人間も、合流するだろうな。パペッティア人は、当然おまえの種族をも、同じくらいひどく侮辱したのだから」

「そのとおりだ。それで？」

「草食いの手で、わが種族は、赤ん坊にいたるまで殲滅しつくされる結果になるだろう。ルイス、おれは、星間種子誘引機（スターシード・ルーア）や、パペッティア人の品種改良計画にまつわることは、誰にもいっさい洩らさぬつもりだ。おまえも沈黙を守るようにしてくれるか？」

「もちろんだとも」

「それがつまり、おまえのいう、わが種族に対して神になれということか？」

「そうだ。だが、もうひとつある」とルイス。「ロングショット号のことだ。あんたは、まだあれをひとり占めする気か？」

「たぶんな」クジン人は答えた。

「無理だと思うよ」とルイス。「しかし、もしそれが成功したとしよう。そうしたら、どうなる？」

「そうしたら、わが長老は、量子第二段階ハイパードライヴを手にすることになる」

「それで？」

何か重大な決定がおこなわれつつある局面を、ブリルも感づいたらしい。まるで、喧嘩になったらすぐ仲裁にはいろうとでもするようなかまえで、ふたりの様子を見つめている。

「まもなくわが種族は、一光年を一分と四分の一で飛ぶ軍艦の建造にかかるだろう。それによって、われわれはノウンスペースを撃ち従え、手のとどくかぎりの種族を奴隷化することができる」

「それで、そのあとは？」

「それで終わりだ。それこそわが種族の目標だったのだからな、ルイス」

「いいや。あんたたちは、さらに征服をつづけるだろう。あれほどの性能をもった駆動装置があれば、あんたたちは、あらゆる方向に進出し、見つかるかぎりの世界を支配しようとするはずだ。結局は版図をひろげすぎて、その維持ができなくなる……おまけに、そこまでひろがっていくうちには、きっと、ほんとうの意味で危険な相手に出くわすだろう。パペッティア人の船隊。最盛期にあるべつのリングワールド。成長途上にある第二のスレイヴァー種族。手を持ったバンダースナッチに足のあるグロッグに銃をもったクダトリノ人」

「おそろしいことを考えるものだな」

「リングワールドのひとつは、現にここにある。パペッティア惑星も見てきたな。あの駆動装置

で到達できる範囲には、まだ同じようなものがどれだけあるかわからないんだぜ」

クジン人はだまりこんだ。

「まあ、時間をかけて考えてみろ」とルイス。「ようく検討してみるんだ。どうせロングショット号をひとり占めすることは、できないだろうがね。どうしてもやろうとすれば、ぼくらを皆殺しにしなければなるまい」

つぎの日、インプロバブル号は、まっすぐにのびる墜落あとの溝に出会った。そこで、反回転（アンチスピン）方向（ワード）に向きを変える。その正面に、〈神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド）〉がそそり立っていた。

〈神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド）〉の巨大な山容は、いっこうに近づく気配もなく、ただどこまでも大きくなっていった。どんな小惑星よりも大きく、粗けずりな円錐形で、一見したところ頂上に雪をいただいたようなその姿は、徐々に、まるで悪夢のような大きさにまでふくれあがっていった。

「わけがわからないわ」プリルは、混乱し、とり乱していた。「こんな山があるなんて、知らなかった。どうして、こんなものをこしらえたのでしょう？　縁（リム）のほうには、このくらいの高さの山はあるけど、それは飾りつけ用だし、大気をとめておく役にも立っているのよ」

「思ったとおりだ」とルイス・ウー。しかし、それ以上は何も語ろうとしなかった。

その日のうちに、たどっている溝はいきどまりとなり、そこに小さなガラス壜のようなものが見えた。

ライヤー号は、残していったままの、摩擦のない面の上にひっくりかえった姿で、そこにあった。帰還のお祝いはあとのことだ、とルイスは心に思った。まだ故郷に帰りついたわけではない。

プリルが、インプロバブル号を近づけ、そのタラップからルイスが乗りうつれるようにした。エアロックの内外のドアを両方ともあけておく方法を見つけ、そのようにスイッチをいれると、かすかな音をたててたえまなく吹きだしてくる風にさからいながら、一同はネサスのからだをはこびこんだ。ネサスがいないと、船内気圧を下げておく方法がわからず、そのネサスは、どう見ても屍体としか思えない状態だった。

何はともあれ、そのからだを、自動医療装置にいれた。それは、パペッティア人と似たようなかたちの棺で、ネサスの大きさにぴったりだが、全体としては、ずいぶん大きなものだった。パペッティアの医学と技術のレベルから考えて、それはおそらくいかなる場合にも対応できるはずだ。が、頸が切れた場合の備えまでは、あるだろうか？

あった。その中には、予備の頭が二個と、さらに頸もついた頭がふたつ、その他、完全なパペッティア人が何人もつくれるくらいの内臓や身体各部の部品がそろっていたのだ。おそらく、ネサス自身の細胞から培養されたものだろう。頭についた顔は、どれもよく似ているように思われた。

プリルが乗りこんできて、あっというまに頭から船内へ墜落した。人間がこれほどびっくり仰天した姿を、ルイスはいままで見たことがなかった。彼女に人工重力のことを話しておく必要があることに、彼はまったく気づいてもいなかったのだ。ようやく起きあがったとき、その表情には、例によってなんの変化も見てとれなかったが、しかしその様子ときたら——。彼女は、畏怖のあまり、口もきけないありさまだった。

静かな帰還。だが、ふいにルイス・ウーは、感きわまったようにわめいた。

「コーヒーだあ！」それから、「熱いお湯だあ！」ティーラ・ブラウンと往路をともにした専用室へ、彼はとびこんでいった。一瞬後、彼は頭を出してよび立てた。「プリル！」

プリルがあとにつづいた。

コーヒーは彼女の好みに合わなかった。こんな苦いものを飲むなんて、気がくるってるんじゃないの、と、彼女は感じたままを口にだした。

シャワーは彼女にとって、忘れてしまうほど長いあいだ得られなかった贅沢だった。ルイスは使いかたを教えてやるだけで充分だった。

就寝プレートは、彼女を手におえないほど有頂天にさせた。

〈話し手（スピーカー）〉は、彼一流のやりかたで、その帰還を祝っていた。クジン人の専用室内で何が起こっているのか、ルイスにすべてがわかるわけではない。が、おそろしいいきおいで何かにかぶりついていることだけは、たしかだった。

「肉だ！」歓喜に堪えぬ声。「腐りかけた肉ばかりで、うんざりだったぞ」

「あんたがいま食ってるのは、人工の再製品なんだぜ」

「そうだ。しかし、殺したての味だ！」

その夜、プリルは、休憩室（ラウンジ）の長椅子で眠った。就寝フィールドは、彼女を大いに喜ばせたが、ただしそれは眠るためにではなかった。しかしルイスにとって、無重力で眠るのは、これが三カ月ぶりのことだった。

十時間も眠って目をさますと、彼は大車輪で働きだした。足もとの床ごしに、半欠けの太陽が

燃えていた。

ふたたびインプロバブル号にもどると、彼は携帯レーザーで、シャドウ・スクェアの糸の端の握りを、壁からはがした。はずれたその握りには、溶融したプラスティックが、まだくっついていた。

それを持ってライヤー号にかけもどるわけにはいかなかった。黒い糸はあまりにも危険だし、環(リング)の床面はあまりにもすべりやすいのだ。彼はその摩擦のない表面を、四つんばいになって、握りをうしろに引きずって進んだ。

〈話し手(スピーカー)〉が、エアロックから、黙ってそれを見つめている。

ルイスは、建物のタラップをたてかけて、船のエアロックにはいると、クジン人をずっとうしろにさがらせ、自分は船尾のほうへ向かった。〈話し手(スピーカー)〉は、まだじっと見まもっている。

ライヤー号の残骸の最後尾に近いところに、人間の腿ほどの大きさの開孔部がある。まだ翼がついていたとき、それに取りつけられた装置類へ通じる電纜(コンディット)がとおっていたものである。いまそれは、金属の蓋で閉じられていた。ルイスはその蓋をひらくと、引っぱってきた糸の端の握りを、そこから外へほうりだした。

それから船首へもどりながら、彼は調理機から出したジンクス製のソーセージを使って、糸の所在をたしかめ、その位置に黄色い塗料でところどころしるしをつけた。これで、ふつうなら見えない糸が、船内を走る黄色い点線として目にとまるようになった。

この糸がぴんと張ると、船内の装備は、当然切りさかれてしまう。黄色い点線の位置から推し

て、その場合も、生命維持システムの一部にふれるおそれがないことを、ルイスは確認した。が、塗料を使った目的はほかにもあった。これで全員が、指を切りおとされたり、それ以上の被害に遭わないよう、身を遠ざけておくことができる。

ルイスは、エアロックから外に出ると、〈話し手(スピーカー)〉が出てくるのを待って、外のドアを閉じた。〈話し手(スピーカー)〉が、このときたずねた。「こんなことをしてどうするのだ」

「もうすぐわかるよ」とルイス。彼は、ゼネラル・プロダクツ製の船体にそって後尾へいき、両手で糸の握りをつかむと、しずかに引いた。途中で、糸がぴんと張ったらしく、それ以上は引けなくなった。

そこでやおら渾身の力をこめて引っぱってみた。糸は微動だにしない。エアロックのドアが、がっちりおさえているのだ。

「これ以上は強度テストの方法がない。だいたい、エアロックのドアが、こいつをくわえこむほどぴったりしているかどうかもわからなかったし、ゼネラル・プロダクツの船体に傷がつかないですむかどうかも、自信がなかった。いや、自信がないことは、いまだって同じだ。しかし、そう、このためにここまできたのさ」

「つぎには何をする?」

「エアロックのドアをあける」そのとおりにしてから、「糸がライヤー号の中を自由にすべるようにしておいて、握りをインプロバブル号へ引っぱっていき、しかるべき場所にがっちり固定するんだ」そして、それもやりおえた。

シャドウ・スクェアをつないでいた糸の、反対の端は、目には見えないが、はるか右舷(スターボード)のほ

うへのびているはずだ。もう何千マイルも、インプロバブル号のうしろにひきずっている。この浮かぶ建物に積みこむ方法がなかったからだ。おそらくは、〈天国〉の下にある都市の上につみかさなった糸の山まで、ずっとつづいているだろう。煙のようにみえた糸の山は、何百万マイルぶんもひとつづきだったかもしれない。

　いまやそれが、二重のエアロックからライヤー号にはいり、その焼け残った船体の中をとおって、電纜(コンディット)用の開孔部から外へ出、そのさきは、浮かぶ建物の下面に接着された電流硬化性プラスティックのもりあがりまでつながったことになる。

「ここまでは上乗だ」とルイス。「さて、つぎはプリルに……カホナ！　忘れていた。プリルには宇宙服がないんだっけ」

「宇宙服だと？」

「これから、インプロバブル号で、あの〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉山にのぼるのさ。この建物は、気密にはできていない。宇宙服が必要だが、プリルは持っていないんだ。彼女はこっちの船に残していくしかない」

「〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉山をのぼるだと」〈話し手(スピーカー)〉は、おうむ返しにいった。「しかしルイス、一台のフライサイクルに、ライヤー号を引きずってあの斜面をのぼるだけの力はないぞ。その上、この建物の重さまで、モーターに負担をかけることになるが」

「ちがうちがう。ライヤー号を引きずっていってないよ。シャドウ・スクェアの糸を引っぱっていくだけのことさ。プリルにいって、エアロックのドアを閉めさせないかぎり、糸はライヤー号の中を自由にすべるんだ」

〈話し手〉は考えこんだ。「それなら大丈夫だろうな。もし、パペッティア人のフライサイクルの出力が充分でなかったら、建物の要らない部分を切り捨てて軽くすればすむ。しかし、なぜそんなことを？　あの山の上に何があるというのだ？」

「それは、ひとことでいえる。が、いったとたんに、あんたに笑いとばされるだろう。なあ〈話し手〉、もしぼくの思惑がはずれたら、あんたには絶対に話さないことを誓うぜ」と、ルイス・ウー。

そういいながら、彼は考えていた。——プリルには、やることをよく話しておかなきゃならん。それから、電纜用の開孔部には、プラスティックでもつめておくことだ。それだと、糸はすべるが、船内をほとんど気密にしておくことはできる——。

インプロバブル号は宇宙船ではない。その浮揚力は電磁気的なもので、環の構成物質そのものに対する反撥力なのだ。そしてその物質は、〈神の拳〉のほうへ、のぼり斜面をなしている。〈神の拳〉の内部が、がらんどうになっているからだ。当然、インプロバブル号はそれに合わせて傾き、フライサイクルの推力にさからって、ふもとへすべり落ちようとする。

しかしこの問題に対しては、〈話し手〉のことばが、すでに解決を与えていた。

この登山がいよいよはじまったときには、ふたりともあらかじめ宇宙服を着こんでいた。ルイスは、チューブから流動食を吸いこみながら、携帯レーザーで焼いたステーキの味を、なつかしく思いだしていた。〈話し手〉も、再生血液をすすりながら、それなりの思いにふけっているはずだった。

当然、調理場はもう不要だ。建物のその部分を切り捨てると、余禄として、建物の傾きがいく

らかもとへもどった。
　空調設備と、警察用の検束装置も切り捨てた。フライサイクルの機構を破壊した動力装置も、それが浮揚動力と関係ないことを確認したあと、すぐに切り落とした。つぎには外郭が捨てられた。ただし、日かげ用に、一部は残しておく必要があった。直射日光による熱が問題になってきたからだ。
　日一日と、〈神の拳（フィスト・オヴ・ゴッド）〉の頂上、たいていの小惑星ならのみこんでしまいそうなその環状の峰が近づいてきた。火口壁のかたちは、ルイスがこれまで見てきた隕石の衝突によるそれとは、かなりちがっていた。黒曜石をといだ槍の穂先をならべたような、ぎざぎざの環が、ぐるりととりまいているらしい。その穂先のひとつひとつが、ふつうの山ほどもある。そのふたつの峰のあいだに、大きな隙間があった……あそこならはいれそうだ……。
「火口壁の内側にはいるつもりだな」と〈話し手（スピーカー）〉がいった。
「そうだ」
「では、峠が見つかってよかったな。これから上は、傾斜が急で、とても推力が足りん。そら、もうすぐそこだぞ」
〈話し手（スピーカー）〉は、フライサイクルの推力をいろいろと変化させて、インプロバブル号を自在にあやつった。重さを減らす最後の試みとして、建物の姿勢制御機構を切り落としてから、ずっとそれをつづけてきたのだ。クジン人の奇怪な宇宙服姿に、ルイスもようやく慣れはじめていた。五個の透明な球形がつらなり、その上にのった金魚鉢のようなヘルメットの内部は、おそろしく複雑な通話機で顔が半分以上もかくれ、背中には巨大な背嚢（バックパック）がついている。

「プリル、そこにいるか？」ルイスは通話機に声をふきこんだ。「ハールロプリララー。いるかい、プリル？」

「いるわ」

「待機してくれ。あと二十分ほどで通過する」

「ええ。ずいぶん長くかかったのね」

頭上では〈アーチ〉が輝いていた。リングワールド面の上空一千マイルの高みにあがったここからだと、その〈アーチ〉の根もとが、外壁と平坦な大地につながっている様子が、よくわかった。一千年の昔、はじめて宇宙に出た人間が、全能の神(ヤハヴェ)とその手の大槌(ハンマー)にかけて、本当にまるい地球を見たようなものだ。

「思いもよらなかったな」と、ルイス・ウー。ほんのつぶやきだったが、〈話し手(スピーカー)〉は、仕事の手をやすめてふり向いた。

ルイスは、クジン人の奇異の目にも気づかぬように、しゃべりつづけた。「早く思いつけば、ずいぶん面倒が避けられたのに。シャドウ・スクェアの糸を見つけてすぐ引っかかえせばよかったんだ。カホナ！ フライサイクル四台を使えば、ライヤー号をまっすぐこの〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉山に引っぱりあげることだってできたはずだ。でも、それだとティーラは、〈探す人(シーカー)〉に会えなかったことになる」

「また、〈ティーラ・ブラウンの幸運〉か？」

「もちろん」答えてから、頭をぶるっとふった。「ぼくは、ひとりごとをいってたのかい？」

「おれにもきこえたぞ」

「思いついていて当然だったんだ」とルイス。ふたつの峰のあいだの裂け目は、もう目の前だ。彼はしゃべりつづけずにはいられなかった。「リングワールドの〈建設者〉が、こんな場所に、こんな高い山をつくったとは思えない。両側の外壁を合わせると、十億マイル以上もの、高さ一千マイルの山脈があるんだから」
「しかし、現実にこの〈神の拳〉は存在するのだぞ、ルイス」
「ちがうちがう。こいつはただの殻にすぎないのさ。下を見てみろ。何が見える？」
「リングワールドの構成物質だ」
「はじめて見たときは、よごれた雪かと思ったっけ。真空中に、よごれた雪とはね！　が、まあ外観はどうでもいい。それより、あんたがリングワールドのでっかい地図をしらべた夜のことを覚えてるかい？〈神の拳〉は見つからなかった。なぜだ？」
クジン人は答えない。
「これが存在しなかったから、というのが理由だよ。地図がつくられたとき、この山は、なかったんだ。プリル、そこにいるか？」
「いるわ。離れるわけないでしょ？」
「よろしい。エアロックのドアを閉めてくれ。くりかえす。エアロックのドアを閉めること。内外とも、いますぐ。糸に触れて怪我をするなよ」
「この糸を発明したのは、わたしの種族よ」プリルの声は、空電のためいくらかゆがんで聞こえた。一分ほどその声がとだえ、それから、「中も外も閉めた」
いましもインプロバブル号は、槍のようにそそり立つ山あいにさしかかっている。ルイスは緊

張していたが、本来ならもっと緊張の極に達していて当然のはずだった。だが、意識の奥では、彼もやはり両側の頂きのあいだに、一種の谷か峠のようなものがあることを予期していたのかもしれない。
「ルイス、本当に、〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉の頂上火口に何があると思っているのだ？」
「星空だよ」と、ルイス・ウーは答えた。
クジン人は、きっとなった。「馬鹿にするな！　わが名誉にかけて――」
――そのとき、視界がひらけた。そこは、峠などではなかった。そこにあるのは、何かおそるべき力によって薄く引きのばされたうえで、まるで卵の殻のように打ちやぶられた、リングワールド構成物質のへりだった。厚さわずか数フィート。その向こうに、〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉山頂の火口がひろがる。
船は墜落をはじめた。火口の中は、満天の星だった。

ルイス・ウーの想像は当たっていた。卓越した心の目で、彼はこの火口の由来を、完璧に心の中で再構成していたのだ。
まず、リングワールド系があった。消毒滅菌ずみで、ラムシップも飛ばず、あるのは中央のG2型恒星と、花輪のようにつらなったシャドウ・スクェアと、そしてリングワールドだけ。
そこへ異世界からの物体が接近し、迫ってきた。恒星空間から、双曲軌道をえがいて飛来したこの物体の進路がさえぎられた――リングワールドの下面によってだ。
心の中で彼はその異星の物体の大きさを、地球の月くらいと考えていた。

衝突から数秒のうちに、それは完全にイオン化し、プラズマとなっていたにちがいない。隕石は、みずからの外面の蒸発により熱を奪われて冷えるものだ。しかしこの場合は、蒸発したガスの逃げ場がなかった。それが、リングワールドの床面を押しあげた。地形が上へ向かってゆがみ、そのため、地球の表面よりも大きな区域にわたって、注意ぶかく計画されたその地域の生態系と降雨パターンは、めちゃめちゃになってしまった。この砂漠が、それによって生じ……そして、〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉自体は、一千マイルも上へ突きあげられたすえ、信じられぬほど強靭な環(リング)の構成物質も、ついに破れて、火球に道をゆずったのである。

〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉だと？　まさしくそのカホな名にぴったりのしろものだ！　あの牢獄の監房から山の姿を見たとき、ルイス・ウーの心眼は、この光景をはっきりととらえていた。その事件は両側の外壁付近からでも、はっきり見えたにちがいない。地球の月くらいもある火の玉が、リングワールドの大地をつきぬけてとびあがるさまは、強い男のこぶしがボール箱をつきやぶるように見えたことであろう。

環(リング)の床面が、とにかくこれだけ変形してから破れたことを、原住民は感謝してしかるべきだ。これだけの穴があけば、リングワールドの空気もすっかりそこから洩れていってしまう。だがその穴は、大気の上限をはるかにこえた、一千マイルの高みにあいたのだった……。

火口の中は、満天の星だった。

重力が一瞬に消えた。浮揚モーターが支えとすべき物質がなくなったのだ。ルイスも、このことまでは予測していなかった。

「何かにつかまれ」と彼はどなった。「しっかりつかまえるんだ！　窓からとびだしちまったら、助かる道はないぞ！」
「もちろんだ」と〈話し手〉。彼は、むきだしの金属の梁に、しがみついていた。ルイスも、べつのにつかまっていた。
「いったとおりだろ？　星だよ！」
「そうだ、ルイス。だが、どうしてわかった？」
重力がもどってきた。何かが一定の力で、インプロバブル号を引きもどそうとする。余分なものをすっかり切りはなされた建物の残骸は、正面の窓を上に、横倒しの状態となった。
「保つぞ」ルイスはくるおしく叫んだ。梁の上側へ、彼はもがきあがった。「思った以上だ！　プリルが座席でネットをかけていてくれりゃいいんだが。猛烈にはずんでるかもしれない。〈神の拳〉の斜面を、一万マイルのシャドウ・スクェアの糸の端に引きずられて、のぼってくるんだ。そして、火口のへりをこえる――」
見あげると、リングワールドの下面が見えた。起伏をきざみこまれた果てしない底面。その中央に、巨大な円錐形の隕石孔があり、その底がぎらりと光った。インプロバブル号が、リングワールドの下で、巨大な振子のようにゆれるたびに、穴の底から太陽がさしこむのだった。
「――外へ、そして下へ。やがてライヤー号もつながって出てくる。そのときはもう、秒速七百七十マイルで飛んでいるんだ。この糸を引っぱって、近づくのはたいへんだな。しかし、うまくいかないようなら、ネサスのフライサイクルのスラスターを使えばいい。
どうしてわかったかって？　ずっとそのことを、あんたに話してたんだぜ。地形のことは、い

ならなかったか?」

「きかなかったか?」

「それがいわば、決定的な証拠だったのさ。この山を見ても。頂上の岩が崩落して優良物質が表面に出ていた。大量の微量元素がはじきだされたのは、わずか千三百年かそこら前のことなのに! これは、わが惑星にあるふたつの環境のせいで、星のパターンがすっかり変わってしまったためだ。ぼくたち兄弟は、いわばそのふたつの環境のあいだを往復しただけだってことが。実現できるかい?」

「ひどく見まちがった理由づけにすぎんな。ルイス」

「それでも、証拠はつくぜ」

「そうだな。それがわかってきたのさ。第三の星があるというわけだ」タシン人が静かな口調でいった。

教授は言葉のように、ルイスの弟子たちを見つめた。「あんたもそういうふうかね?」

「そうだ。ぼくたちは、そういう人を認めることがあるさ。ここまでで、ヨンダショット号のことを相談しよう」

「ここだな。なんだって?」

「もしそれが、ヨンダショット号を、おまえの手から奪いとったとしたら。わが種族はノウンスペースを支配し、その習慣は、より強力な種族にはばまれるまでつづけるだろう。われわれは、多大の犠牲をはらって学んだ。他種族との協力に関する教訓を。おれはでてしまうことになる」

「そのとおりだ」とルイス。周囲はまっくらだ。シャドウ・スクェアの糸の張力も、ようやく一定してきた。ライヤー号は、〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉への十度の傾斜を、いまや順調にすべっているものと思われた。

「いや、おそらくそのようにはなるまい。地球は、多くのティーラ・ブラウンどもの〈幸運〉によって守られているのだからな。それでも、わが種族は、名誉にかけて、その試みを放棄するわけにはいかん」と〈獣への話し手(スピーカー・トゥ・アニマルズ)〉はつづけた。「この戦いへの道筋を、おれひとりでどうして変えることができようか？　おれはクジンの神々の怒りを一身にうけることだろう」

「神様ぶるのは危険だといったはずだ。大怪我のもとだぞ」

「だが幸いなことに、そのおそれはない。以前おまえは、もしおれがロングショット号に手を出したら、それをぶちこわしてしまうのが落ちだろうといったな。そういう危険をおかしてよいものかどうか。銀河の〈核〉の爆発からやってくる放射前線から逃がれるのに、あのパペッティア製のハイパードライヴは、われわれみんなにとって、どうしても必要なのだ」

「そうだとも」とルイス。おそれを知らぬクジン人が、ロングショット号でハイパースペースへ突入を試みたら、たちまちのうちに、もよりの重力井戸へ突っこんで消滅してしまうだろう。それを承知のうえで、ルイスはいった。「でも、もしぼくが、うそをついてるとしたら？」

「おまえほどの知性をもつ存在を出しぬくことは、おれには無理だろうな」

〈神の拳(フィスト・オヴ・ゴッド)〉の火口で、また陽光がぎらりと光った。

「ぼくらの旅が、どんなに短いものだったかを考えてみろよ」とルイス。「五日間で十五万マイルを飛び、二カ月かけて同じ距離をもどっただけだ。リングワールドの幅の、わずか七分の一だ

よ。だが、ティーラと〈探す人(シーカー)〉は、その全長にわたって旅しようとしているんだ」
「愚かものめが」
「ぼくらはとうとう、外壁を見ずじまいだった。が、あのふたりは見るだろう。ほかにも、どんなものを、われわれは見そこねたかな？　もしリングワールドのラムシップが、地球の近くまできていたとしたら、人間が絶滅させてしまう前の白長須鯨や抹香鯨なども、彼らは持ちこんでいたかもしれない。なにしろぼくらは、大洋へのりだしさえしなかったんだから。
　それに、あのふたりが出会う人びと。文明のたどる道には、果てというものがない。そのうえに、この広さだ……リングワールドは、あまりにも広い……」
「二度とここへもどってくることは、できそうにないな、ルイス」
「もちろん無理だろう」
「だが、それも、われわれが、例の秘密をそれぞれの故郷へ持ち帰るまでのことかもしれんぞ。そうすれば、あの船が造れるのだからな」

# 訳者あとがき

宇宙時代の初期（すなわち地球時代後期）にLN（ラリイ・ニーヴン）氏が提唱した「リングワールド」の構想に、最初に惹きつけられたのは、科学技術文明の先進圏に住むSFファンという自称エリート集団だった。それより二十年ほど前に書かれたハル・クレメント氏の『重力の使命』は、「SFファンがもっとも愛した作品」と呼ばれたが、小説『リングワールド』は、ある意味でそのお株を奪ったといってよい。……（中略）……北米大陸において、いかに多くのハードSFファンが、リングワールドの研究と設計にのめりこんだかは、十年後に出た続篇『リングワールドふたたび』の献辞に詳しい。さらに少し遅れて、太平洋の西側に位置する極東の一角にも、同様のフィーバーが吹きまくった。……（後略）……

のっけからの引用で申しわけないが、これは一九八二年夏の日本SF大会〈TOKON－8〉の会場で頒布されたファン出版『リングワールド建設公団企画書』（鹿野司・水谷賢）に載せていただいた拙文の冒頭である。表現が妙に架空じみてラディカルなのは、どちらかといえばパロディックな同書の性格に合わせただけのことなので、その点を割り引けば、あとの内容はそのま

ま事実とお考えいただいていいはずだ。B5変型判七十二頁のこの一冊中、十七頁が「リングワールド用語辞典」および「ノウンスペース生物学」と題する解説、そして約三十頁が六名の執筆者によるリングワールドそのものの構造力学的、物理学的、地理＝気象学的研究考証に当てられている。こうした構成からも、はじめの引用文で述べたようなハードSFファンの熱意のほどが読みとれよう。

同じ大会では、このほかいろいろ愉快な関連アイテムも配られた。例えば……

**《丁罹撫罹雲大社縁起文》**和紙に毛筆書き。内容の一部をご紹介すると、「そもそも丁罹撫罹雲大社とは、皇紀三千五百拾年、輪状世界に降臨し給ひし丁罹撫罹雲の命を始祖とし、類巣鵜字を開祖とする由緒正しき神社也、彼等、久塵、破辺手意悪の悪鬼を従え……（中略）……彼女の幸運尋常に非ず、幾多の災厄より……（中略）……本社、丁羅の徳を偲び、神乃拳の麓に建立さる。本社の縁起正に是也」

**《おみくじ》**めん吉・吉・大吉・超吉・極吉・激吉の六種。凶はない。ティーラ・ブラウン大社のものとなれば当然だろう。

**《お守り》**リングワールドの床材でつくったと称するもの。わたしはこのお守りを今も肌身離さず持ち歩いている。

……等々。まあ、お遊びといってしまえばそれまでだが、考えてみると、リングワールドのようなしろものを現代の科学で云々すること自体、お遊び以外のなにものでもあるまい。そのことは、やっている当人たちが誰よりもよく承知している（なのにやはりそれがファンタジイの架空さとは異質の分析対象になるのが、ハードSFのハードSFたるゆえんであろう）。

紹介ついでに申しあげると、これよりさき、八〇年二月に〈スタジオぬえ〉がSFマガジン誌でリングワールドの見えかたを話題にした（「スターシップ・ライブラリー」第十七回／青井邦夫）のが、この種の試みの嚆矢かと思われる。翌八一年には、ファンジン『TANSTAAFL』三号の「世界環」と題する論文（星暁雄）が、リングワールド内の景観をかなり突っこんで論じ、また続篇『リングワールドふたたび』が邦訳された直後には、ファンジン『マーチラビッツ』二十七号が全頁をあげて「特集・リングワールド研究」（鹿野・橋本・大川・木全）を組み、やや荒けずりだが多岐にわたる詳細な分析を発表、これが前出『企画書』の〝考証〟部分の根幹となった。なおこの『企画書』で論じられた内容の要点は、SFイズム誌八号（八三年十月）に鹿野氏自身の筆で紹介がなされているので、興味をお持ちのかたはまずそれを見ていただくのがいいだろう。リングワールドに立ったときの〝アーチ〟の見えかたにはじまり、その夜の明るさ、朝の訪れかた、気温とそれに付随する諸現象など、読んで楽しいことは請け合える（細部についてはわたしなりに異論もあるのだが、今回はご遠慮しておくことにする）。

こうした〝研究〟は、まだほかにもあるかと思うが、これまで目にとまった範囲では、以上がおもなものである。もし重要な刊行物が洩れていたら、ご教示いただきたい。

さて、ところで——と、いまさらあらたまってみてもはじまらないが——ここに、わたしの見たところ、いくら数式を駆使した研究を積んでもどうにもならない——いま一つイメージの湧いてこない一面があるようだ。それはほかでもない、リングワールドそのものの巨大さである。ことに、本書の百六十七頁で宇宙船ライヤー号が外壁に近づいたときの壮絶な景観〝一次元の直線

宇宙〟など、いくら大きいにしても、もともと円形のものがどうしてそう見えるのかと、首をかしげておられる向きも多いのではなかろうか。

そこで、そうしたファン諸兄姉のため、ここでは縮尺によるアプローチを試みてみたい。リングワールド各部のサイズをあげてみると――

外壁の高さ＝一千マイル

床面の幅＝九十九万七千（約百万）マイル

半径（主星からの距離）＝九千五百万マイル

これを約十六億分の一に縮めると、半径九十五メートル、床面の幅およそ一メートルの超マイクロ・リングワールドが誕生するわけだが、このとき外壁の高さは、なんと一ミリになってしまうのだ。……念を押しておくと、これはリングワールドの床の厚さではなく、外壁の高さである。床の厚さは、約五十フィートと書かれているので、わずか〇・〇一ミクロンしかないことになる。

さて、ひとつお手数だが、ちょっと本書を下において、両手を左右一メートルの幅にひろげ、親指とひとさし指とで一ミリの厚み（いや〝高さ〟だ）をつくってみてほしい。その上で、この、両端に各一ミリずつ直角の折り返しを持つ一メートル幅の超薄膜リボンが、そこからぐるりと半径およそ百メートルの環をつくって頭上にそそり立っている光景――いちばん遠いところではその幅が月の直径の半分くらいに見える――を想像し、できればそれを追うように首を動かしてみていただきたい。そう……それがリングワールドの各部分の比率なのである。思えばまったく途方もない話で、これでは、床物質の非常識な強靭さ――引張り強度で通常の鋼材の一億倍のオーダーだ――も、それがわずか五十フィートで中性微子を四十パーセント遮蔽するという麻薬的な

思いつきも、そのまま納得せざるをえないだろう。
ついでながら、同じ縮尺だと、地球の直径は約八ミリ、地球と月のあいだの距離はおよそ二十五センチ（つまり床面の幅の四分の一）になる。――この比較も、〝大きさ〟を実感する一助として有効かもしれない。
だが、前述の、外壁の近くから眺めた感じは、これでは味わいにくいので、思いきってこれを百倍に拡大してみよう。つまり縮尺を千六百万分の一とするわけだが、そうすると半径が九・五キロ、床面の幅約百メートル、そして外壁の高さは十センチとなる。外壁から五百マイルにまで近づいた宇宙船からの見えかたは、つまりこのミニ・リングワールドの外壁から五センチの距離まで目をよせて眺めた場合に等しいわけだ。ちなみに、半径九・五キロの円というのは、東京の国電山手線よりひとまわり外にある環状七号道路とだいたいかさなる大きさである。あの環七が真円だとして、その道路にそって高さ百メートルの塀（厚みは約一ミクロン）をめぐらし、この極薄塀の上縁を（下縁もだが）、十センチ内側に折り曲げ、そこから五センチの位置に目をおいて全体を見わたすことを考えてみてほしい。こんなイメージが、平面の紙の上に写すことを前提としたふつうの透視画法で出せるわけがない……そう、結局のところ、問題は、対象に比べた視点の近さ――観測者は頭を動かしてみなければ全貌をつかむことができないこと――にあったといってよさそうである。
原作者のラリイ・ニーヴン氏とは、毎夏、世界SF大会の席で顔を合わせる。一九八二年にシカゴで開かれたCHICON－4には、その直前の日本大会で手に入れたばかりの『リングワー

ルド建設公団企画書」を（それに同じ会場で余分に買ったパペッティア人ペンダントも）持っていって進呈し、日本にも〈ノウンスペース〉シリーズの熱烈なファンが大勢いることを現物で裏づけることができた。ニーヴン氏は大喜びで、「ジュディ・リン（デル＝レイ・ブックスの主幹）に見せて英訳版を出そう」とまで言いだしたが……まあ、そのあと何の音沙汰もないところをみると、やはりそこまでは無理だったか、あるいは冗談半分の外交辞礼だったのだろう。

　この大会ではまた、本国の考証役のひとりであるクタイン氏（おかしなペンネームだが、氏は写真家で、あいにく同姓同名の有名な同業者がいたため、変わった名前をつけたのだそうだ）と、はじめてゆっくり話し合うチャンスがあり、当然ながら話題はリングワールド談義に集中した。といっても、わたしの英語力では、もっぱら氏の意見を拝聴するばかりで、思うことの半分も伝えられなかったような気がするが、そのうち気温の問題について、ここでは床物質の性質上、光子ばかりでなく中性微子（ニュートリノ）による熱平衡も考えに入れねばならないこと（中川格氏の意見）を持ちだすと、クタイン氏、愕然とした様子だった。どうやらこの点では、日本ファンダムが一歩さきを越していたらしい。それかあらぬか、翌朝ホテルのロビーでばったり顔を合わせたとき、氏は、「昨夜の討論はとても有益だった」と言って、あらためて握手を求めてきた。……こんないい思いができたのも、わが国の優秀なファン諸氏のおかげである。この頁をかりて、感謝の意を表したい。

　ところで、長篇六冊、オムニバス一冊、短篇集二冊から成るニーヴン氏の未来史〈ノウンスペース〉シリーズの一応の集大成として書かれた本書には、これに先立つ物語を読んでいないと味

わいにくいところがいくつかある。アウトサイダー人と星間種子（スターシード）の因縁や、クジン人と地球人の遭遇など、重要ないきさつについては本文中で作者が解説しているからいいが、それよりマイナーな諸点――定着生物グロッグ（十三頁）や〈山頂平原（プラトー・アイズ）〉能力（四十六頁）など――は、名称が出ているきりで、これだけでは何のことかわからない（実はこの両者それぞれ、同シリーズの短篇集『中性子星』所載の短篇「恵（めぐ）まれざるもの」と長篇『地球からの贈り物』の中心テーマとして登場しているものである）。また、ネサスが〝チュフト船長（キャプテン）というクジン人をうしろ脚の蹄で蹴とばし〟た話（二十二頁）や、ゼネラル・プロダクツの船殻の弱点（百四十六頁）なども、それぞれに先立つエピソードがある（前者は「ソフト・ウェポン」、後者は「フラットランダー」。ともに『中性子星』所載）。本書を堪能されたかたがたには、できればこれらの諸篇にも目をとおしていただくようおすすめしたい。なお、〈ノウンスペース〉シリーズに含まれる諸作（単行本は九冊すべて邦訳が出ている）については、長篇『プタヴの世界』（ハヤカワ文庫ＳＦ506）の「あとがき」に全部のリストを掲げてあるので、ご参照いただければ幸いである。

それからもう一つ――これは先立つ諸作とは無関係だが――強意の間投詞「カホナ」（形容詞的に使われるときは〝カホな〟）について。……このスラングの原語はTanjで、There ain't no justice.の頭文字を並べたものである。そこでこの文の意訳「神も仏もないものか」（十一頁）から起こしてみたわけだが、はたして成功しているかどうか？　わたしとしては、原文のいかにも俗語的な二重否定の含みまで移せたことに一応は満足して使ったのだが、もっとさりげない処理法がなかったものか、あるいは〝タンジ〟または〝ＴＡＮＪ〟で押すべきだったのではないかと、いまだに迷いが取れない。

いちばん大事なことがあとまわしになってしまった。……本書は、一九七一年にヒューゴー、ネビュラ両賞を独占したラリイ・ニーヴン氏の最高傑作長篇 *Ringworld* の全訳である。テキストは、ある事情から、原作者の希望で一九七二年のバランタイン版第四版を使用した。邦訳は最初七八年に〈海外SFノヴェルズ〉の一冊として出たが、今回、文庫に収録されるにあたっては、ほぼ全面的に改訳を試みた。校正の段階でもまた手を入れ、練りなおしをかさねたので、担当の村山裕氏にはたいへんご苦労をかけてしまった。ここに慎んでお礼を申しあげたい。